



文學博士藤岡作太郎著

鎌倉室町時代文學史　全

東圃遺稿卷三

東京　大倉書店　發行

鎌倉室町時代の文學研究に就いて

鎌倉室町時代は文學の暗黑時代にして、この時代の文學の評論には、困難を感ずること殊に多し。

凡そ批評家が文學を取扱ふに二様の方法あり。一は文學を手段として見、他は文學を目的と見ることこれなり。文學を手段として見るとは文學をある學問研究の資料として取扱ふものにして、例へば風俗史の研究のために、その材料を文學書中に探らむとし、平安朝の風俗を知るに源氏物語、鎌倉室町時代の武家故實又は世態人情を知るに平家物語、太平記を見るが如し。されば文學を目的とするものとは截然たる區別あるに似たり。されど時として彼此その界を混ずることあり。例へば文献學の如き、文學を目的とせるか、はた手段とせるか、その區別漠たるものありといはざるべからず。

文學を手段として見る態度の混じ來る時は、拙なる作品が却つて重要なる位

置を占むることあり。近松と西鶴とを比するに、近松は永久不變の人情を描き出して、文學的價値は西鶴の上にあるべけれど、元祿時代の特殊の風俗人情を知らんためには、これを去つて西鶴に就かざるべからず。芭蕉は深く自然に親炙して、その句は今なほ新しき生命あるものなれど、元祿時代の風俗習慣を知らむがためには、却つて他の片々たる談林俳人の作の下にあるべし。

文學史は文學を對象として見るが故に、名作と拙作との區別を立て、飽くまで文學を目的とすることを忘るべからず。

次に評論の方法を類別すれば、説明的評論、批評的評論の二とすべし。説明的評論とは、その巧拙善惡はこれを度外に置いて、單にその梗概を説明するものなり。而してこの評論の方法が更に進めば、歷史的評論と傳記的評論との二となるべし。

歷史的評論とはその作品とその時代との關係を論ずるものなり。たとへば兼好の徒然草を論ずるにあたりて、徒然草そのものを説明するのみにては十分なりとせず、更に進んで、かくの如き書の生るゝに至りたる逕路を知らむがた

めに、當時の人情、風俗、政治、その他一般文明の狀態を併せ考ふるなり。而して鎌倉室町時代の作品をこの方法によりて論せむとするにあたりて、第一に不便を感ずることは、作品の時代の不明なることなり。平家物語、源平盛衰記の前後の確ならざるが如き、謠曲、舞の本、小說の製作の時代の明ならざるが如きこれなり。

傳記的評論とは、作者の個人性とその作品との關係を論ずるものなり。抑、作品はこれを人格の表現と見るを得べし。されば一つの作品の特徵は單にその時代の影響のみによるにあらず、またその作者の個人性によること多しとす。而してすぐれたる作品には殊に作者の個人性のあらはるゝこと著し。されば作者の傳記を明にせざればその作品を精細に批判すること能はず。而して鎌倉室町時代の文學を硏究するにあたりて、吾人はこの點においてもまた不便を感せざるを得ず。卽ちこの時代の作品は著者の不明なるもの多く、或は著者は明なれども、その傳記の知りがたきもの多きことこれなり。

次に批評的評論とは文學の絕對的價値を根本より論ずるものなり。これなく

んば文學の價値如何にしてか知るを得む。されどその價値を定むる標準は極めて曖昧なるものにして、一定不變なりといひがたし。一の作物に對する甲の評價と乙の評價とおのづから差異なき能はず。多數の人の一致する評價を定評といふ。而して前時代の人の定評と次の時代の人の定評とにまた異同を生ずることあり。こはいづれの時代の作物に對しても皆同樣なれども、鎌倉室町時代の作品に就いては殊にこのうらみあり。見よ、その作品はいまだ價値明ならざるもの多く、定評あるものといへども、多く前代の偏見によりて見られたるものなれば、更に改めて研究するを要す。

以上三種の評論の方法中批評的のもの最も必要なりと思惟せらるれども、時代を考量に入れず、作者を度外視して論ずる能はざる場合多かるべし。

また評論の種類をその立つる所の方針によつて、知的評論、道德的評論、美的評論の三に分つことを得べし。

知的評論とは、理性に訴へてその作物を批判するものなり。たとへば今日宗敎上の信仰が理性に戻らば迷信なりと論ずる如く、文學も科學の敎ふる所と衝

突すべからずとの見地よりして、これを批判するものなり。たとへばある時代を描ける小説中に後世に至りて始めて見るべき事物のあらはるゝが如き時代の相違、海なき國に海岸の場をあらはすが如き地理上の相違、新月の時に月蝕を見るが如き天文學上の誤謬、その他死せるものが後にてあらはれ來るが如き論理の誤など、西洋の小說、戲曲にも多く見ゆ。我が邦の文藝上の作品、就中淨瑠璃にはこの種の誤謬殊に多し。而してかくの如き誤謬の有無によりて作品を評價するものは智的批評なり。馬琴などはこの智的批評を加ふること多し。元來支那の批評が道德的批評にあらずんば智的批評にして、その流れを傳へたるもの亦多く然り。今の自然主義の批評またこの傾向あり。

道德的批評は、その文學が道德と一致するか否かによつて、その作物の價値を定めむとするものなり。馬琴はその極端なる代表者といふべし。裸體畫などに對してなせる今日の道學先生の批判また同樣の傾向を見る。されど眞に文學を評論するにこの方法は必要ならず。

美的批評とは心理上、美學上の立場よりしてその價値を判定せむとするもの

なり。即ちその技巧を論ずるなり。換言すれば作者の思想が如何なる程度まで表現せられ居るかを見るものなり。故に外形は主にして内容は客なり。內容卽ち著者の思想の如何は殆ど文學的價値を定むる標準とならず、たゞその思想がそのまゝに表現せられをるか否かによりて、その價値を判定せむとするなり。然れども余輩の思ふ所を以てすれば、この批評の方針は偏せりといはざるべからず、文學は人生の表現なるが故に技巧のみに巧なりとも、思想そのものが幼稚ならば、價値ある文學とはいひかたかるべし。

この外哲學的批評とも名づくべきものあり。茲に哲學的批評といふは、作品を通じて著者の人格を論せむとするなり。即ち著者が當時の社會に對して如何なる位置に立ちしか、また當代及び後代の人心に如何なる影響を與へしかを見るなり。美的批評が外形即ち技巧の方面よりするに對して、この批評法は內容即ち思想の方面よりするものなり。されど鎌倉時代は宗敎に偏したる時代にして、文藝の評論も哲學的といふよりも宗敎的といふを適當とす。

なほこの外に語學的の批評あり。而してこの批評は細別して、文學、言語、文法、修

辭などさま〳〵の方面の研究に分たるべし。

言語學的研究は文學の批評としては頗る緣遠きものなれども、わが國に於ける歌論歌學の書は多くこれに屬す。言語の解釋か、然らずば儀式作法の說明なり。これに禁忌を加へ、宗敎趣味を交へたるが中世の批評なるが、元祿の頃の古典の學起りても、なほ依然として注釋的なりき。宣長の如きこれに文法を加味し、廣道の源氏物語評釋に至つて修辭の研究に及びたるが、大體はこの言語學的批評に外ならず。今日に及んでもなほ然り。殊に學校の敎科書に於て然り。この類の批評は近代の文學には適せず。即ち奈良朝平安朝の文學は古典として貴ばれしと、時代隔りたるために特に解釋の要ありしとにより、德川時代の學者のこれに對する語學的研究は頗る進みをれり。これに反して鎌倉室町時代の文學は奈良朝平安朝時代の文學の如く重んぜられず且は時代新しくして語の解釋に困難なかりしために、この種の研究は頗る忽諸に附せられたり。但武器のことは後世もやかましくいへるを以て、伊勢貞丈の如きこの道の學者出でゝ頗る穿鑿せられをれり。

語學研究をなさむとするにあたりて最も必要なることは本文の研究の十分行き屆きをることこれなり。而して鎌倉室町時代の文學は、本文の研究十分ならざるために、吾人はこの點に於てもまた頗る困難を感せずんばあらず。本文の研究はすべての批評の基礎なり。これなくして完全なる批評の行はるべき理なし。その書は正しきか否か、その作者は何人なるか、その述作の時代は何時頃なるか、これを明にせずして批評するは砂上に樓閣を構ふると一般なり。而して鎌倉室町時代の文學はまたこの點に於ても暗黑の中にあり。

思ふに江戸時代の文學はその作者、及びその傳記の明ならざるもの極めて尠ければ、この點に於てさまでの困難を感ずることなし、然るに鎌倉室町時代にては文藝の沈衰その極に達し、その述作に創意あるものなく、因習に從ひ、模倣をこれ事とす。文藝上の良心麻痺して、先哲の作に假托せる僞書相次いで出でたり。神道五部書は鎌倉時代に僞作せられ、定家の歌論の書は多く鎌倉時代の中頃以後に成れるものと稱せらる。方丈記、發心集、無名抄の如きも鴨長明の作と稱せらるれど、發心集、無名抄の二書は無論、從來長明の作に相違なしと思は

れたる方丈記すら果して彼の作なるか頗る疑はしきものなり。なほこの問題をして一層困難ならしむるは眞書また僞書に、更に後人の攙入あることなり。西行の作なりと稱せらるゝ撰集抄の如き、これに異本ありて、流布の本は異本に後人の攙入せるものとおもはるゝが、その異本もまた西行の作にあらじと思はるゝふしあり。とにかく後人の攙入あることは一部に疑はしき點あればとて、直にその全部を否定する事も得ず、困難なる問題をますく困難に陷らしむるものといはざるべからず。

またたとひ僞作にもせよ、その時代明ならば、その作品によりてその時代の思想を窺ふを得べけれど、これらの僞書に限りてその時代の定かならぬは甚だ遺憾なりといはざるべからず。またはじめより何人の作とも知られざるあり、或は作者に擬せらるゝ人多くして、眞の作者はそのいづれなるか、或は全くこれら以外にあるか、更に慥ならざるあり。平家物語、源平盛衰記はその作者、その時代とともに明ならず、そのいづれがさきに出でたるものなるかも定かならず。宇治拾遺物語は今昔物語とおなじ作者の手になれりとは何人も信せず、鎌倉

時代のものなることは明なれども、その何人の作なるかは分明ならず。古今著聞集は年代を記しあれどこれも果してその時代のものなりや否や明ならず、或は藤原基俊の作なりといはるゝ悦目抄と同一の記事あるより、その後に出でたるものなりといふものあり。しかも悦目抄が基俊の作なるか頗る疑はしきものなるは勿論、その著聞集との前後の如き、却つて悦目抄に著聞集の一部を攙入せしものなりやもまた知るべからず。とにかく二書を比較して漫然その前後を定むるは甚だ危險なり。

これら時代の明ならざる作品の時代を鑑別するには頗る見識を要す。風俗、制度、言語などの變遷によりて穿鑿することは必要なれど、現在の研究はそれまで進みをらず。最も明にして正しきは歷史の事實によりて調ぶることとなるべし。

本文(テキスト)の研究をなすには古寫本の正しきものを選ばざるべからず。殊に言語の研究をなすに、文字の寫し誤りありては、その研究は徒勞に屬す。故に德川時代の木版本、殊に明治時代の活版本は誤謬多くして、ある場合は全く用をなさず。

なほ寫本は、その寫されたる時代の筆法、紙質などによりてその書の眞僞を判ずる一助ともなるべし。

別に書中の事實が歷史上の實に違ふとてその書を攻擊することあり。こは歷史家に多し。源平盛衰記、太平記に記せる所が歷史に見ゆる所に反すとてこれを斥くるが如し。されどこは僞書として斥くるとはおのづから別個の問題にして決して混同すべからず。勿論盛衰記、太平記は歷史にあらざれども、當時の人情風俗を寫せる點よりして、大に參考すべきものなり。これらは國民の精神的方面の變遷を知るには、むしろ歷史にまさる點もあらむ。たゞその史的事實に至つては、何處まで事實と見るべきか分明ならず。神代の神話は事實と空想と全く相化合して離すべからざるものとなれり。これ空想を誠の事實として考へたればなり。盛衰記、太平記にしるす所は、事實と空想と相混合せるまでなれば、明眼達識の士はこれを篩ひ分くることを得べし。

緒言

東圃遺稿第三篇たる鎌倉室町時代文學史は、もつぱら吉川秀雄氏の努力によりて修整せられたるものにして、編成の方針について同氏のいふところ左の如し。

一、本書は、明治三十九年九月より逝去に至るまで約三箇年半に亘れる講義にかゝる。而して初めの學年には最初より玉葉集までを、次の學年には鎌倉時代の散文より同時代の小説までを講じ、その次の學年には室町時代の小説全部を終へ、更に南北朝時代に溯りて新葉集までを講じ、最後の學年には徒然草を講じ終へたるのみにて永眠に就けるなり。なほこれより軍記にては太平記、假名文の歴史にては神皇正統記、增鏡、隨筆にては吉野拾遺等を講じ、更に鎌倉時代に溯りて東關紀行、海道記、十六夜日記、辨內侍日記、中務內侍日記等の紀行、日記、今鏡等の假名文の歷史を講じ、次に室町時代に降りて義經記、曾我物語より謠曲、連歌等を講ずるの順序なりしが如し。然るに業半ばに

して永眠の不幸に遇ひ、あたら大著も未完に了れり。卷頭の鎌倉室町時代の文學研究に就いての一章は、第二年のはじめ鎌倉時代の散文を講ずる前に述べられしものなるが、今これを捨つるに忍びず、卷頭に附加することとせり。

二、本書は第一年度分は高木武氏、第二年度分は東條操氏、第三年度分は東條氏及び栗原武一郎氏、第四年度分は栗原氏の筆記を借り受け、これをもととして自筆の覺えがきめきたる稿本と照らし合はせ、稿本にありて筆記になき部分は悉くこれを補ひ、稿本の方一貫せる文章をなしたる部分は悉くこれを採りて、足らざるを筆記もて補ひ、以て成るべく多く故人の面影を傳へむとせり。而して徒然草の評論と兼好傳とは、稿本ほゞ完備し、保元、平治物語および平家、盛衰記の二論、また辭句に多少の修正を加へたるのみにして、最も多く著者の面目を存せり、その他は概ね自筆の稿本ははなはだ不完全にして、たゞ斷片的に記せるものあるのみ。筆記もまたこの間は比較的整頓しをらず、わけて第一年度分はたゞ一人の筆記に據りしがため、意味不明の箇所續

出したるを、さまぐ\に調査して、辛うじて首尾一貫せる文に纒めたるものにして、文章はいふまでもなく、思想の排列も一に起稿者の手に成れり。然れどもその內容は講義及び稿本に見えたるほか寸毫も私意を加へざらむことを期せり。

三、章段の區劃は、筆記及び稿本とも前後標準一致せず。よりて起草者は標準を平安朝文學史に取りて、假に今の如く分てり。著者の意、本書は平安朝文學史に次いで、國文學全史の一篇となすべき筈なりしを以て、大體はかくの如くなるべきを疑はずといへども、なほ實際にわたりては多少の出入ありしなるべし。

附錄の日本文學小史は、中等學校の敎科書として著はしたるものなれば、簡約に過ぎたる憾なきにあらねど、また一般讀者のために文學變遷の大勢を知らしむるに便なれば、發行書肆開成館の快諾を得て、卷尾に附載することとせり。西行論は嘗て異本山家集に附刊せしものなるが、鎌倉時代の文學に關係多きを以て、これまた發行書肆本郷書院の許諾を得て附錄とせり。

鎌倉室町時代文學史の詳細なる索引は脇本十九郎氏の工夫に成り、見かへしの繪は寺崎廣業畫伯、題簽は内藤湖南博士の筆を勞せり。茲に記してその厚意を謝す。

大正四年五月

芳賀矢一
藤井乙男

目次

第二期　鎌倉時代

第四期　室町時代　三一三—三九〇

日本文學小史（附錄第一）　三九一—六二四

西行論（附錄第一）

目次終

鎌倉室町時代文學史

藤岡作太郎著

總論

第一章　新舊兩思想の消長

平安朝は偏したる文明を有し、ある點に於ては鎌倉室町時代よりも發展せるところなきにあらざりしかども、その範圍は概ね上流貴族にのみ限られ、一里四方の京都の文明に過ぎずして、頗る不具の觀ありき。然るに鎌倉室町時代に於ては形勢俄に一變して、二つの文化の中心を生じ、兩々相對立せり。卽ち政治上よりいへば朝廷と幕府、廣く場所より云へば上方と關東、狹く云へば京都と鎌倉、階級よりいへば公卿と武士、又その學ぶ所より云へば一は有職和歌の道、一は兵術武士道なりき。

京都は兎に角四百年間文化の中心たりし所なれども、關東は賴朝が伊豆相模

より起りて根據を定めたる所たるに過ぎずして、その地勢上永く文化の中心となるには適せざるなり。階級の上よりいへば、公卿は平安朝時代より上流に立ちて政治に與りしかども、その實力を以てせるにあらず、その學問と云ふもたゞ昔よりの年中行事等の習慣典例を有職の道として墨守し、和歌の如きも古人の詞例をいたづらに列擧して能事終れりとし、學問の意義を去ること甚だ遠かりき。然るに武士は平生武を練り、技を鍛へ、心膽を磨くを職としたり。されば公卿と武士とは、一は舊時代の遺風を代表し、一は新時代の思想を基として、兩々相對立せり。

然れどもこの新舊の兩思想は常に相混和せんとする傾向を有し、而しておのづからその間に一種の特色を生み出せり。舊思想は感情的、女性的にして意志の要素を缺き、他は感情よりも意志を尙べる男性的の質朴なる風を旨とせり。而して新思想は未だ歷史を有するほどのもののなければその形式も具らず、文學としては注目すべき程の產物はなかりき。然れども此の兩風が相混和し、互に消長して、以てこの時代の特色を生ぜり。例へば舞樂に對して平家琵琶、猿樂、

田樂などの起れるが如き、和歌に對して連歌、連歌より更に俳諧出でゝ、和歌の束縛を免れて卑近なる言葉を以て所思を歌はむと試みたるが如きは、皆これ舊思想に對する新思潮の勃興なり。而して軍記物語類が武事合戰のことを記すを主とするに、一方に於て祇王、佛、小督など物語風のこと、及び古歌の引用說明などを挿入するはこの二風潮の交錯せるを示す。謠曲に至りては殊に著しきものあり。小鹽、井筒、杜若、高砂、求塚などは皆歌道を說けるものにして、前の三つは伊勢物語より、後の二つは古今集、大和物語より材を得來れるものにして、その他空蟬、夕貌、葵の上、玉葛、浮舟の如き源氏物もまたこの例に外ならず。
新舊兩思想混淆の萠芽となれるは平淸盛なり。渠は平安の公卿に鎌倉武士を混和して成れる代表者なり。元來淸盛は武士の階級を以て公卿に對立せるもの、而して、一時は習慣の力を打破して武士として公卿の上に立つに至りしかども、公卿の力はなほ隱然非常なる力を裏面に藏し、淸盛のみは本能に從ひてよく習慣の力を破り得しかど、彼の周圍の武士は何時しか公卿の感化をうけてその風に化せられ、武士の特色を失へり。忠度を見よ。經正を見よ。平氏はかく

の如くにして倒るゝに至れり。淸盛が都を福原に遷せるは一は交通の便よりならんも、一は古の習慣の力を破らんがために京都を避けむとしたりしなり。然るに公卿等の大反對を招きてその目的を遂げざりき。また淸盛が神社佛閣に對する放恣の行動は殊に世の反感を招き、就中重衡が大佛殿を燒けるが如きは平家滅亡の一因となるに至れり。習慣の力に對抗せむとする淸盛の本能的行動は形式的の世に容れられざりしなり。

賴朝は前車の覆轍に鑒みて常に戒心し、古來の習慣を破らざらんことを力め、神社佛閣等に對しては大に崇敬の念を抱き居たり。而して京都に居を定めなば公卿化せられて、平家と同樣の運命に陷らざるべからざることを自覺して、遂に府を鎌倉に定むるに至れるならん。然るにこれが幕府に幸して、その實力を天下に布き得るに至れるなり。

當時京都の人士はなほ帝政の復興を夢み居たり。いはば動搖の時代にして、平安末期に於けるが如く活氣を帶びたりき。この活氣はおのづから文學の上にも現れ、歌道もまた混亂の時代となりぬ。されば文學上より見る時はこの時代

は平安末期のつゞきとして見るべきにして、普通の歴史に於けるが如く平安末期と鎌倉時代とを區劃すべきにあらず。而して定家出づるに及びて、一時混亂せる歌道の趨向も定れること、政治上に於ける頼朝に似たり。

承久の亂に至りては文學上の鎌倉時代は來れり。その以前は啻に京都中心復歸說を思ふのみならず、頼朝みづからもまた鎌倉を第二の京都たらしめむとせしが如し。頼朝の後二代三代の將軍またかくの如し。而して源氏の亡びたるは平家が舊思想に亡されたるに反して、これは新時代の武家の風潮に倒されたるが如し。承久の亂以後京都方は實力なきを自覺し、全く鎌倉にその勢力を及す能はざりしかば、茲に於て純粹なる鎌倉風初めて成り、京都と相對峙するに至れり。即ち茲に二個の中心は確立したるなり。

鎌倉時代の京都は首なき體の如し。和歌は活氣失せて、單に門閥を尊び、內容を省みずして、たゞ詞のかけ合など、形式にのみ拘泥するに至りぬ。僞書も出でぬ。古代の注釋にのみ憂身をやつす古歌などの物語も出で來ぬ。たゞ平家物語、源平盛衰記の如き軍記物語のみはこの時代の特色ある產物には相違なけれど

も、文學上の產物としては比較的價値乏しきものといはざるべからず。かくしてこの京都と鎌倉と兩々相對立して、文化の中心二つに分れたる時代はいづ方にも利益を與ふることなく、文學上にはさまで價値なき時代なり。

南北朝時代に至つて、從來何の爲す所なくして醉生夢死したりし京都人は、玆に漸く覺醒し來り、弓を取り、矢を負ひて、專ら實力を以て世に立たんとするに至れり。これ迄關東武士は天下第一の强兵にして、關西武士は到底之に對抗することを能はざりしが、楠正成の如きは能くこの關東の長所を取り、關西の長所と和して兵法を硏究せしかば、小數の關西武士を以て、遙に智勇なる關東武士に能く對抗し得たるなり。楠氏が當時無双と稱せられしは、蓋し近畿の人にして、文事に武事を兼ねたる故なり。玆に於て、尊氏もこれに對するには、勢ひ政治の中心を京都に移さゞるを得ざりしなり。かくして文化の中心は再び合して一となり、文學はために一時活氣を呈し來り、新古二風の混和は文學の上にも希望を有せしむるに至れり。

室町時代は安寧の日少く、戰亂相次ぎ、ために上述の希望を空しからしめきと

はいへ、而もこの二風の混和は平民文學の發生をうながし、江戸時代の曙光を認むるに至れり。而してこの二風の混和せるは、京都公卿の間にありし有職の風が武家にも移りて武家有職の風を生じたる事によりても知るべく、また平民的傳說が集められて文學の材料となれるにも徵すべし。

普通の歴史にては、室町時代は應仁を以て界とし、以後を戰國となす。然れども文學上に於てはかく劃然たる時期を分つこと能はず。所謂戰國時代はたゞ暗黒の時代にして、特色もなく、室町時代に連續したるものなり。而してこの間またた一時京都の文化も散亂して、近くは堺、東にては小田原、西にては山口に別れたることもあれど、さしたる事もなく、鎌倉は幕府京都に移りてよりは見る影もなくなりて、遂にまた江戸時代に至りて、家康が賴朝の故智にならひて江戸幕府を起してより、再び文化の中心はわかれて二となるに至れり。

今各時期を通覽するに、特色の著しきものなく、三期とも、四期とも、五期ともするを得べけれど、玆にはしばらく、一、新古今集時代(鎌倉幕府創立より承久の亂まで)二、鎌倉時代(承久の亂以後北條氏の滅亡まで)三、南北朝時代、四、室町時代(南

北朝合一より江戸幕府創立以前まで)に分ちて論ずべし。

第二章　佛教と武士道

鎌倉室町時代には佛教盛に行はれ、當時の文化を支配したること甚だ少からず。奈良朝にては律、華嚴等の宗派ありしが、平安朝に至りては天台宗、眞言宗起り、鎌倉時代に及びては淨土宗、日蓮宗、禪宗等非常なる勢力を以て勃興し、社會に影響を與へたる事甚だ大なり。

前章に於て、鎌倉室町時代は文化の中心が兩々相對立し、また相並行したる事を述べしが、佛教にもまたこの傾向を認むることを得。即ち新宗教勃興せしかども、天台宗、眞言宗の如きはなほ當時の上流社會に行はれ、保守的潮流に伴へり。而して新興の禪宗、日蓮宗等は多く中流以下に行はれ、比較的進取的潮流に伴へり。從つて天台宗、眞言宗は京都を中心として、その他主なる都會貴族の間に行はれ、禪宗、日蓮宗等は多く地方の武家庶民の間に行はれ、おのづからその

勢力範圍を異にせり。されば新教は初の間は京都に於てはその勢力を扶植すること能はず、禪宗の如きも鎌倉を根據とせり。故に京都の五山の如きも鎌倉時代までは未だ盛ならず、その勢力を振ふに至りしは室町時代以後のことなり。即ち從來の京都派の公卿を代表せるは天台宗、眞言宗にして、新に起れる鎌倉派の武家を代表せるものが禪宗なり。故に舊教は新教の勃興を極力排斥壓迫せんと試みたるなり。また日蓮宗、念佛宗等は武家の間にも信仰せられたれども、主として下流の庶民の間に行はれしかば、その文化に影響し、殊に風俗を指導せる點に於ては禪宗に及ぶべくもあらず。

禪宗は支那の唐宋の風を傳へて我が國の風俗に影響を及しゝこと甚だ大なり。玄關、書院等の建築、その他床飾、燭臺、或は饅頭、豆腐等の食物に至るまで、禪宗が當時風俗變遷の原動力となしりこと頗る大なり。その他美術、工藝等にも少からず影響を及せり。また茶の湯の如きは禪宗の榮西禪師が茶を支那より傳へたるによりて起り、室町時代に及びては非常なる流行を逞しうし、從つて澁味ある禪的趣味を一般社會に生ぜしめたり。

然らば當時の文學に關係せるものは禪宗のみなりやといふに、必ずしも然りと斷言することは能はず。漢詩の流行、朱子學の興起等は禪僧の力に負ふ所甚だ多しと雖も、もと文學は繪畫建築等が直に外國の風を傳ふるが如くに容易く影響せらるゝものにあらざれば、天台宗、眞言宗等の從來の舊派の影響を蒙れることも少からざるべし。要するに新派の勢力と舊派の勢力とは兩々相俟つて文化に影響を及しゝなるべし。

當時の文學は宗教の趣味を帶べりといふよりも寧ろ宗教の道具となれる觀あり。今日に殘れるものにて文學上價値あるものは、むしろ繪を見るを主とする繪卷物、及び純粹の文學としては軍記物なるが、これらも概ね厭世的なる佛教の趣味を帶び、客觀的に佛教の意義を說けるものにあらずやと思はる。謠曲或は御伽草子の如きも佛教の影響を蒙れること少からず。繪卷物を一層平易にせる樣なるものが御伽草子なり。その他和歌の如きも亦宗教趣味を帶びて厭世的に着色したるもの少からず。古代の文學を見るにも亦文學以外に宗教的意義を有する樣に解釋したり。

上述の如く、すべての文學は皆佛教の立脚地より解釋せむと試みられたり。これ一はこの時代の文學が僧侶の筆になれるもの多きにもよるべけれど、讀者もまた宗教思想に富みたればなり。かくして後には文學は五山の專有なるかの觀あるに至りぬ。

從つて儒教は佛教に壓せられ、儒者も僧侶にならひて頭髮を剃りしが、後佛教の勢力衰ふるに及びて、儒教は漸く勢力を回復し、德川時代に於ては平安朝文學の如きも儒教眼を以て解釋したること、恰も鎌倉室町時代に於て同一のものを佛教眼を以て解釋したるが如し。儒教も菅原、淸原等は朝廷に門閥として世襲したりしかども、これ等も單に門閥たるに過ぎず。禪宗が次第に勢力を得るに及び儒教にも影響を及すに至りたり。

武士道は太古よりその萠芽は現れたるが、鎌倉室町時代に於て大いに發育せり。然れども、發達したる武士道には種々の形式等加り居れるが、この形式複雜なる武士道は鎌倉室町時代には未だ十分發達せざりき。江戶時代に見るが如き武士道は幾多の年月を重ねて漸次に發展し來りたるものにして、一朝一夕

にあらはれたるものにあらず。江戸時代の人士は武士道の根本は源平時代及び南北朝時代にあるが如く考ふれども、實は然らずして、むしろ江戸時代の理想を源平時代及び南北朝時代に托せしに外ならず。武士道の十分に發展したるは實に江戸時代にあり。

抑、鎌倉室町時代は江戸時代の人の理想的に考へたる時代なり。第一に家康が制度を定めたるも頼朝に倣ひしものにして、鎌倉時代の貞永式目、東鑑等は江戸幕府の成立に參考せられたる所多し。而して文學にても鎌倉室町時代を江戸時代の人はむしろ理想視せり。即ち平安朝の物語よりも鎌倉室町時代の軍記物、謠曲等を珍重せり。太平記を珍重するより太平記讀などいふものも起り、後の講談の源をなせり。畠山重忠、新田義貞等は武士の典型とせられ、忠孝の結晶としては曾我兄弟、武勇の權化としては源義經を取りて、小説芝居等の材料とするに至れり。これ一は當時現在の事を直寫することを幕府が禁じたるによるべけれども、また一は鎌倉室町時代を理想とせしより、この時代の事を小説、謠物等の材料に取りしなり。然るに鎌倉時代の初期程人倫頽亂し、嫉妬、讒謗、

奸計等の行はれし時代はあらず。源家一族の運命、及びその功臣忠士の滅亡等、皆明にこの消息を傳ふるものならざるなし。これ等人倫顛亂の狀態は平安朝と異ならず、江戸時代の人の考ふる如き立派なる時代にては決してあざらりしなり。唯平安朝の臆病なりしに比して鎌倉時代の蠻勇なりしのみ。しかもなほ後世の人はしか見ずして、却つて理想の時代なるが如く思惟して景仰措かざるは、これ武士道の發展が多く玆に淵源したるによるなるべし。

第一期　新古今集時代

第一章　和歌の流行

すでにいへるが如く、文學上より見る時は院政時代は一貫せる時代にして、新古今集時代は千載集時代より區別することなく、むしろこれを平安朝掉尾の期と見るべく、承久の亂後はじめて鎌倉時代の風あらはれ來れり。院政時代は和歌の盛に流行せる時代にして、從來單に抒情の歌のみ盛なりしに加へて、叙景の歌興り、且つ當時の俗語を和歌の上に用ひ、剛强なる語を採り、一方に於てまた歌論歌學盛となり、互に爭へるさま源平の爭に似たり。今和歌がかくの如く盛に流行するに至れる徑路を說き、しかる後新古今集以下について論ずべし。

歌合。　歌合の濫觴については平安朝文學史に述べたれば茲に贅せず。平安朝の末に至りて殊に盛に行はれ、以て鎌倉時代に及びしなり。今群書類從及び續

群書類従の和歌部を見る時は歌合の數多く載せられたるを見るべく、別に歌合部類もあり。千五百番の歌合、六百番の歌合の如き浩瀚なるものは單行本として行はる。なほ勅撰集、家集等の小序によりてその鈌を補ふべし。思ふに平安朝の末より歌論の盛となりしは、歌合の流行これを導きしなるべし。相手の和歌をそしり、味方の和歌を辯護せしなどより歌學も盛なりしなり。然れども歌合ははじめ好結果を得たりといへども、後には却つて和歌を萎微せしむる一原因となれり。卽ちその辯難攻擊は徒に故實典例の末をやかましく論じ、從つて消極的にその非難を免かれむことをのみ努めしかば、積極的の進步發達はこれがために阻害せらるるに至れり。今川了俊の和歌所へ不審條々に「歌合などの歌は自他吹毛難じ申べければ、聊おもふべきなるべし、云々、」とあるによりても思ふべし。

題詠。題詠の盛なることは今更いふにも及ばず。平安朝末より好んで所々の名所又は異物等をよみ、殊に著しきは百首の多くなりたることなり。名所異物をよむことが和歌の範圍を廣むることと後世の俳諧の如くなるかといふに決

して然らず。親しく接せぬ遠隔の所をよみ、見もせぬ物をよめども、何の興趣もなく、却つて和歌に累するに過ぎざりしなり。定家、家隆の書を繙き見よ、和歌の稽古のためいかに百首に苦心したるかを知らん。この百首の始は詳ならず、菅家百首ありといへども信ずるに足らず。曾丹集に他國の名所をよめること多く、また百首和歌とて擧げたるが、平安末期彼の歌を貴ぶに及び隨つて百首の流行を來ししならん。而してその殊に盛なるに至りしは堀川太郎次郎百首なるべし。而してこの百首の作者の一人たる俊頼の散木集にまた百首あり。これらより殊に盛なるに至りしものと見ゆ。而して爲家等に至りてまた千首あり。これらの百首、千首いづれも群書類從及び續群書類從に就いて見るべし。而して小倉百人一首の如き個々別人のものながら、また以て百首の流行の證とするに足る。この小倉百人一首の定家の撰なるか否かについては種々の論あり。別に更めていふことあるべし。

法樂和歌。　一方に於てまた歌道を立てゝ神佛道に近くするの風を生じぬ。本地垂迹の說の行はれたるは既に久しきことにて、奈良朝よりその說あり、平安

朝に行はれしが、眞に神佛混交せしは平安朝の末より鎌倉時代にかけて新佛敎の興りしと同時にあるべし。而してこの時に及んでは、佛者が神道をおのが道に引き入れしのみならず、神道家もまた佛道を己が道に入れたり。かくして和歌道もこれに倣ひてその道の神をつくりてこれを崇むるに至りしなり。勿論後世の古今傳授に說くが如き和歌一首に陰陽和合の理あり、三敎一致の理備れりなどいふことはあらざれども、とにかくその道を貴くし、神前に歌合または百首をさゝげて法樂と稱し、その道の發達を祈りしなり。近世まで神前に俳句などの額、行灯を捧ぐるもこのならひなり。この法樂はいつ始れるかを知らざれども、後三條天皇の延久四年國司が奉れる氣多宮歌合あり、俊成が春日、日吉、住吉、賀茂、大神宮に奉れる五社百首あり。西行が御裳濯川歌合、宮川歌合あり。その他の例また群書類從等について見るべし。而して大神宮、春日等いづれはあれど、殊に當時に和歌の神とせられたるものには人麿呂あり、玉津島あり、住吉あり。ついでは文學の神として北野も盛なり。(但し北野は後に連歌殊に多し。玉津島はこれに捧げたること少きが如し。)人磨呂影供のことは十訓抄、著聞

集に出で、また影供の文など群書類従にもあれば玆に贅せず。
玉津島の事は紀州名所圖會引の今按名蹟考等を見るべし。されどその神功皇后といへるも果して如何。續記にあるは山水の靈を祭りしなるべし。而してその地名が和歌の浦といふによりて和歌の神となりしなり衣通姫といふは何に據れるか。始めの歌はたゞ風景を詠じたるのみ。崇徳院の頃より神としての歌みゆ。但し神祉といふも別になかりけらし。東野州聞書に、「玉津島には祉一つもなし、鳥居もなし、只漫々たる海のはたに古松一本横はれり。是を玉津島の垂跡のしるしとするなり、云々」と見え、兼載雜談にも、「玉津島にも祉なし、松神體なり、云々」と見えたり。要するに、その名によりて和歌の道に托することありしなり。而して俊成の五條室町の宅の新玉津島は俊成の創立するところといへば、その和歌の神たるも久しかりしなり。後の和歌所といひて爲明が新拾遺集を撰びしも實にこの處、季吟が久しく住みしもこの處なり。
住吉もまた和歌の神たること何によれるかを知らざれども、袖中抄によれば玉津島と關係あるが如し。新後撰集に

和歌の浦の道をば捨てぬ神なれば、哀をかけよ、住吉の波。　俊成

また新古今集に、

我が道を守らば君をまもるらん、齢はゆづれ、住吉の松。　定家

と見ゆ。平安朝に屢〻行幸あり。また貴族の遊覽あり。歌詠など多かりしかばおのづから和歌の神となりしなるべく、また神主津守氏に代々歌人の出でしもその一因なるべし。津守氏の歌人として知られしは後冷泉天皇の頃の津守國基(源平時代の人)等その始なるべくその子に經國あり、その後國平、國助、國冬(弘安頃の人)等相ついで聞えたり。水蛙眼目には「住吉神主國冬云、歌よみは多く當社御眷屬となれり。……國助神主をば、神護寺のそばに社を作て、神とあがむ。至主(イ王)神社と號す。近來此道の堪能也」と見えたり。

竟宴和歌。　(本文缺)

和歌所の再興。　貫之等の古今集を撰するや、承香殿の東なる處(仁壽殿の北)御書所においてこれが業をつとむ。その名は未だ存せざれども、即ち和歌所にして、貫之等は即ち寄人なり。その後、村上天皇の天曆五年昭陽舍(梨つぼ)に於て古

萬葉集を注釋せしめ、また後撰集を撰せしむ。藏人左近衛少將藤原伊尹を和歌所別當となし、宣旨奉行文は源順これを作る。淸原元輔等五人撰述の業にあづかる。これ實に和歌所の名ある始にして五人等は未だその名なしといへども、寄人に外ならず。拾遺集は花山院天皇の自撰と稱せられ、後拾遺集以下千載集まで一人の撰にかゝり、特に和歌所の設なかりしが如し。しかるに後鳥羽院に至りて殊に和歌を好み、讓位の後また古制を回復して和歌を奬勵せらる。こゝに於て和歌所の再興あり。

事は明月記建仁元年の條に見ゆ、曰く

七月廿六日、巳時計參上、此間右中辨奉書到來、明日可被始和歌所事、爲寄人、西尅可令參仕給。

追仰、初可被講和歌、以松月夜涼爲題、凝風情可令來入給、人々布衣也、今遇此事、可謂老幸、聞人々說、寄人十一人云々。

左大臣殿良經公内大臣殿通親公座主慈圓三位入道殿俊成卿頭中將通具朝臣予、家隆朝臣、雅經、具親、寂蓮云々。

而してこれに次いで以㆓弘御所北面㆒爲㆓和歌所㆒とてその指圖あり。源家長朝臣開闔たりき。

勅撰考に「是は必ず撰歌の爲めのみならず、彼の翰林院弘文館などの類になぞらへて、此の所に時の歌よみ連をつどへ置かれんが爲なり。さて新古今集も此の和歌所にて撰ばしめ給へるなりき」とあり。前掲の明月記の翌廿七日の條に和歌御會のことを記し、而してかの指圖をかきたるを見れば、歌會もこゝに行はれたることとしるし。

また水無瀨殿にも和歌所ありしが如し、たゞ事ある時にその所を和歌所と名づけて、特殊の局を設けたにもあらざりしならんか。水蛙眼目に、

六條内府有房被㆑語云、後鳥羽院御時、柿本、栗本とて置かる。柿本は世のつねの歌、是を有心と名く、栗本は狂歌、是を無心といふ。有心には後京極殿(良經)慈鎭和尚、以下其時秀逸の歌人なり。無心には光親卿、宗行卿、泰覺法眼等也。水無瀨殿和歌所に、庭を隔てゝ無心座あり、庭に大なる松あり、風吹きて殊に面白き日、有心の方より慈鎭和尚、

心あると心なきとが中にまたいかに聞けとや庭の松風。

といふ歌を詠じて無心の方へ送らる。宗行卿、

心なしと人のたまへど耳しあれば、聞き候ふぞ軒の松風。

と返歌を詠じたり。「耳しあれば」が生さかしきぞと上皇勅諚ありて笑はせ給ひけり。水無瀨殿御堂長老至一上人水無瀨三品の說とて語て云、此の和歌所の軒の松は上皇御心をとゞめさせ給ふ木なり。はるかの御所の後、此松にをしつくべしとて御歌を送らる。

古へは花ぞあるじをしたひける、松は人とも思はざりけり。

此の和歌をされて後、まもなく松はかれにけり。云々。

と見ゆ。その後も定りたる和歌所といふもなく、定家の子孫の勅撰にかゝはる人の宅を和歌所と號せしが如し。今一々その例をあげず。勅撰考等を見るべし。而して和歌所の領といふに播州細川、江州小野の邑あり。いつ頃置かれたるか詳ならず。爲氏爲相の爭ひしは即ちこれなり。

新古今和歌集（一）—撰者と時代

新古今和歌集の題名に就いては別に說くべき事なし、たゞ八代集抄に「新古今の題號はあらたなる古今集といへる心なるべし」とあるが如く、古今集の盛を追ふとてこの名も出でしなるべし。

この集卷數すべて二十卷、載する所の歌の數は、八雲御抄及び拾芥抄に從へば一千九百七十八首、國歌大觀によれば一千九百七十九首、勅撰次第一本に從へば一千八百七十四首となす。いづれにもせよ、千五百首の上に出でしもの、八代集の內ひとりこの集あるのみ。次いで後撰集最も多けれども、それも千四百首をいでず。

新古今集は部門を分つて、春上下夏、秋上下冬、賀、哀傷、離別、羇旅、戀一二三四五雜、上中下神祇、釋敎の十二となし、區分略、千載集に似たり。唯雜體のなきのみおなじからず、卅一字の純なる短歌に力を專にせるを見るべきなり。

序は千載集にもありしが、これはなほ泝りて古今集にならひて漢文の序をも作りて終に附せり。但し漢文の序は國文の序に比して頗る出入あり。大體は似たりといへども、古今集の兩々相似たるが如くならず。これ古今集の二序あるも目的の異なればなり。新古今集の序は古今集のそれに次いで神妙なりと稱せらるれども、徒に古今集の風に擬して駢儷の體の最も甚しきもの、見るに足らざるなり。國文の序は後鳥羽院の聖作に擬して後京極攝政の手になれるもの、漢文の序は權中納言日野親經卿がおなじく聖作に擬して記しゝものなりといふ。（拾芥抄、異本勅撰次第上）

次に撰集の時代は如何。明月記建仁元年十一月三日の條に、「左中辨（拾芥抄には右中辨長房奉行とあり）奉レ書、上古以後和歌可二撰進一者、此事被レ仰二所寄人一云々」と見え、この後撰歌部類のこと屢、明月記の中に見ゆ。勅撰次第に、「同三年四月撰進之、元久元年二月廿六日巳行二竟宴一」とあるは蓋し明月記を心得違へたるなるべし。國文の序には「元久二年三月記し了りぬ、」（漢文の序も同月にして日は記さず）とあり。次に元久二年二月廿二日の條に

今日終戀部、又終釋敎部、雜部多之間、相待人數多時、神祇部取出之、予依憚身、此部有恐之由、示家長了、神歌甚多、又神歌之次第尤難測、雖爲一旦之沙汰、可備萬代之證據、暗列神御名之條、恐無極、仍不交手。

その後も切繼のことと見えしが、三月廿七日竟宴のことあれば、（東鑑九月二日の條「三月十六日撰進、四月奏覽、未被行竟宴、又無披露之儀」とあり）一旦業を終へしものと見ゆ。但し假名序は後れしなり。同月廿九日の條に「假名序御草賜見之、殊勝々々、尤可被急進覽由計申給、愚意又以同、假名筆云古云今、殊尋常疑有事歟、此御文章眞不可思義無比類者也云々」。その後家長が本を持して往復、上皇の訂正もあり、屢々切繼のこととありしなり。承元元年十一月八日の條に、參上、依仰又切新古今出入如反掌以切繼爲事、於身無一分面目、近日和歌沙汰、又驚耳目、上手多出來歟、如除目任人」とあり。勅撰考にいはく、「扨此後はこの沙汰聞えねば此十一月八日の切繼にて事定まりしにやあらん」と。

次に撰者は、序によれば右衛門督源通具、大藏卿藤原有家、左近權中將藤原定家、前上總介藤原家隆、左近少將藤原雅隆にして、拾遺集以來一人のしわざになり

ておのづから聞きもらし見及ばぬことあればとて、古今後撰の二集にならひて五人を選ばれしなり。而して撰進中上皇自ら御合點ありしは從來類少き事なりとす。増鏡おどろのしたにもこのことを述べたり。

拾芥抄によれば寂蓮撰者に入るといへども奏覽前に早世すとあり。延慶兩卿訴陳狀にも見ゆ。建仁二年七月廿日逝去せしなり。また通親、通光も仰せを承れる由明月記及び拾芥抄に見ゆれどもいかゞにや。良經、慈圓などもその議に預りしなるべし。而して家長開闔として專ら事務に斡旋せしことといふに及ばず。

定家については玄旨百人一首抄序にいはく「新古今を五人に仰せて撰はれしなり。然るに定家卿は奏覽以前に父の喪にこもり居たまへり。さるによりて各の撰歌の體彼卿の心に叶はず。その趣明月記に見えたり。」とて、この書及宗祇百人一首抄にも、定家は即ち古今集は花實相對、新古今集の花が實に過ぎたるを喜ばずして、こゝに小倉百人一首を撰びしなりといへり。定家の心に叶はざる由は先の引文にもあるが如く明なり。されど俊成の喪に籠りたる故にはあらず。俊成は元久元年九十一にして歿したれば喪中といはゞいふべし。されど撰

集の事に關りしは明月記に明なり。百人一首を以てこれに代ふべきにあらざる由は古より定論あり。むしろ「新勅撰こそ心たらひにせられなめ」と眞淵のいへるを當れりとせむ。

次に雅經の事について、正徹物語に「雅經は新古今の五人の撰者の內に入侍りしも、其比堅固の若輩にてありしかば、撰者の數に入りたる許りにて、家には記錄などもあるまじきなり」と。

この集は萬葉集にあるはぬき、古今集以下の集に見えたるは採らず。今のも昔のも併せとりぬ。古今集以下を採らずといへども、一二の重出はあるべし。「かの末の露もとの雫や世の中の、」といふは既に古今集にありなど、最初より論ありしなり。赤人の「神なび山の郭公」の歌も既に後撰集に出でたる由宮內卿注意せりといふ。今その作者の歌の數多きものより列擧すれば、西行九十四首、慈圓九十二首、良經七十九首、俊成七十二首、式子內親王四十九首、家隆四十二首、寂連三十五首、院三十二首、貫之三十二首、定家三十首、和泉式部二十五首、紫式部二十四首、人麿呂三十三首、雅經二十二首、有家及俊成卿女十九首、秀能十七首、伊勢、北野

神、曾丹、經信、實定、二條院、讃岐、各十六首、宮內卿十五首、匡房十四首、寂然十三首、業平、實方、淸輔、俊惠、各十二首、家持、俊賴、齋宮女御、赤染衛門、相模、行尊、各十一首、これなり。而して卷頭は良經にして、卷軸は西行なり。十首以下はこれを略すといへども、特に注意すべきは長明の事なり。兼載雜談に「新古今撰せられし時公卿、諸大夫以下家集を五百首千首づゝ出されしに、鴨長明はたゞ十二首出したりしに、そのまゝ十二首（實は十首なるが如し、如何。）ながら入りしとなり」と見えたり。要するに帝王以下高位の人多し。又始めてこの集に見えたる人は後拾遺集以下に比すれば甚だ少し。敢て今を重んせざるにあらず、千載集の後年を隔つること少ければなり。新勅撰集に至つて却りて始めて見えたる人多し。その今を重んじたること古今集の如く、撰者の自信に篤きは、元久二年三月二日の明月記の文を見て知るべし。その文にいはく、

人々云、當世人歌不知食多少先註出之可經御覽爲令增減也云々、以能書人令書之、下官只見雜部三卷直詞等、（或人所進歌、依非分事多也、）又仰云、卷之始大略以故人置之、不可然、以定家、家隆、押小路女房等三人、各可立一卷之始者、又繼直之、以

家隆爲₂秋下部始₁、以₂女歌₁爲₂戀二始₁、以₂予歌₁爲₂戀第五始₁、依レ爲₂身事₁、態可レ入レ末也、此仰尤爲₂面目₁、但如₂當時₁者、連世一字人未レ知者多入レ之、又昨今末生等及₂十首₁、予歌四十餘、家隆二十餘云々、今仰頗似レ撰レ人、如何。

また定家卿相談に（勅撰次第に出づ）「又自詠は可レ入歌も不レ入、思ひかけざる歌も入れり。自撰せざる故なり。自撰恐ある間一首もかゝざりしなり。撰者たちの歌思ふやうにも見えず。家隆卿歌こそ入たる限り、神妙に候へ。定家手を下して彼の人の歌えりて奉りき」と見えたり。

第三章　新古今和歌集（二）――その評論

つら〳〵思ふに新古今集は古今集に比すれば大差あるが如くなれども、その相接する撰集と並べ見るに差異甚しからず。蓋し千載集の後を追うてこれを敷衍發達せしめたるものとや云はん。而して世人皆これが古今集と頗る風體を異にするあるをいへども、實は世人の思ふが如く甚しき差異あるにあらず、

その大いに古今集に異なるはむしろ金葉、詞花の二集なるべく、千載集、新古今集は却つてその後をうけて古今集の體にかへらんとせしものなり。されば險辭難語はつとめてこれを避け、むしろ詞は舊きを以てよしとすとして、三代集を庶幾せり。さればその結果として種々の特質を生み出しぬ。

第一に本歌どりの歌、即ち古人の字句をとるもの多くなれり。而してこの法も漸次發達して種類多し。些少の字句をとるもの、意義をそのまゝ受くるもの、本歌によりて他に道を開くもの、問答、反對等種々の體あるべし、今一々いはず。なほ歌學書を辯ずる時に讓らん。而して本歌どりの歌の多きは驚くべきばかりにて一枚毎に一二首を數ふべし。これ一は復古の意と、一は意義を多からしめんの意に出でしなるべし。今一二の例をあげむに、

秋ふけぬ、なけや、霜夜のきり〴〵す。やゝ影寒し。蓬生の月。　後鳥羽院

は後拾遺集の

なけやなけ、蓬が杣のきり〴〵す。過ぎ行く秋はげにぞかなしき。　好忠

にならへるものにして、一句を取れるものなり。

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮。　定家

は萬葉集の

苦しくも降りくる雨か、みわが崎さののわたりに家もあらなくに。

によれるものなり。これを本歌とれる歌の本と稱す。

眺むれば千々に物思ふ月に又わがみ一つの峯の松風。　長明

は古今集の

月見れば千々に物こそ悲しけれ、我が身ひとつの秋にはあらねど。　千里

の敷衍なり。

忘れなん、まつとなづげそ、なか〳〵に稻葉の山の峯の松風。　定家

は古今集の

立ちわかれ稻葉の山の峯に生ふる松としきかば今かへりこん。　行平

によれるものにして、問答體なり。

立田川峯の嵐も弱るらん、渡らぬ水も錦たえけり。　宮内卿

立田川紅葉をとづる薄氷、渡らばそれも中やたえなん。　家隆

は共に古今集の

立田川紅葉みだれて流るめり、渡らばにしき中や絶えなん。

を取りたるものにして、第一の宮内卿の歌に本歌は反對せるなり。わけて古今集の

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身一つはもとの身にして。　業平

の歌はよく引かれ、また曾丹の歌も引かるゝ事多し。

かく古辭をたつとんで、想は新鮮ならんことを期せり。然り、或點に於ては清新なる所もあるべし、されど大體に於て陳腐にして蹈襲の弊を免れず。月雪花に對する根本の思想において殆ど新に添加する所なきなり。一々例をあぐるにも及ばざらんか。

かくいへば辭想共に昔を追うて保守因循、何のとるべきなきが如しといへど

も、新古今集の特長は前代をうけて練磨に練磨を重ねて、よく舊想に新衣を着せて清新なる體をなさしめしにあり。即ち難辭奇語を用ひざれどもよく語を練りて言ひまはしの巧になれることこれなり。

よそながら怪しとだにも思へかし、戀せぬ人の袖の色かは。　高松左衛門佐

さそはれぬ人のためとや殘りけん、明日よりさきの花の白ゆき。　良經

されど言まはし過ぎておのづから意義の晦澁に陷れるものなきにあらず。

わすれずばなれし袖もや氷るらん、ねぬ夜の床の霜のさむしろ。　定家

知られじな、同じ袖には通ふとも、たが夕暮とたのむ秋風。　家隆

柴の戸に匂はん花はさもあらばあれ、ながめてけりな、うらめしの身や。　慈圓

語、辭の彫琢また至れり、盡せり。

梅が枝に物うきほどにちる雪を花ともいはじ、春の名たてに。源　重之

みよし野の高嶺の櫻ちりにけり、嵐もしろき春のあけぼの。　太上天皇

逢坂や木ずゑの花を吹くからに、嵐ぞかすむ關の杉村。　宮内卿

櫻色の庭の春風あともなし、とはばや人の雪とだに見ん。　定家

くれてゆく春の港はしらねども、霞におつる宇治の柴ふね。　寂蓮

たぐへくる松の嵐やたゆむらん、尾の上にかへるさを鹿の聲。　良經

憂身にはながむるかひもなかりけり、心にくもる秋の夜の月。　慈圓

立田山夜半に嵐の松ふけば、雲にはうとき峯の月かげ。　通光

修辭の法には色なきものに色をつけ、形なきものに形をあたへて、

時鳥ふかき峯より出でにけり、外山のすそにこゑのおちくる。　西行

など色々あれど、擬人の法を多しとす。

野原より露のゆかりをたづねきて我が衣手に秋風ぞふく。　後鳥羽院

石川やせみの小河の清ければ、月も流をたづねぞすむ。　長明

比喩も巧みになりたるが、わけて戀歌に著し。

我が戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風さわぐなり。　慈圓

きくやいかに、うはの空なる風だにも松に音する習ありとは。宮　内　卿

思ひ入る身は深草の秋のつゆ、たのめし末やこがらしの風。家　隆

かくして語辭の修練はおのづから簡單に詞をつゞめて、てにはゝ動詞ゝ等の省畧ゝを來せり。

(その例脱落)

從うてまた名ゝ詞ゝをゝ多ゝくゝするに至りぬ。

みよしの野の高嶺の櫻散りにけり、嵐もしろき春のあけぼの。後鳥羽院

わが涙もとめて袖にやどれ月、さりとて人の影は見えねど。良　經

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜、忘れぬゆめを吹く嵐かな。通　光

同時にまた漢詩などの調も加はりて、自ら切字多き歌加はりぬ。

ふしわびぬ、しのの小笹のかり枕、はかなの露やひとよばかりに。有　家

袖にふけ、さぞな旅ねの夢も見じ、おもふ方より通ふ浦風。定　家

山かげやさらでは庭にあともなし、春ぞ來にける、雪のむらぎえ。

これらの言語の弊は陷りて、極めて難解なるもの多きに至りぬ。

身にとまる思を荻のうは葉にて、このごろ悲し、秋のゆふぐれ。　有家

年もへぬ、祈るちぎりははつせ山、をのへの鐘のよそのゆふぐれ。　慈圓

おもひ出て、よなく月に尋ねずば、まてと契りし中やたえなむ。　定家

要するに語句の彫琢は、歌合、百首など多く行はるゝに從うてこの風を馴致せしものにして、勢虚僞に奔り、感情ひややかなるに至らざるを得ず、されどこれに反して調も自然に、強ひて修飾を用ひず、暢達を專とせしものあり。西行上人を最となす。　良經

きりぐす夜さむに秋のなるまゝに、よわるか、聲のとほざかり行く。　西行

なにとなくさすがにをしき命かな、ありへば人や思ひしるとて。

西行

逢ふと見てことぞともなく明けにけり、はかなの夢の忘れがたみや。

家隆

なにごとを思ふ人ぞと人問はゞ、答へぬさきに袖ぞぬるべき。慈圓

つくづくと思へばやすき世の中を、心となげくわが身なりけり。

長延

さて思想の上より觀れば、先蹤を追うて、叙景のものゝ少からず。殊に、湖海の夕、また月などの詠多し。

なごの浦の霞のまよりながむれば、入日を洗ふ沖つ白浪。 實定

夕なぎにとわたる千鳥浪間より見ゆる小島の雲に消えぬる。實定

霞たつ末の松山ほのぼのと波に放るゝ横雲の空、 家隆

契らねど、一夜はすぎぬ、清見潟、波にわかるゝあかつきの雲。 家隆

にほの海や、月の光のうつろへば、浪の花にも秋は見えけり。 家隆

しがの浦やとほざかり行く波間より氷りて出づる有明の月。家隆

夜もすがら浦こぐ船はあともなし、月も殘れるしがの唐崎。　宜秋門院丹後
須磨の浦なぎたる朝は目もはるに、霞にまがふあまの釣舟。　孝　　　善
山野の景はこれに比すれば少けれど、また無きにあらず。
山里の峯の雨雲とだえして、夕涼しき槇の下露。　後鳥羽院
行末は空も一つの武藏野に、草の原より出づる月かげ。　良　　　經
旅人の袖吹きかへす秋風に、夕日さびしき山のかけはし。　定　　　家
初瀨山夕こえ暮れて宿とへば、三輪の檜原に秋風ぞ吹く。　禪性法師
されどこれらの叙景の歌は机上に案出したるもの多くして、實地に臨んで目に觸るゝ所をさながらに詠じたるもの甚だ少し。たゞ西行のみは例外にして、自然の間に放浪して、親しく之に接し、感ずるまゝに詠じ出せるが如し。
ふるはたのそばのたつ木にゐる鳩の友呼ぶ聲のすごき夕暮。西　　　行
の如きは普通の歌と材料を異にせり。
しかれども大部分は依然として叙情にあることは、和歌本來の通性にして、ひとりこの時代のみ然らざるを得ざるなり。たゞこの集に於いて特に說くべき

ものありとせば、そは情景の融合にあり。これ前代に未だ見ざるところなり。

春の夜の夢のうきはしとだえして、峯に別るゝ橫雲の空。　定家

人は來で、風のけしきもふけぬるに、あはれに雁の音づれて行く。　西行

忘らるゝ身を知る袖の村雨に、つれなく山の月は出でけり。　太上天皇

忘れじの言の葉いかになりにけむ、たのめし暮は秋風ぞ吹く。宜秋門院丹後

これや見し昔すみけむ跡ならむ、蓬が露に月のかゝれる。　西行

世の中を思ひつらねてながむれば、空しき空に消ゆる白雲。　俊成

またつとめて詩想を雄大にせむとせし傾向あり。所謂丈高き歌これなり。これ既に尾張の家苞にいへる所にして、單に言葉のつゞけざまによるにあらず。

ほのぼのと春こそ空に來にけらし、天のかぐ山霞たなびく。　太上天皇

今日といへばもろこしまでも行く春を、都にのみと思ひけるかな。　俊成

天の原富士の煙の春の色の霞になびくあけぼのの空。　慈圓

富士のねの煙も猶ぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。　　家隆

蓋し當時の武士的氣風及び漢詩の感化もあるべし。されど纎細、巧緻、豐麗なるものもとより多しと知るべし。

霜迷ふ空にしほれし雁がねの、かへる翼に春雨ぞふる。　　定家

風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢。　　俊成女

こゝになほ一つ注目すべきは當時の思想は古今集時代よりも遙に複雜になりて、想の深くなりしことこれなり。わけて戀の部に於て然るを見る。これ久しく古今集風の單調に飽けるによること勿論なり。されどこれも實は想の深くなりたるといふよりは、言葉のかゝりなどに工夫して、一つことを裏面より、また側面よりいひしに過ぎずして、眞に前人未發の想ありしにあらず。而して工夫經營のあまり、おのづから實情に遠ざかり、虚僞に陷ること多し。

心とや紅葉はすらむ立田山、松は時雨に染めぬものかは。　　俊成

うき身をば我だに厭ふ、いとへたゞ、そをだに同じ心とおもはむ。

うすきこき野邊のみどりの若草に、あとまで見ゆる雪のむら消え。　　俊成

紅葉とはおのが染めたる色ぞかし、よそげにおける今朝の霜かな。　　宮内卿

今ぞ知る、思ひいでよと契りしは、忘れむとてのなさけなりけり。　　慈圓

西行

さて意義の上に於て深遠なるものあるに至れりとせば、そは實に佛敎より來らざるべからず。平安朝にも佛敎の影響はありしかども、その主旨の深く人心に染みしは新佛敎の出來し平安朝の末よりなること屢いふが如し。その佛敎的の歌は神祇、釋敎の釋敎の部よりも、むしろ普通の歌にあり。而して最もこの點に於て成功せるは西行と慈鎭となり。されどそれも詩としては成功せぬもの多し。

いつなげきいつ思ふべきことなれば、後の世知らで人の過ぐらむ。

西　行

皆人の知り顏にして知らぬかな、必ず死ぬる習ありとは。慈　鎭

昨日見し人はいかにと驚けば、なほ長き世の夢にぞありける。慈　鎭

蓬生にいつかおくべき露の身は、けふの夕ぐれ、あすのあけぼの。

慈　鎭

つく〴〵とおもへば悲し、いつまでか人のあはれをよそに聞くべき。

入道左大臣

さとり行く誠の道に入りぬれば、戀しかるべきふる鄕もなし。慈　鎭

うけがたき人の姿にうかび出て、こりずや誰もまた沈むべき。西　行

背きてもなほ憂きものは世なりけり、身をはなれたる心ならねば。

寂　蓮

いづくにも住まれずはたゞ住までわらむ、柴の庵のしばしなる世に。

西　行

月の行く山に心を送り入れて、闇なるあとの身をいかにせむ。西　行

思ふことなど問ふ人のなかるらむ、仰げば空に月ぞさやけき。慈　圓

思ふべきわが後の世はあるかなきか、無ければこそはこの世には住め。

慈　圓

身のうさを思ひ知らでや止みなまし、背く習のなき世なりせば。

西　行

いかがすべき、世にあらばこそ世をも捨て、あなうの世やと更に思はめ。

西　行

何事にとまる心のありければ、更にしもまた世の厭はしき。西　行

くるゝまも待つべき世かは、あだし野の末葉の露に嵐吹くなり。

式子内親王

最後に新古今集中名歌として聞えしもの數首をあげてこの章を終へむ。

おきなくつらき嵐の聲もうし、など夕ぐれに待ちならひけむ。

定　家

大納言爲兼新古今集の中に歌首と考へたるその一つなり。

かへるさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月。　　定家

長明の所謂新古今三首の名歌のその一なり。おなじく定家の「駒とめて」の詠が本歌どれる歌の本といはれたるものなることは、既にいへるが如し。その他定家に

見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋のゆふぐれ。

の詠あり。西行の

心なき身にもあはれは知られけり、鴫立つ澤の秋のゆふぐれ。

及び寂蓮の

さびしさはその色としもなかりけり、槇立つ山の秋のゆふぐれ。

と共に三夕の歌とて古來名高し。

萩が花までにうけて高圓の尾上の宮にひれふるや誰。　　顯昭

顯昭詠歌中の秀逸といふ。

思ひ入る深き心の便まで見しは、それともなき山路かな。　　秀能

を定家も奇特なる由褒美ありしと也………無上至極の歌」と抄にいへり。

袖の上に誰ゆゑ月は宿るぞと、よそになしても人のとへかし　秀能

「これも定家卿幽玄體の内の餘情なりと」云々」と見えたり。

きり〴〵す鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ。　良經

「小莚に衣かたしき今夜もや」及び「足引の山鳥の尾の」の二首を本歌にせる名吟なり。

たゞたのめたとへば人の僞を重ねてこそはまたも恨みめ。　慈圓

玄旨」戀の歌のよみやうの手本といふ。教訓的なればなるべし。

しめおきて今やとおもふ秋山の蓬が本に松虫の鳴く。　俊成

八十有餘の歌、定家感極れる歌と書きたりけり、この哀は骨にもとほるばかりなりと、古人は評せり。

玉の緒よ絶えなば絶えね、ながらへば忍ぶることの弱りもぞする。　式子内親王

生きてよもあすまで人はつらからじこの夕暮をとはば問へかし。
式子內親王

この內親王の如き感情のはげしき歌は、新古今集中集に見る所なり。

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出づる月の影のさやけさ。
顯輔

白にしてよき歌ならむか。

第四章　新古今集時代の最も有名なる歌人

當時の歌人として最も注意すべきは、定家、家隆、後鳥羽院、後京極攝政、慈鎭和尙等にして、その他式子內親王、宮內卿、顯昭、寂蓮、鴨長明、秀能、俊惠等亦有名なり。定家は家隆と相並んで、當時に於て最も尊ばれたる歌人なり。從來あまりに渠を尊崇し來りし反動として、近來は頗る聲價を落し、むしろ師範家の祖としてこれを斥くるが如し。されど傳授等の些事は必ずしも定家に始りしにあらざ

ることを思ふべし、定家は最も文辭の修練に力めたるが如し。徹書記物語に、西行、定家、俊成、三人が歌を作る時のさまをしるして「西行は道をあゆみながら、あるひは北面の戸をほそめにあけて月のかげを見ながら歌を案じ、定家は南面を取りはらひて、ま中に居て南をはるかに見はらして衣文たゞしくきて案じ、俊成はいつもすゝけたる淨衣の上ばかりうちかけて、桐火鉢にうちかゝりて案じたり。」とあるによりて、三人の性質の異同を見るべく、また以て渠の歌の工夫に工夫を凝して成れるものなるを案すべし、從つて感情の勃發して歌となれるものは定家の作中遂に見るを得べからざるなり。渠の著せる詠歌大概にいはく、「情以新爲先、詞以舊可用、詞不可出三代集云々風體可效堪能先達之秀歌、不論古今遠近云々近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除弃之、七十八十以來之詞努々不可取用之和歌無師匠、只以舊歌爲師、染心古風、習詞於先達者、誰人不詠哉」と。以て渠の歌に對する意見を窺ひ知るべし。しかも渠の歌、想に於てあへて新奇なるものあるにあらず、複雜となれる所はあらむも、兎に角從來のまゝの想を、語をかへて句を珍しくして詠み出せるに過ぎず。更にその用語に對する意見は偏狹なりといふの外なし、三代集

時代の思想を盛るには、三代集中の詞をもつて足れりとせむも、はるかに下れる時代の複雜なる思想をあらはすには、三代集中の語を出づべからず、七八十年來の歌人の詠出する所の語を用ふべからずとは無理なりといはざるべからず。從つて渠は制限せられたる僅なる詞を以て複雜なる思想をあらはさゞるべからざるがゆゑに勢ひ修辭に工夫を凝すに至れるなり。故に渠の歌は意味深遠なるものあるとともに、また時として無理なる詞づかひありて、その意を解するに苦むものあり。されば後鳥羽院は定家の歌は元來深き高き思想はなくして、たゞ詞たくみにいひまはせるものなり、これを初心の人が眞似たらば必ず失敗すべき由のたまひ、その子爲家すらも、また、定家の歌は詞は巧なれども思想は元來平凡なるものなるよしいへり。たゞそれ紆餘曲折に富むが故に、おのづから戀歌には妙を得たり。されば徹書記物話にも、定家に誰も及ぶまじきは戀の歌なり。家隆ぞ劣るまじけれども、それも戀の歌は及ぶまじきなり、」と見えたり。叙景の歌に至つては虛構の嫌ありて、却つて趣味を損せり。要するに定家の歌の研究はその想の上にあらずして、その修辭にあり。言語の修練は

實に當時の歌人一般の風潮なれども、定家は實にこれが代表者なりしなり。「春の色」『秋の色』『櫻色』『風の色』『嵐の色』など、好んで用ひし所。對句もまた好んで用ひたり。「ふして思ひ、起きてぞ祈る、『峰なる雲も、谷の氷も』の如し。こは渠が一方に於て漢詩を作り、文選を講じなどせるがために、おのづから漢詩の影響を蒙れるものなるべし。「都の山は月繊うして、『殘れる柳春を忘れず、『浦風寒く殘る月影』の如きもまた前の對句とともに漢詩より出でたるものなるべし。されどこれらは一般の風習にして、定家をのみ奇とするに足らず。定家はむしろ、前述の如く、險語、奇辭を避け、舊く弘く行はれたる言語をもて意義を深くせむとせしなり。

また

この暮を夏とは誰か岩井波、松かげ拂ふ山おろしの風。

の如く双關語は定家の好んで用ふる所。かくの如くにして、その末流は平語を用ひ双關語を用ひ、平板極るものに漸々うつり行きしなり。ひとり京極家は俊賴の奇矯の風を喜びて、その風潮に反對せしかども、遂に大勢を如何ともすることは能はざりき。

藤原家隆は寂蓮の婿にして、俊成の門弟なり。家集を玉吟集とも又壬二集ともいふ。俊成は家隆が常に詠歌の大事をのみ質して、故實などの末を問はざりしを褒めたるよし、水蛙眼目にも兼載雜談にも見えたり。これに反して定家は俊成に叱らるゝ事多かりきといふ。後京極攝政また家隆を推重し、渠を後鳥羽院に薦めたり。かくして家隆は院に最も昵近せり。定家また家隆と友としてよく、互に相推重すること甚し。家隆かつて後京極攝政に見えける時、當世の歌人中何人か最もすぐれたると問はれて定家の「明けばまた秋の半も過ぎぬべし、傾く月の惜しきのみかは」の歌を記したるふところ紙を落して去りきといふ逸話は、普く人の知る所なり。また徹書記物語には「家隆はことばきゝて、さつさつとしたる歌をよまれしなり。定家は執し思はれしにや、新勅撰には家隆の歌をおほく入られ侍ければ、家隆の集の樣なり。但少亡室體の歌ありて、子孫久しかるまじき歌樣也とて恐れ給ひし也」と見えたり。その他新古今集の家隆の歌を、特に定家が選びしが如き、定家の家隆を重んずることと他にこえたるを知るべし。家隆の歌はこれを西行の詠に比するに、かれが如くいふ所に變化あるに

あらず、欝勃たる詩趣あるにあらず、むしろ定家に似て從來の想のまゝなるもの多し。その相似たるをもて、定家もまたこれを喜びたるなり。されどなほその傾向の異なる所を求むれば、定家が工夫を積みて極力修辭を整ふるに反して、家隆はむしろ感情に任せてすら〳〵と詠み、强ひて巧緻を弄することなし、今、定家家隆兩卿撰歌合第四番、

名もしるし嶺の嵐も雪とふる山さくら戸の曙の空。　定家

けさ見れば梢の花は散りにけり、風の下なる峰の白雲。　家隆

の二首の歌を對比すれば、以て兩卿の歌の趣の異なる所を伺ふを得むか。家隆に、

霞たつ末の松山ほの〴〵と波にはなるゝ横雲の空。

の類多し。これ新古今集時代の人が一般に喜びし風體にして、修辭の巧を推すべきものなり。しかもなほ巧を弄すること定家の如く甚しからず。これ解しやすきをつとめて、むしろ平板に流れたる二條の正風が、家隆を尊びし所以ならむ。されど長所はやがてまた短所なり。定家の歌に歌屑といふもの殆ど無きに

反して家隆の作には、時として愚にもつかぬたゞこと歌なきにあらず。殊に本歌取りの歌に至りては定家は本歌を基としてこれに新なる思想を加へ、または本歌とは反對のことを詠み出でゝ變化を試みたるに反し家隆の歌は本歌と同じ意味の歌多しといはれたり。今この二家を古今集時代の歌人に比するにその伎倆といひ、その位置といひ、定家は貫之の如く家隆は躬恒に似たり。その亡室體といはれしは、如何なる意味なるかを知らずといへども、想の上にはあるべからず。思ふに中世のよろこびし双關語を以て上下の句を繋がずして、三句目に句切あり、志かも上下の關係やゝ薄きもの、いはゆる腰折の歌の腰、あるをいひしならむか。

後京極攝政良經は九條兼實の子にして、慈鎭和尚の姪なり。三十四歳にして攝政となる。衆藝に通じ、手跡をよくし、また和歌に巧なり。三十八歳にして刺客のために害せられぬ。家集を月清集といふ。良經頗る詩才あり。秀歌最も多く殊に叙景の歌に秀逸多し。惜むべし、その長生せざりしこと、この人の歌は感情のゆく所に任せて、定家の想を錬りて詠みいづるとは全く趣を異にせり。

足柄の關路こえゆく東雲に一むらかすむ浮島が原。

人すまぬ不破の關屋の板廂、あれにし後はたゞ秋の風。

春の色は花ともいはじ霞よりこぼれてにほふ鶯の聲。

逢坂の山こえはてゝながむれば、霞につゞくしがの浦波。

庭深きまがきの野べの虫の音を、月と風との下に聞くかな。

等の如く、叙景の妙を見るべく、新古今集の清新の風は良經を代表すといふべし。その詞を驅使すること自在にして、かつ常に新しき句格を用ふるはこの人の特色なり。而してその思想に於ては迷悟の境にある煩悶の情却つてその歌を趣味あらしめ、同情を催さしむものあるが如し。當時後鳥羽帝最も渠を推重したまへり。後世に至つては、荷田在滿は國歌八論に於て渠を激賞し、北村季吟また八代集抄に於ていたく賞揚せり。

慈鎭和尚は攝政忠通（賴長の兄）の子にして、良經の父兼實の弟なり。歌には桑門時貞とも、學生安成とも、その外種々の假名を用ひたり。家集を拾玉集といふ。その他歌論に關する著述ありといはるれど信じ難し。この人達者無双にて拾玉集一

部は六家集中最も大部なるものなり。かつて奈良一乘院の門主慈鎭の和歌を好むをいさめし時、「皆人に一つの癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道」と詠ぜりといふ。而して稽古の歌甚だ多く、或は題詠を試み、或は詩の句を和歌に譯することを試みなどせり。或は百首を二時餘によめりといひ、或は一時半によめりといふ。從つてその歌粗雜なるもの多し。慈鎭もと西行を庶幾するもの、その詠大體に於て相似たり。その若き時西行に眞言の奥旨に達すべき方法を尋ねし時、西行のいはく、密敎を學ばむには須らくまづ和歌を學ばざるべからず、和歌を學ばざれば佛敎の奥旨は得がたしと。それかあらぬかこの二人の歌は最も佛敎趣味に富めり。されど西行の歌は自然に融化して渾然たる美玉をなす。慈鎭の詠に至つてはこれ味噌の味噌臭きもの、あまりに佛敎趣味多きに過ぐ。かの一乘院の門主が諫めたまひしはさることながら、慈鎭は和歌もまた佛敎の方便なりとし、和光同塵の說より引いて歌を以て道を說くの具とせるなり、いはく、「天に口なし、和歌をもていふべし」と。而して歌を論じて佛敎にたとへしこともあり、また住吉、賀茂等に法樂の和歌を奉りしこともあり。こゝをもて

和歌の深くなりしはさることながら、むしろ佛教の附庸の如くなりしもこれらの感化なるべく、その利よりも或は弊多かりしならむ。後鳥羽院また良經と相並んで當代に傑出せる人なり。活氣潑剌として清新の趣に富めり。

奥山のおどろが下も踏みわけて道ある世ぞと人に知らせむ。

夜を寒み閨の衾のさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ。

人も惜し、人もうらめし、あぢきなく、世を思ふ故に物思ふ身は。

君かくて山の端深く住ひせば、ひとりうき世に物や思はむ。（出家せる時慈鎭に。）

見渡せはむらの朝げぞ霞み行く、民のかまどの春にあふ頃。

われこそは新島守よ、隱岐の海のあらき波風心して吹け。

の如きは、皆そのすぐれたるものなり。院器局やゝ狹小、あまりに事を急ぎて政治に失敗し、また和歌の上に於ても、新古今集の撰に際して、あまりに干渉に過ぎたるやの噂もあれども、北條氏の追討を思ひ立ち給ふほどの勃々たる英氣

は、おのづから詠歌の上にも現れて、活氣をそへたるものなること明なり。晩年順德院と共に感慨の歌少からざるは、境遇の然らしめたるなり。順德院また頗る勝れたり。八雲御抄は禁秘御抄と共に注意すべし。

第五章　新勅撰和歌集

新古今集に次げる勅撰集を新勅撰和歌集となす。撰者は定家一人にして、序及び增鏡にしるす所によれば、貞永元年十月二日奏上せるなり。增鏡によれば、この年に勅を蒙りて、一年のうちに奏せりといふ。されど拾芥抄及び勅撰次第には、元年には序のみを奉りしにて、天福二年五月これを奏すといへり。今貞永元年說に從へば新古今集の撰進せられたる元久二年より後るゝこと二十八年にして、定家の七十一歲の時なり。而してその間に承久の大亂ありて、世は大に變轉せることを忘るべからず。

體裁は殆ど新古今集と同じけれど、神祇、釋敎の部を戀の部の前に置き、哀傷、離

別の部を去りて、雜の部を增して五卷となす。而してその中に長歌、旋頭歌もあり。古今集の簡單にならへるものの如し。

歌の數は勅撰次第に從へば千三百五十三首、拾芥抄に從へば千三百七十一首、國歌大觀に從へば千三百七十六首なり。今その作者の主なるものを列擧すれば、家隆四十三首、俊成三十五首、良經三十首、公經（西園寺入道）三十首、道家（良經の子）二十五首、慈圓二十四首、邦經二十首、實朝十九首、相模十七首、實氏（常盤井入道）十六首、定家十五首、殷富門院大輔十五首、貫之、八條院高倉、各十四首、俊頼十三首、和泉式部、式子内親王、二條院讃岐、各十二首、西行、知家、道助法親王（後鳥羽院御子）各十一首、信實十首、寂蓮、如願（秀能）各九首等なりとす。而して徒に片々たる作者の數のみ多く、名家鉅匠の作少きは頗る自信なきが如く、また撰者自身の詠の少きもあまりに謙遜に過ぎたり。その中ひとり家隆は頗る推重せられたるを見るべし。家隆の歌につきては、井蛙抄に、「新勅撰えらばれける時、梅の歌に花やかなる歌なしとて撰者周章せられけり。猶も壬生二品歌の中にぞあるらむとて撰ばれけるに、「いく郷か月の光も匂ふらむ、梅さく山の峯の春風」といふ歌を出して彼人云々、」と見

えたり。

家隆が後鳥羽院と相信じ、院の配流の後も常に歌を贈答してかたみに志をかはししに反して、定家は却つて關東に志を通はししは、かくれもなき事にして、後鳥羽、土御門、順德の三院の御製はこの集に入ることなかりき。こは渠が古來最も非難せらるゝ所なるが、誠にさもなき御製を卷頭におく程なるに、三院の歌一首だも採らざりしは、後人の謗免るじきか。また西園寺公經の歌も多きに過ぐ。こは公經が關東に志をよせし人なるによると解するは、あながちに誣ひたりとなすべからず。

この集また武士の歌を多く撰入せるは注意すべし。井蛙抄に「新勅撰をば宇治川集といひけり。武士の歌多く入たる故なり」と見ゆ。こは契沖の難新勅撰にもいへるが如く、實朝の詠に「武士の八十氏川をゆく水の流れて早き年の暮哉、」また新古今集人麿の人の歌に、「武士の八十氏川の早き瀨にいざよふ波の行方しらずも、」などあるによれり。かくの如く武士の歌が多くなれるは、一面より見れば、これ鎌倉と京都と融化し、鎌倉は京都の文化に染む間に、京都は漸次衰微に

赴ける事實を語るものにあらずや。

この集改めて委細を評するに及ばず。耳底記に「新古今花過たりとて、新勅撰を定家卿のくすみてあまれたり」と見えたる如く、新勅撰集が新古今集の華を失へるは明なり。これ一は定家の嗜好の然らしめしにもよるべけれど、一は定家すでに老いて、壯時の風を脱して枯淡を喜びしにもよるべく、人氣沈衰の時勢もまた與つて力ありしならむ。新古今集にもあることながら、この集の中、殊に各〻の卷のはじめなどには萬葉集の歌頗る多し。また當代の人の作も萬葉集の風體にならへるものの少からざるが如し。以てこれらを庶幾せるを知るべし。また伊勢物語の歌をも多くぬきたり。

定家自身の歌も壯年の時の作に似ず平易なるが多し。叙景の歌も見ゆるが、これも平易なり。

來ぬ人を松帆の浦の夕凪に、やくや藻鹽の身を焦れつつ。

戀をのみすまの汐干に玉藻刈るあまりにうたて袖なぬらしそ。

の如き名歌も少からず、その他の作者にも、

山高み明けはなれ行く横雲のたえまに見ゆる峰の白雪。　鎌倉右大臣

わけわたる雲間の星の光まで、山の端寒し、峰のしら雪。　家　　隆

の如きすぐれたるもの多し。また新古今集に見えたる所謂丈高き歌も少からず。

抑、新古今集は定家の獨撰せるものにあらず、殊に後鳥羽上皇の御干渉もありて、渠の意に滿たざりし所少からざりが如し。しかゐにこれはその獨撰にかゝるものなれば、これによりて定家その人の面影を覗ふを得べきなり。二條家に於ては、俊成の獨撰せる千載集と、爲家の獨撰せる續後撰集と、及びこの集とを最も尊重して、あはせて二條家の三代集と稱す。これ既にいへるが如く、この集が華麗なるもの少くして、平淡なるもの多く、定家自身の歌も特色たるむつかしきいひまはし比較的少くして、平易なるもの多くなれることが、後世二條家の模範とせらるゝに至りし所以ならむ。

第六章　歌學者としての定家

新古今集の成るや定家四十四歳の頃、新勅撰集の成るや七十一歳、この間に定家は遂に二代の門閥を固めたり。その間の奮鬪は稍彈指すべきもののなきにあらず。良經は定家四十五歳の時に薨じ、六十歳の時承久の役あり、家隆は定家七十六歳の時八十歳にて薨じ、後鳥羽院は定家七十八歳の時隱岐に崩ず。家隆は温厚君子の風ある人にして、定家と爭はず、またその歌學を學問として樹つる程の家柄にもあらず。ひとり六條家ありて、歌學を以て門閥を作り、歌論の書多し。これ實に當面の敵なり。定家にして天下に覇を唱へむと欲せば、まづ六條家を倒さざるべからず。

六條二條兩家の葛藤はすでに俊成の時に始れり。俊成ははじめ顯輔の猶子なりき。されど後基俊の門に轉じて、常に六條家と相轢れり、俊成と同時代には六條家には清輔あり。清輔及びその弟顯昭には歌學の書も少からず。しかるに清

六條家略系

- 六條 顯季
  - 八條 長實
  - 三條 家保
  - 六條 顯輔（歌道一流祖 詞花の撰者）
    - 清輔
    - 重家
      - 經家
      - 顯家 ── 知家（法名蓮性）── 行家 ── 隆博 ── 隆教（續古今の撰者の一人）
        - 隆朝 ── 行輔
        - 隆清
      - 有家（新古今の撰者の一人）
    - 顯昭（法橋）
    - 季經

輔は治承元年に死し、その弟重家も亦翌年死し、殘れるは顯昭と季經のみとなれり。この頃兩家の互に相反目せる樣は、建久の頃左大將良經の邸に於て行はれたる六百番の歌合によりて覗ふを得べし。この歌合は、判者は俊成にして、その中には顯昭、季經、有家等の歌もあり、俊成は常に六條家を排斥せり、茲に於て顯昭は憤慨に堪へず、陳狀を著してこれを辯駁せり。

俊成また正治奏狀に顯輔の詞花集を難じてざれ歌多しと笑ひ、白樂天の「不明不暗朧々月、非暖非寒漫々風」より出でたる「照りもせず曇りもはてぬ」の歌を「夏の夜の」とかきて夏の部に入れたりと嘲り、また清輔が續詞花集を撰して、二條院に勅撰せられむことを請ひしかど許されず、（實は崩御ありし故なり）左大臣實定またわが歌のわろしと思ふをば入れて、よしと思ふをば入れざりしを怒りてわが一族の歌をすべて拔き去らむことを求めたりと記せり。

寂蓮また俊成の養子にして、定家の生るゝに及びて出家したる人なるが、この人また常に顯昭と相爭へるは故なきにあらじ。

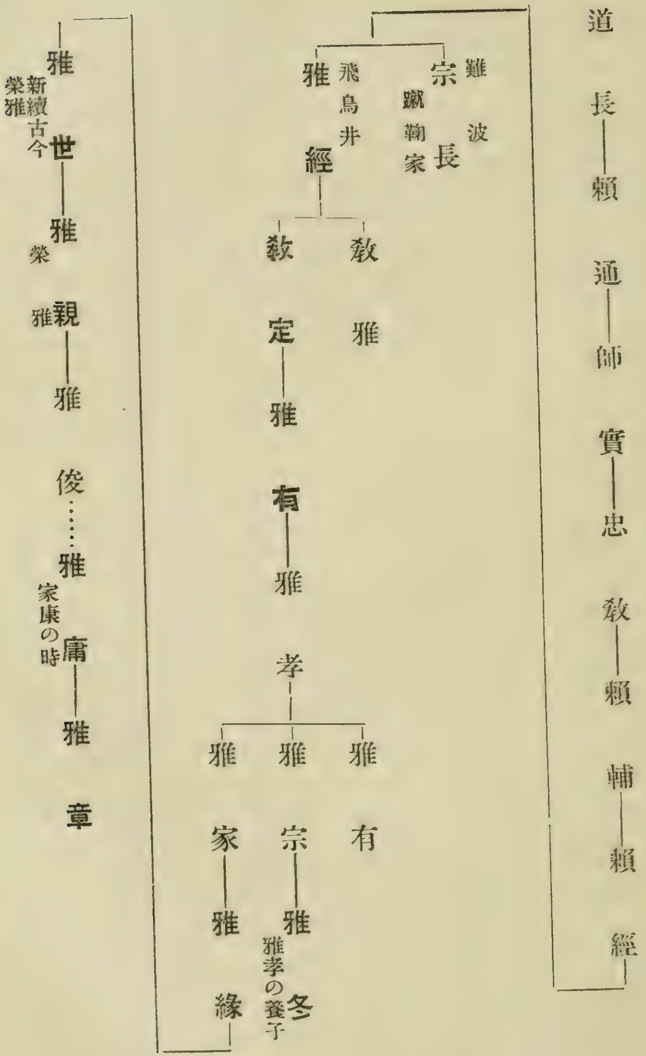
定家に至つて兩家の爭は益〻激烈となれり。顯昭は袖中抄、古今和歌集註等を著

ししに、定家は顯註密勘を著して顯昭の註を難せり、顯昭また日本紀註を奉りて昇官を望みしが、定家はこれを惡口せり。定家また季經とも相善からず、明月記に彼を惡樣にいへること所々に見ゆ。

重家の孫知家(法名蓮性)は幼にして父におくれし故、定家これを取り立てゝ歌の道を敎へたれば、知家は定家の生存中は敢て反對せず、六條家はむしろ二條家に從屬せるの觀ありき。されど定家の死後に至りて、知家は二條家の風をすてゝ六條家流の歌を詠むに至り、茲に於て定家の子爲家と相對立して、茲に再び二條六條の二家は相反目するに至れり。即ち寶治百首には爲家が撰者となりて、六條家をあしざまにいへる故、知家はいたく憤りて陳狀を奉りて、之を非難駁擊せり。

かくの如くにして定家の權威は次家に强くなれり。後世和歌をもつて家を立つるものは殆ど皆渠の弟子たらざるものなしといふべし。後代六條二條の二家以外に歌道の門閥をつくれるものには飛鳥井家、西園寺家、小倉家あり。皆定家の門より起れり。

飛鳥井家略系



道長—頼通—師實—忠教—頼輔—頼經
難波 宗長 蹴鞠家
飛鳥井 雅經
教雅
教定—雅有—雅孝
雅有
宗雅—雅冬 雅孝の養子
家雅—雅縁
雅世 新續古今 榮雅
雅親 榮雅
雅俊……雅庸 家康の時
雅章

飛鳥井家は飛鳥井雅經にはじまる。雅經はじめ定家の門に入りて學びしが、後には二條家と相對立するに至り、德川時代に至る迄斯道の門閥となれり。

西園寺家にては、公經を祖とす。公經は俊成または定家の門人なりといふ。その子實氏は定家の門人中實朝と相並んで盛名ありし人にして、常磐井相國と稱せり。以下の一門の人は皆その風を望んで起りしものなり。

西園寺家略系

- 公經
  - 實氏（常盤井相國）
  - 實雄（洞院家祖）
    - 公雄（小倉家祖）

實雄は洞院家の祖となり、公雄は小倉家の祖となり、小倉家は後西園家と相並んで、公卿の歌道門閥となれり。

將軍實朝また定家の門人なり。但し定家のむしろ三代集の調を庶幾するに反して、實朝は好んで萬葉集の風調を詠出せり。

かくの如く定家は將軍實朝をはじめとして、これら多くの公卿を門弟とせる事なれば、遂に歌道に於ける覇權を握るに至れるなり。

歌道に於ける渠の功は、當時の歌風を一定したるにあり。總じて定家の歌人としての眞價は頗る疑はし、辭句の修練に工夫を凝すは頗る長けたりといへども、詩的思想の充實せるものなし、この點に於て渠は頗る貫之に似たり。貫之の歌は業平等に劣り、纔に躬恒等と相疋敵するに過ぎざるべし、たゞ渠の頭腦は組織的にして、科學的に歌學を整頓し、範を後世に垂るゝには力ありしなり。定家もまた然り。渠の歌はさばかり上乘のものにあらず。されど組織的の才はあり、語句を練り、當時の歌の風調を定めて、範を後代に殘せる功は認むべきなり。はじめ俊賴等大に思想の奇警を喜び、辭句の斬新を求めたる結果、野卑に流れ、蕪雜に陷りて、歌風大に混亂せしかば、俊成等はこれに反對して古風を起さむと努めしが、定家に至りて更にこれを祖述して殆ど全く古形式に法りてつとめて奇矯を避け、中正なる歌の一體を起し、所謂二條家の正風の基を築けり。渠が貫之と共に歌聖として後世に仰がるゝに至れる所以は實に玆にあるなり。

然れどもその殘せる弊害はその利よりも遙に大なるものあり。即ち新に歌學を起して、歌を作ることを一種の學問として敎へたる結果、茲に歌道の門閥を樹立するに至り、從つて和歌を特殊の家の專有物たるが如き觀あるに至らしめ、ひいて祕傳傳授など、愚にもつかぬことをやかましくいふに至らしめしは、渠の罪科からずといふべし。後世元祿時代に及びて、自由思想大に發達するに及びて、二條家の歌風を攻擊するもの續々起り、久しく歌聖として仰がれし定家の位置も低下するの止むなきに至れり。さりながら定家が後世に影響を與へしこと甚だ大なりしを思へば、渠もまた尋常一般の人物にあらざりしや明けし古來定家の作として傳へらるゝ歌學の書頗る多し。その內詠歌大概のみは渠の作たること疑ふべからざれども、他は多くは後世の二條家にて、京極家に對せむがために、渠の作に擬して作れる僞書なりとす。

歌を作ることを一種の學問としたる定家は、一方に於て古來の歌書その他歌に關係ある書を筆寫して、これが本文(テキスト)を作れり。晚年に及びては殊にこの事に熱心なりしが如し。明月記寬喜二年三月十二日の條に朗詠集上卷を寫し同廿

七日の條には源氏物語を筆寫せること見ゆ。同六月十七日の條には但馬前司に更級日記、隆房卿日記、蜻蛉日記、治承右大臣家百首、卅六人傳を貸したるよしを記し、同七月十四日の條には殿下より部類萬葉を賜り書寫して進むべしとの事なれどこの春手腫れて後執筆困難なりなどしるせり。定家みづから拙筆なれども誤字脱字等はなしと誇れり、同三年八月七日の條に徒然のあまり一昨日より伊勢物語を書き終ふとあり。即ち三日間にて書き終へたるなり。而して九日に校訂を終へたり。當時定家は七十の高齢なりしを以て見れば、その精力の大なる想ふべし。同年八月十八日の條に日頃時々大和物語を寫し、今日之を終ふと記せり。この書は今日前田侯爵家に傳へらる。同年九月十二日の條に拾遺集を寫して女子に授けたりとあり。天福二年二月二日の奥書あり、淨辨が記せるものなり。また天福二年に後撰集をも寫せり。これも前田家にあり、天福二年は文暦元年にして、この時定家は七十三歳なり。また文暦二年五月十三日の奥書ある土佐日記ありてこれも前田家の秘藏となれり。こは貫之自筆の日記を京都の蓮花王院(三十三間堂)に見て感興に堪へず、貫之の手跡を模して寫

せるものにして、これも二日にして稿を終へたりといふ。こは實に定家が七十四歳の時なり。その精勵驚くべし。貞永二年三月二十日の條に、物語の面白きものを、書かむために、その頃行はれたる夜半の寢覺の御津の濱松、心高き東宮宣旨、左右の袖ぬらす物語、朝倉物語、御河に咲ける物語、とりかへばや、末葉の露、海人の苅藻、玉藻に遊ぶ物語の十種より選み出せる旨を記し、同年七月三十日には千載集を寫せる由を記せり。當時文學といへば歌人のする事と限られたる如き有樣なるに、定家は歌道を以て家を樹つる必要より、諸種の文學の書を蒐集筆寫して傳へしなり。かくして貴重なる本文(テキスト)を作りて之を後世に殘したるは、後人の永く忘るゝ能はざる恩惠なりといはざるべからず。渠の功勞の一半は實に茲にあり。

小倉百人一首に就ては、定家を辯護する人は、新勅撰集に三上皇の詠を採らざりし故に、その缺を補はむがために、これを撰べるなりといへど、こは毫も取るに足らぬ說なり。また假令實際さなりとしても、定家を辯護するに足らず。元來百人一首そのものが大に怪しきものなり。明月記文暦二年五月二十七日の條

に、天智天皇より家隆、雅經に至る歌を集めたる由を記せるが、こは初め色紙形に書けるもの故、それを切り離して綴本とする際に順序を少しく違へて、今傳れるやうのものとなりしならむと思はる。百人一首をえらみたるは果して定家なりしか否か確ならず。また選み方についても種々の批評あり。天智天皇の御製の如きも實際に適應せず。また源兼昌の如きは歌に名ある人にあらざるにこれを擧げて、源順の如き名人の詠をとらざりしが如きも、また非難せらるゝ處なり。兎に角百人一首は十分精選せられたるものにはあらず。勿論嵯峨中院にて定家が百人一首をかけることは事實ならむも、これが後世にいふ百人一首なりや否やは確ならず。或は後人が定家の選として僞選したるものなるかも知るべからず。

要するに文學界に於ける定家は恰も政治上に於ける頼朝に相當し、頼朝が武家政治を創立したるが如く、定家は歌道の門閥を樹立し、歌論歌學を起して後世の思想を束縛したり。

第二期　鎌倉時代

第一章　文藝の最も沈衰せる時代

鎌倉幕府の創立は政治上に一期を劃しぬ。されど文學界の趨勢はなほ平安末期の風を持續して、いまだ一期を形成するに至らず、承久の亂を經てはじめて一變せり。

院政時代より鎌倉時代の初期にかけては文學は少しく活氣を呈し、殊に和歌は頗る盛なりき。保元の亂後戰亂相次ぎ、世はいたく衰へたるに拘らず、文學がかくの如く光彩を放てるは何故ぞ。蓋し平安朝時代に於ては泰平無事のために人心おのづから惰氣を生じたりしに、平安末期に至りては世態一變して、人心おのづから改りて活氣を生じ來れるによるならむ。抑〻源平爭亂當時の形勢は、唯一の文學の愛好者たりし京都の公卿と、眼中毫も學問、文藝なき東國の武士との二派の對立と見るを得べし。而してこの二潮流の間にありて流轉浮沈

せるは平家なり。その滅亡の歷史は波瀾多く詩的要素に富めり。これ平家物語、源平盛衰記等が太平記に比すれば遙に詩趣多き所以なり。平家の滅亡後は公卿と武士とは直接相對峙するに至れり。この時政權はすでに武士の手に歸したりといへども、公卿はいまだ全く勢力を失墜するに至らず、鬱勃たる活氣はなほ渠等の胸裡に充ち、折もあらば再び政權を恢復せむとの希望は常に公卿の心中に宿りしなり。この活氣あり、この希望あり、その產出する所の文學またいかでか生氣なからむや。

承久の亂に至りて、京都方の政權恢復の企圖失敗に終るや、この活氣は忽ちに粉碎せられ、この希望は破壞せられをはんぬ。而して活氣なく希望なき事程人生に大なる打擊はなし。京都に於ける文藝はこれがために大影響を蒙り、殆ど沈衰の極に達せり。一方鎌倉にては、武を主として、文を顧みることなければ、この間に於て到底見るに足るべき文藝の起るべき理なし。公卿の狀態かくの如く、武人の狀態かくの如くなるが中に、學あり、識あるものはひとり僧侶のみなり。元來渠等は政治と遠ざかりをれば、從つて比較的自由に文學に親むを得、稍〻

見るに足るべき文學をも產出せり、鎌倉以後の文藝が殆ど佛教の奴隷となるに至れるは、かくの如く文學が僧侶の手に委せられたればなり。僧侶の外には公卿の一派が一縷の命脈を保ちて、文藝の生命を維持したりき。されば此の時代の文藝は創見などは固よりなく、單に古き物の模倣をなせるに過ぎず。從つて古書の僞作等も少からず出でたり。二條京極兩家の爭の如きも、單に定家、爲家等の遺物を多く傳へたるを誇り合ふに過ぎずして、作歌の實力の上には何の關係もなかりしが如し。我が國文藝の歷史中、最も氣力なく、最も卑屈なる時代は、戰國時代にあらずしてむしろ鎌倉時代ならむ。

第二章　續後撰和歌集と爲家

爲家は鎌倉時代の和歌の祖とも見るべき人物なり、續後撰和歌集はその撰にかかる、別に續古今和歌集の撰にも與りきといへども、こは渠一人の撰にあらざるを以て、その面影を覗はむと欲せば、續後撰集を見ざるべからず。

集中の主なる作者は、定家四十三首、常盤井實氏四十三首、後京極攝政良經二十七首、俊成二十六首、後鳥羽院二十五首、土御門院二十三首、後嵯峨院二十首、前攝政道安、家隆、慈鎭和尚、各十八首、知家十七首、和泉式部十五首、基俊、信實各十四首、順德院、實朝、西園寺公經各十三首、衣笠前内大臣家長十二首、西行、人麿各十一首、俊成女十首等なり。而して金葉、千載の時代に盛なりし俊頼の作はわづかに三首に過ぎざるに、單に古風を墨守せるのみに過ぎざる基俊の作の如きは十四首も採れるより見れば、自ら當時の風潮を知るを得べし。次に信實は定家と異父の兄弟にして、爲家はその甥なり。この人歌のみならず繪畫にも堪能なりき。爲家は平生大に信實に私淑したり。故にこの人の歌風を見て、爲家の嗜好の存する所を覗ふを得べし。

定家は新勅撰集を撰するにあたり、後鳥羽、順德、土御門三上皇の歌を採らざりしとて非難せられたりしが、この集にはこれら三上皇の作を多く載せたり。されどさばかり妙ならざる後嵯峨院の作を多く採れるは、院に媚びたる謗は免れざるべし。

早苗とる伏見の里に雨すぎて向ひの山に雲ぞかゝれる。　土御門院
涙散る袖に玉まく葛の葉に秋風吹くと問はばこたへよ。　土御門院

の如きは、おだやかなる面影を見るべし。

百敷やふるき軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり。順徳院

の如きまたおだやかなり。

降る雪にいづれを花とわきもこが折る袖にほふ春の梅が枝。順徳院

は厭みあるを免れず。

敷島や大和島根の朝霞、もろこしまでも春は立つらし。後嵯峨院

は新古今集の

今日といへばもろこしまでも行く春を、都にのみと思ひける哉。俊成

を模倣したるのみ、かつ故らに大袈裟にいへる嫌あり。

來ぬ人によそへて待ちし夕より、月てふものはうらみそめてき。後嵯峨院

は
うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき。
小野小町
を模倣せしものにしてさして價値あるものとは思はれず。爲家その人の作も極めて平凡、陳腐なるもの多し。
頼まじな、思ひわびぬる宵々の心は行きて夢に見ゆとも。
の如きは、その一例なり。前内大臣基家の作は七首採れるが、いづれも平凡無趣味のものにして、
片岡の朝けの風も吹きかへて、冬の景色に散る紅葉かな。
の如き、拙劣極れるものすらあり。かくの如く二條家にては平凡陳腐なるもののみを以てその家風とせり。
この集春の部に霞の歌甚だ多し。新勅撰集もやゝ多かりき。また秋の部には擣衣の歌いと多し。蓋し漢詩の影響ならむか。
更にこの集の一特色として見るべきは、一首の歌が中切れずして、一續きにな

れることなり。新古今集の風は一首の歌のいくつにも句切れたるがその特色なりしに、更に古今集などの古風にたちかへりて、一つゞきになれるを尙ぶに至れり。

いたづらにわが身世にふる春雨の晴れぬながめに袖はぬれつゝ。　前關白左大臣

かつらぎや花吹き渡す春風にとだえも見えぬくめの岩橋。　西園寺公經

山鳥のをのへの里の秋風に、長き夜寒のころもうつなり。　家　良

露むすぶ籬に深き夏草の何ともなしにことしげの身や。　前大政大臣

はやせ川なびく玉藻の下みだれ、くるしやこゝろ水がくれてのみ。　後京極攝政

の如き皆然るを見る。また、

下折れの音のみ杉のしるしにて、雪の底なる三輪の山もと。　信　實

の「雪の底なる」の如きは、當時の特徵を示せる用語なり。

すでに述べたる如く、俊成の千載集、定家の新勅撰集及び爲家のこの集は二條

家の三代集と稱して貴ばれたるが、定家は巧を弄し過ぎて難解のもの多きを以て、二條家にても定家は學ぶに高きに過ぐとなして、むしろ爲家を模範となし、三代集中にてもわけてこの集を重んじたり。さても爲家は如何なる人ぞ。爲家は若き時は歌を好まざりければ定家大にこれを憂へたるよし、明月記建曆三年五月十六日の條、及び同廿七日の條に見ゆ。然るに成長して後は刻苦勉勵し、廿二歳の時、和歌の道に精しからざれば父祖の業を繼ぐ能はざるを憂へ、出家せむとて慈鎭和尙に會ひたるに、和尙に戒められて、大に歌道を研鑽し、遂に詞宗と仰がるゝに至れり。渠はまた蹴鞠、連歌にも堪能なりき。

爲家自己の歌を評して、平易なる歌風にして、如何なる人にも解しがたからずといへり。また歌を作る心得を說きて、一本橋を渡る時の如く、左にも右にも片寄るべからずといひ、また塔を築くが如く、下より次第に積みあげざるべからずといひて、下の句より詠むべきよしをいへり。總じて心のまゝに自由に奔放なる思想を發表することを戒め、たゞ無難なるを得ば足れりとする消極的方針をとりしかば、その結果は毫も特色なき、極めて平凡なる歌となるを免れざ

りき。

今爲家の歌を檢するに、毫も俊成定家の埒外に出でず、その垣牆の中にありて逡巡するのみ。つくる所題詠のみ多く、作爲の跡歴々たるもの相つぐ、家集を見ても、叙景の歌の實景を詠みたりと思はるゝは一つもなく、戀の歌もまた寄何戀などいふもののみ多し。さらずとも百首、千首などのみ。されど平易ながら語句の修錬は積みたるものにて、作爲するだけに非凡の佳句もなければ無下の惡句もなく、毎首の出來ばえ殆ど一樣なるを見る。

爲家の歌集を中院入道家集といふ。弘長中上皇の勅を奉じて常盤井相國、衣笠家長、九條忠家等六人と共に仙洞百首を撰む。七玉集といふ。當時の百首の模範となれり。また寶治百首の作あり。こは爲家の歌の標本たるべきものなり。歌論には詠歌一體、八雲一言記（古語深秘妙の中にあり）（詠歌一體はこれより拔萃したるものゝ如く見ゆ。されど、後に増加したるものか）あり。これらを見れば、制の詞、主ある語などを定めたるは、恐らく爲家がはじめならむ。

第四章　三家の分立

俊成、定家、爲家の三代は相繼ぎて權門と親を結び、以て歌道の覇權を握るに至れり。歌道に於ける二條家の權威は實にこの三代に於て基礎を固めたるなり。而して二條家の歌風の全く定れるは爲家の時にあり。その他歌道の門閥に、常盤井家、小倉家など何れも、皆二條家の風を守りて別に異を立てず。かくの如くにして定家、爲家等の勢力は室町時代に至るまで大に斯道に影響を及せり。然れども二條家も二條、京極、冷泉の三家に分立するに及び、互に反目して紛爭を事とするに至れり。即ち二條家と冷泉家との間には領地爭あり、二條家と京極家との間には和歌の主義の上の爭あり。鎌倉時代の歌道の歷史はむしろこの三家紛爭の歷史なりともいひつべし。

一、二條冷泉の爭。　俊成の頃より和歌所の所領として御子左の家に有せしもの播州三木郡細川庄、江州坂田郡小野庄あり。もと俊成の祖先よりその家に傳

二條家略系

道長―長家―忠家―俊忠―俊成（御子左　入道釋阿　千載撰者）
- 定長（養子　出家寂蓮）
- 定家（京極　入道明靜　新古今撰者　新勅撰撰者）―為家（中院　入道融覺　續後撰撰者　續古今撰者）―為氏（二條　入道覺阿　母宇都宮頼綱の母　續拾遺撰者）
  - 為世（母飛鳥井教定女　新後撰撰者　續千載撰者）
    - 為道（早世）―為定（入道釋空　續後拾遺撰者　新千載撰者）
      - 為遠（新後拾遺撰者）―為衡
  - 定為

- 京極 為教（入道明心　母同上）
  - 為兼（入道靜覺　玉葉撰者）
    - 忠兼（猶子　後復本流　閑院）
      - 為藤（續後拾撰者）
        - 為明（新拾遺撰者）
      - 為冬（於戰場死）
        - 為重（新後拾撰者）
          - 為右
      - 女子（名為子　贈從三位）
  - 女子（名為子　從三位大納言）
- 冷泉 為相（母阿佛尼）
  - 為秀
    - 為邦（二條為明の養子　早世）
    - 為尹
      - 上冷泉 為之……為村
      - 持和（改持為）……惺窩
- 為守（入道曉月　母同上）
- 慶融（寺法師）
- 源承（山法師）
- 紀内侍
- 為實

りしものなるか、はた和歌所の領なるか詳ならずといへども、兎に角俊成の子孫の領有となりにき。爲家は康元元年五十九歲にして出家す。この時爲氏三十五歲、爲教三十二歲にして、爲相は未だ生れず。蓋し家督はこの時すべて爲氏に讓りしものなるべし。建治元年爲家歿する時長子爲氏は五十四歲、嫡孫爲世は二十二歲にして、爲相は僅に十三歲なり。爲家遺言して細川庄を爲相に附す。しかるに爲氏自らこれを領して爲相に與へず。こゝに於て領地の爭起り、爲相の母阿佛(北林禪尼)關東に下りてこれを幕府に訴ふ。その時の紀行が即ちかの十六夜日記なり。

抑、爲家が細川庄を爲相に讓りしは何故ぞ。思ふにこれは爲家が幼兒の愛に溺れしこともその一因なるべし。されどまた傳へて爲氏が不孝のことありて、その領を取られしなりともいふ。續古今集の撰ばれし時爲家その撰者の一人たり。當初撰者たるべき勅令下りし時、爲家はおのれは出家後なるを以てその子爲氏を薦む。されど入道撰者の例俊成の千載集にありとて、なほ爲家に命せらる。次いで續拾遺集の撰あり。その撰を仰せ出されしは尊卑分派、勅撰次第、增鏡

等によれば建治二年、拾芥抄に從へば文永十一年なりとす。勅撰考には多數の說に從ひて前者をとれり。されど延慶兩卿訴陳狀（終の條）によれば爲家病床に爲氏を薦むといへば、文永十一年說或は正しからむ。京極家の申狀によれば爲家は爲氏の不孝を憂へたるが如く、

限ある命を人にいそがれて、見ぬ世の後をかねてしりぬる　　爲家

の詠は父子不和なりし證なりといへり。されど爲家が病床に爲氏を薦めきといへる事實に照して、この說果して如何あらん。二條家にてはまた、この時の爲家の勅答には爲氏の撰者となれるを喜び、爲相のためにも面目なるよしをいへりと稱す。その是非曲直今俄に甄別するを得ず。いづれにもせよ、死後の爭は爲相幼少にして、阿佛專ら訴訟の衝にあたれり。而して京極家は二條家に快からざる事ありて、その尻押しをなしたるが如し。訴陳狀爲世の申狀に、亡父與二繼母一違背の後彼卿父子追二從阿佛一而僅習二當道事一歟とあるを思ふべし。

かくて訴訟は久しく決せざりしが、正和二年に至りて爲相の勝訴に歸す。爲相遂に止まりて鎌倉藤谷に住し、その地に薨ず。（或は云ふ、京都にて歿すと。）冷泉の家はかくして

二條家より分岐せしが、爲相は爲家の老後の子（父六十六歳の時に生る）にして、其兄爲氏、爲敎より遙に幼きはもとより、甥の爲世、爲兼よりもまた甚だ幼ければ、これらと並んで歌道を爭ふ能はざりしはいふを俟たず。しかも爲相鎌倉に歿して、遂にその道の權力を握ること能はず、微々として僅にその家を傳へしかど、子孫またその領地を武人のために横領せられぬ。されど二條京極二家の斷絕したるには似ず、その系を傳へしかば、應永二十三年將軍義持細川庄を爲尹に還附し、享德二年將軍義政小野庄を爲尹の孫、持爲の子、政爲に還附す。爾來盛衰ありしが、江戸時代に至りて更に興り、以て今日に至れるなり。

二、二條京極の爭。　爲家の孫二條爲世、京極爲兼、從兄弟の身を以て頻にその道を爭ひ、互に相排す。但しこの葛藤はもと二人に始まれるにあらず、その萠芽はすでに爲氏と爲敎との間に發せしを見る。（この事水蛙眼目、延慶訴陳狀等に見ゆ。）されど二家の爭は爲世爲兼の時に至りて甚しかりしなり。續拾遺集は爲氏の撰、新後撰集は爲世の撰にして、いづれも二條家の手に成れるものなり。その後伏見天皇の正應中また撰集の沙汰あり、爲世、爲兼、雅有（飛鳥井）隆博（六條）を召さる。されど撰者の軋轢によ

りてその事遂に成らず。増鏡こゝに於て爲世、爲兼相誹りて、爲兼は爲世の無學にして、またその實定家の眞筆遺書を相傳せず、わづかに歌道を雅有に學びたるものなりと誇り、爲世は爲兼が庶流にして、しかも刑餘の人、撰者たるべからざるを罵る。延慶兩卿訴陳狀これなり。されど間もなく爲兼玉葉集を撰するに至れり。(大日本史爲世傳には訴陳狀を玉葉集の後とし、爲世勝を得て新千載集を撰ぶに至れりとせるが如し、蓋し誤れり。)

抑、爲世爲兼は持明院、大覺寺の兩皇統に姻緣して、皇統の爭は歌道の爭のために愈、その軋轢の度を高めたるが如し。即ち爲世は大覺寺統に愛せられ、爲兼は持明院統に寵遇せらる。爲世は後宇多天皇の師となり、この事なほたづぬべしまた爲世の女贈從三位爲子は後醍醐天皇の女房となり、皇子尊良親王、宗良親王等はその所出なり。爲兼は伏見天皇に昵近し、和歌を天皇に授く。且後伏見、花園二帝の乳父にして、二帝は實に爲兼の家に生長し給へり。伏見院出家し給ふに及び、爲兼も從ひて素懷を遂ぐ。爲兼の妹從二位爲子も永福門院伏見后、後伏見養母に陪侍し、從うて伏見天皇以來持明院統は深く爲兼を愛し、西園寺實兼實氏の孫、永福門院の父も亦厚く爲

兼に親む。永仁六年（伏見の朝）爲兼六波羅に執へられて佐渡に流され、五年を經て許されて歸りしが、玉葉集を撰して勢甚だ强く、傲慢にして實兼をも凌ぎてこれに抗するに至り、花園天皇の正和四年更に六波羅に召されて土佐に流さる。その政事に喙を容れたるが故なりといひ、本朝通鑑、國史記事本末には北條氏を滅さんとせしがためなりといふ。未だ必ずしも然らじ。

かくして爲世、爲兼はその家の權を爭ひしのみならず、歌道に於て非常の異同を立てて互に相排擠せり。されど二條家の歌風世好に投じたりと見えて、玉葉集の後續千載集は爲世之を撰び、續後拾遺集は爲世すでに撰集二度になりぬとて、長子爲道早世せしかば、次子爲藤に讓る。爲藤果さずして歿す。爲世は末子爲冬を愛してこれに繼がせむと思ひしが、爲藤生前に甥爲定（爲道の子）を養ひてこれを愛せしに、この度の業に漏れむことを歎き思ひて、遁世せむ由など聞え、即ち爲定に仰せらる。二條家の末もまたその祖先の如き波瀾あるを思ふべし。さてこの二集はいづれも大覺寺統の天皇の勅になれり。花園上皇これを遺憾におぼして風雅集を御自撰あり。その後北朝京都に立つに至り、二條家は京都を

去ることなかりき。爲明の如き、六波羅に捕はれて拷問せられむとせし時、

思ひきや我敷島の道ならで浮世の道をとはるべしとは。

といひて許されしが（太平記）遂に二條家は北朝の下に立ちて、爲世の三子の後交、勅撰あり。南朝の歌は概ねその集に載せず。ために南朝には新葉集の勅撰に擬せらるゝあり。その後二條家は一門相軋りて勢益〻弱く、幾何もなくして絶えぬ。これより先京極家は爲兼の養子忠兼本流閑院に歸して、その家絶えぬ。かくして遂に新續古今集は飛鳥井家のものとなりしなり。

二條、京極、冷泉三條の俗權の爭は深く問ふの値なし。要はその歌道に於ける差如何にあるのみ。二條は平易平穩を喜び、京極は變化活動を尙ぶ。かれは多く平凡に流れ、これは往々にして奇怪に陷る。冷泉もまた傾向なきにあらずといへども、二條京極の如く著しからず。

一、二條家。　二條家は爲家を宗とす。爲家は制の詞、主ある詞などを定め、緣語を喜び、平懷を喜び、古語を尙び、始めての詞、珍しき詞を嫌ふ。（詠歌一體）その作る所の歌が平凡にして何等の特色なきは既に說けるが如し。二條家は實にかくの如き

歌風を相承し、爲氏、爲世は飽くまで爲家の詠歌一體の說を固守せり。かれらは古體を尙び、詞は三代集を出でざれといふ。されどその作る所の歌は眞の古體にあらずして、爲家などの近代の擬古體をならへるなり。而して二條家はその門閥の權威を保持せむがために、殊に京極家を攻擊せむがために、父祖の傳こ稱して、切に制の詞、主ある詞などのことを喧しく論じ、盛にその道を束縛せり。こゝに於てその歌益〻平凡となりぬ。二條家は京極家を和歌の外道の如く罵れど、その害毒を流せるは遙に京極家にまされり。（戶田茂睡これを惡みて、梨本集を著してこれを駁し、三五記、未來記、雨中吟（僻案抄も）等もかれ等が定家に托して僞作せるものなりと稱す。尾張の家苞の論も亦見るべし。

爲世の歌は二條家の歌風を代表するものといふべし、その歌陳腐にして平凡、何等清新の趣あるを認めず。

今日もまた取る手あまたに急げども、山田の早苗なほぞ盡きせぬ。

かくの如き平凡の歌相つぐ。また、

つれなさもよしや祈らじ、神だにもうけずは後のたのみなければ。

など理屈に陷りたるものも少からず。

言の葉はつらきあまりに枯れぬとも、冬野の眞葛なほやららみむ。

年もへぬ、今は何をかかくて身の老となるをのまつことにせむ。

右の如く緣語、掛詞はその得意とする所なるべし。

老いてこそ涙も曇れ、春の夜の月はいつより霞みそめけむ。

の如きは、その稍可なるものか。これとても爲世一人の特色とてはなけれども、溫和にして縹緲誦するに足るものなるべし。

二、京極家。 爲教は常盤井實氏に學ぶといふ。この人の歌は多からず。その子爲兼父に勝りて頗る新奇の歌を好む。かれは二條家よりは異端として極力排斥せられたれども、鎌倉時代の群小歌人中にありて、特に一頭地を抽んでたる斯道の一異彩たりき。當時二條家の勢力京極家を壓して漸次和歌の覇權を握るに至る、南北朝時代に至りても頓阿二條家を復興して大に勢力を張りしが、京極家は甚だ振はず。この勢は足利時代に至るもなほ持續して、二條家は頗る重んぜられしが、京極家は愈、輕んぜられ、爲兼の名は殆ど世に忘らるゝに至りぬ。

その最も力を極めて爲兼の歌を誹謗せるは、千種有房の野守の鏡なり。思ふに有房は爲世の門人なるべし。德川時代に至りても、本居宣長の如きは二條家の風を重んじ、京極家を排し、玉葉風雅を嫌ふ。されどこれを賛せしものは戶田茂睡なり。かれは梨本集を著して、極力京極家を辯護して、二條家を攻擊せり。余輩もまた爲兼は爲世との確執に基きて、遂にその眞價以下に墜されたるものと信ず。而してこれが排斥せられたるは、また以て時勢の平凡なすなきを知るに足るべし。

總じて二條家は古き詞を用ひよといひ、爲兼は新古を擇ばず、雅俗を問はず。而して二條家はおのづから爲家以來の風に陷り、爲兼はむしろ千載、新古今の自由を庶幾す。されば束縛なく、箝制なきを好んで、玉葉集にはおのづから萬葉以來の歌多し。新勅撰集以來古人の著名なる作は漸く少く、爲氏の續拾遺集、爲世の新後撰集には人麿、貫之、躬恒、伊勢等の歌一もこれなし。玉葉集に至りて貫之は二十六、躬恒は十六を數へ、西行が歌も更に多く、俊成、定家もまた增加したるを見よ。二條家は古きを好むといひて近代尙古の弊に陷り、玉葉集は時代に逆

ひて新奇を求むと雖も、おのづから古人自由の風にかなひしものあり。今爲兼の歌を見るに、當時にありては誠に新奇なるものなりしなるべし。されど奇怪といふべき程のものにはあらず。これを俊賴等に比し、玉葉、風雅の二集を金葉、詞花の二集と較ぶるに、むしろこの方遙に平穩明瞭なるものなり。

いづくより置くともしらぬ白露の暮るれは草の上に見ゆらむ。

高砂の松の緑はつれなくて、尾の上の花の色ぞうつろふ。

されどこれらは巧みを弄せざる所かへつて二條家に斥けられたるやも知れず。その得意は戀歌にあるものの如く、それも平明穩雅にして、定家の作の如く難澁なるものなし。

おのづからたのむ契もたえはてて、ねられぬ床にのこる面影。

月影と人にはいひて止めばや、あくるわびしき閨のいたまも。

これもまたつらきへだてとなりにけり、心に似たる宿の中垣。

思想は陳腐なれども、理屈に陷らぬはその長所なり。

あふことはただ思ひ出の夢路にて、うつつゆるさぬ夜半の關守。

うらむともせめて知らする中ならば、わはれをかくる折もあらまし。

次に叙景の歌は、實際の景色に着目したるが如し。中には當時の事とて、景を叙するに作爲に過ぎたるものなきにあらず。たとへば、

散りまがふ紅葉を空に吹き立てゝ朝日しぐるゝ峯の木枯。

また印象不明瞭なるものあり。

山人の菊うる市か、花の枝に露あたゝむる朝日さすなり。

誰かはと雪の花咲く道芝に、春を知るまの雪の山里

されどとにかくに實景を詠みたりと見ゆるもの少からざるは多とすべし。

片岡の森の下蔭露落ちて、夕立おくる日ぐらしのこゑ。

鳴る神の音ほのかなる夕立の曇る方より風ぞはげしき

しづみはつる入日の際にあらはれぬ、かすめる山の端の奥の峰。

もりうつる谷に一筋夕日見えて、峯もふもとも松の夕風。

これらはつとめて活動せる景を詠せむとせしものなるべし。

兎に角彼の歌は決して拮倔なるものにあらず。その流暢にしてありのまゝに

思想をいひあらはせるが、却つて二條家の誹謗をうくる種となりしなるべし。されどまた掛詞も多く、巧を弄せることも少からず、概して鎌倉時代の風潮を脱すること能はず。

難波江やあしの夜な〳〵霜こほり、枯葉亂れて浦風ぞ吹く。

夜もすがら聞けば涙のをちこちに、いそぐ砧の、音のさびしさ。

語り來る言の葉ごとにたきすてて、あすは今宵の友もわすれよ。

總じて甚しく奇怪なるものにもあらず。これをその競爭者たる爲世の歌と比較するに、勿論兩者の間の差異は認められざるにあらねど、それも相距ること さして遠きものにはあらず。さるに二條家より異端として罵られたるは如何。これ全く黨同伐異の風盛なりしと、神經過敏になりたるとによる。わづかなる修辭にのみ苦心して、型にはめたる樣の歌のみ行はれたる時代には、わづかなる趣向の差を雲泥の懸隔あるものの如く感じ、やゝ新奇なる歌に會すれば、それを異端として斥けざるを得ざりしなり。

爲兼の歌集は、かれが久しく輕蔑せられたる結果行はれず。今の歌集を板にせ

るは眞顏なり。その本は中院通勝の筆にて二百七十五首ありしを、更に百八十餘首を末に加へて二冊とす。されどその歌は訴陳狀に爲兼が我はせめて一萬餘首仕侍りぬ、爲世卿は、歌七百首には過ぐべからずといへば、十が一にも過ぎざるべきか。

三、冷泉家。　これは世の人二條の風に似たりといへども、しからず。他二家の如く勢力なく、從つて爭はざれば、强ひて偏する所もなかりしなり。而して實は京極家の流に近かりしが如し。阿佛尼の歌十首以上は玉葉集と風雅集とのみに見えたり。而して二條家の撰の集には甚だ少し。これ豈獨り領地爭の事ありしを含みて故のみならむや。爲相は廣くわたりて、十體のうち何にても學び得べきを稽古せよと（了俊辨要抄）いへり。爲秀また好忠の歌を勝れたりと稱し、又御子左家にては爲相の歌を珍しけれど、たけなき歌と稱すと（今川了俊和歌所見不審條々）いへるなど、以てその歌道に對する見解の頗る自由にして、二條家に遠くしてむしろ京極家に近きを察するに足らむか。

第四章　玉葉和歌集

玉葉和歌集は花園天皇の時、伏見院の詔をうけて爲兼これを撰す。應長元年に命を蒙り、翌正和元年に奉る。これより先伏見院勅撰集を撰むべき御企あり、二條爲世、京極爲兼、飛鳥井雅有、六條隆博の四人にその撰者を仰せつけられしが、互に軋轢して果さず。伏見院これを歎じて、

わが世にはあつめぬ和歌の浦千鳥、空しき名をやあとに殘さむ。

の御製ありき。その後爲世と爲兼とは大に爭ひしが、遂に從來の慣例を破りて、爲兼一人仰せをうけてこの集を撰べるなり。

玉葉集は京極家が撰べる勅撰集の最初のものなれば、その派の人を殊に多く選び、二條家の流を斥けたること勿論なり。今その中に選まれたる作者を見るに、伏見院七十六首、從二位爲子（爲教女、永福門院に陪侍す）五十九首、西園寺實兼（實氏の孫にして爲兼に親し）五十七首、永福門院（伏見后實兼女）、四十三首なり。その他永福門院内侍、二條治部卿など皆

京極家の派に屬する人々にして、この集の外は遙に少く、或は全く載らざるもあり。また鎌倉の宗尊親王、貞時等の詠も載れり。二條家にては、爲氏十五首、爲世八首、爲藤五首、爲定、定爲法印各一首の如き、全く除外する能はざれども、他の集に比するにその數極めて少し。これに反して爲兼は三十三首の多きに上れり。冷泉家にては、阿佛尼は十一首（風雅集には十五首、他は多きもの六首以上に上らず）爲相十三首（風雅集には十八首にして、この人の作も亦この二集に最も多し。）なり。これによりても京極家と冷泉家との關係を知るを得むか。その他の作者にては、定家六十八首、俊成五十六首、爲家五十三首、西行四十九首、貫之二十六首、人麿二十五首、慈鎭二十一首なり。二條家にては爲家を主とせしが、爲兼は爲家を捨てずとはいへども、その以後の風に拘泥せず、自在に古人を折衷せむとするを見るべし。

かくの如くして玉葉集は新勅撰集を摸範とせず、むしろ新古今集を規模とせるなり。爲家より俊成、定家、むしろ泝りて古今集、萬葉集の風調をも博くとり來れり。當時の歌人にては二條家に對して京極一派の人の多くとられたる事前にいへるが如し。これ黨同伐異の風あるがためなることは勿論なれども、また

必ずしもその故のみにあらず。伏見院永福門院、等また和歌をよくして、京極派の特色を發揮し、殊に永福門院の如きはむしろ爲兼よりもその特色著しといふべし。

山の端に消えて行くへは夕霞、かすゝめるはては雨となりぬる。　伏見院

高砂の思ひはれたる夕暮に、松の葉のぼる月のさやけさ。　宗尊親王

入相の聲する山のかげ暮れて、花の雲間に月いでにけり。　永福門院

殊に最後の一首、平穩なれど、情景睹るが如し。

余は玉葉集を當時の他の集に比較して貶すべき所を見ず、また醜怪なる點多きを見ず。むしろその清新の調あるを喜ぶものなり。

これのみは人の國より傳らで神代をうけし敷島の道。　冷泉爲相

山の端の月まつ空の匂ふより花にそむくる春のともし火。　定家

これらは最も人口に膾炙せるものなり。(但し前者は詩趣よりもむしろ道を尊ぶの意味あるならむ。)その想に於ては當時の欝屈沈滯せる時勢の然らしむる

所、多く推移する所あるを見ず。たゞ旭日夕陽、霞霧のにほひ、かはりゆく有樣をうつすことのやゝ精細になりゆくを見るのみ。また寫生的の詠も少からず。こはすでに爲兼のことをいへる條にも一言せし所なり。蓋し久しく京にありし四條派の繪畫がよく雲煙の情態を寫すに至れるが如きか。

難波潟おぼろ月夜の入汐に、明方かすむ淡路島山。　前僧正實伊

夕立の雲間の日影晴れそめて、山のこなたをわたる白鷺。　定家

降りくらす雨靜なる庭の面に、散りて片よる花の白浪。　前關白太政大臣

されどその見るべきは思想内容の上にあらずして、詞の工夫にあり。而してこは二條風にては禁制として嫌へるものなり。（詠歌一體禁の言の例な見よ。）

東のまも忘れむものか、いでがてに月をしぼりし袖の別は。　定家

秋風は軒端の松をしばる夜に、月は雲井をのどかにぞ行く。　永福門院

にほの海や秋の夜わたる蜑小舟、月に乘りてや浦傳ふらむ。　俊成

朝風にゆきかふ船のけしきまで、春を浮ぶる波のうへかな。　定家

さかりなる峯の櫻の一いろに、霞も白き花のゆふばえ。　雅孝

庭の面はうづみさだむる方もなし、嵐にかゝる花の白雪。　津守國助

枝に洩る朝日の影の少きに、すゞしさ深き竹の奥かな。　爲兼

吹きたをる四方の草木のうら見えて、風にしらめる秋の曙。　兼孝

八重葎秋のわけ入る風の色を、われ先にとぞ鹿は鳴くなる。　定家

また葉散る柳の梢うちなびき、秋風高し初雁のこゑ。　宗尊親王

入る月の名殘の影は峰に見えて、松風くらき秋の山もと。　定成

昔見し月にも袖はぬれしかど、老はさながら涙なりけり。　僧正公朝

萬葉調を取れるものには次の如きものあり。

旅衣袂かたしき、今宵もや草の枕にわれひとりねむ。　實朝

いざこゝにこよひはさねむ、旅衣、山嵐吹きて袖はさゆとも。　實氏

また新古今集に多く見ゆるが如き切字多きものは、

秋は來ぬ。鹿は尾の上に聲立てす。夜半のねざめに來る人はなし。　有家

いかなりし人の情か、思ひ出づることしかた語れ、秋の夜の月。　爲兼

過ぎゆくかつれなき秋の心かな。戀しかるべき夜半のけしきか。　覺性法師

また新古今集にも多く見る所なるが、名詞を多く用ひ、殊に疊句、對句を用ふること多し。永福門院に殊にこの癖あり。

峰の霞麓の草の薄みどり、野山をかけて春めきにけり。　永福門院

木々の心花ちかゝらし、昨日今日世はうす曇り春雨のふる。　同上

遠近の山は櫻の花ざかり、野邊はかすみに鶯のこゑ。　同上

花よいかに、春日うらゝに世はなりて、やまの霞に鳥のこゑ〳〵。　伏見院

月のこり露まだ消えぬあさあけの、秋のまがきの花のいろ〳〵。　僧正實承

露のいろ、眞柴の風の夕げしき、おすもやこゝにたへてながめむ。　爲兼

露はおき風、は身にしむゆふぐれを、おのか時とや虫の鳴くらむ。

冬　敎

峰の雲麓の霧も色くれて、そらも心も秋のまつかせ。　定　家

おく露も情も深き百草の花の紐とく朝露の庭。　公　顯

これらはむしろ玉葉集の弊に近かるべし。また「時鳥なる」といふ造語を野守の鏡に駁したるが、この類の詞あり。これらはあまりに作爲せし弊ならむ。

をしやなほ櫻山吹散りしをれ、春なりぬべきけふの景色を。　伏　見　院

ひら〳〵と雲の空には雁鳴きて、草葉露なる秋のあさあけ。　親　子

枯れつもるもとの落葉のうへにまた、更に色にて散る紅葉かな。

爲　子

の如きは、あまりに詞を弄し過ぎて、嫌味あるものなり。

さはれ玉葉は平凡なる二條家より攻撃せられたるだけ出色の趣あり。

爲兼は元亨二年に薨ずと尊卑分脈に見ゆれど、恐らくは誤なるべし。新千載集に建武二年九月十三夜内裏によめる歌をのせたれば、少くともこの時までは生存せしなり。建武二年には爲兼八十二歳なれば、その長生なりしを知るべし。

（爲世は延元三年八十九歳にて薨ず。尊卑分脈）

次いで續千載集は花園天皇の文保三年後宇多院の院宣によりて撰せらる。玉葉集の成りてよりいまだ十年ならず。次いで續後拾遺集また十年ならずして成り、更に十餘年を經て風雅集あり。またこれより十餘年の後新千載集の撰あり。こゝに至つて爲兼薨じ、京極家は殆ど亡びたりと見えて、北朝もまた二條家の選となる。されど二條家もまた滅亡に近づき、その家以外に頓阿の起るありて、これを興すと稱せらる。されどこは次期のことなり。

第五章　鎌倉時代の散文

鎌倉時代は武家制度のはじめとして、後世の文學に屢〻理想的の時代としてあらはるれども、當時の文學は極めて貧弱なるものなり。

承久の亂以後京都は少しも實力なく、全く政權を關東に奪はれて中心點を失ひたれば、活氣なく、精力なく、萎靡逡巡、甚だ振はざる有樣となりぬ。關東はこれ

に反して榮えたれども、こゝは文學の地にあらず。文學に志あるものは依然として京都の地に着す。而して京都の有様は上述の如くなれば、文學の衰へざらむと欲するも得べけむや。

是に於てか文學の士は皆平安の盛時をおもふ。すでに平安朝の末に於て然り。況や鎌倉時代の衰時に於てをや。かくして自らおのれが力を信せず、ひたすらに古人を憧憬す。その想像力になる作品に乏しくして、歴史、雜錄、日記、紀行などの事實を主とせるもの多きもこれがためなり。わけて歴史的事實の波瀾は貧弱なる想像よりも遙に興味あるものなるをや。

また佛敎趣味のこの時代に至りて殊に增加し、深く人心の根柢に入りたることは、新宗敎の起りたるを見ても知るべく、茲に更めていふを要せざるべし。

今鎌倉時代の散文の作物の主なる作物を類別せむに、

一、雜纂類の一。 佛敎臭きものにして、宗敎の影響をうくること多き鎌倉時代の特產物なり。この類のものに、鴨長明の方丈記、發心集あり。(なほ類を異にするものに四季物語あり。)西行に撰集抄あり。康賴に寶物集あり。下りて無住法師に

沙石集あり。されどこれらの書の實際にこれらの著者の手に成りしか頗る疑はし。蓋し歌道の書にも定家の作などと稱せらるるものに僞作多し。これを梨本集には爲世、爲兼の爭ありて、二條家などにて僞作せしものなりといへり。僞作の書は何れの世にもあらめど、鎌倉時代に於て殊にその多かりしを思はずんばあらず。そのいづれの時なるかはいまだ知るを得ず。五部書説辯には神道五部書を鎌倉時代の僞作なりと論斷せり。或は鎌倉の世人心萎靡、武家の威力に壓せられ、積極的に自ら力を伸ぶるを思はず、退いて先哲の書を僞作せしものにあらずや。今を輕んじて昔を慕ふ時代には殊にその然るをおぼゆ。されどこはたゞ想像なり。されば方丈記以下の書の如き、余輩は頗るその怪むべきをおもふ。中にも方丈記は長明の著として最も確なるものとして知らるれども、尚かも甚だ信ずべからざる所あるが如し。

二、雜纂類の二。　平安朝文學の影響をうけ、今昔物語、江談抄などにならへる物語集にして、古事談續古事談、宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集の類をいふ。

三、日記、紀行。　玉海、明月記の如きはいはず、文學的の作物をあぐれば、親行の東

關紀行、光行の海道記は鎌倉風の文體にして、阿佛のうたゝねの記、及び十六夜日記、辨内侍日記、中務内侍日記は平安朝の假名文の體にならへり。

四、假名の歷史。 今鏡(續世繼)は後一條天皇より、高倉天皇までの歷史なり。これは或は平安朝の末なるべし。次に後世繼あり。後鳥羽天皇の朝に至るまでを玄るす。隆信の作といふ。今なし。増鏡は後鳥羽天皇より後醍醐天皇の元弘三年に至る。但しこは南北朝時代に入りて出來しものなり。これら假名文の歷史の外に、漢文の歷史に信西の本朝世紀あり、皇圓の扶桑略記あり。また愚管抄あり。いづれも文學的價値なし。

五、軍記物語。 假名の歷史が平安朝の榮華物語、大鏡などにならへるに對して、これは純鎌倉風を發揮せるものなり。保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記などこれなり。

六、小說。 この時代の小說はたゞ平安朝時代の糟粕を甞むるのみ。毫も創意の見るべきなく、時代の特色の認むべきものなし。唐物語、風につれなき物語、岩清水物語、住吉物語、松浦宮物語等をその主なるものとす。

第六章　寶物集、方丈記、發心集、沙石集

これらの書は一方において佛教皷吹の具たるものにて、大抵僧侶の手に成れるものなるべく、これと淨土、一向、日蓮の開祖高僧等が著述とは併せて見るべきものなり。また平安朝の末に續出せる往生傳などの系統をうけたるものとも見るを得べきものなり。但し日蓮、法然等の著述は、文章として見るべきものあれども、內容は佛教の理を說明するを主とす。往生傳はその目的は同じく佛教を廣めむとするにあれども、純粹の教理を說かずして、具體的の事實を引證して通俗に說き示せり。こは多く漢文を用ひ、文學書としては殆ど見るの價値なきものなり。茲にいふ雜纂類は、假名文の往生傳ともいふべし。即ち發心して佛門に入れる物語、めでたく極樂往生をとげたる物語、不信心のために冥罰を蒙りたる物語などを多く載せたり。また和歌をも多くはさみ、その功德をのべて、たとへば西行、慈鎭の如く和歌と佛教とを同一視し、否むしろ和歌を以て佛

敎を說く要具とせり。往生集などに比して文學趣味の多きは爭はれぬことながら、文藝の目的たる美を主とせずして、佛敎の奴隷たることは相同じ。これらはかの純文學的作品として認むべき古今著聞集などに比して、著しき相違あるを見るべし。一は平安朝時代の作風を繼承せるもの、他は新時代の風潮の生み出せるもの、以て時代の推移を覗ふべし。

而してこれらの書の著者と稱せらるゝもの、眞僞頗る疑はしく、本にもまた種種の異同ありて、その取捨に苦しまざるを得ず。

寶物集は平判官康賴の著なりと稱せられ、平家物語、源平盛衰記にもそのよし見えたり、康賴の傳は審ならず。長門本平家物語によれば阿波國の住人にして、書道に長じ、検非違使になれりといへり。後白河法皇に近侍し、成親、俊寬等と鹿ヶ谷に會し、平家を傾けむことを相謀りしが、謀洩れて捕へられ、成親の子丹波少將成經及び俊寬僧都と共に薩摩の孤島に流されたり。源平盛衰記に俊寬の流されたるを治承元年六月十三日とせるが、康賴の流されしも當日なるべし。而して平家物語源平盛衰記に記すところ、俊寬身法籍にありながら佛敎を信ぜざりしに、康賴と成經とは深く佛法を信じ、祈禱三昧に

耽りまた熊野の祠をつくりて祝詞を奉るよしなどをしるして、俊寛と對照して書けり。和歌をよくし、薩摩潟の歌を詠じ、成經と共に許されて都に還る。（治承二年九月）而して俊寛のみ赦免にもれて島に殘されたり。盛衰記には、康賴等が許されしは、佛敎を信仰せる功德によるものとせり。かくて康賴は歸京の後東山に閑居して寶物集を著せりといふ。東鑑文治二年閏七月二十二日の條に、康賴が尾張の國に行きしついでに、義朝の墓に詣でゝ供養したる報酬として阿波に領地を賜はりたる由をしるせり。康賴は出家して性照といひしとぞ。寶物集は歸洛の後東山に閑居せる際、知人の訪ね來りて嵯峨の釋迦天竺へ歸り給はんずる瑞相ありとて、洛中の人々立騷ぐよし語るを聞いて、やがて嵯峨に參詣し夜もすがら御堂に集りたる人々の物語るを聞くさまに擬して、世の中の寶は金にあらず、子にあらず、命にあらず、佛より貴きものはなしとて、經文和歌を引きて佛法を說き、地獄、六道、八苦、藥師、地藏、不動などの事を述べ、最後に佛を信ずれば極樂往生疑ふべからずとし、かつ阿彌陀如來の功德廣大無量なりとて、專ら唱名念佛を勸めたり。

寶物集に二種あり。一は三卷本にして寛文元年の刊本(繪入のもあり)なり。群書一覽に別に活板片假名本ありといへるも同じ本なるべし。また七卷本あり。元祿六年の刊本なり。元政の隱逸傳に、三卷本は後人が七卷本中より抄略せるものならむとあれど、この七卷本こそ後人が三卷本に增補せるものにあらざるか。寶物集は撰集抄、發心集などに比するに、やゝ漢語など多く、柔き所少く、後世の普通文の體に近し。

七卷本は知らず、三卷本は後人の假托と見るべき所もさしてこれなきが如し。たゞいかゞはしきは、治承元年の秋薩摩の國の島を出て、同二年の春ふたゝびふる里にかへりて」といへる發端の文句なり。されどこれは誤寫とおもへばさまで深く追窮すべくもあらず。歸洛の日は盛衰記と齟齬せるやうにおぼゆ。すなはち盛衰記は三月十六日入京とし、寶物集には歸りての春(翌年の春と思はれず。)二月二十日に嵯峨へ行くとし、花も咲きたりといへれば誤寫とのみも思はれず。但しこれは盛衰記にしるす所必ずしも信ずべからねば、これにより直ちに僞作の證とはなしがたからむ。右大臣實雅を左大臣とせるが如きも、右と左とは間違

ひやすき字なれば、これも寫字の誤ならずともいふべからず。貫之の「むすぶ手の」の歌の由來また拾遺集と違へど、これらは傳説の相違にて、これも後人が作れるものなりとの證たり難し。とにかく誤寫とおもはるゝ箇所は多けれども、いまだ僞書たる證跡と認むべきほどのものなし。

方丈記、發心集の二書は鴨長明の作と稱せらる。その他長明の作と稱せらるゝものに、四季物語、無名抄、瑩玉集（古語深秘抄に出づ。）文字鏁等あり。（方丈記、發心集、四季物語にはいづれも廣略の差あり。）その他長明の著なりといはるゝものなほ多し。源親行の東關紀行は長明道の記ともいひ、また源光行の海道記は長明海道記ともいひて、ともに古來長明の作に擬せられたり。（これらの記行のことは後に論ずべし。）流水抄には伊勢の記をも長明の作として數へたり。

抑、鴨長明とはいかなる人ぞといふに、その名の著しきに反してその傳記は詳ならず。鴨は下鴨の社人なり。（下は鴨、上は賀茂とかく習なり。）作者部類には、長明は鴨の禰宜長繼の男應保元年に授爵せらると見え、十訓抄には長明は俗名菊太夫と稱し、和歌管絃の道に通じけるが、社司を望みて叶はず、ために世を恨みて出家せりとい

へり。新古今集雑下に出でたる長明の歌のはしがきにも「身の望叶ひ侍らで、社のまじらひもせでこもりゐて侍りけるに云々」と見ゆ。流水抄にも引けり。かくて出家して蓮胤といふ。但し眞の僧侶にはあらざるが如く、代々の撰集みな鴨長明とのみ記せり。方丈記には出家の後大原にこもり、晩年日野に移りしよし見ゆるが、その眞僞は知らず。流水抄には、建仁元年後鳥羽院和歌所をおき、長明をして寄人たらしむ。幾程もなく長明辭して退きしを、更にもとの如く寄人に補せられむとせしに「しづみにき、今更和歌の浦浪に、よせばやよらむあまの捨船」といふ歌を献りて辭し奉りきといへり。東鑑には、建暦元年十月十三日に、鴨社の菊太夫入道が雅繼朝臣の推薦によりて將軍家に謁見せるよしを云るせり。長明の歿年は詳ならず。泗説に、或説として、長明は久壽元年に生れ、建暦四年五月八日六十四歳にして死すとあれども、如何にや。長明の歌は、さして多からず。その中にて、賀茂歌合に、

石川や瀨見の小川の淸ければ、月も流れを尋ねてぞすむ。

といふあり、石川丈山の

石川や瀬見の小川の淸ければ、老の浪そふかげもはづかし。その他には西行はど人口に膾炙せる歌なの歌と共に、極めて名高きものなり。その他には西行はど人口に膾炙せる歌なし。

方丈記は流暢なる和漢折衷文體の魁をなすもの、建暦二年といへば鎌倉時代の初期にして、平家物語などに先んじて出で、この時代における新文體の先鞭をつけたるものとおもはる。その文四六文の體にならひ、華麗この上なし。しかも東關紀行などの繁縟なく、組織整然として一絲亂れず、叙述の明確にして、文意の透徹せる、これが比にあらず。たゞ活氣に乏しきを病とす。

この書に廣略の二本あり。廣本は類從本、扶桑拾葉集本皆然り。諺解、首書、泗說等またこれによれり。略本は延德二年宗祇の手書を寫せるものなるよしを記せり。この兩本のいづれが方丈記の原本なりや分明ならず。

今方丈記を源平盛衰記及び平家物語の二書に比するに、頗る相似たる所あり。すなはち方丈記のはじめに、大火の事を記せる條あり。平家物語卷一の內裏炎上の事、及び盛衰記卷四の京中燒失の事に似て、然も平家物語の方に近し。次に

大風の事ありて、これも平家物語巻の三及び盛衰記巻十一に同じ事實を記せり。但しその年月は異なり。而して方丈記の方を正しとす。次に福原遷都の事あり。その文前半は平家物語、巻五後半は盛衰記巻十六に志るす所と酷似せり。次に饑饉の記事あり。これは盛衰記の巻二十七に見えたり。また大地震のことを志るせるが、これも平家物語の巻十二、盛衰記の十一にあり。これらは類似殊に甚し。また日野山の庵室のさまも、平家物語、盛衰記の二書に見えたる大原山の女院の庵室のさま、殊に盛衰記の文に酷似せり。また方丈記には玉葉集の「山鳥のほろ〱となく聲聞けば父かとぞおもふ、母かとぞおもふ」の歌を引ける所あり。山家集の「山深みなるゝかせぎのけぢかきに、世に遠ざかる程をしぞ知る」の歌を引ける所あり、また巻末に志るしたる「月影は入る山の端もつらかりき、たえぬ光は見るよしもがな、」は長明の作にあらずして新勅撰集に出でたる源季廣の歌なり。かくの如く方丈記には、他の書と類似せる個所相次ぐを以て、余はこの書は恐らく後人が諸書の一部を飣餖補綴して作りなせる僞書にして、長明の作にはあらざるべしと信ず。但し畧本は地水火風の變を志るせる條なく、文章また拙く、順序も前後轉倒せ

る個所あり。この方は長明の作にあらじと斷言する能はず。發心集は專ら發心往生のことを記し、また因果の物語もあり。時に詩歌管絃の事もあり。文章優雅なれど活氣に乏し。これを方丈記に比するに、文致全く異にして、同一人の手に成れりとは思はれず。二の卷に「承久の頃云々」と見ゆるが、この頃は長明すでに死去の後なるべし。また一の卷に「續古今云々」と見ゆれど、續古今集の出でし龜山院の文永頃には長明いまだ生存せりとも思はれず。兎に角確に僞作なりとは斷言するを得ざれども、尠くともその中に後人の挿入せるものあるは爭ふべからず。六の卷に寶日上人和歌を詠じて行とすること見ゆ。それによれば、作者は文學を以てすべて佛敎の手段なりと思惟せしなり。撰集抄は西行法師の作と稱せらるれど、恐らく後人の僞作なるべし。これも厭離穢土、欣求淨土の主意にて書き、また詩歌管絃のことをも挿めり。文章は活氣に乏し。（異本山家集附錄西行論參照。）

砂石集十卷はこの類の書中最も信すべく、また最も面白きものなり。今普通に行はるゝものは貞享二年の刊本なるが、その跋によれば廣略の二本ありとい

ふ。その作者を無住法師なりといふについては、少しく疑はしき點なきにあらず。書中智覺禪師の名見ゆ。禪師名は道海、延慶二年寂す。智覺禪師はその寂後に贈られたる勅諡なり。而して無住法師の死はそれよりわづかに三年の後なり。しからばこの文はこの三年の中になれるものならざるべからず。この點稍疑はば疑ふべけれど、他に怪しき點を認めざれば余輩は强ひてこれに對して疑を挾まざるべし。

法師名は一圓、字は道鏡、無住はその號なり。通姓梶原氏、鎌倉の人、幼にして父を失ひ、常陸にて人となる。十九歳にして出家し、諸宗の大德に就いて學び、終に東福寺の聖一國師に參して心印を傳ふ。文永の初尾張木賀崎に長母寺を開き、正和元年桑名蓮華寺に於て寂す。年八十七歳。他に雜談集、妻鏡等の著あり。

沙石集は序に弘安二年三伏の夏とあり。奥書に弘安二年中秋に草卒とあり。しばらく中絕したるよしをもしるせり。また永仁、乾元に重ねて他人の書寫せる奥書ありて、更に無住が德治三年裏書少々注之などいへる奥書あり。（時に八十三歳）この書佛敎を主意としたること言ふに及ばず。而して發心集、寶物集が念佛を

勸め、往生を說けるとは稍趣を異にして、念佛宗徒が妄に雜行雜修を排斥する非として、却つて諸宗一體を論じ、諸宗の一方に偏する事なく、各の長を採るべきを說けり。經文を引用するにも甚だ公平にして各宗のものを弘くとれり。されど中に就いていづれかといへば眞言宗を重んじたるが如く、卷二彌勒行者の事、卷八眞言功能事などは殊に眞言の功德を說き、わけて末法に靈驗ありとす。また禪に傾けることは言ふに及ばず。卷五行基菩薩之歌事に、八幡の大菩薩の御託宣に坐禪殊にえらばれたり我も常に坐禪の心地なりと宣へりと見ゆ。また本地垂跡の說を主張し、卷一和光同塵の事に、內宮外宮は兩界の曼陀羅なりといへり。その他南都北嶺の弊、末流には弊多き事、僧侶の無敎育なる事をいへる條などあり。また文學的趣味に富み、和歌連歌も多く、滑稽談も多し。中に就いて無言行者の話は名高きものなるが、その他猿が肝を干す話、鼠が婿を取る話など、經文よりいでたる御伽話あり。兼好の徒然草にはこの沙石集にならへるにあらずやと思はるゝふし少からず。文章は擬古的形式を避けて、鎌倉時代の俗語を交へ、極めて通俗に、しかも眞率にして、遙に寶物集、發心集にまされり。

一言芳談は徒然草にも引用せるが、これは古今の名僧智識等の名言を記し、專ら佛敎を說けり。作者は知られず。

第七章　古事談、續古事談、宇治拾遺物語、今物語、十訓抄、古今著聞集(一)——その解說

承久の亂後京都の貴族は、全く武家の勢力に壓倒せられて、現代を末の世とはかなみ、希望なく自信なく、從つて現代に對して毫も興味を有せず、たゞ徒に古代を悄悅してその模倣をこれ事とし、且つ想像力全く缺乏して、創作の見るべきもの跡をたてり。かくして古事談、續古事談、宇治拾遺物語、今物語、十訓抄、古今著聞集の如き雜纂類は出でたり。これらの雜纂類は多く巷談街說等をそのまゝに寫ししものにて、著者の空想を加へたる所極めて尠し。而してこれらの諸書には彼此同じ事實の重複せるもの尠からざるのみならず、中には文章まで同じきものも見ゆ。これ、一は敢て公にせむとするにあらずして、單に自己の備

忘に供せんがために、他書よりそのまゝに拔抄せるに由るものならむか。

これら雜纂類の淵源は、平安朝の今昔物語及び江談抄なるべく、而してこれらは同樣なる事實頗る混雜し、いづれがいづれより取れるものなるか分明ならぬもの多し。

今これら雜纂類につきて述ぶる前に、姑く平安朝に溯りて、その淵源たる今昔物語及び江談抄の二書に就いて說く要あるべし。されど今昔物語については平安朝文學史に詳述したればこゝに略す。江談抄は今昔物語と同じく平安末期のものなり。本朝書籍目錄の雜抄中に、一ヶ所に江談六卷江匡房とあるに、又如何なる故にや、更に江談三卷とありて著者の名なし。すべて六卷、卷一、公事攝關家事、佛神事、卷二、三、雜事（就中音樂のことを詳述せり。）卷四、題なし（詩句のこと、但し對句のみなり。）卷五、詩事（これは事實なり。）卷六、長句（次いで事實をも擧ぐ。）これなり。こは匡房が自ら書けるものにあらずして、門人がその說を筆記したるものゝ如し。被」命云、また被」談云などいへる書法なり。また入道帥（資仲）談曰、經信卿常被」示云、爲仲云、故小野右大臣（實資）語云などいへる所もあり、「卷五に都督自讃事と題して匡房のことをかけるを見れば、匡房の談せ

ることを書けるに相違なし。また於壽命者及七十事近代之難有之事也とあるより見れば、匡房が七十歳頃のこととなることと疑ふべくもあらず。巻二の初堀川院崩御運叶天度事の條の末に、匡房欲隱居、足下（門人を指す。）令仕朝バ亦可預朝議之人也、可得其心云々とあり。堀河院の崩御は匡房六十九歳の時のことなり故にこれも匡房七十歳の時の談を門人が筆記せる證たるべし。たゞ一つあやしきことは巻三安倍仲麿詠歌事の條の末に、永久四年或人問師遠（後の文缺けたるか、文これにて終れり。）とあり。然るに匡房は天永二年（永久四年に先だつこと五六年なり。）七十一歳にて薨せり。されどこは門人が匡房の死後五六年にして書けるものなりとも見るべく、未だこれを以て匡房の談を筆記せるものにあらずとの反證とはなし難し。さて今鏡巻十、敷島の打聞に、藏人實兼と聞えし人の匡房の中納言の物語にかける文にも云々とあり。江談抄巻三、郭公爲鶯子事の條をいへるなり。されば江談抄は實兼が筆記せるにや。

古事談はすべて六巻、巻一、王道后宮、巻三、臣節、巻三、僧行、巻四、勇士、巻五、神社佛寺、事、巻六、亭宅諸道これなり。本朝書籍目錄雜抄に古事談六巻（顯兼卿抄）とあり。勅撰和

歌作者部類によれば、從三位藤原顯兼は從三位宗雅男、新勅撰（五戀）作者、（一本藤原作レ源。）とあり。尊卑分脈（卷三）には村上源氏に宗雅顯兼（新勅撰作者）とあり、公卿補任（土御門天皇承元二年の條に見ゆ）にも源顯兼とあれば、源がその本姓なるべし。なほ公卿補任によれば父は入道三位宗雅、母は石清水別當光清の女なり、官位從三位刑部卿に至る、承久二年官を辭し、建暦元年五十二歲にて出家し、建保三年二月五十六歲にて薨ず。卷五に八幡撿校成清は光清第十三郎の弟子、小大進（三宮女房）腹也云々の條あり。成清は兼顯の叔父にあたる人なり。而してこの記事最も委しきは、この書の著者が兼顯なるべしとの一證たらずとせじ。卷三に東大寺聖人舜乘坊のことあり。また解脫房（建保元年寂）のことあり。共に同輩なるべし。卷四に「鎌倉にて庄司次郎、稻毛入道など被レ打之時云々」とあり。重忠、重成の殺されたるは土御門天皇の元久二年の事なり。その次の項に、「熊野別當湛增之許云々」の條に、「去承元三年此於湛增之墓云々」とあり。卷六に「承元四年三月日鴨禰宜祐綱奏レ之云々」とあり。卷三に「大納言法印良宴建暦二年九月於雲居寺房入滅（春秋八十六）之時云々」とあり。こは顯兼が五十七歲の時のことなり。以上によりて察するに、この書は建暦二年以後、建保三

年位までの間に成れるものなること明なり。即ち顯兼が晩年の作たるに相違なし。但し卷一に「經任說云々」と見えるせるもの二個所まで見ゆ。經任は實資の弟懷平の子なり。後冷泉天皇の治曆二年二月十六日六十七歲にて薨ず。顯兼の生れたるは二條天皇の永曆二年にして、經任の沒後遙に年を隔てたり。されば顯兼が經任の談を聞くべき筈なし。これこの書の著者が果して顯兼なるか、疑はしといはざるべからず。されどおもふに、こは他に原書ありてこれをそのまゝに引き來れるにあらざるか。元來この時代の雜纂類は極めて雜駁なるものにして、古書の一部をそのまゝに引き來れるもの少からず。例へば宇治拾遺物語は今昔物語の一部を殆どそのまゝに取り來れる個所あり。されば古事談またこの事なしといふべからず。これを以て、この書が顯兼の作にあらずとの確證とはなし難からむ。また卷三に玄賓僧都が榮華を捨てて山村の淸境に隱遁したることを書ける條あり。こは發心集の最初に出でたるものと殆ど同一なり。この中に、「また古今歌にも、山田もるそほづの身こそあはれなれ、あきはてぬれば問ふ人もなし。是は彼玄賓僧都と申傳へたり、」とあり。これは續古今集の誤に

て、その雜上に見ゆる歌なり。續古今集は龜山天皇の文永頃の撰なり。さればこの一章後人の攙入せるものか或はまた「古今歌にも」の一句、後人が肩書に、「續古今」と注したるが誤つて本文に混せしにもあるべし。この一項の故を以て他のすべてを疑ふべからず。この書は蓋し最も確なるものならむ。

續古事談は六卷のうち卷三一冊かけたり。卷一、王道后宮、卷二、臣節、卷四、神社佛寺、卷五、諸道、卷六、漢朝これなり。即ち大體は古事談と同じ分類なるが、たゞかれには漢朝のことなし。本朝書籍目錄には六卷とありて著者の名なし。況齋叢書に、狩谷棭齋云、建保七年源顯兼入道著見二多紀安叔時還讀我書一とあり。その著作の年代を建保七年とせるは、續古事談の末に、「建保七年の卯月の下の三日之をしるす、」とあれば、これによりたるなるべし。(建保七年四月十二日承久元年と改元す。さればこゝにも承久元年とありたき所なり。但し前の年號を守りしものならずともいふべからざれば、この故を以て疑を挾むべきにあらず。さればその著作の年代はしばらくこれを許すとすとも、その著者が顯兼なることは信ずべからず。これを顯兼の作なりとは、古事談がこの人の作なりといはるゝによ

りて、漫然とかいへるなるべければ、この人すでに建保三年に歿したれば、かかる說は一顧にだも値せず。體裁も頗る古事談とは異にして、文章もまた古事談が漢文假名文相交りて極めて雜駁なるに似ず、終始流暢雅馴なる假名文を以て一貫せり（御室目錄にも、古事談は雜抄の內に入れ、これは假名文の部に入れたり。）また古事談中に見えたる事實が更に續古事談に現れたるもの少からず。即ち續古事談の中に一條帝が寒夜に御衣を脫したまふこと、璽劒の事、地火爐の事、成信重家申合はせて出家の事などあるが、これらはすべて古事談中に見えたり。（但し繁簡の差、人名の相違はあり。）かくの如く事實の重複せるに徵してもその同一著者の手に成れるものにあらざることを知るべし。

宇治拾遺物語は、十五卷あり。普通刊本の序に「世に宇治大納言物語といふものあり。この大納言は隆國といふ人なり。……後にさかしき人々書き入れたるあひだ、物語おほく成れり。大納言より後のこと書き入れたる本もあるにこそ。さるほどに今の世にまた物がたり書き入れたる出で來れり。大納言の物語に洩れたるを拾ひあつめ、またその後のことなどかき集めたるなるべし」といへり。

その宇治大納言物語といへるは今昔物語なるが如し。故にこれに從へば宇治拾遺物語は今昔物語の改補なるが如し。八雲御抄に宇治大納言として作者隆國とせるはこれも今昔物語を指せるなり。古今著聞集の序に、「夫著聞集者宇縣亞相巧語之遺類」とある宇縣亞相巧語もまた宇治大納言物語即ち今昔物語のことなるべし。今、今昔物語と宇治拾遺物語とを比較するに、彼此同一の事實頗る多し。しかも文章は少しづゝ異なり。今昔物語の文は頗る古雅なるところあり、平安末期に出でたるものなるべく、宇治拾遺物語は鎌倉時代に入りて後の作ならむ。書中明暹の事を記せるに、「件笛幸淸進上、當今建保三年也」とあり。これによりて見れば、宇治拾遺物語は建保三年以後幾もなくして成れるものならむ。また今昔物語にては「渡る」「射らる」などいへる語も、宇治拾遺物語には「渡す」「射さす」など、武家時代特有の語法ありて、時代の差歷然たるものあり。さればこの書は今昔物語の改補にはあらで、單に後人がその一部を拔抄せるに過ぎざるべし。啻に今昔物語のみならず、古事談その他の書より拔き來れるもの尠からざるを見ても知るべし。本朝書籍目錄には、宇治拾遺物語源隆國作とあり。然れ

ども今日いふ所の宇治拾遺物語は隆國の作ならざること明なれば、今昔物語をもとは宇治拾遺物語といひしならむとの說もあれども、强ち本朝書籍目錄をさまでに辯護するにも及ばじ。本朝書籍目錄は足利時代のものなれば、そのいふ所一一に信憑すべきにあらず。別に宇治大納言物語といふあり。こは三册位の極めて小部のものなり。また小世繼といふ書あり。これも宇治大納言物語と殆ど同樣のものなり。この短篇の宇治大納言物語は大鏡、源氏物語、枕草子、今昔物語等より採れるものにして、極めて後世のものなり。

今物語は多くは歌の逸話なり。群書類從には、藤原信實文永二年二月薨。の作となせり。但し信實といふ證跡巻中に見えず。この物語中にあらはれたる年代の最も後なるものは、四條天皇の延應元年のことなり。また松島上人(法心房のことなるべし。)のことあるが、恰も信實と同時なるべし。信實は歌人にして畫家を兼ねたる人なり。增鏡に信實が後鳥羽院の肖像を寫せることをゑるせり。また今日信實の作として傳れる繪は、華嚴緣起及び北野天神緣起これなり。しかれどもこの二つは全く筆法を異にすれば信實一人の作とは認め難し。また繪師草子丹鶴叢書に出づ。

といふものあり。信實が自畫自筆のものとして有名なり。信實の父は隆信といふ。この人も似繪に巧なる人なり。この隆信と定家とは同腹の兄弟なるが、歌道に於ては信實は定家の門人たり。井蛙眼目による。爲家と信實とは從兄弟たるが、爲家は信實を無双の歌よみとなし、その作を續後撰集の卷頭に入れむとしたりしを、辭して出さざりきといふ。井蛙抄。されど信實はさほどに巧なる歌人にあらず。その歌集續群書類從に出づ。信實の女三人あり。いづれも歌人なり。四條院少將內侍、藻壁門院少將內侍、後深草院辨內侍これなり。就中辨內侍には辨內侍日記のつたはれるあり。

十訓抄はその序文に建長四年の冬に成れるよししるせり。作者については三說あり。一は橘成季なりといふ說なり。成季は古今著聞集の作者なりとせらるるが、十訓抄には著聞集と同じ事實を同じ文章にてしるせるもの尠からざればやがてまたこれをも成季の作ならむといへるなるべし。然れども十訓抄は著聞集と同一人の作にはあらざるべし。成る程この二者は事實文章とも同様なること少からざれども、しかもその間に語脈を異にし十訓抄は斷片的にし

て著聞集は然らず。故にこの同一の事實あることは、却つて別人の作なることとを證するに足らむ。著聞集は建長六年の作なり。次に清巖茶話に「十訓抄は爲長卿の作かと覺る也云々」と見えたり。しかるに爲長は寛元四年三月廿八日八十九歳を以て歿せり。即ち建長四年に先だつこと七年なり。第三に、妙覺寺本の奥書に、六波羅二﨟左衛門入道作云々（長時時茂等ニ奉公）とあり。或は然らむ。されどもまた確たる證もなし。

古今著聞集は三十篇、二十卷あり。卷一、神祇、卷二、釋敎、卷三、政道忠臣、公事、卷四、文學、卷五、和歌、卷六、管絃歌舞、卷七能書、術道、卷八、孝行恩愛、好色、卷九、武勇、弓矢、卷十、馬藝、相撲、强力、卷十一、畫圖、蹴鞠、卷十二、博奕、偸盗、卷十三、祝言、哀傷、卷十四、遊覽、卷十五、宿執、鬪諍、卷十六、興言利口、卷十七、恠異、變化、卷十八、飯食、卷十九、草木、卷二十魚虫禽獸これなり。漢文の序の末に、于時建長六年應鍾中旬、散木士橘南袁と記し、又終に十月十六日竟宴の事を記し、奥書に、建長六年十月十七日宴後朝右筆記之……朝請太夫橘成季とあり。（朝請大夫とは從五位上の文官の唐名なり。）昔のことも多く見えたれど同時代のこと最も多し。殊に建長年間のことも少からず。これらは著者の見

聞にかゝることとなるべし。たゞ怪むべきは卷二十に「建長六年十二月二十日節分御方違のために云々」とあり。されどこは後に至りての挿入なるべし。また「第八十七代の皇帝御嵯峨天皇と申すは……前右大臣の女、女御に參り給ふ後には大宮女院と申して二代の國母におはします。」とあり。玆に二代といへるは御深草、龜山の二帝なり。後嵯峨院は龜山天皇の文永頃に崩御あり。而して建長は後深草天皇の朝の年號なれば、これらは後の追記と見るべく、これを以てこの書の著者が成季にあらずとの證とはなし難からむ。

此等の雜纂類は古書より拔抄したるもの多し。平安朝時代には、當時の出來事は外記の官ありて日記をしるし、これが歷史の主なる基礎をなせり。而して江談抄の如きは多く材料をこれ等の日記中より得來れり。上述の雜纂類もまたその例に洩れず。今これ等の書を比較するに、事實の同じきもの多きのみならず、文章までも酷似せるもの尠からず。彼此關係のあまりに混雜せるに呆然ならずんばあらず。

古事談は最も文學的趣味に遠ざかりて、單に事實を集めたるに過ぎず、今昔物

語、江記、袖中抄に抜くもの。 江談抄、百練抄、今鏡、その他公卿の日記より取れる記事多し。殊に江談抄と同文なる所尠からず。巻二齊時の話は江談抄にもありて、江談抄の方は事實の誤あり、古事談の方は古朴にして事實に近きが如くなれど、強ちこれを以て江談抄を僞とはいひ難し。また同じ巻に有國の談あるが、こは話の筋は今鏡と寸毫の差なし。蓋し今鏡の和文を古事談には漢文に譯したるものか。二書必ず關係あるを知るべし。而して、古事談の文素朴なるが如くなれど、今鏡の時代もまた強ひて疑ふべきにあらざるが如し。

續古事談の最も交渉多きは古事談にして、同じ事實もあり、またこれを増補せるやうの所もあり。その他百練抄、扶桑略記などと同じ事柄多く、また臺記、長秋記などをさながら取りたる所もあり、大鏡と同事實もあり。

宇治拾遺物語はすべて百九十六章の内今昔物語と同じきもの八十六條あり。なほ今昔物語の今鈌本となる部より取りたるものあるべければ、實際の數は更に多かるべし。 次に江談抄に比するに、伴大納言の事は同じけれど、こは古事談にも同じ文あれば、むしろ後者より取れるなるべし。小野篁のこともまた江談抄中のものと似たれども、これも全くこれによれりと

は思はれず。要するに江談抄とは關係薄し、古事談と同じ事實は二十三あり。されば宇治拾遺物語は今昔物語に次いでは古事談より取りたるものなることは明なり。而して今昔物語にも古事談にも出でたることは、今昔語物によりたるもあれども、これを捨てゝ古事談によりたるもあり。古事談と殆ど同文なるものも尠からず。その他大鏡、今鏡に出でたるもあり、稀には大和物語、土佐日記に出でたるもあり。その他も多くは典據あるものなるべく、著者自らの見聞に拘るものはいくらもあらざるべし。宇治拾遺物語の文は類書中最もすぐれて見ゆ。また事實の拔粹もよろしきを得たれば、今日まで最も廣く行はれたり。

今物語も同じく古きものより引きたるが多かるべし。いまだよくは調べず。但しこの書と十訓抄と同じ個所五つばかりあり。いづれも凡そ同文なり。うち二つは何れを先とも分きかねれど、他の三條のうち、「螢火亂れ飛びて」の條に、十訓抄中の「ゆゆしき螢かな、集めたらむやうに」の句を省きたるは、恐らくは意義なしと見て今物語に省きたるものならむ。十訓抄が今物語をもととせるならば、いかにしてかくの如き句を入るべきぞ。また今物語のこの條の末の詩歌三章

は後に加へたるものならむ。然らずば「音もせで」の方前にあるべし。但しまた注釋の混とも見るべきか。即ちかく見れば十訓抄の方先と見ゆ。また「物かはの藏人」の條も、今物語の方は冗長にして、後に加へたる句あるが如し。但し信實は十訓抄の成れる建長四年より後に生きのびたる人なれば、老後の編と見ればよきものの、なほ定家、家隆互に相推重することを記せる條また二書同文なるが、今物語には、二人を指して「家の風たゆることなく」といへり。信實ならばかくはいはじ。後の人がかくおほらかにいへるなるべし。されば余輩は今物語を信實の作といふに疑あり。而してその作は十訓抄より後なるべし。

十訓抄は今昔物語、江談抄、大鏡、榮華物語、今鏡、袋草子、古事談、續古事談、宇治拾遺物語、その他より多く取りて、殆ど自家本來の面目なきに近く、平家物語、盛衰記と同じき個所も見ゆ。また悦目抄、俊頼口傳、奥儀抄等と同文なるもあり。(その中最も正しとせられたる悦目抄と比べ見るに、悦目抄の終數個條天智天皇朝倉や以下、但し最後の二條を除く。は全く十訓抄と同じく、しかも十訓抄を丸抜きにして、殆ど意義をなさざる所ありて明に剽竊の跡を示す。但しこれらは後人の攙入とも見れば見ら

るべけれど、その以前の條々にも疑ふべきこと多く、悦目抄は蓋し信じ難きものなり。）かくの如く十訓抄は多く他の書を殆どそのまゝに取り來れるが故に、記事そのものに價値あることと少し。たゞその敎訓說を挾み、論に從うて事實を剪裁補綴したる處を見るべし。文章は宇治拾遺物語と共に雜纂類中の雙璧なるが、この方句を切ること多く、全體の樣子甚だ素朴に見ゆ。繪佛師良秀の物語二者ともにあるを比較すべし。一見十訓抄の方却つてもとなるが如くに見ゆ。事實には、附會の點あるべけれど養老の孝子の話の如き他に見ざる所なるべし。また淸盛の慈愛に富めるをいへる條あり。賴政鵺を射る條の如き、平家物語よりこの方事實に近し。

古今著聞集は、十訓抄と同事實甚だ多し。その引用する所もかれと同じく、今昔物語、江抄、古事談などなるべくその他畧記、紀畧、百練抄等の歷史日記類多かるべし。

第八章　古事談、續古事談、宇治拾遺物語、今物語、十訓抄、古今著聞集(二)—その評論

これらの雜纂類は片々たるものにして、かれより取り、これより借りたるものなれば、個人としての著者の獨創の見を認むるを得ず。その文學的價値また極めて少し、たゞこれ等は當時の歷史上の事實、思想、風俗、習慣等を知るに止る。古事談はこの中にて最も無味乾燥なるものなり。宇治拾遺物語も興趣を主としたるもの、他に目的あるなし。而してその話は多くは他より拔いて秩序なく臚列したるに過ぎず。十訓抄は敎訓を標榜して露骨に作者の主觀的意見を加へたれば、最も當時の思想、殊に道德的觀念を窺ひ知るべし。古今著聞集も單なる事實を蒐集せるに過ぎざれど、類を別ちて、その各條のはじめに二三行の小序を加へたれば、大體に於て著者の意向を窺ふに足る。今一々に論ずべくもあらねば、これを一括して說かむとす。

鎌倉幕府創立以後、世はまさに一轉化せり。平安朝趣味は漸く減退して、新時代

の傾向は著しくあらはれ來れり。然らば新時代の傾向を生み來れるものは何ぞ。武家政治と新宗教とこれなり。然れどもこの二傾向は未だ全く融和するに至らず。寶物集、沙石集の類は僧侶の手に成れるを以て、佛敎を主として、歌道をも佛敎宣傳のためとして說きたれども、宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集の類は、これらの作者が武事を知らず、また新宗敎にも趣味を有せず、むしろ平安朝の趣味に心ひかれたるを以て、種々の倫理、敎訓、宗敎も、ひたすら形式的に過ぎざるの觀あり。換言すればこれらの書には新舊兩思想の融合せずしてたゞ混合せるを見るのみ。

雜纂類のうち、十訓抄は敎訓書ともいふべく、他と少しく類を異にせり。十個の條目を設けて敎訓を說く。その條目は或は十善などより出でたるなるべく、組織甚だ整然たるが如くなれど、これを通讀して腦中に深き印象を留むることなし。即ち著者はこれによりてその豫期せる結果を讀者に與へ得ざりしが如し。これ、その題目が道德的なるに似ず、その例が趣味的のこと多き故なり。換言すれば、形式が鎌倉式なるに似ず、內容が平安朝式なるに由る。而して尾籠下劣

なる記事の多きはこれら雜纂類のいづれにも見る所なるが、十訓抄もまたその例に洩れざるは、その名にも似合はぬ心地す。要するにこれらの著者は僧侶にもあらず、武家にもあらずして、公卿か、さらずともその下につくものなるべし。當時の公卿は因循姑息にして、單に舊來の思想を墨守するのみ。さればこそかくの如き活氣なく、生命なき作物は出來たるなれ。一説に十訓抄を六波羅二﨟左衛門入道の作なりといへど、武家らしくもなく、入道らしくも思はれず、或は文事著作などいへば自己の生活と全く別物と心得たるにもよるか。

平家物語などの軍記類は、もとより武事を主として戰爭の記事多きは言ふまでもなきことなるが、これら雜纂類には武事は極めて尠く、しきりに太平を氣取る風あり。これ公卿等の武事を卑む平安朝以來の風習の殘れるによるか。十訓抄十には「凡武士といふは亂たる世を平ぐる時是を先とするが故に文にならびて優劣なし……」といひて賴政の例をあぐるのみ。また武人文を兼ねたる例あれども、これらはむしろ文事に長けたるを賞せしのみ。何等武事の記事あるにあらず。古事談には勇士の項あり。著聞集には武勇の項あれども、將門より

義家頃迄の事位にて、源平兵亂のことは殆どなし。賴朝、義經その他の同時代の人の名出でざるにはあらねど、合戰のことは極めて少し。十訓抄に淸盛、重盛のこと一つ出でたれど、いづれもその善行にて、武事には關せず。著聞集には弓箭馬藝のことあれども、概ね賭馬競爭などの遊戯のみ。蓋し殺傷のことは甚だ殺風景なりと思へるなるべし。然らずんば興味ある源平の戰爭のことを記せざる筈なかるべきなり。

蓋し文藝に對する見解は古今類を異にす。今日は直下に人生に接觸するを以てその目的とし、繁劇多忙なるこの人生を寫さずして閑文字を弄するが如きは惘殺すべきのみとなす。前人の文藝を見るや然らず。多忙なるこの人生を一時なりとも解脱して、悠然として我を忘るゝを以てその目的となす。渠等はすべて俗事を嫌へり。和歌には花鳥風月の外すべて歌ふべからず、世俗の言は用ふべからずとす。よし俗事にまれこれを美化して全く脱俗のこととなすが文藝の德なりとなす。哀傷窮乏もしばらく和歌によりて美化し、困厄苦痛も爲に忘るべし、これ詩歌の德なりと思へり。然ども、かくの如きも眞情より出でたる

はよけれど、屢、情の僞りて風流めかすことあり。此の如きは俗臭却つて厭ふべし。至悲に文なく至哀に詩なしといへるは即ちこれなり。かくの如き時代ゆゑ頼政の武勇を寫すにも、却つてその連歌を讀みたるを賞したるなるべし。

さればとて誤解する勿れ。雜纂類は決して史實を想像を以て美化し、想化したるものにあらず。古事談などは乾燥なる事實多く、その他も作り物語といふ程のもの少し。唯その記事が文藝を主とせりといふのみ。詩歌管絃と戀愛に關すること多しといふのみ。古事談に諸道の事とて記せる內、詩歌管絃に關するもの最も多く、（陰陽宿曜道などのこともまた多し。） 十訓抄には最後の可庶幾才能事と題して詩歌管絃のことを載せたる條最も長く、著聞集には文學、和歌、管絃、歌舞の條ありて、何れも委しく、就中管絃歌舞は著者のみづからこれを得意とすといひて、殊に精し。好色のこともまた記事多し。しかのみならず、すべて他の道にわたりても、和歌に關したることを多く引けり。但しそれらも著者の想化美化にあらず。著者は事實を見聞のまゝに寫して、（但し事件の確否如何は保證すべからず、）軍記などの如く誇張の迹は存せず。後世の物語の如く、善惡いづれかの標本的人物を

作らず。十訓抄の如き、勸懲を主とすとはいへ、遙に後世の物語類の人物とも違ひ、また軍記類とも少しく異にして、むしろ自然に近きものあり。十訓抄十に頼政が鵺を射ることあるが、平家物語にも同じ事實見えたり。されど天皇の御名も、怪物の有樣も異なり。即ち平家物語には鵺を極めて恐しきものにうつして、誇張の迹著しきに、十訓抄の方は事實に近きものあるが如し。著聞集には男女間の肉慾を赤裸々に描き出して、醜陋面を向くべからざるものあり。これも飾らず作らず寫したる所、やがて眞に近き所なるべし。

さて雜纂類は過半は平安朝の保守的趣味を帶び、記事も過半は平安朝のことなるが、猶新時代の傾向も混じたるはいふまでもなきことなり。既に十訓抄などといふ敎訓的の書の出づるだけにても、儒佛の影響著しきを思ふべし。神道はいかにといふに、これも古事談に神社佛寺のこと見え、著聞集には第一に神祇の目を掲げたるが、その佛敎化したるものなることはいふに及ばず。託宣の事など續出する他には注目すべき點なし。儒敎は十訓抄に屢、經書等を引きたるにて、その影響を知らる。老莊なども引きたり。

因にいふ、漢文學の影響は平安朝以來のことにして、事例をあぐるに本朝よりも、むしろ支那のことを引き來る例却つて多き程なり。古事談及び著聞集は主として本朝のこと多く、たゞ著聞集の最後の數條に支那の事を見るのみ。續古事談には漢朝の目あり。これらは記事を主とし、殊に本朝の事を記すが趣意なれば、いふまでもなき事なるが、十訓抄は敎訓を主としたるものなれば、主として支那の故事を引き、次いで本朝のことを引けり。

佛敎の感化の大なるはいふに及ばず。古事談には殊に僧行の目あり。著聞集には釋敎の目あり。十訓抄の跋を讀みても著者の意嚮を思ひやるべし。されど僧侶が魚鳥を食ふ事などありて、簡易佛法に左祖したるを見る。

さて以上の儒敎及び佛敎が、十訓抄には條目を設けてあらはれ居れども、心底よりこれらの敎に化しをるにあらずして、むしろ皮相に止れる觀あり。例へば女は禍の緣となるとて、妲己、褒姒の例をあげて、牝雞の晨するを戒めたるが、これも因緣によりて善惡種々ありといひて、女のために道に達したる例などあげ、敢て深く咎めず。また妹背の中の哀別離苦は「偏に愛著生死の業なれども、木

石ならぬ身の習にて、」といへるを思ふべし。これに次いで「たゞ傾城の色にあはざらむ事希ふべし、」といふが如き、また時に內心如夜叉といふが如き、むしろ蛇足の感なき能はず。

また「可レ存二忠信廉直旨一事」には、忠孝廉直を主とすべきことを說きたるが、君父を諫むるにも一直線にはすべからず。君の機嫌を見計ひて、その怒に觸れざるやうにすべしと說けり。また廉直を重んじ、內外表裏共に潔白なるべき由を說きたるが、全體よりいへば本書の說くところは、直下に良心を主とするものにあらず、たゞ內に疚しからずば則ち外間の評はわれ關せずといふにあらず。是非善惡我に於て則を違へずんば足れりといふにあらず。むしろ一身の善惡よりも、世間に對しての成功如何を慮るにあり。動機よりも結果を重んじ、目的よりも手段に心を勞するが如し。一直線に驀進する青年にあらずして、思慮分別ある中年の人なり。否むしろ理想を失ひ、目的を忘れて、末節に齷齪するを老年の人なり。進歩よりも保守、向上よりも頽廢の氣の漲れるを見る。「可レ專二思慮一事」の條條を讀みてこれを知るべし。即ち善惡共に己を盡せば足れりといふよりも、己

をよく見られ、人にあしく思はれじとするが主なり。實際よりもよく思はれむとするなり。たとへば正直なる人の用意なくして物にたぶらかさるゝこと、慈悲に仕損じある事をいへるが如き、これらは元よりしかあるべきこと、正直も思慮なければ愚直となり、慈　も思慮なければ宋襄の仁となることはあれども、著者の眞意は正直、慈悲よりも思慮を先としたるやに考へらる。

かくして道徳の内容よりも、說はおのづから社會交際に涉るを見る。而して最も殺風景を忌み、樸實愛すべしなどとは決していはざるなり。されば第一の可レ定二心操振舞一事にも概ね應接を主としたり、即ち、人をそらさぬ事、人の忙しきか否かをはかりて物いふべきこと、上手めくも時による、周章つるも時によるべき事を述べたるが如きは情緒を主としたるものにして、「情を先とす」といひ、また「中庸を重んずべし」といへるが如きは、決して意志を主とする鎌倉以後の道德にあらず。即ち十訓抄等が、その皮相に於ては兎も角も、その根本はなほ平安朝の風尙を追へるものなることを察すべし。

十訓抄第九可レ停二懇望一事は事物に執着すまじといふ事にて、これ一は佛敎思想

より來る。著聞集にも宿執の一節を設けて「宿執よしなし」といへど、なほその道に於ては止むべからざる所以を說き、競馬の勝を祈りて負けて生きんより、たゞ勝ちて死ぬべしといへる例話を出せり。

詩歌管絃の道はその最も重んずる所にして、十訓抄に可庶幾才能事、古事談に亭宅諸道、著聞集に文學、和歌、管絃、歌舞などの項目あるによりても知らる。かくて藝に達すれば神明も感動すといふ例を多く引きたり。十訓抄に「心ありても藝なくばせん方なし」といへるにても、その意向を知るに足らむか。

雜纂類は童話、傳說、研究の資料として尊きものなり。古事談には、粟津冠者大蛇を射て龍宮の鐘を得る話あり。これが太平記には田原藤太の蜈蚣退治の物語となりて出でたり。又花山院の頭痛を痛み給ふ記事は三十三間堂の由來に似たり。宇治拾遺物語にては瘤取の話、雀の恩を報ずる物語など注意すべし。十訓抄にては養老の孝子のこと注意すべく、清盛、重盛の逸話は史實を補ふべし。著聞集にては平家物語の祇王、祇女の物語に似たる男色物語あり。紫金臺寺御室に千手といふ童あり、はじめ寵を專らにしたるが、後に三河といふ童來りて寵

を奪ひ、互に爭ふ物語なり。こは暫く關係なき獨立の話と見むも、かの清盛前世のことは平家物語に見えたると全く相同じ。これらは二書の前後を考ふる資料となるべし。盜賊大殿小殿は叙述甚だ巧妙にして壓卷といふべし。その他なよ竹、時秋の話あり、なよ竹物語はこれをそのまゝに取りたるものか。時秋の話も前に時秋物語あり。同文にして、順序をかへたり。なほこの物語は今鏡村上の源氏のうちに出でて、時秋を時忠とし、事實も簡にしてたゞ笛を返すこととせり。

第九章　保元物語と平治物語(一)——その解說

保元物語と平治物語とは各、三卷あり。この二書はその筆致より見れば別人の作なりとは思はれず。また物語の組立より見るも同樣の體裁なり。事實もかれこれ矛盾する所なし。されば之れを同一の著者の手に成れるものと見るとも大過なからむ。よりてこの二書を茲に一括して論せむ。

この二書を平家物語と同じ著者の作なりとなすものあり醍醐雜抄に、或平家双紙奥書云、當時命世之盲法師了義坊（實名如一）之說云、平家物語、中山中納言顯時、子息左衞門佐盛隆其子民部少輔時長作之、又將門、保元、平治、以上四部同人作云々と見えたり。されど、將門記と保元、平治物語とが同じ著者の筆にあらざることは一目瞭然にして平家物語と保元平治物語とが同一人の著にあらざることも亦明らけし。文體然り、思想に於て然り。事實の矛盾亦これを證す。今一々辯せずといへども、參考本を見ば明ならむ。

この書を以て世に軍記の始と稱す、（將門記の如きは別として）而してその簡淨素朴なるの故を以て、必ず平家物語より以前に出來たるものなりとして疑はず。されど簡淨はあるべし、素朴古雅は未だし、そのかれが如く華麗ならざるば、却つて華麗なるものが發達して、所謂絢爛の極平淡に歸せしものと見られざるにあらず、兎に角余は如何にしても、この二書は平家物語源平盛衰記の後に來るべきものと信ず。こは確乎不動の證あるにあらず。しかもなほ余はかく信ずるなり。故いかにといふに、平安末期世の中亂れて擾亂久しく續きたるが、その最も著しき

は二十年間の平家の盛衰なり、清盛、頼朝の政權の爭奪なり、花の如き平家の沒落なり。保元、平治の二亂の如きはこれに先だつて起れる小波瀾のみ、暴風の前の雲行のみ。しかるにこれらの爭亂の後に出でてこれを寫さむとするもの、二十年の盛衰をさしおいて、まづ筆を保元、平治の爭亂につくるの理あらむや。この二書は未だ二十年の盛衰を見ざるものの筆とはいひ難し。保元物語にも崇德院遷宮のこと（元暦元年）を記し、平治物語には頼朝薨去の後のことまでを記せり。こは諸本皆然り。故に著者は平家の沒落を見または聞きたる人に相違なし。而してこれらの爭亂をすてゝまづ保元、平治の小亂を寫すの理あらむや。思ふに著者は源平の大亂を記せる書を見て、これに倣ひて未だ手をつけられざりし保元、平治の亂を寫せるものならむ。これによつて余は斷然保元、平治物語を平家物語の前なりとの説を非とす。されどなほ傍證を求めざるべからず。

鎌倉時代の書は雜纂類にても軍記物にても異本少からず、參考本にいはく、今探世族名家之藏得異本五部章段編次互有異同、體裁不齊、然則撰者亦非一人明矣、異本併印本凡六部云々）凡印本行于世久矣、故今以印本爲本書、以異本參考

之云々とさてその異本とは、

一、京師本――得二之于京師一因稱レ之、此本人名諱多用二假字一無レ用二證文字一因唯取レ訓參考耳。

三、杉原本――九條殿家司、杉原出雲守平盛安家藏也、因稱レ之、

三、鎌倉本――間注所上野介三善康豐手書、而鎌倉相承院所レ藏也、故稱二鎌倉本一。（猶保元物語には、此本第二卷闕云々、平治物語には此本自二首卷一至二第二卷一闕、今見存唯末卷耳云々。）

四、半井本――半井通仙院和氣瑞桀世々所レ藏也、故稱レ之。

五、岡崎本――故岡崎內記所二手書一今三木別所高之所レ藏也、此本篇次悉與二印本一同、章句間異者、他本所レ無而多與二實錄一符合、足二以徵一也。

これらの諸本を比較するに、流布本は岡崎本と甚だ相似て、他の四本は順序も文章も流布本と大に異に、而して彼等相互は相似たるが如し。例へば平治物語卷三に、難波三郎震死のことあり。流布本及び岡崎本には、惡源太を斬れる難波三郎經房が布引瀧にて、雷鳴に遭ひしが、惡源太の姿雲間にあらはれ、經房は遂

に雷にうたれて死すとあり。盛衰記には難波恒俊が重盛の布引瀧遊覽の際に瀧壺に入り、龍宮に行き、その有様を語ることを禁せられたるに拘らず、歸りて重盛にこれを物語れるより、俄に雷鳴起り、恒俊は震死せりとありて、惡源太とは關係なし。鎌倉本には難波三郎經遠が、惡源太を斬りてより、氣分あしければとて箕面の瀧にゆき、瀧壺に入りて、はからずも龍宮に至り、佛舍利を得しが、其の後昆陽野にて雷に殺されたりと記せり。他の三本も略〻同じ。即ちこれらの諸本は盛衰記と流布本及び岡崎本との記す所を折衷してかけるが如し。また平治物語卷三に賴朝の生捕らるゝことをしるせるに、流布本及び岡崎本には賴朝青墓を出でて東國に赴き、途にして捕へらるゝこととなりをれるに、他四本には賴朝靑墓にありて捕へらるゝやうに書けり。序のあるも流布本と岡崎本とのみ。（岡崎本は名にす。）而して岡崎本は參考に、章句間に他本になき所多く、實錄と符合すとあるが、余の見る所によれば、流布本がもとにして、岡崎本はこれに東鑑などによつて所々攙入したるにあらずやと思はる。たとへば平治物語の終、賴朝舉義兵、併平家對治事に土佐へ流されたる希義討たるゝ事、及び賴朝義經

對面の事は岡崎本ひとり異にして、東鑑に同じ。また岡崎本に淸盛歷官、薨去、遺言、賴朝及び從士の任官の事など見えたるが、これが、これらは軍記物としては似合はしからぬ記事なり。而して公卿補任及び東鑑にしるす所と同じきを見れば、これらの實錄によりて補ひたるものならずや。

他の四本を見るに頗る怪むべきこと多し。保元物語卷二爲義降參事に、他三本（鎌倉本ここの卷缺く）爲義が逃れて叡山に上れることを寫し、月輪房堅者の許にて出家し、宿房の「過去帳に、我法名を自筆に書入、其下に一首の歌をぞ書附ける、

梓弓いつるべしとも思はねばなき人數に兼て入るかな。

こは太平記如意輪堂の傳說と同じ。但しこれを以て太平記の後といふにはあらず。されど相互の關係ある事は明なり。因にいふ、太平記には「いづれを菖蒲ひきぞわづらふ」の歌（盛衰記などにはなし。）を賴政の作としたるに、沙石集には梶原景時とせり。）

また保元物語卷三、京師本杉原本、鎌倉本に「彼一宮ハ御出家有テ後花藏院法印元性ト申キ。新院崩御ノ事都へ聞ヘシカバ、御服奉ラントシケル時、入道法親王

覺性ヨリ御服ハイツヨリメサルゾト尋申サセ給ケレバ、御涙ヲオサヘツ、角ゾ御返事ハアリケル、

ウキナガラ其松山ノ形見ニハ今夜ゾ藤ノ衣ヲゾキル」

とあり。參考本にいふ「按三本所載、出于今鏡、而此以元性爲一宮誤也、一宮重仁、法名空性、云々、作此歌者之性、亦崇德帝皇子也」とあり。

また保元物語卷三、新院御經沈附崩御事、京都本、杉原本に、西行が崇德天皇の御舊跡を尋ねてよめる歌とて（鎌倉本には前後なくてこの歌だけなし。）

みがゝれし玉のうてなを露ふかき野邊にうつして見るぞ悲しき。

を載せたり。これは玉葉集及び山家集によれば、近衛帝の陵に詣でゝよめるなり。また同二本に、

松山の浪に流れてこし舟のやがて空しくなりにけるかな。

を崇德帝の御靈の詠とし、西行夢ともなく、現ともなき御返事に、

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせん。

と申せりとす。これは盛衰記、故事談、山家集、いづれも二首ともに西行の詠とせ

り。二本が一を院の詠とせるは附會せるものならむ。

なほこの二本には「みがかれし」の詠の前に、「昔は十善萬乘の主云々」鎌倉本も漢文にて同文。の文あり。而してその以前にまた「昔は槐門宗廟の窓にして云々」こは盛衰記と殆ど同文なり。の文ありて、重複を感ず。こは元の文は決してかく重複せるものならざりしを盛衰記に眞似てかゝる文となれるにはあらざるか。

また保元物語卷二に白河殿攻落事に、爲朝の射たる矢が寶莊嚴院頬立に立つたることとあり。これはいづれの本にもかく見ゆるが、その次の新院左府御沒落の事に、京師本、杉原本、半井本には爲朝が射盡したる矢一つ殘れるを、末代までに名を殘さむとて、寶莊嚴院頬立に射立てゝ歸れりとあるが、これも重複にして、後にて附け加へたるものの如し。

また平治物語卷三に、四本に、新大納言阿波に流されて一首の歌を詠める、

　落ちたぎつ水の泡とは消えもせで、うきに堪へせぬ身こそつらけれ。」

とあり。こは、寶物集には、下の句「うきに消えせぬ身をいかにせん」とありて、敎長宰相東の方へ流されたる時の詠とす。寶物集も必ずしも信じかたけれど、また

これを正しとも定めがたし。

また平治物語巻三に、伏見源中納言師仲室の八島（下野）へ流さるゝ道にてよめる。

夢にだにかくて三河の八橋を渡るべしとは思はざりしを。

流布本岡崎本かくの如し、他の四本は即ち三河八橋へ流さるとして、この歌（少しくかはれり）をあぐ。千載集には「下野にまかりける時」とあり、公卿補任にもそのよし見えたれば、流布本の方を正しとす。

これらによりて見れば、異本は頗る牽強附會のこと多きが如し、牽強附會のこと多き故を以て流布本よりは新しとはいふべからざれども、その附會のある所及びその前後の關係をおしはかるに、異本の誤多き所を實際によつて正して、流布本が出來たりと見るよりも、流布本に書き加へ、附會の事をも添へて、異本が出來たるものと見るが適當なるが如し。

文章を見てもまた然るを知る。平治物語巻二、頼朝下着青墓事、流布本は極めて簡單なるに、他四本はあまりに微細にわたつて、室町時代の文なるが如く思はる。また平治物語常盤落の條の如きも、四本の文は極めて新しき書き様にして、

曾我物語などと前後すべきものなり。而してその中に「二人のおさあいおさあい幼には」の語あり。こは鎌倉時代の用語にあらずして、むしろ足利時代より鎌倉時代にかけての用語なり。また對句の用ひ樣も鎌倉時代の質樸なる風にあらずして、足利時代の新しき、しかも幼稚なる書き樣なり。また平治物語卷三「賴朝被生捕」事に、鬢切を平家に取り上ぐること、記載の順序、四本よりも流布本岡崎本の方よろしく、元の姿なるべしとおもはる。

されば余は諸本のうち、流布本を以て最も古きものと見て可ならむかと思ふものなり。

さらば保元、平治の二物語は歷史としては如何。その事實は他の東鑑、玉海などの實記と符合するもあり、相違するもあり。また他に所見なきもあり。所見なきものはそれはた事實か、否か。又戰亂當時にその大略の事實を記したるものありて、後に之を演義してこの戰記は成りたるか、はた今絕えたる多くの記錄などありて、それらを綜合して作りたるか、それらの消息は今詳にしがたし。

軍記物が史實として確實ならざることは、星野博士史學雜誌にてこれを論せ

り。また參考本を見ても知るべし。例へば爲朝の蔵の如きは保元物語中にてすでに揷着あり平治物語にては、唐僧來朝の事、紀伊二位の父祖のこと違へり。（參考本を見よ）さりながら、軍記物は單に空想を以て書かれたるものにはあらねど、元來歷史として書きたるにあらず、むしろ讀物として書けるものなれば、その史實に符合すると否とは、今我等が關する所にあらず。たゞ他の文學書と比較して見る時は多少の興味あるべきなり。

第一に注意すべきは古事談との關係なり。平治物語卷一に叡山物語の事あり。こは信西が叡山に行きて物語せることにして、信西の博學なることを示せり。こは古事談にも、沙石集にも見ゆ。沙石集は古事談の後のものなれば、古事談より取れるなるべし。而して平治物語もおそらく古事談に據れるものにあらざるか。次に、平治物語卷一信西子息被定遠流事に俊憲の文才の例として出せる詩、意義通せず。古事談に敦光の詩としてあげたるものより出でたるなるべし。次に、平治物語卷一、六波羅行幸事に内侍所のことを記して、「伏見源中納言師仲卿に申合て坊門局の寢處へぞ遷し奉りける」とある、卷二、官軍除目を行はるる

ことの條に「さる程に伏見源中納言師仲は………信頼卿内侍所を取つて東國へ下し進らせむとせられ候ひしを、女坊門局の寢所、姉小路東洞院に隱し置き進らせて候へば云々」とある、これらは古事談より出でたるものなるべし。(百練抄には、桂邊に一夜おきて清盛が六波羅の亭に移すとあり。)古事談は鎌倉時代の初期に出でたるものにして、保元、平治物語はそれよりも後のものなるべければ、古事談とこの二書との關係は深く論ぜずとも可ならむ。

愚管抄は慈鎭和尙の作なりとの說あり。これにも保元平治物語と同じ記事あり。愚管抄の書方は極めて素朴なるが、保元、平治物語にはこれを敷衍して書けるならむと思はるゝ所あり。保元物語卷一に、法皇熊野御參詣、並御託宣の事あり。この御託宣のこと諸實錄に見えずして、たゞ愚管抄にのみ見ゆ。平治物語卷一。信頼信西不快の事に、「延喜天曆の二朝にも耻ず、義懷惟成が三年にも超たり」の三年の詞一寸思ひつかざる語なり。これ愚管抄より得たるにや。平治物語卷二、六波羅合戰の事、清盛の黑裝束いさゝか愚管抄と違へど、似たるところあり。これも愚管抄より出でたるならずや。而して、愚管抄とこの二物語との前後は

定かならねど、なほ保元、平治物語が元に出でたるものとは思はれず。されどこれらは大なる問題とならず。注意すべきは平家物語及び源平盛衰記とこの二書との關係なり。

保元物語卷三に新院御遷幸並重仁親王の御事あり。また二三章を隔てゝ新院御經沈の事、附崩御の事あり。而して同じ新院の事實は盛衰記卷八に出づ。かく盛衰記に關係もなき讃岐院の事を出せるは如何。これは治承元年七月、讃岐院御追號ありて、崇德院と申し奉り、次いで八月宇治左府贈官のことありしかば、年代を追うて記述せる盛衰記はかゝる別途のことをも記せしなり。而してこの記事あるは平家物語にては長門本のみ。その他の本にては中宮御懷妊の事に、「神子明王の縛にかけて靈顯れたり。讃岐院御靈、惡左府御憶念、成親、西光が靈、鬼界島流人共の生靈なんどぞ申しける。是に依て靈共を宥らるべき由の御政有べしと神中、先讃岐院御謚號有て崇德天皇と號す。惡左府贈官贈位行はる。」とあり。これだけの方が似つかはしきやうながら、中宮御懷妊は治承二年なり。玉海を按ずるに時代は盛衰記の方合へり。思ふに平家物語は繁を厭ひて事實の

關係を都合よくせむとして、おのづから時代の顚倒を來せるなるべく、盛衰記の撰を古しとすべし。然るにこのこと保元物語には、崇德院の崩御を記し、さて後、「治承元年六月（七月を正しとす。）廿九日、追號有つて崇德院とぞ申しける。」この間崇德院の靈のことをかきて、誠に幾程なくて淸盛は物狂しく成給ふ。是讃岐院の御靈也とて、宥進らせん爲に昔御合戰有し大炊御門が末の御所の跡に社を造て、崇德院といはひ奉り、（百錬抄によるに遷宮は治承元年より後八年にして元暦元年なり。この事盛衰記には四十一卷に精しく出せり。）並左大臣贈官贈位行はる、（これは治承元年のことと前におなじ。）少納言經基勅使にて、彼御墓所に向て、太政大臣正一位の位記を讀懸けり。亡魂もさこそ嬉しと思し召けめと皆人申しあへり、」とあり。これも院の遷宮と左大臣贈位とを同時の事にしたるは、蓋し後に始末をつけんが爲に一所に集め、文勢によりて事實を忘れたるなり。これよりも盛衰記の記述の方初のものの樣なり。されどこれを以ては、必ずしも盛衰記を以前のものとのみも言ひがたからんが、更になほ理由あり。

保元物語卷三、新院御遷幸の條に、

讃岐につかせ給ひしかども國司未御所を造り出されざれば、當國の在廳散

位高遠といふものの造りたる一字の堂、松山といふ所にあるにぞ入れ進らせける。されば事にふれて都を戀しく思し召しければ、かくなん

濱千鳥跡は都へ通へども、身は松山に音をのみぞ鳴く。

その後御經沈の事の條に「此程は松山に御座ありけるが、國司既に直島といふ所に御所を造り出されければ其に遷らせおはします。云々」とあり。こゝに五部の大乘經をかき都へ入れられむ事を願はるゝ御文を添へて遣はさるゝ事あり。盛衰記は然らず。

去る保元元年當國に遷れおはしまして、初は直島に渡らせ給けるが、後には在廳の廳官、野大夫高遠が堂に入せ給けるを、鼓岡に御所立て居奉る云々」とありて、さてかの御手紙にそへて濱千鳥の歌あり。何故に所の順序が變りをるか知らざれども、盛衰記の如くありてこそ濱千鳥跡は都に通へども、の意義はあれ、保元物語の如くにては鳥跡の文字無意義に歸す。これ妄に文章を整へむとして、かゝる失態を生せなるべし。されはこの點に於ても保元、平治物語よりも盛衰記を古しとす。(京師本、杉原本、半井本、鎌倉本には源平盛衰記と

おなじく御文の後に濱千鳥の歌をつけたり。)

また盛衰記には

三年の間に五部大乘經をあそばし集めて、貝鐘の音もせぬ遠國に捨置進らせん事心うく、覺侍るに御經ばかり都近き八幡、鳥羽邊まで入進らせばやと云々。

とあり、保元物語には、

五部大乘經を三年が程に御自筆に遊ばして、貝鐘の音も聞えぬ所に置奉らんも不便也。八幡山か、高野山か、若御免あらば鳥羽の安樂壽院の御墓に置奉り度由云々

とあり。(半井本には「八幡の邊にても候へ、鳥羽かさなくば長谷の邊にても候へ、都の邊に送置候はゞやとて云々」とあり。)思ふに盛衰記は何となく都に近き處しかも、西國よりの入口をさして八幡、鳥羽といひしなるべく、これ最も率直なる書き方なり。然るに保元物語の作者はそれにては地名に意義なしとおもひしか、鳥羽を父帝の安樂壽院陵とし、別に高野を加へたるは、盛衰記に崩御の事

を記して、「御骨をば必ず高野へ送れとの御遺言ありけるとかや、」とあるを、これに移ししなるべし。而して保元物語に「然るに筆跡をだに都に置かざる程の儀に至つては力なし、」とあるは、高野を入れたるがために甚だ力弱くなりぬ。これ後につくろひし痕跡をあらはせるなり。よりてわれは盛衰記を先とす。

又平治物語卷三、賴朝被生捕附常盤落事に、常盤が小兒をつれて伏見あたりをさまよふ所に、

怪しげなる柴の戸にたゝずみしに、内より女立出て情有てぞ宿しける。世に立たぬ身の旅寢とて、浮節しげき竹の柱、あるかひもなき命持て、獨歎くぞ嘗の七ふと思ふ人はなし云々

とあり。而して盛衰記及び平家物語にも大原御幸の條に、寂光院の御住居のさまを記して、「世にたゝぬ身の習とて、うき節繁き竹柱、都の方の言傳は、間遠にかこふ竹垣や、云々」とあり。閑居のさまを寫してこそ竹柱、竹垣の意味もあれ、平治物語の「旅寢とて、うき節しげき竹の柱」にては全く前後に緣なく措辭唐突なり。またこは盛衰記の語をまるぬきにせる一證ならずや。諸本にはこの邊なけれ

ども、そのかはりに、

今若殿を前に立、乙若殿の手を引、牛若殿を懷に抱、二人のおさあひには物もはかせず、氷の上を徒跣にてぞ歩ませける。寒や、つめたや母御前とて、泣悲しめば云々

とあり。これらの口調は遙に下れる室町時代の文なるを信ず。されば保元、平治物語は、これらの一二の文より推すも、盛衰記の後なるべきをおもふ。況んや玆にいへる理由あるをや。

頭書保元物語凡例に、

新古事談には、大和の國多武峰の公喩僧正(一本には源喩とあり)保元、平治の二書を作り出で、因縁舞の名人烏丸久兒若節附したるを、大納言經實二條院に奏上したること見ゆ。平治の亂は二條帝の時に起りたるも、同書には二條帝崩御より三十餘年後の事をも記したれば、此說亦從ひ難し。

と見えたり。まことに然り。

保元、平治物語を讀んでおもふは、一、二篇その構造を同うせること、二、これが盛衰記、平家物語とかはれること、三、構造の同じき所は著者の想像を加へたる所多かるべきことこれなり。而してこの三者は相連關せるものなること勿論なり。

まづ盛衰記、太平記と比較せむ。(盛衰記、平家物語二書のうちにては、余は盛衰記の方元の姿に近きものと信ず。)この二者はもとより事實そのまゝの記事といふこと能はざるべしといへども、年代を追うて記し、さてその一事實の出づる毎に、これに關聯して樣々の事實を引き、極めて雜駁の感あり、保元、平治物語は前後關聯してこの二亂の外は何等の事件もなきが如く、短くして要を得たるが如し。これ記せる事實の大小繁簡にもよる事無論なるべしといへども、保元平治物語として、盛衰記の如く書かばまだ〳〵書かるべし。たとへば爲朝の九州にての事、義平が義賢を殺ししことなどいくらもあるべし。

まづ全體の構造を見るに、いづれも三卷、卷一は戰の起れる所以、卷二は合戰のさま、卷三はその結果を記すといふ仕組なるが、その原因を說くこと甚だ粗にして、何故にかゝる爭が起りしか十分飲込めざるうちに、早くも既に戰鬪ならむとするに及ぶ、故に卷一にてはその原因に併せて兩軍の勢揃へなどを主として說き、卷二には直に合戰に入れるが、それも一戰にして事すめば、また直に結果に入り、敗將の始末は却つて長々しく卷二より卷三にかけて、書き續けられたり。これ蓋し盛衰記との關係上、省略に從ひたるならむも、源平祖先の事など今少し精しく述ぶべきに、さもなかりしは怪むべし。思ふにこれ當時の日記などによりて作れるがためにして、深くその前後の事情を究めず、後の事は時代も近ければ、おのづから明なれど、以前の事は前に記したるものなければ、そのまゝにさし置きたるならむか。盛衰記卷二十二、入道申官符事の條に、

九月四日戌時に太政入道手輿に入り、新院の御所に參て申けるは、源爲義、義朝父子は法皇の御敵にて候ひしを、入道が謀にて彼等を始て數の伴類皆手を懸てさし候き。保元平治の日記と申物に見えて侍り。

とあれば、こは或は保元、平治物語のことにあらずやと疑はるれども、これは當時にかゝる日記ありしものなるべく、恐らく保元、平治物語のことにはあらざるべし。

保元、平治物語は敗者に頗る同情を寄せたり。これ弱を扶け強を挫くの精神に出でたりといふよりも、むしろ、源氏亡びたりといへども、その名殘をうけたる鎌倉時代に出でたるためなるべし。

この二物語は人物をも兩々相對せしめたり、即ち主人公となるべき勇者として保元物語には爲朝あり、これに對して平治物語には義平あり。而してこの二勇士の好敵手たる位置に立つもの、保元物語にては義朝あり、平治物語にては重盛あり。將軍としては保元物語に爲義あり、平治物語に義朝あり。また事を破る侫人としては、保元物語に惡左府頼長あり、これに對して平治物語に信頼あり。獨り人物のみならず、事件の構造もまた二書頗る相似たり。即ち保元物語には新院、爲朝の最後をくはしくし、平治物語には義朝、義平の最期をつまびらかにせり。また保元物語には爲義の子等の誅せらるゝを描き、平治物語には義朝

の子の沒落を述ぶ。かくの如く二者の人物及び事件の殆ど對照的なるに見るも、この二書の著者が同一人なることは殆ど疑ふべからざるに似たり。而して信西と光賴の如きは、事實は强ち對比すべからざれども、兩者のあまりによく對照せらるゝを見るに、著者の想像の加はりをるや明なり。

清盛はこの二書に、事實以上に臆病なる人として描き出されたり。これ當時平安朝の保守的傾向ある人々には好まれざる人物なるによるならむ。盛衰記も同情を寄することはなけれども、さすがに情に强き人物なることはほの見えたり。保元、平治物語には臆病にしてたゞ奸智にたけたる人物としてうつされたり。彼が叔父忠正を殺せるは、義朝をして其父を殺させむの謀に出でたりとせるが如き、俄に信ずべからず。兎に角著者が源氏の諸將に厚くして、彼に薄きあまりに偏頗にすぎたりされば、爲朝、義平等が奮戰の勇しき、いかにも負くまじく見ゆるに、最後の勝利が淸盛等に歸せるは何故なるか、これに就いては毫も說明する所なし。

文章に於ては、盛衰記は絢爛を求めむとして頗る繁冗、平家物語はこれより出

でて文やはらかに、趣味深く、保元平治物語は簡淨にして剛健なり保元平治物語は平家物語と共に軍記物語中の雄篇たるを失はず、繁簡の差こそあれ、文體に於ては盛衰記よりもむしろ太平記に近きが如し。

盛衰記が佛敎徒の手に成れりと見ゆるに反し、この二書は佛敎の感化乏し。而して儒敎の影響多きことは盛衰記の比にあらず。この點に於てもまた太平記に似たり。但太平記には禪の影響いたく見えたれど、これはさることなし。盛衰記等にも儒敎の經典の語を引くことなどはあれども、その影響を蒙れる點は少し。保元、平治物語には忠孝を論じ、家督相續のことをやかましく論せるが如き、儒敎の感化の淺からぬを證せるものなり。保元物語卷二、義朝、爲義を斬る論、卷三、儲嗣の論、平治物語卷一、君臣論、卷二に人情反覆を論せる條などを見るべし。これほどに儒敎の影響あらば、佛敎の影響もまた見ゆべきに、そのこれなきはおもふに儒家などの手に成れるものなるべし。

第十一章　源平盛衰記と平家物語(一)――二書の先後。

源平盛衰記と平家物語とは別書にあらず。詳略、差あり、體裁また異なりといへども、そのもとは一なるべし。今これを説くにあたりては、まづその本につきてきはめざるべからず。

盛衰記には異本なきが如しといへども、平家物語には甚だ多し、參考源平盛衰記にあぐるもの次の如し。

一、印本。――所謂一方(イチガタ)本。

二、一本。――不レ知レ所レ出、世之所レ祕、亦異本也。

三、伊藤本。――伊藤玄蕃所藏。

四、八坂本。――所謂城方(ジヤウガタ)本。

五、鎌倉本。――問注所上野介三善康豊所レ自書、

六、如本白本。——卷尾書曰、以₂如白所₁手書₁之本₁寫₁之。

七、佐野本。——佐野在綱所藏本。

八、南都本。——良峯宗淳於₂南都₁得₁之。二、三、四、五卷闕。

九、南都異本。——於₂南都₁得₁之。唯存₂第十卷一本₁。

十、東寺本。——東寺執行法印榮增所藏本。

十一、長門本。——長門赤間關阿彌陀寺所藏本。

更に赤堀氏はこれに次の四本を附加す。

十二、延慶本。——奥書に、于時延慶庚戌正月二十七日子刻於₂紀州那賀郡根來寺禪定院之住坊₁寫₁之畢、聊不₁可₁有₂外見₁而已、執筆榮嚴、享年三十一とあり。

十三、嵯峨本。——光悦本ともいふ。角倉素庵が藏せしものにして、光悦本を借りて、素庵がうつし版にせしものなり。

十四、眞片假名本。——萬治二年刊行。

十五、梵舜本。——天正中梵舜書寫。

なは明治四十一年三月の新小說に、那須家所藏平家物語目錄あるよし見えたり。

平家物語は普通十二卷、延慶本は六卷二十四冊、長門本は二十卷、盛衰記は四十八卷あり。目錄はあるもあり、なきもあり、またつけやうも同じからず。今一々これを比較するは興味ある事ながら、大約これを分てば、盛衰記最も詳しく、普通の平家物語(略本)最も粗なり。而して延慶本、長門本、南都本は頗る出入あれども、また一束と見るべきものにして、平家物語とはいへ甚だ盛衰記に近く、即ち詳略の度に於て二書の中間にあるものなり。參考本の凡例にも

盛衰記蓋平家物語前名也……今考諸本而質之諸實錄、則次敍本末詳而且確者盛衰記爲魁、拾遺索隱者長門本爲長、其他互有優劣、難爲伯仲。

といへり。

思ふに、盛衰記より延慶本、長門本が出來、それより普通本（延慶、長門、南都の三本以外の平家物語の諸本を指す以下同じ。）が出來たるか、或は普通本より延慶本、長門本が出來、それより盛衰記が出來たるか、或は延慶本、長門本より普通本と盛衰記とか出來たるかは研究に値

する問題なり、

今頃を展ひて之をたゞその兩極端の盛衰記と普通本とを比較するに、(一)盛衰記は編年體にして（延慶本、長門本また然り。）普通本は同じやうながら記事本末の所あり。例へば讃岐院院號の事などを見て知るべし。(二)盛衰記は事實の蒐集を主とし、普通本は文章の趣味を主とせり。

余を以て考ふるに、編年體より本末體は出づべし、即ち材料より消化したるものは出づべし、その反對はあり得べからず。平家物語が盛衰記を捃摭したる跡は歴々として見るべし。また文章にても盛衰記の文を練つて普通本の文は成るべく、その反對はあり得べくもあらず。

更にこれを事實によりて見るも同じ結論に達すべし。盛衰記卷十有王硫黃島に渡る事の條に、有王龜王等三人の名を出しゐるが、普通本には龜王等はなく、有王唯一人のみ。談話の簡明を欲すれば有王一人のみにて十分なり。これらより見るもはじめ三人なりしを一人に減ずる事はあるべし、はじめ一人とありしを三人と改むる事はあり得べくもあらず。（長門本、延慶本には二人とせり。）また盛衰記卷二十

六、清盛薨去の事をしるせる條に、ある女房の夢の中に地獄より鬼の迎へに來るを見たるよしを記せり。しかるに普通本には夢を見たる人を二位殿とせり。こは女房の夢とするよりも二位殿の夢とする方適切なり。されば盛衰記後ならば二位殿の夢とあるを女房の夢に改むることあるべからず。思ふに盛衰記には、當時の噂にある女房がかゝる夢を見たりと聞きて、これをそのまゝに記せしを、平家物語に二位殿と改めたるにあらざるか。（長門本及び延慶本は盛衰記に同じ。）又盛衰記卷二十四、南都合戰の條に「東大興福兩寺の佛閣諸堂諸院一宇も殘らず、瑜伽唯識兩部の法門、因明內明一卷も殘さず、三論華嚴の經釋大乘小乘の聖敎悉く燒にけり、」とありて、その先に東大、興福兩寺のことを述べたるに、普通本には、はじめに興福寺のことを述べ、次に東大寺のことを述べ、その末に「法相三論の法文聖敎總て一卷も殘らず、云々」とあり。この句はむしろ興福寺のことを述べたる末にあるべきなり。延慶本、長門本も普通本に似て、東大寺のことを述べたる條に「瑜伽唯識兩部を始として、法文聖敎一卷も不殘、云々」とあり。瑜伽唯識は法相に第一にたふとぶものにして、これも興福寺のことを述べたる末にあるべき

なり。盛衰記の方は、上に「東大、興福兩寺云々」とある故「三論華嚴云々」の華嚴は東大寺をうけしものならむ。普通本及び延慶本、長門本にては、盛衰記中の上の文より、華嚴を脱して、東大寺の條の後につけたれば、かゝる不都合を生じたるならむ。また盛衰記卷十一、靜憲入道と問答の事あるが、普通本は盛衰記に比して甚だ簡單にして、態々靜憲が西八條に行きての問答としては、あまりにあつけなし、こは盛衰記の如く委しく書きてはじめて領かるなり。（延慶本は盛衰記と同じく委し。）次に盛衰記卷十六の初に、帝位非人力事あるが、この條普通本は餘りに簡略にして意味不明なる所あり。また盛衰記卷三十二に、四宮御位事あるが、このこと平家物語には卷八、山門御幸の條に見えたり。その末に範光が、あまり優遇せられざりしかば、

一聲は思ひ出てなけ郭公、老蘇の森の夜半の昔を。

籠の内もなほうらやまし、山がらの身のほどかくす夕顏の宿。

といふ述懐の歌二首をよみて、正三位に叙せられたる由をしるせり。松本愛重氏は國文注釋全書の解題に、「籠の内も云々」の歌は寂蓮法師の歌にして、範光の

詠にあらず、かつ範光も實際は優遇せられ居たる故に、こは範光の死後にかけるものに相違なしといへり。しかるに盛衰記にはこれらの歌の事なければ平家物語のは攙入せるものならむ。

これらの一斑を以て見れば、余輩は盛衰記がもとなるべしと思ふ。蓋し普通本は語らむがために縮少して、事實を簡約にせむとて大體に關係なきことはつとめて略せり。その最も甚だしきは賴朝擧兵の始末少しもなきことなり。盛衰記にはこの事甚だ委しく、長門本及び延慶本にも見えたり。又佛敎の事も普通本は盛衰記に比して頗る簡略なり。盛衰記卷八、法皇三井灌頂事に、天狗の事を長々と記せり。延慶本また殆ど同じ。(延慶本にはなほその後に、道宣律師の事、四天王寺の事を委しく記せり、このことと盛衰記になし。普通本にもなし。但し、その次の廿糟太郎の法然上人に謁する事は盛衰記にのみあり。)而して普通本にはなし。蓋し盛衰記卷九に康賴の熊野詣の事あり。普通本には、俊寛が、康賴等と共に參詣せざりしは、單に不信心の故とせるに、盛衰記によれば、俊寛の意見にも一應の道理あり。而して禪宗の事をも記せざるが、普通本には見えず、但し延慶本には禪宗の事など故事まで引きて精しく記せり。概し

て盛衰記の方は同じ佛敎の事にても殊に精しく、また種々の宗派の事を書けるに普通本は簡單にして宗派にわたることなし。

上述の理由を以て、余は普通本と盛衰記との先後については、もはやこれ以上論議するの必要なしと信ず。されど普通本に對する論は必ずしも延慶本、長門本に對してあたらず。即ち殘れる問題は盛衰記と延慶本との先後なり。赤堀氏等は延慶本、長門本を先とし、盛衰記を後とするが如し。余も未だこれを決する能はず。されど余は盛衰記ももとのまゝのものにあらずして、後人の訂正を經たるものにあらざるかを疑ふ。されど延慶本、長門本もまた後人の改竄を經たるものにあらざるか、これもまた疑はしきなり。

唯一つ注意すべきは、盛衰記をはじめ、他の多くの平家物語は、大原御幸の始末、女院御往生を以て終れり。長門本また然り。ひとり嵯峨本と延慶本とは異なり。嵯峨本最後の卷の目次左の如し。

六代御前のこと。

大原御幸の事。

六代御前出家の事。
右大將上洛の事。
法しやう寺らせんの事。
文覺流罪の事。
六代御前誅せらるゝ事。
延慶本は甚だ煩瑣にして、建禮門院の事は卷六本末より所々に分載し、六代の事をも分載し、六の末建禮門院法性寺にて終り給ふ事の後も次の如し。
賴朝右大將に成給事（建久二年上洛右大將。）
薩摩平六家長被ㇾ誅事（同年六月大佛供養の時伺うて捕へらる。）
越中次郎兵衞盛次被ㇾ誅事（同八年頃捕へらる。）
上總惡七兵衞景淸干死事（東大寺供養の日、湯水を絕つて死す。）
伊賀太夫知忠被ㇾ誅事（建久七年。）
小松侍從忠房被ㇾ誅給事（年號不ㇾ見。）（盛衰記參照）
土佐守宗實死給事（小松殿の子。年號不ㇾ見。文治元年に殺さるゝ事東鑑に見ゆ。盛衰記參照。）

阿波守宗親發㆓道心㆒事（八島大臣の養子。年號不㆑見。）

肥後守貞能顯㆓觀世音利生㆒事（年號不㆑見。）

文覺被㆑流罪㆒事附文覺死去事、隱岐院事。（正治元年流罪。隱岐院とある事注意。）

六代御前被㆑誅給事。（正治元年誅。）

法皇崩御之事（建久三年。）

右大將賴朝果報目出度事。

これにて終れり。全體の意を考ふるに、諸行無常を以て始まり、六道物語を以て終れる事、佛教に造詣深き著者の微意なるが如く、延慶本の如きは如何にや思はる。但しこは試みに言ふのみ。

こゝに注意すべきは盛衰記の結末なり。盛衰記には卷四十六の終と卷四十七の初とに、平家の子孫を尋ねて殘害する事あれども、（文治の始頃なるべし。）その後は六代被㆑捕（東鑑によれば、文治元年十二月。）及び赦免（同上）の事卷四十七にありて、誅せらるゝ事もなし。四十八卷には建孔門院の事のみ。（文治二年とあり。）即ち貞應三年建禮門院の終れることもあり、篇中青侍の夢もあり。後鳥羽院と稱することもあれども、その原本は文治二

年頃に書きたるものにあらずや。而して延慶本は後にまた補ひたる所あるにあらずや。（普通本にも六代その他の人々の誅せらるゝ事見ゆ。）さらば殊更に頼朝が總追捕使になりたるに筆を止めたるか。然らばその由記すべきに、さる事なきもをかしからずや。

兎にかく余は盛衰記または延慶本の類を先として、普通本の後なる事は明なりと信ず。されど文學として價値如何といふ時は平家物語のまされる事勿論なり。試みに頼豪阿闍梨の條を對比せよ。何人も直ちにその優劣の著しきものあるを知らむ。

なほ諸本の事實の異同の一斑をいはむに、普通本卷一、鱸の事の條に、忠盛が歌を詠じたる事見ゆるが、こは盛衰記にも延慶本にもなし。（長門本には見ゆ。）獨りこの みにあらず、歌の事は普通本には思ひの外に精しく記せり。また維盛が源氏征伐のために東國に下るに、精しき道行の文あるに、盛衰記延慶本には見えず。盛衰記にはむしろ源氏の方面より寫せるが、普通本は主として平家の方面より寫せり。これ普通本が平家物語の題號ある所以なるか。頼朝擧兵の事が盛衰記

にありて、普通本になき事と併せ考ふべきなり、長門本には祇王祇女の事なし、また頼政が鵺を射ること長門本には大に異なり、また普通本には頼政の鵺退治せる事二度とせり。また長門本には康頼、俊寛等が流さるゝ時の事をしるせる條、その道行の文に、大隅、日向あたりの地理を精しく記せるが、こは他の本に見えず。三井寺燒失の條は、普通本は事實を顚倒せり。こは盛衰記、殊に長門本の方を正しとす。延慶本にこの事見えざるは物足らぬ心地す。

第十二章　源平盛衰記と平家物語(二)――著者と時代

平家物語著作の時代に就いては、その論赤堀氏（文學叢書本平家物語）關根氏（圖書刊行會翻刻長門本平家物語）松本氏（國文注釋全書第一卷）の説に略〻盡せり。今これに加ふること能はず。

今その時代を定むる根據となるべき事實を求むるに建禮門院崩御の事を記せるより見れば、建禮門院崩御の後に成れるものならざるべからず。但印本等

には建久二年、如白本には建久四年、長門本には貞應二年、盛衰記には貞應三年、女院小傳、歷代皇紀には建保元年とありて一致せず。かくの如く崩御の年すら、漠然たるを以て、これによりて著作の年代を定むること難し。さなくともこは卷末の方にあれば、追記たることもあり得べければ、これを以て證とはなし難し。次に文覺佐渡に流さるゝ處に後鳥羽院を詛ふことあり。これ即ち承久の亂の後の記事と見ゆ。されどこれも盛衰記になき文なり。又終の方に後鳥羽院の崩御を記して、「配流の後は隱岐院とぞ申ける。又は後鳥羽院とも名づけ奉る、」とあり。後鳥羽院は四條天皇の延應元年崩御あり、初は顯德院と申し、後嵯峨天皇の時に至りて後鳥羽院と改む。されば後嵯峨天皇の代以後の作と見ゆ、されどこれも圈點を施したる部分は追記し易き文なり、殊に終りの方なるをや。稍確なる證と見るべきは、嚴島造營のことをしるせる條(盛衰記卷十三、平家物語卷三)に清盛が節刀を大明神より授けらるゝ事を記し、更に、源中納言雅賴に仕へたる靑侍の夢に、春日明神、嚴島明神、八幡八菩薩など相會して、平家に授けられたる節刀を取りかへして源氏に與へられ、更に、末は藤原氏に授けらるべ

きをほのめかせり。(但しこの事保暦間記略、及び增鏡新島守の條にも見えたり。これらは平家物語よりとれるか。)そも〳〵藤原氏の將軍たるは承久二年より建長三年まで三十二年間なり、而して、宗尊親王將軍となりし後に成れる後ならば、上述の如くのみはいふまじければ、盛衰記平家物語の內、その最初のものは、前記の期間に成らざるべからず。而して後鳥羽院の論を記せることを思へば、後嵯峨天皇以後たり。されば結局後嵯峨天皇のはじめより後深草天皇の建長三年まで數年間の記事なるべけれど、夢の事もまた追記ならずとも斷じがたし。この記事すべての本にわたりてあれば原文なるべしとは思はるれども、さりとて未だ確言すべからず。また關根氏はこの著者の想像ならで、當時の傳說によるかともいへり。されど今の平家物語の出來あがりしは、承久以後といふことだけは明なり。

なほ他書と比較するも、時代明ならず。高倉天皇嚴島より還御の條(平家物語卷四は土御門通親の嚴島御幸記を取りたるなるべきが、この御幸記はその當時のものなるべければ、時代を知るの益なし。また平家物語卷六、慈心坊の條は、著

聞集卷二(釋敎)にあると同じく、しかも詳略の別はあれども、何れの平家物語、盛衰記にもあり。これはいづれが先かいまだ斷言することと能はず。
次に、著者として古來傳ふる所、數說あり。
一、信濃前司行長。　徒然草に、
後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の譽ありけるが、樂府の御論議の番にめされて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを心うき事にして、學問をすてて遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝あるものをば下部までもめしおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持したまひけり。この行長入道、平家物語を作りて生佛といひける盲目に敎へてかたらせけり。さて山門の事をことにゆゝしく書けり。九郎判官の事はくはしく知りて書きのせたり。蒲冠者の事はよく知らざりけるにや、多くの事どもをしるしもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のものにて武士にとひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學びたるなり。

とあり。これを後鳥羽院在位の時と見れば、承久以前となる。されど院政の時と見てもよしといへる關根氏の論然るべし。行長は藤原高藤の末にして、行隆の子、下野守にして、從五位下なり。赤堀氏は平家物語卷三に父の行隆のことを精しく書けるを以て、行長の作ならむといへり。

二、葉室時長。 大系圖に、時長正五位下、民部少輔、平家物語作者隨一也とあり。(なほ別に葉室家顯長子長方の三子に時長、從五位下東宮權大進とあり。)醍醐雜抄(群書類從雜部)にも平家物語作者事といふ一條あり。

或平家双紙奥書云、當時命世の盲法師了義坊(實名如一)之說云、平家物語中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆、其子民部權少輔時長作之、又將門保元平治以上四部同人作云々。此時長前作平家廿四卷之本、籠伊勢大神宮訖、是佐渡院之御時也。順德帝是也。後嵯峨院御在位之時吉大貳入道輔常作之。平家物語民部少輔時長書之。合戰之事依無才學源光行誂之。十二卷平家資經卿書之。又鵲談集第七云、一平家の物がたりは民部少輔時長かきたりけるを、合戰の事をばさいがくなしとて、源光行にあつらへたりけるとなむ。十二卷平

家と云物資經卿書」之、

とあり。盲法師の說とて信じ難し。群書一覽には葉室大納言とあるが、これらにいへる民部少輔は遙にいやしき官なり。(又長方の子に今一人同名の人あるが、これも從五位下なるに過ぎず。)而して、行長と時長とは從兄弟の間なるが如し。

爲房─┬─顯隆
　　　└─長隆───顯時─┬─行隆───行長（從五位下 下野守）
　　　　　　　　　　　└─盛隆───時長（正五位下 民部少輔）

三、吉田大貳資經。　醐醐雜抄にしるす所による。されど信じ難し。系圖によるに、後嵯峨院の寛元元年に六十二歲なり。

四、源光行。　おなじく醍醐雜抄にしるす所による。光行は承久の役に從ひ、金澤にて誅せられむとして、親行の請によりて許さる。盛衰記には光行が、福原の京の丈尺を定めしよししるせり。文筆に長じ、海道記の著あり。されどこの人

が平家物語の作者なりとの説は信ずるに足らず。

五、爲長。　臥雲日件錄（相國寺周鳳撰、文明五年寂文安五年七月十九日の條に、最一の話として昔爲長卿が平家物語十二卷を作りしを性佛が語りしなりといへり、爲長卿とは恐らく菅原爲長を指せるものならむ。爲長は高辻家の祖にて、寛元四年年八十九にて死せり、性佛が語れりといへるが、徒然草にいふと符合せり。性佛の後は次の如し。

性佛—如一
　├覺一
　│　├通一
　│　├靈一—最一（この人の話）
　│　├景一
　│　└清一
　└城一—城元（八坂本作者）—城意—城存。

また臥雲日件錄、文明二年正月四日の條に、董一の話として、惡七兵衛爲清が平家一代合戰の樣を記し、平大納言時忠が文官歌詠等の事を書き、其後長三

位なる者諸記を捨拾して之を集め、玄會法印剪裁して一書となし平家といへり。最初は性佛といふ者禁中にて語りしなりといへり。

五、願敎法師。　陰德太平記に瞽者勝一の語を擧げて、

行長の書を北國平家と稱す、また葉室時長の作りし書あり、今翫ぶ所は櫻町中納言(成範か)の子願敎法印の作りし所也、其他なほ六人ありと聞けり。後性佛檢校節博士をつけて如性城一に傳ふ。其弟子城賢恕一、其弟子明石覺一は太平記に所謂鵺を語りて高師直に聞かせたる無双の上手ゆゑ、禁中より賜はりし平家あり。今傳ふる所のもの即ち是也、

とあり。

六、憲耀法師。　天地根元歷代圖、順德天皇の下に、

少納言信西子息憲耀法師、保元以來源平兩家之合戰之有樣を書綴十二卷書籍、當帝此事を聞召し、是を召出し被成、天下の翫物云々、于今盲目爲作業、加聲之曲節謠之、名平家也、

とあり。

要するに足利時代の書にいふ所は信ずるに足らず。琵琶法師の家に傳ふゐ書などまして信ずべからず。徒然草の說も傳說とはいへど、時代の古きだけにな ほ信ずるに足る。爲長といふも、實は行長の行の字の草書を爲の字に讀み誤りたるものなりやもまた知るべからず。また性佛に語らせたるものなりとは、いづれの書にも見ゆる所なれば、これもまた稍信ずるに足らむか。兎に角、考證の材料乏しくして、その作者も時代も判然と論定するを得ず。

因にいふ、赤堀氏は、行長の異腹の兄弟に法蓮坊眞空といふ僧あり。法然上人の弟子なり、而して平家物語に淨土往生の事多きが、これ行長が書けりといふ一の證據ならむといへり。然れども余思ふに、行長の兄弟に淨土宗の僧あり、而して平家物語に淨土往生の事多ければとて、これが直に行長が平家物語の著者たる證とはならじ。淨土往生のことをいふは當時の一般の風にして、天台宗、眞言宗にてもやかましくいへるをや。

平家、盛衰記の二書は從來一部の歷史と見て、それにより史論を立てられしが、大日本史並に參考源平盛衰記等にて他の正史と事實の異なる所を指摘せら

れ、また明治時代になりて星野氏史學雜誌にて史料の方面より、正史にあらざることを遺憾なく論破せられたり。而してその正史と矛盾せるは、今の新聞紙の記事に事實の誤多きが如く、當時誤り傳へたる風說を事實と信じて記述せるもあるべし。されどまた傳說をそのまゝに集めたるのみにはあらずして、著者がほしいまゝに想像を加へたる假作の物語も少からず混入せるが如し。例へば袈裟御前の物語（多くの本になし盛衰記、長門本南都本などに見ゆ。）の如きは、今昔物語震旦の部に、長安の婦人が夫に代りて敵に殺さるゝ物語を、作者が作り改めたるものにあらざるか。次に小督の局の事は、白樂天の長恨歌を取れるものならむといふ說あり。盛衰記卷廿六入道非直人事の條に、祇園の女御の娠めるを忠盛に賜はり、やがて生れたるが清盛なるよしをしるし、さて熊野御參詣の折、忠盛零餘を折りて奉るとて、

　這ふ程にいもがぬか子もなりにけり、

と奏しけるに、白河院

　たゞもりとりてやしなひにせよ。

と仰せられしよししるせり。こは今物語に、

小大進と聞えし歌よみいと貧しくて大秦へ參り云々、程なく八幡の前當光清に相具して樂しく成りにけり。子などいで來て後、諸共に居たりける所、近き所に芋のつるのはひかゝりて、ぬかごなどのなりけるを見て、光清、

はふ程にいもがぬかごはなりにけり、

といひたりければ、程なく小大進

今はもりもやとるべかるらむ

とつけたりける。面白かりけり。

とあるを取れるならむ。また大原御幸の折の法皇の御製に、

池水に汀の櫻散りしきて、波の花こそさかりなりけれ。

とあるは、千載集によれば、「みこにおはしける時、鳥羽殿に渡らせ給へる比に、池上花といへる心をよませ給ひける、」とあり。これを應用したるなり。

要するに平家物語、盛衰記等は、單に傳説をそのまゝに書けるにあらずして、想像を加へて幾分か小説的にかけるものなり。故に事實と想像と錯誤混淆せり。

平家物語の巻一に淸盛その孫資盛の耻辱にあふを憤り、武士に命じて攝政基房を路に要し、前駈の髻を切る、重盛之を切諫するよししるせり。しかるに愚管抄、玉葉にしるす所によれば、こは淸盛にあらずして重盛の所爲なり、又富士川の役には實盛は維盛の陣中にあらず。その平氏に投ずるは役罷みて二月の後にあること吾妻鏡に明記する所なり。その外正史と齟齬する所多し、但し、星野氏が、正史になき故を以て直にこれを排するは取らず。さりながら、

蓋作者の意中まづ淸盛は殘暴、重盛は仁孝、源氏は勇健、平氏は懦弱と申す如く、夫々品評を定め、然る後に筆を下す故に、事實の意見にあふものは、力を極めてこれを敷衍し、意見にあはざるものはこれを删落し、或は反對の事實を揑造す。

といへるはあたれり。

第十三章　源平盛衰記と平家物語(三)――その評論

平家物語は文學が平民的になれるはじめのものと稱するを得べし。從來源氏物語などの讀者は主として貴族の間に限られたりしが、平家物語に至りて一變して、その讀者の範圍は大に擴張せらるるに至れり。されど未だ後世の平民文學の如く、社會一般に行はれたりとは言ふべからず。寧ろ主として武士上流もあはせての間に行はれきといふを適當とすべし、而して當時は平安朝の貴族衰微して、武士勢力を得たる時代なれば、その間に行はれたる平家物語もまた從うて最も勢力あり、且最も廣く讀まれしなるべし。太平記はもとより平家物語に倣へり、後の小說またいづれかこれに據らざるものある。馬琴の如き殊に然り。元祿の小說また然り。啻に文學のみならず、鎌倉以後の武士はすべて自己の標準をこれらの物語のうちに見出し、これを手本として行動せしなり。平家物語

は實にかくの如き勇壯なる記事を以て充されしなり。

平家物語は實に武家文學の始祖なり、勇武譚の嚆矢なり。こゝに社會に一革新あり、階級の勢力は全く顚倒せり。これに伴うて平家物語は出で、而してこの變革の際の亂を寫せるものなり。平安公卿は全く茲に勢力を失へり、この後はたゞ尸位素餐するのみ。平安物語もこの後うちつゞきて出でたり。然れどもこれもまた尸位素餐するのみ。武家は公卿に代りて立てり、而して軍記物語もまた平安物語に代りて立てり。されど習慣の力は拔くべからず、武勇譚に交ぶるに、平安物語の遺孽とも見るべき宮中の記事及び上﨟の戀愛物語相交はる。かくの如きは太平記には遙に減じたり。このことはなほ後に述ぶべし。

或はいふ平家物語は一篇の敍事詩なりと。これに比すべきものを海外の文學に求むればホーマーか或はむしろニーベルンゲンか。希臘、羅馬の文化は過ぎ去りて、別に新興粗野の國民の傳說を見る。これニーベルンゲンなり。わが國にても平安文化は既に去りて、武家時代の來れること恰も希臘、羅馬の文化の去りて中世となりしが如し。ニーベルンゲンの如きは全く上古の文學と異なる

粗野の文學なるに、平家物語は同じ京都を舞臺として文野を混淆せるものなり、古今を合一せるものなり。

元來叙事詩、抒情詩、戯曲など、西歐の類別法をさながらあてはめむとするより混雜を生ず。むつかしくいはずとも軍記は軍記にて可なり。しかれどもその比を求めば、なほ叙事詩に似たりとやいはまし。事件を客觀的に記載するを主として、しかも記するところ、勇氣哀別、死別等の單純なる性行感情を寫せるものなり。その著者の不明にして、屢、改竄を經たるが如きも、偶、叙事詩の面影を印す。

但し清盛若しくは平家の一族が社會的變革を代表して、改革の犧牲となるが如き、頗る戯曲的性質を帶ぶ。即ち清盛が單純なる個人にならずして、當時の新階級たる武家の代表者となりて、遂に斃るゝが如きは、むしろ小說よりも戯曲の性質ありといふべし。

但し、この書は、實際は如何にもあれ、當時の戰記にして、從うて事實に基いて人物夥しく著はる。かくの如きは一の創作と見る時は甚しき混亂なり、複雜なり。かつ類似したる事件の續出するを如何にしてか能く書き別けむ。かくして、そ

の描寫は平安朝小說の如く心理を寫さずして、たゞ事件の進行のみを寫す。後世小說の事件を寫すを主として、心理の描寫を省みざるに至りしは、その作者が平家物語を手本として、延いてその弊竇をも踏襲せるに因るならむ。

平家物語に描き出されたる戰爭は、事實よりも美化せられたるものゝ如し。その戰爭を見るに、今日より見れば、規模甚だ小さくして、しかも悠々閑々たるものなり。まづ氏文をよみ、しかる後敵を選んで派手なる戰をなす。その戰の派手なるさまは今日に殘れる甲冑を見ても知らる。然れども悠々と氏文を讀むが如きは果して源平時代の史上の事實なりや。勿論かゝる事實なきにはわらざらむも果して軍記物語に出でたるまゝのものか。思ふに記者の誇張も交りしを、後にはこれをさながら事實と信ずるに至りしならむ。よしやこれらは事實とすとも、著者は著しく戰爭を美化したり。ありのまゝに戰爭を寫さずしてこれを詩化したり。これ一は平安朝の事物になれたる眼を以て、當時の戰爭を見たる故なるべし。而して武士の一面はやさしく詩歌にも長ずるものとし、ひたぶるの關東武者よりもむしろ優美なる平家の公達に滿腔の同情を表したり。

頼政の「埋木の」、忠度の「行きくれて、」の歌ある、その他經正、重衡の如き優にやさしき武士のふるまひは後世武人が憧憬する所となれり、或はこれをも事實とせむ。然れども生田の箙の梅、八島の扇の的の如きは、戰爭中あまりに優長に過ぎたり。或は記者が揑造にあらずや。かくの如く當時の戰爭は優美なり、否平家物語の作者によりて優美化せられ。よつて以て後世に感化を與へたることは頗る大いなりき。

平家物語は事實を列記したるものにて、創意を以て趣向を立つるものにあらざれば、その著者の思想などについては論ずべきこと少きが如くなれども、なほ言ふべきことなきにならず。その事實の取捨措擁に於て明に編者の着想を見るべく、殊に盛衰記にてはなほ事實の列記に止まるやうのところを、平家物語にてはこれを前後し取捨したれば、その間に編者の意向を認むべく、その主觀的方面を伺ふべし。

第一にその記事は平家の榮枯を主とす。即ち平家は主にして源氏は客なり、亦堀氏が

詳なる所は源平の合戰にあり。されはこの物語の類に、源平盛衰記と名を命じたるものの方が、その稱或は適當なるべきか。

といへるは與すべからず。源平の合戰を委しく寫せども、そは平家が亡滅に近づくの道行のみ。主意はたゞ平家の榮枯にあるべく、盛衰記が石橋山の事など委しきを平家物語に略したるは、またその著者の本意を汲みて、この省略を施しものならむ。されば本文の異同はともあれ、名目もはじめは平安朝の物語類にならうて、平家物語とありしなるべく、それを赤堀氏の如き考の人ありて、源平盛衰記と題したる本も出來しなるべし。(太平記は或は盛衰記といふ名に則りしものにして、太平記の出來し頃は、或は盛衰記の名は既にありしものなるべきかと思はる。)

記事は治承元年成親等の事を擧げむとするに起りて、文治元年一族西海に亡び、翌十年頼朝將軍になるまで、約十年間の事最も精しく、その前後の事は事實の關係を明にせむとて記ししなり。即ち平家の漸々に起りし事は記さず、保元、平治の亂なきは既にその物語あるかためならずして、むしろ平家が榮華の絕

頂より筆を起せるものにして、その亡滅に筆を絶ちたるなり。賴朝の將軍になる事などは、むしろ事實の關係を示すがためにして、平家の嫡六代、國母建禮門院などの事に卷を閉づるが一篇の主意なりとす。

唯保元、平治を寫さずして、飛んで忠盛の事を寫せるは清盛の父の事を精しくせむが爲にあらずして、一時の成り上りなるを示し、忠盛はかくの如く朝廷にて殿上人などに卑められたるをいひ、これによつて清盛の榮華の度を著しく見せむが爲のみ。かくの如き榮花が一朝にしてはかなく凋み失せし夕電朝露の有樣を示すが全體の大主意なり。即ち「祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れるもの久しからず、唯春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ、」に始り、灌頂の卷に終る。而して盛衰記には卷十七に見えたる祇王祇女のことを、平家物語には、卷一「我が身の榮華の事」にならべて記せるも、亦篇者が心ありてのわざなるべし。

著者は平家滅亡の原因を説いては、また主として佛敎に關せりとなせるが如し。最初忠盛の興れる事を記して、得長壽院の建立をいひ、また清盛が大威德法

を行ひ、陀枳尼天法を行ひ、清水寺に千日詣をする事をいひ、殊に嚴島信仰の事を述べたり。また平家の沒落は淸盛の暴虐によるとし、法皇を法住寺殿に幽したるがその著しきものとしたるが、なほ力を込めて三井寺を燒き南都を攻め、大佛殿を燒きたる罪惡を責め、重衡が死罪にあへるはその應報なりと、事々しく記せり。されど重衡が關東下向に、特に法然坊を拈出して、いかなる極重惡人も懺悔の一念に罪障消滅すといへるは、注意すべきことなり。

されば平和にも戰爭にも神佛を賴む平安朝以來の習慣は、またこの物語にも隨所にあらはれたり。盛衰記卷十には中宮の御平產を祈る事あり、卷二十七には行家が大神宮に願書を上る事あり、また安祥寺實源が源氏調伏の法を行ふ事あり、卷二十九には義仲が平家調伏の願書を白山權現及び新八幡宮に上る事あり。卷三十には平家の一族が木曾調伏の願書を延曆寺に捧ぐる事見えたり（但しこれは佛への願のみにあらずして、一には衆徒をたのめるなり。）なほこの類の記事多かるべし。されどこれらは著者の意向といふよりも、むしろ時代の姿を直寫せるものと見るべきなり。

僧侶の記事頗る多きが中に、神佛に關するものはむしろ少くして、俗界にたづ

さはれる記事殊に多きは、一は後者の戰記として面白きがためなるべけれど、また當時の僧侶の腐敗に原因せずんばあらず。されば僧徒の事を多く寫すといふも、また時事に關係あるがためにして、一は止むを得ざればなり。たとへば額打論の如き、鵜川合戰、御輿振、座主流罪の如き、三井寺炎上の如き、奈良炎上、大佛勸進、大佛開眼の如き、何人が筆をとるとも省くを得ざらむ。

されど書かずともあるべき社寺の緣起などを甚だ精しくものせるは、なほ著者が宗敎に關係深き人ゆゑなるべし。即ち、南都燒失の條に南都諸寺の由來を記し、大佛造營勸進の條に春日明神の垂迹を記し、御輿振の條に山王垂迹の事を記し、當衆軍の條（これも私事かゝすものの事なり。）に、山門堂塔の事を記し、三井寺燒失の條に三井寺の由來を記し、維盛高野に至る條に高野山の事を記し、三箇馬場願書に白山權現の垂迹を記せり。なほ法皇の熊野那智參詣の記あり、維盛の熊野大峯參詣の記あり。その他、天王寺、住吉明神、石塔寺、粉川寺、長光寺の事などをしるし、有名なる佛寺（時に神社）の事は殆ど備はらざるなし。なほ僧侶の事は役行者の事あり、弘法大師の事あり、法然上人のことは殊に精し。

又當時の人が陰陽道を信仰し、迷信深く、地水火風の天變地異は悉く人事に關係あるものと思へる事は、またこの物語を通じても伺はる。

かくの如く、或は意識的に、或は無意識的に佛法の事を多く寫せば、男女の戀愛を寫す事も少からざれども、その終を全うせるを描けるは稀にして、畢竟哀別離苦に終るを主とす、淸盛息女の事、二代后の事、祇王、祇女、佛御前の事、成親の妻女の事、菖蒲前の事、(平家物語にはなし。)待宵侍從の事、袈裟御前の事、葵と宿彌との事、小督局の事、祇園女御の事、維盛妻女の事、巴御前の事、小宰相の局の事、中納言の局の事、千壽の前の事、(盛衰記には千壽、伊王の二人となす。)横笛の事、池田の宿の遊君の事、建禮門院の事など、無常に終る事多し。而して上流の婦人は二代后、小督の局の如く、運命の手に飜弄せられ歎き悲めるが多きに、中流以下の婦人は、祇王、祇女、横笛、千壽の如く、失意の際思ひ切りて剃髮せるが多し。これ上流の婦人が平安朝式の女性を代表せるに對して、所謂時代の婦人を代表せるものが。

またこは著者が意識的になしたる事にはあるまじけれど、この書は時代の革新、社會組織の變更をあらはせり。前は公家全盛の時代、後は武家の時代、この過

渡の時にあたりて、平家はその變革の犧牲に供せられたり。新人として舊人の感化をうけ、更に新武家のために滅されたり。而してこの階級の變化する所が戯曲的趣味ある所なり。

唯戰術、兵法については未だ著しき所なく、戰の巧拙などは餘りに知れず。この點は、太平記を讀む時といたくその感を異にす。すでに述べたる如く、その戰や著者の想像を以て面白く書きなしたる所多かるべしといへども又一面、その花やかなるは事實にてもありしなり。平安朝以來割據の風ありて、一將の下に統一せず、個人ありて軍隊なく、一騎打の高名流行せり。さればこそ義經と景時との間に逆櫓の論も起りたるなれ。

この物語は時代變更の境界に成れるが故に、時代の特色なる戰爭を主として記せるは勿論なれど、また平安朝の物語めきたる事を交へ、かれこれ相混せり。何ぞや。年中行事、これなり、詩歌管絃これなり。もとより朝廷の年中行事など一々委しくは記さざれども、またこれを忘れざることは明なり。

また著しきは故事を引くことなり。これは訓蒙の爲なりといふ說もあれど、時

代の自信なく、古代を憧憬し、故實を重んぜし影響ならずんばあらず。而してその引用し來る故事は、本朝の事もあれど、むしろ漢土の事を多しとす。

この物語は、既に述べたるが如く、記載の事實雜駁なるを免れざれども、なほ一貫せる著者の觀念の存するを見る。卽ち、屢〻いへが如く、平家の沒落はこの物語の大意にして、淸盛の惡業いまだ生前に報いずして、歿後その一門、及びその女の出なる天皇にまで因果の及べることをいへるなり。終の「女院御往生の事」の條にいはく、

抑〻壇の浦にて生捕にせられたりける廿餘人の人々、或は頭を刎ねて大路を渡され、或は妻子に別れて遠流せらる。池の大納言の外は一人も命を生けて都に置かず。四十餘人の女房達の御事は、何の沙汰にも及ばず。親類に從ひ、所緣につきてぞましく〳〵ける。忍ぶ思は盡せねども、さてこそ歎きながらも過されけれ。上は玉の簾垂の內までも風靜なる家もなく、下は賤が伏屋の內までも塵收まれる宿もなし。枕を並べて妹背も雲居のよそにぞなりはつる。養ひ立てし親子も知らず別れけり。入道相國上は一人をも恐れず、下は萬民を

もかへり見ず、死罪流刑闕官停任、思ふまゝに行はれしが、罪の致す所なり。されば父祖の善惡は必ず子孫に及ぶといふ事は疑なしとぞ見えける。

と。而して嫡々なれば維盛、六代に重きを置き、また建禮門院の事をも重く書きたること前に述べたるが如し。かくの如き觀念は太平記には存せず。その有無何れがよきかは別に論あらむも、余輩は平家の統一あるを思ふものなり。

最後に文章に就いて一言せしめよ。盛衰記の文は粉飾に過ぎ、對句などを多く臚列して、かの四六文を模倣して、多少の嫌味なきにあらざりしを、平家物語は訂正宜しきを得て、和漢混淆の文を大成し、流麗暢達頗る耳に快く、無比の名文なりといふを得べし。されどその失をいへば、寫實に遠ざかりて印象の不明瞭なることこれなり。これを源氏物語に比するに、かれは文章くだ〳〵しけれども、その筆寫實を離れず、故を以て事件の背景たる場面を明に思ひ浮ぶるを得れども、平家物語にありては、讀者は單にその流麗なる辭句に魅せられて、實際の印象を感受せず。小督横笛の事などに見えたる嵯峨野の條の如きその好適例なり。これ一は事實に故事を引けるが如く、文章にも古歌などを引き、和歌の

所謂本歌どりと伴ひ「小鹿鳴くこの山里と咏じけむ、」など、優雅、流麗をのみ求めて他を顧みざるが、累をなしたるものならむ。平家物語の文も、四六文の體を模したる所も尠からねど、なほいまだ東關紀行、海道記等の如く甚しからず。長く後世の模範たり。かの有名なる太平記の俊基卿東下りの條の如きは、平家物語の重衡海道下りの條を學びたるものなることは言ふまでもなし。謠曲の道行文また範をこれに取れり。元祿時代はすべて歷史習慣を打破して、新機運を鼓吹せるに拘らず、近松の淨瑠璃の如き、なほ道行の一段を存せざるを得ざりしなり。秋成、馬琴等の文がこの物語の影響を蒙れる事の多きはたいふにしも及ばず。

第十四章　鎌倉時代の小說(一)——總說

鎌倉時代は極めて想像力の缺乏せし時代なり、平家物語、保元物語、平治物語の如き、軍記にては面目を一新するもの出でたれども、こは事實に憑據するもの

なれば、純粹の小說と同一視すべくもあらず。その全く想像力によりて成れるものは極めて貧弱なりといふの外なし。當時の貴族は暇はあれども境遇に變化なく、從つてその手に成れる作品も平安朝の小說の模倣を事とするに過ぎず、故にこの時代の小說に見るに足るべきものなし。室町時代の小說もまた見るに足るべきものの少きはいふまでもなき事ながら、なほかれが如く單調ならず、拙けれども粗朴にして新しき趣味を含めり。且つ數に於てもその比にあらず。但し鎌倉時代とてもその數は必ずしも尠からざりしならむも、今に傳れるもの殆ど罕なり。蓋しその文學として價値に乏しかりしがために、その生命も短くおのづから絕滅するに至れるものなるべし。

抑、古き物語の名のみつたはりて實物の存せざるもの、または一部分のみ存せる作物を擧げたるものに黑川春村の古物語類字鈔あり。また和歌色葉集(建久元年十一月の奧書あり。顯昭の文などあり。)卷三物語名の條に古物語七八十の名をのせたり。これに載せたるは平安末期頃までの作ならむ。その外なほ物語の名のみをあげたるもの多けれども、その內容については毫も記する所なし。稍、その面影を伺ふに足る

は無名草紙（群書類従）なり。無名草紙の時代は詳ならず。その內容より察すれば鎌倉時代の初期のものの如く思はる。即ち定家の事を定家の少將と記し、（定家は建仁二年に中將となれり。）勅撰集をあげて新古今集に及ばざるを見れば、多分新古今集のなれる元久二年前なるべし。また建久七年の事見えをれば、建久七年より、建仁二年までの間になるものの如し。されどこの時代が確なりや否やは明言し難し。この書によりて、夜半の寢覺、昔のとりかへばや物語などの體裁を知るを得べし。

また物語中の歌を引きたるものには、拾遺百番歌會及び風葉集等あり。拾遺百番歌合は、左は源氏物語中の歌、右は夜半の寢覺以下十種の物語の歌を集め、百番として合せたるものにして、百番歌合（左源氏、右狹衣）に對してこの名あり。奥書には定家の自筆本を以てこれを書すとあり。明月記の貞永二年三月廿日の條に、物語の歌をえらめる事を記し、物語の名十種をあげたり。而してその十種の物語の名殆ど同じ。これによりて見れば、拾遺百番歌合は定家の撰か。風葉集（續々群書類従、丹鶴叢書。）は鎌倉時代に行はれたる物語の名を見るに最も便にして、流行の書の多かりしをも知るべし。この書序文より見るに、文永八年、當時の國母、後深草、

龜山兩帝の御母藤原姞子の旨を奉じ、物語の歌を集めたるものなり。すべて二十巻（丹鶴叢書の方は十八卷。）あり。鎌倉初期に出でし色葉集に出でずして、この風葉集に出でたる物語の多くは鎌倉期に成れるものと見ることを得べし。これに載れる物語の類は非常に多けれども、今日殘れるものは殆どなし。而して今殘れる物語中の歌と、この書に引ける歌とを比較する時は、現存の書が僞作なりや眞書なりや、はた原本のまゝのものなりや、幾分の改竄を經たるものなりやを知るの一助とするを得べし。

玆に注意すべきは、この時代の小說に短篇の極めて多かりしことなり。例へば鳴門中將物語、（こは事實談ならむといふ。風葉集には見えず。）繪師草紙（藤原信實の作。）等皆片々たる短篇なり。鳴門中將物語は著聞集の一節となり、繪卷物としてはなよ竹物語となれり。時秋物語も亦著聞集の一節となれり。志貴山緣起は宇治拾遺物語の一節なり。堤中納言物語も風葉集には、十種の異なる物語として列擧せり。故に風葉集中にある物語が、悉く狹衣、とりかへばやと同じ位の長篇と思ふはあやまりなり。その實短篇も極めて多かりしならむ。

今鎌倉時代の小說中特に注意すべきは何ぞといはゞ、石淸水物語、松浦宮物語、苔の衣位なるべし。この外風につれなき物語あれども、殘缺本なり、住吉物語は平安朝に同じ名の作ありしかど、それとは全く別物にして、落窪物語の模倣にすぎず。夜半の寢覺も或はこの時代に作りかへしものならむか。とりかへばや物語は、黑川春村は鎌倉時代のものならむといひしかど、余は平安末期の作ならむと信ず。

第十五章　鎌倉時代の小說(二)——石淸水物語

石淸水物語は寫本にて上下二卷あり、近頃續々群書類從歌文部に出でたり。この物語は從來正三位物語として傳へたるものなり。正三位物語として傳へたるものなり。正三位物語の名は源氏物語繪合の卷に、竹取物語、宇津保物語のことをいひ、次に伊勢物語に正三位をあはせて、その優劣を定めがたしと評せり。されど今日に傳はれるものはさまで古きものにあらず。卷を開けば、直ちに

鎌倉若宮のことなど出づ。これによりて察するに、開府以後のものなること勿論なり。篇中、

常陸守が子はをさなくして鹿島といひし、今はおとなびて伊豫守といふ。國々をめぐらして、さるべき兵の習として、三月づゝ京に上りて、大番といふことを勤ること、昔より今に絶えぬ習なりければ、云々、

とあり。大番は鎌倉幕府以前は三年を以て交替することとなりしに、頼朝改めて六個月となす。後後深草天皇の寶治元年更に三個月に減せり。然るを本書昔より今にといへるは疑ふべし。されば この書は寶治元年以後のものなることを知るべし。色葉集にはこの物語の名見えず。風葉集に石清水として五首の歌を載せたるもの、皆この物語に符合するを思へば、この物語が即ち石清水物語にして、また風葉集以前のものなることを思ふべし。されば この物語は、寶治元年より文永八年に至る凡そ二十五年の間に成れるものなること疑ふべからず。而して主人公ともいふべき伊豫守が、石清水八幡に詣でゝ夢想を得ることなどの見えたる、即ちこの題名の來れる所以ならむか。

因にいふ、この書巻上に「長月の半にも成ぬ。天龍寺に人多く參る比にて、云々」と活字本に見ゆ。天龍寺は暦應二年の建立にかゝるものなれば、南北朝以後の作ならむかと察せらる。されど佐々木氏所藏の寫本は天王寺とあり、思ふにこは轉寫の際、天王の王字の草體をまに誤り、更に天まうのうが脱落せるものと心得て天龍寺と誤るに至れるなるべく、かくの如きは時代を是非するに足らず。」

今その梗概を記せむか。關白と左大臣との兄弟あり、子女とりどりに立身出世す。左大臣には男女二人、女子一人あり。男子は本妻たる先代の女四宮の腹、女子は宰相君が腹なり。宰相の君は本妻の嫉妬を恐れて、姉なる常陸守の妻に具して常陸に下り、この姫君を生み、おのれは産後のなやみにて身まかりぬ。常陸守姫君を子とし養ひ、又妾に一男を生ましむ。鹿島の君といふ。常陸守歿して後、その妻姫を具して木幡に籠り、いかにもして父の左大臣にあはしめむとす。左大臣の乙子、即ち姫の叔兄秋の中將（關白の子と並んで春秋の稱を得たり）木幡に姫君をかいまみ、異母妹と知らず。これを慕ひていひより、まさに危からむとす。常陸守の妻供人に聞きてその素性を知り、喜んで、姫が中將の妹なることをあ

かす。中將嬉しけれどまた張合のなき心地す。かくて兄妹名のりあひ、やがてまた父子再會となる。伊豫守(鹿島君)は久しく國にありしが、この時上洛し、姫君を見て戀々の情禁せず、一度は覗ひよりてかき口説く。されど身分の高下あるを耻ぢて、みづから情を抑へてこれに迫るの意なし。その後東國に亂あり、伊豫守は討死の覺悟にて再び常陸に下りしが、武運めでたく大功をたてゝ凱旋す。一日石清水に籠れるに、はかなき事より身を苦しむべしとの夢想を得たり。時に姫は參内の用意にていそがはしかりしが、ある日常陸守の後室の許にて相會し、戀情とゞめがたく、遂にはかなき契を遂げぬ。然るに姫の不義の事、八幡の示現によりて父の知る所となり、參内せしむる事を思ひ止まり、老いたる中務宮の妻となす。かくて姫は心にそまぬ人に妻とし仕ふる事一兩年なりしが、宮は亡妻の怨靈に祟られて狂氣のやうになり、姫はかへりて里にある事多し。帝これを奪うて入内せしむ。程なく中務宮は薨じ、伊豫守は姫の立身を喜びて、おのれは出家し、善光寺にこもりてめでたく身ををはりきとなり。

この物語脚色に頗る無理なる所多し、八幡の御託宣と、天皇よりの御迎などは、

前後頗る矛盾せるが如し。

この物語の主眼とする所は伊豫守と姫君の遂げられざる戀にして、それに春秋の二中將をからませたるものなり。これを源氏物語の人物に思ひあはすれば、關白の三男春の中將と、左大臣の次子秋の中將とは、匂の宮と薫となり。而して秋の中將の妹の姫君は、類はかはれど浮舟にあたる。秋の中將の戀は實妹に對するにして、伊豫守のは義姉に對する戀なり。春の中將と秋の中將と對比せられたるは、はたらきある趣向とおぼえしに、春の中將は少しも活動せず、或ははじめの趣向のかはれるにあらずや。姫君が老いたる宮に嫁するは夜半の寢覺の趣向に似たり。

この物語にて男子にて最も活躍せるは、秋の中將と伊豫守となり。わけて伊豫守にこの物語の特色を見る。初のあたりは春秋二中將のいどみかはしたる誰は女御、誰は何など、乾燥なる平安朝式の事のみ多かりしが、伊豫守の現るゝに及んで、大に異色を生ず。即ち物語の主人公たる男が關東武士なる事は從來の物語にかつて見ざる所なり。たゞその武士が毫も武士らしく描き出されず、從

來の平安朝の物語にあらはれたる公達と同樣の優男となり了れるは、甚だ物足らぬ心地す。東國の戰爭の如きも大省筆を以てして、見るに足るものなし。思ふにこれ平安朝の物語の餘風を脫しかねたるものか。

次にこの物語に男色の事見えたるは、平安朝の物語とかはりて、室町時代の物語の價をなすものといふべし。卽ち秋の中將と伊豫守との中らひなり。されどなほ大に叙述に躑躅せし所あり。又、たゞ共に同じ女子を愛する同情より起りしにて、眞の男色といふもいかゞと思はれざるにもあらず。

次に感情の極めて純潔にして、また興奮的なること、また從來の物語に見ざる異色なりとす。源氏物語に描かれたる戀は、迂餘曲折、頗る理窟的にして熱情を缺けり。一方に思を運ぶと共に、また他方に愛情を注ぐことを不思議とせず。石清水物語またやゝこの點に似たる所なきにあらず。而して代りの美人を見て先の戀も忘れ、心も慰むといふが如きは、やゝ荒涼たる感なきにあらず。されど伊豫守の戀に至つては頗る情熱の高きを見る。且つ未來ある男子が出家遁世するも、また鎌倉時代の文學の特色なり。但し、その出家は潔く思ひ切りて世を

棄てたるにはあらずして、何時までも未練の心絶ちがたき風あるは、なほ平安朝の臭味を脱却せざるものといふべきなり。要するにこの物語は平安朝式と室町時代式との中間に彷徨するものなり。總じてこの時代の小說を見るに、時代を以ては中々に分ち難し。むしろ類を以て分つを可とす。而して石清水物語は類を以てしても、なほ鎌倉時代のものに入るべきか。

第十六章　鎌倉時代の小說(三)—苔の衣

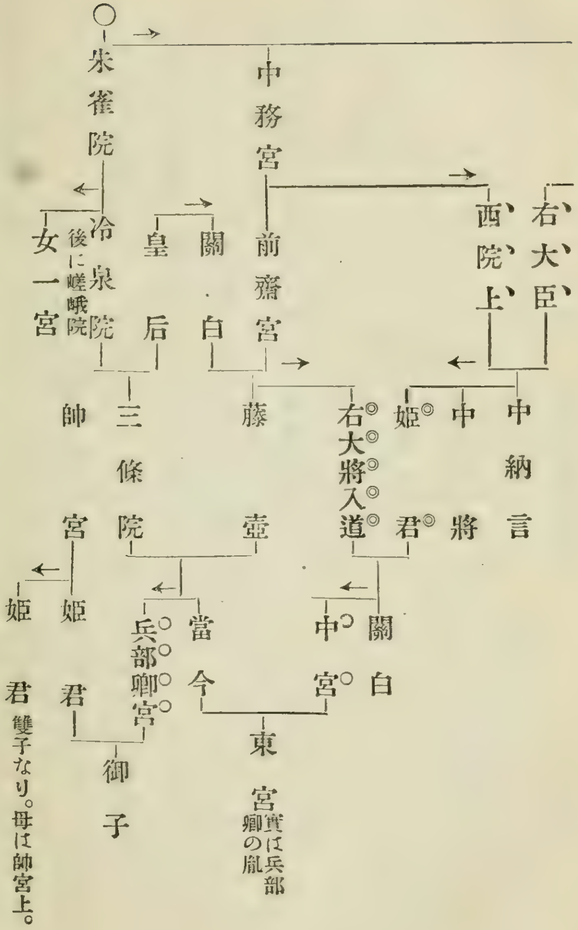
寫本にて五冊より成れり。未だ版行の書なし。言葉づかひなど極めて野卑にして、恐らく建長以前のものにあらざるべし。風葉集を見るに、この物語の歌戀の部に一首、雜の部に一首、あはせて二首を撰べり。戀の部にあるは卷二、雜の部にあるは卷三にあり。これを以て見るに、風葉集の撰ばれし頃には、この物語すでに世に行はれしものなるべし。されど、苔の衣中の歌すべて九十九首あるが中

に、僅にその二首を拔けるを見れば、この物語が當時にありてさまで珍重せられざりしを推するに足らむか。

この物語を苔の衣と名づけたるは、卷の一及び卷の三に主人公が出家して、いやしき其の衣をまとへりといへりといふ事散見するによる。こは親子三代にわたれる小說にして、稍、源氏物語に似たれども、源氏物語にては、桐壺の帝の事が第一卷にて終れるとは異にして、冗長散漫の作たるを免れず。今苔の衣中の人物の略系をつくれば左の如し。

○苔の衣略系。（矢は兄弟の年の順序を示す。）

- 一世源氏
  - 内大臣
    - 權大納言
    - 中納言
    - 弘徽殿
    - 式部卿宮上
      - 帥宮
      - 上（冷泉院女御、東院上に養はる）
      - 兵部卿宮上（對君に養はる）
    - 東院上
    - 式部卿宮上對君



苔の衣はこれを三段に分つを得べし。右大臣、西院上、東院上を第一代とし、右大將入道と姫君とを第二代とし中宮と兵部卿の宮と帥宮の上とを第三代とす。

而して作者が最も力をこめたるは第二代の右大將入道夫妻の上にあり。

右大臣に妻二人あり。一は東院上、一は西院上なり。東院上は愛せられず、西院上の父は宮にて、今は世になき人なり。されど美人なりければ、右大臣の寵を得たり。男兒二人(中納言、中將)あれど、女の子なきをうらみとし、觀音を信仰し、石山に祈りて遂に姫君を設けぬ。東院上も女の子をほしがりて、姉の式部卿宮上の女を養ひて子となす。右大臣の姫君は美人なりしかば、右大臣これを三條院に入内せしめむとす。東院上これをねたく思ひて、中納言にすゝめて姫君を奪ひ取りて妻とせしむ。しかるに中納言はあやまりて帥宮上を奪ひて妻とせり。さて右大臣は姫君を三條院に入内せしめむとしたるが、三條院には藤壺ありて、勢力あり。かゝる折右大將は姫君を見染めて命も危かりしかば、父の關白は子の愛にひかされて、右大臣を動かしたる結果、姫君の入内のこと思ひとゞまりて、右大將の妻となれり。その間は小說として經過頗る早し。姫君男女二人の子關白、中宮)をあぐ。中宮いまだ五六歲の時姫君は身まかりぬ。朱雀院は女一宮をたまはりてこれを慰めむとしたまふ。これ源氏物語の紫の上の條に似たり、妻の喪中に右大將の悲嘆哀痛は、作者が最も力をこめて描ける所にして、この條ま

た源氏物語幻の卷の筆法を模倣せるに似たり。苔の衣一篇の主眼はこの段なりとす。喪終るや、右大將は出家して横川の奥に入る。都にてはその行方を知れるものなし。

中宮と兵部卿宮とは、幼時より共に藤壺の膝下にありて育てられぬ。中宮は美人の譽あり、當今に入内す。兵部卿宮は妻の許に通ひ、そこに居る帥宮の姫君に通ず。この姫君兵部卿宮上にあはす顏なく、竊に住吉に遁る。兵部卿宮はかねて中宮と相慕へる中なれば、事のまぎれありて、二人の間に男宮を生めり。これ東宮なり。兵部卿宮はせめてもと思ひて愛したる帥宮の姫君は行方知れずなり、思ひ思はれし中宮ともまた會ひ難く、東宮は誠はおのれの子ながら、表面は兄たる當今の皇子なり。事毎に皆悲哀の種ならぬはなし。一方中宮はまた東宮が當今の子にあらざるを常に憂ひ、遂に病に染む。一夕僧來りて、その加持の力にて病癒えたり。その名を問へども答へず、たゞ一首の歌を殘して去る。これを見るに父の右大將入道なり。入道は横川にありて夢想を蒙り、娘を助けむとて來りしなり。

大體は源氏物語より出でたるものなる事明なり。右大將は光源氏、兵部卿宮は薫大將にあたる。また繼子を奪はしむる趣向など、落窪物語に似たり。而して、善人は幸をうけ、惡人は禍を受くといふ道德觀念はなし。因果の理法を說かず、善惡の標準を設けず、たゞ自然の世相をそのまゝに寫せるは、なほ平安朝文學の特色を帶びたり。さりながら、源氏物語は幻の卷に大に力を盡したりといへども、これが一篇の主眼にはあらず。然れどもこの苔の衣に至つては、右大將の悲哀に沈めるさまを描くに最も力を致して、全篇の眼目こゝにありといふも不可なし。これ鎌倉時代文學の特色の現れたるものといひつべし。また末段に右大將をあらはせるが如き、あまりに巧みすぎたる趣向にして、これも平安朝文學に見るを得ざる鎌倉時代以後の文學の特色なり。さりながらこの物語は石清水物語はどに出家解脫のことに重きをおかず。さればこの一篇の物語は、平安朝式の物語と、鎌倉時代式の小說との中間に位するものと見ば大過ならむか。

文章はさして巧みなりとはいひ難し、且、つとめて古語を用ひむとする所、稍厭

ふべきものあり。右大將入道が妻を失ひて悲む條は稍見るに足る。大體よりいへば決して傑作を以て許すべからねど、落寞たる鎌倉時代の小説界にありては、なほその白眉たらむか。

第十七章　鎌倉時代の小説(四)――松浦宮物語

松浦宮物語は上下二巻あり。續群書類從物語部に收む。この物語を研究したるもの、高田與淸が阿波侯のために作れる松浦宮物語考證あり。
今この物語を梗概を記さむに、昔、藤原宮の御世に橘冬明の一子辨君(風葉集に氏忠とあり、志かいふにや、この名本文には見あたらざるが如し。)幼より后腹の神南備の皇女を思ひ、互に眷戀の情ありしが、皇女入内と定まりて、いたく望を失ひ、時に遣唐使の事あり、辨君副使となりて出づ。その父母怨みにたへず、わけて母の飛鳥皇女は別ををしみ、松浦までその子に伴ひて下り、辨君のかへるまでは、そこに宮を作りて待たむといふ。
辨君長安に至りしに、唐の帝いたくこれを寵して、その國の臣下にましして召し

まつはしたまふ。八月十五夜とある山に登りて、仙人にあひて琴を學びしが、殘の手は帝の妹華陽公主に學べよとて別る。辨君公主を尋ねて琴を學び、馴るゝにつけて思慕の念切に、綿々の情を語る。もしみだり心地を起さば禍あらむとの仙人の敎も顧みる暇あらざりしなり。公主も心碎け、君に許さば妾は死すべし、さはれ一日の契に百年の命を縮め、百年の命にかへて永劫の契をなさむと約して、一つの水晶の玉を與へ、我を思はゞこれを携へ歸りて、初瀨の觀音に祈らば驗あるべしと約してやがて死す。

幾ばくもなく帝また崩じ、崩後亂直に起り、帝の弟燕王幼主を倒して、おのれ帝位に登らむとす。燕王の將宇文會萬夫不當の勇あり。皇軍敗衂、大后幼主をつれて未央宮を出で、蜀山にかゝる。辨の君またこれに從ふ。蜀山にして大后謀つて宇文會を迎へ擊たむとす。されど誰一人この任にあたらむといふものなし。大后切に辨君に依賴す。辨君何一つ武技をも心得ぬ身の、如何にすべきかを知らざれども、大后の請のもだし難さに、勇猛心をふり起し、五六十人の兵を率ゐ、險によりて多人數と見せて、敵軍を擊つ。敵軍おどろいて敗れ走り、辨君奮つて宇

公會を斬る。折節軍勢また來り加はり、一氣にして長安を復することを得たり。これひとへに辨君の功なれば、大后これに高位高官を與へむとすれども辭して受けず、故國に歸らむことを希ふ、大后せむ方なくしてこれを許し、出發の期遠からざらむとす。

更に辨君が、片山里の梅が香匂ふ家にて見そめたる女あり。それより夜な〳〵來るともなく來りて、相會ふ。辨君これがために心もそらに、風浪の荒きにことよせて、歸朝を特に延ばず。この女何者とも知らず。問へども答へず。たゞ、何となく大后に似たりと覺ゆる所あり。愈〻出發の期も定まれるに、大后はじめて因縁を辨君に告ぐ、宇文會は阿修羅の化身にしてこの國を奪はむとす。帝玄弉三藏を使としてこれを天帝に訴へ、天帝乃ち天衆を下してこれを援はしむ、卽ち我なり。されど女の身にては事成り難き故、更に天童を下してこれを助けしむ。されど唐に弓矢をわづくるものなき故、日本の住吉明神に託す。乃ち君なり。我と君とはかゝる因縁あれば、この間の如きことも夢の如くにして夢にあらず。されど君はなは別に蓬萊の仙宮の中に、世々に結べる契深く、この世の命もまた

久しとて、鏡を入れたる箱を與へ、我を戀しく思ふとき、これを開かば見ゆべしと告ぐ。
辨君日本に歸る。父母の喜び知るべし。後初瀨にまゐりて、水品の玉の功驗によりて公主に再會し、また鏡の箱を開いて大后を見る。かくてさま〴〵に思ひ亂るといひて、終りに、

この奥も本くちうせて、はなれおちにけりと本ニとありて著者は殊更に脫簡なる由を示せり。

さて、奥書に、

この物語高き代の事にて、歌も辭もさま異に古めかしう見えしを、蜀山の道のはとりより、今の世の人の作りかへたるとて、無下に見苦しき事ども見ゆめり。いづれかまことならむ。
もろしの人のうちぬるなかといひけむそらごとのなかのそらごとおかしう、

貞觀三年四月十八日

染殿の院のにしのたいにて書きおはりぬ。

とあり。されど最初の奥書は「貞觀云々」なるべく、またその後に、「この物語高き代云々」の奥書を附したるならむ。最初の奥書と後の奥書と前後せるはこの他にも例なきことにあらねばなり。

然れども「貞觀云々」といへるは信ずべからず、與清もいへらく、この物語中に、「かくれみののためしにやとまで云々」と、かくれみの物語を引用せるが、普通物語は竹取物語、うつぼ物語をはじめとして、藤原中世のものと思はるれば、かくれみの物語もまたその頃の作なるべく、これを引用せる松浦宮物語は更にその後ならざるべらずとへり。勿論の事なり。次に無名草子に

まつらの宮とかやこそひとへに萬葉の風情にて、うつぼなど見る心地しておろかなる心も及ばざるやうに侍るめれ。云々。

とあれど、無名草子の時代既に知るべからず、之を以て鎌倉時代の始とせば、松浦宮物語はその以前ともすべけれども、余は無名草子を鎌倉時代の末の作にあらずやと疑ふ。とにかくこれを以て松浦宮物語の年代を判定すべき證とは

なし難きに似たり。されば黒川春村は

按に此書巻末に貞觀三年云々など見えたるにつきて、やゝ古き世に出でけむなどと、いまだしききはは思ひもすめれど、文體詞づかひなどを考ふるに、鎌倉の初のほどなど作り出し物なるべし。風葉のうたはみな本書にあへど、色葉には名目見えねば、さのみ古からぬも事揭焉なるもの也

といへり。

然らば今一つの奥書を見よ。上は古くて、下だけが新しきならずやといへる、成程一見すれば、前半即ち蜀山より以前は後半とは違ひて、土佐日記、伊勢物語などを模して、古めかしく、文章簡潔素朴にして、和歌も古今集中の讀人不知の歌の調に似たるものあり。しかれどもこれ僞なり。しひてかく古めかしく作りなせるに過ぎず。「けいめいして」の音便「もたまへる」の約言など、果して貞觀以前のものなりや。「彼は年甫めて二十」とあるも、その頃の文とは思はれず。九月十三夜といふ事も、宇多帝嘗てこの月を賞したまひしに始る。しかるに、この物語に後の月の事あるを思へは、「貞觀云々」といへるは當らず。蓋し作者、古物語に擬して

作りたるが、中途より勞に堪へずして、今めかしくなり、その申譯に前におげたるが如き奥書を添へたるにあらずや。

概して文章極めて亂雜にして、漢文調の所あるかと思へば、長く柔なる古文體の所あり。（事實も太宰府と松浦とおなじ所にあるやうに思ひ、長安あたりの散步に、海岸のやうなる景を描き出せるもをかし。）而して結末はやゝ缺けたるやうに作りなしながら、大體に備はりたる、（松浦宮の名のそはざるが如きはいかゞながら、）而して、その歌はすべて風葉集にあへるを思へば、この物語も元來このまゝのものにて、時代は色葉集と風葉集との間ならむといへる春村の說をや肯ふべからむか。

辨君神南備の御子をおいて渡唐後また唐の后と契ることは、濱松中納言物語を學び、仙人に琴を習ふ件は宇津保物語俊蔭卷を學びたるもの、后が天上より下りしといふことと稍、竹取物語に似たり。而して公主を戀ひては神南備公女を忘れたるが如く、髣髴たる佳人を見ては公主を忘れたるが如く、感情一本筋にして甚だ單純に、平安朝の物語の如く委曲を盡さず、頗る描寫の拙にして、唯形

式を逐ひて觀察を疎にするを示す。宇文會が阿修羅の化身にして、辨君の本地は住吉明神なりといへるは、本地物の濫觴なりと古代小說史にいへるは、それ或は然らむ。また外國の軍を平げし戰爭の記事（一身十體に現じて宇文會を斬るなど）のかさ高なるが如き百合若などに似たる所ありて、後世の金平淨瑠璃などの濫觴をなし、頗る室町時代の風を帶びたり。かく一面は平安朝の小說を模倣し、一面はやがて荒唐無稽なる室町文學の魁をなしたる歷史的價値を見るのみ。絕體的價値に至りては論ずるに足らず。また奥書の僞作も、當時の自信なき作者の風をあらはして遺憾なしといふべし。

第十八章　鎌倉時代の小說（五）――住吉物語

この書慶長の活字本、寛永九年の版本あり、また寶曆九年梅村三郎兵衞板の本もあり。また群書類從の中にもあり。なほ春曙抄のしるす所によれば異本十卷ありといふ、普通は二册なり。この外寫本にて種々傳りをれり。これらを校合す

るは全く別本の如く、異同甚しといふ。されど大體の構造に於ては皆同じ。この物語は趣向に於ては、さながら落窪物語を模したるものなり。中納言の女三人あり。大君は前妻の女なり、繼女に虐待せられて住吉に逃れしが、右大臣の子の少將、(後に中將となり、遂に關白となる。)に見そめられて、めでたく榮え、繼母は零落して終りしといふ話なり。摸倣もかくばかり甚しきはなく、たゞ長さに於て落窪物語より短く、かつかれになき叙景の文多し。

もとの住吉物語は頗る古きものにして、枕草子、源氏物語、舊本今昔物語、八雲御抄、色葉集等にこれを引きたれど、いかなるものともおぼえず。たゞ源氏物語には「かぞへのかみ云々」といひて、源氏物語の筑紫のげん(監)をこれに比したる、やゝ似通ひたることとなるべし。花鳥余情にもかぞへのかみとあり、本書には主計助とあり、いかゞ。されどこれが今の住吉物語にあらざる證據は、その文を見るものの直に悟るべき所にて、深く論ずるまでもなきことなり。又風葉集の序に、「住吉のこれを入あひの連歌は、小一條院のおはむうたときこゆ、」とあり。これは住吉物語に姫君の許へ少將の訪ね來れることを叙して、

眞夜も半に過ぎて鐘の音きこえければ、侍從何心もなく物語の中に「曉の鐘の音こそ聞ゆなれ」といへば、「これを入あひと思はましかば」とうち詠めたまひけり。

とあるに出でたり。小一條院は三條院の御子にして、道長の晩年の頃の人なり。されば、この住吉物語は道長時代より早きものにあらず。さるを枕草子、源氏物語に引くべき理もなきかと思はる。

さらばこの住吉物語のなれる時代は如何、古物語類字抄には、「按に……落窪をまねびたらむこと決なし」といへるが、承久頃の作ならむといへること果して中れりや。

風葉集にはこの物語より引ける歌六首あり。その四首は符合すれども、二首は見あたらず。符合する四首より見ればこの書は風葉集以前なり。さらば何故他の二首はなきか。この二首のある所は本書缺けるかとおもへど、住吉物語は首尾全く整へるものなり。而してこの二首の挿入せらるべき箇所も略〻推定するを得べし。さらば内容は風葉集以前のものと同じかりしが、後に多少の修正を

施し、二首の歌を省けるものといふの外なし。現に異本甚だ多き由前にいへり。而して花鳥余情螢の卷に、住吉物語の大體の趣向をあげをれるが、その內容は今の住吉物語と同じきを知る。されどその形式(卽ち語句)のすべてまで同一なりしかは頗る疑はし。卽ち今の住吉物語(の形式)は或は花鳥余情以後のものなりやもまた知るべからず。たゞその內容に於ては略〻風葉集以前のものと同じき事明なり。たゞその內容は最古の住吉物語と同じきか、又今の物語の形式が何時のものなるか、これが疑問なり。

その故は今の住吉物語の詞に、

この姬君の御乳母子に侍從と聞ゆる侍りけり……

の如く、「侍り」を三人稱に用ひたる所あり。かゝる用法は徒然草あたりよりのことなり。「御ゆかしく」「御嬉しさよ」の如く、形容詞の上にまで御の字を附するが如き、「くるはかされ」「にげかへれね」などの語の如き、すべて南北朝時代以後の言葉遣ひなり。內容に於てもまた然り。篇中少將が女の樣子を探りたく思ひて、筑前といふ男をつかはす、筑前卽ち姬君に面會して、かへりて復命することあり。か

く下ざまの男に上流の女が面會することは、平安朝になきは勿論、平安朝の物語を摸したる他の小說にも見ざる所なり。また子の日の遊びをする條あり。少將はこの時三の君の婿君となりをれり。こは繼母、少將が大姫に心を通はせゐを憎みて、態と計りてかくしたるなり。然るに子の日の遊びすとて、大姫、二の君などと遊ぶ事あり。かゝる事は平安朝にはなき事なり。また落窪物語にては、男が後に繼母につらくあたり、報を見する所あれども、その報のすみし後には繼母も落窪の君と共に住む事となれり。しかるに、住吉物語にては、かく怨をかへす事なけれども、繼母は惡業の報をうけて零落する事となれり。かゝる勸善懲惡の思想は平安朝に見ざる所なり。これらはむしろ室町時代の臭味を帶びたるものなり。されば余はこれを鎌倉時代のものといふ事をも疑ふものなり。繼子いぢめの物語は室町時代になほ多し。さりながら住吉物語はそれらよりも先鞭をつけたるものならむ。

第十九章　鎌倉時代の小說(六)―風につれなき物語、山路の露。

鎌倉時代の小說中、前數章に洩れたるもの、風につれなき物語(殘闕本)一卷、源氏物語の續篇なる山路の露一卷あり。

風につれなき物語は古鈔本一册あり、丹鶴叢書及び續々群書類從歌文部に收めたり。卷中の歌すべて廿五首の中、風葉集に見えたるもの五首あり。なほ風葉集中この物語の歌とて拔けるもの上の五首の外に二十首ばかりあり。これによりて考ふれば、今殘れるはもと數卷ありしものの殘缺本なるを知る。黑川春村は全部十卷ばかりありしものが、第一卷のみ殘れるものならむといへり。

大臣の子太郎は關白左大臣、次郎は右大臣にて左大將を兼ね、女は太皇大后宮なり。左大臣はやはらかに大人しきさが、右大臣はおしたち角々しき所ある人なり。弟大臣には公達數々あれど、兄關白には女二人のみ。その母は妹娘を生み

て失せたり、弟大臣の女入內して藤壺の女御といふ、兄關白の姉娘またその叔母なる大后の勸めによりて入內し、弘徽殿女御といふ。幾くもなく中宮に立つ。中宮の妹最も美麗にして、この篇の主人公たり、右大臣の子三位中將これを慕へども、意の如くならず。わづかに零落せる一條宮などを訪ひて心を慰む。中君姉中宮の許に至り、はからずも物のまぎれに帝に見ゆる事あり、藤壺、中宮共に懷妊、藤壺は女子を生み、父母共に落膽一方ならず。中宮は男宮を生みたれども、產後のなやみにやがて空しくなり給へば、父關白の悲み極りなし。のち出家して宇治にこもる。藤壺中宮となる。中君は帝呼びたまへども從はず。三位中將にも從はず。かくて何の出來事もなくて卷一は終りぬ。

一篇あまりに無味乾燥、想像極めて貧弱、趣向極めて陳套、たゞ平安朝式の小說の跡を追へるに過ぎず。文章また平板にして冗長、何等清新の趣あるを見ず。その文學的價値は極めて乏しといはざるを得ず。

山路の露は續々群書類從歌文部に出でたり。こは源氏物語の續篇として、夢の浮橋の後をうけたるものなり。（但し源氏物語の後をうけたるもの、この他に雲がくれの卷あり、また遙に後世になりては、本居宣長手枕といふな

書きて、六條御息所と源氏との關係を記せり。

源氏物語の終は薫大將と匂兵部卿と手習君を爭ひたる結果、手習君の入水となり、尼君の救によりて小野にかくれをる所へ、薫大將の許より消息ある所にて絶えたり。山路の露はこの後をうけ、しかも事件はあまり進行せず、薫大將しば〳〵小君をつかはし驚かせども浮舟は應せず。返事さへ送らず。只おのれの母君へのみは時々消息をかよはせり。大將おもひに堪へかね小君をつれ、夜小野に至りて浮舟を音づれ、恨を述ぶれども、浮舟はすげなく袖を振ひてきかず。大將は強ひても迫り得ず、歸るとて、

思ひやれ、山路の露に袖朽ちて、またわけかへるあかつきの風。

また浮舟の母君は浮舟の消息を得て大に喜び、わが子の許にたづね行きて母子對面あり。薫大將もたづね來りて、母君と共に下山せむ事をすゝむれども浮舟は更に應せず。匂兵部卿宮も來り訪へども、また對面だにせずといふにて、この物語は終れり。

この物語の作者は尊世寺伊行（行成の後）なりと傳ふ。この人は近衛天皇の頃の人に

して、夜鶴庭訓抄といふ著あり、源氏物語奥入（源氏の註の最も古きもの。）もこの人の作にして定家が補筆せるものなりといふ。山路の露の著者をこの人なりといへるは、或は奥入の作者なるにより、かく傳へたるものにあらざるか。文章は頗る巧妙にして雲がくれの巻の比にあらず、思ふに平安朝の末より鎌倉時代にかけての間の作ならむ。

雲がくれといふは、恐らく德川時代の初期のものならむ。奥書には後冷泉天皇、後醍醐天皇の年號などあれども、これは僞なり。紫式部の作れるを、康平の頃石山の行譽上人見出したりなど記しあれども、勿論信ずべくもあらず。文章拙惡殆ど見るべき價値なし。

今鎌倉時代の小說を概觀するに、その描く所は依然平安朝時代の人物にして、この舞臺は宮庭及び貴族の家庭なり。而して冗長無味の筆を以て、平凡なる事實を叙述するのみ。一言以てこれを掩へば平安朝小說の活氣なき摸倣のみ。たゞ特色と見るべきは、石清水物語の主人公が武士なること、松浦宮物語の主人

公が外國にて戰爭することと等なり。されどこれとても軍記物に比すれば殆どいふに足らず。次に石淸水物語の主人公、苔の衣の主人公が遁世することも、また平安朝の物語に見ざる所にして、また當時の風潮を現はせり。今一つ、この時代の小說に注意すべきは、古物語の名をかりて古めかしく作れる假托の書極めて多き事なり。正三位物語、松浦宮物語、住吉物語等皆その例に洩れず。作者に自信なく、活氣なくして、藝術的良の麻痺せる事、この時代の如く甚だしきはあらず。

第四期　南北朝時代

第一章　文藝の稍〻活氣を帶びたる時代

新古今集を出しし後の鎌倉時代の文學は衰微を極め、たゞ平家物語、保元物語、平治物語等二三の見るべきものを有するのみ。その他には片々たる逸話を集めし十訓抄、古今著聞集等あり。されどこれ等は文學的價値極めて乏しきものにして、たゞこの時の風俗人情を知る材料として價値あるに過ぎず。蓋し當時の公卿は、政權にはなれて閑散の地にあれども、同時に活氣を失ひて、たゞ歌道の論爭と僞書の製作とを能事とするのみ、從つて見るべき作品も出でざりしなり。

然るに南北朝時代に入るや、政治上にも文學上にも著しく活氣を帶び來れり。こは何故ぞといふに、單に戰爭の影響のみとはいひ難し。南北朝の爭の起れるも、鎌倉時代に抑壓せられて沈滯せる活氣の迸れるなり。而してこの活氣は獨り

政治上のみならず、文藝の上にもおのづから現れ來れるなるべし。

南北朝時代の文學の特色は實世間に觸れたる事なり。これまでは、和歌の如き、人間の實生活とはなれて、たゞ月花を弄ぶに過ぎず、しかもその月花は、自然のまゝの月花に對する情にあらずして、習慣によりて作りあげられたる、全く自然を離れし月花に對する情のみ。さればひとり人生とはなれたるのみならず、自然とも沒交渉のものなりき。然るに南北朝時代に入りては然らず。作者には、僧侶に頓阿あり、兼好あり、公卿に二條良基あり、北畠親房あり、武家に今川了俊あり。注意すべき著述には、和歌に草庵集あり、新葉集あり、隨筆に徒然草あり、歴史に增鏡あり、神皇正統記あり、太平記あり。これらを見るも、當時の文學の實世間と交渉深きを知らむ。就中、北畠親房の神皇正統記の如きは、當時の政治問題と最も密接の關係を有す。この書は實に親房が實地の政治上の意見を吐露せるものなり。增鏡は大鏡の系統をうけ、また源氏物語の影響をも蒙り、正統記ほどに實世間に關係あるものにあらざれども、これはた當時の實狀に促されて出でたるものなり。正統記の論行はれず、失望的回顧の念のあらはれしものは

吉野拾遺なり。正統記の思想の和歌にあらはれしものは新葉集なり。これらは當時の英邁なる人々が兵馬倥偬の間に、實際の感情を詠み出せる慷慨の響にして、机上にて作れる作にあらず。新葉集が卓絶せる所以實にこゝにあり。これらは實に維新の際に於ける勤王思想にも關係少からざるものなり。

正統記が直接に政治問題と關係せしに反して、兼好法師の徒然草はうるさき世間を離れて、悠々と自然を樂める風あり。しかれどもこれを仔細に觀察すれば全く出世間的のものにあらず。その世を白眼に見るは、方丈記の著者とかはる所なけれども、西行の如く全く浮世と緣を絶てるにはあらず。徒然草一篇、實に著者が人世觀の告白なり。即ち無常のさとりを以て人生の一大事とする事、首尾を通じて一貫せり。かくの如く、廣き人生問題に觸れし著者が、たゞ一時的の政治問題、社會問題を捨てゝ顧みざりしは誠に止むを得ざりしなり。されば徒然草が當時の實際問題に觸れざりしとて、いまだこれを以て、南北朝時代の他の文學と全く傾向を異にして、實世間と關係なきものとはいふべからざるなり。

南北朝時代に至りて、文學が俄に活氣を帶び來り、かつ直接實世間と交渉あるに至りしことは前述の如し。但しこれは一時的の現象に過ぎずして、根本的のものにてはあらざりき。建武中興の事業が忽ちにして衰へたるが如く、文學の上にあらはれたる活氣も、恰も彗星の忽ち見えてまた忽ちに天半に消え去るが如くに失せゆきぬ。たゞ茲に注意すべきは從來文學が公卿の專有物たる觀ありしに、この時代より漸次中流以下に移り來りしことこれなり。太平記に公卿と武人との風俗の混じ來れることを記せる條あるが、この傾向は文藝の上にも現れ、武人、僧侶もまた文事にたづさはるに至りぬ。但し僧侶が文藝にたづさはるは必ずしもこゝに始れるにあらず、平安朝に於ても能因、良暹、喜撰、遍照、西行などありき。されど文學を以て職業とせる者はあらざりき。俊成の如きは文學の家に生れながら、入道して後撰集に關與する事を憚りて、喜撰法師の例を引いてみづから慰めをれる程なりき。しかるにこの頃に至りてこの傾向は漸く一變し、今まで文藝界に於てむしろ客位にありし僧侶は、公卿に代りて主人公の地位を占むるに至れり。見よ、頓阿のごとき、文藝を以て生涯の業となし、

集を撰む上に於てもみづからその僧侶なるを憚るが如きことは毫もあらざりき。當時和歌の四天王と稱せられしもの、悉く僧侶なりしを以ても、その傾向を知るに足らむ。獨り純文藝の方面のみならず、漢學の方面に於ても亦然り。即ち玄慧法師起りて我が國に於ける朱子學は興りしなり。次に武人は僧侶より稍〻後れて文壇に出づ。今川了俊は冷泉派の歌人にて、難太平記の著あり。これに後れて東常緣あり。古今傳授の祖といはる。されどこれらの人々の出でしは、既に室町時代に入りて後のことなり。(同じ時代にありて僧侶にて名あるものゝ正徹あり。この人に徹書記物語の著あり。)

頓阿は舊思想に沒頭せる保守的の歌人にして、新氣運を開ける人にあらず。然れども當時二條家和歌中興の祖と稱せられ、南北朝時代の第一の歌人と稱せらる。されば予輩はまづこの人より論ずべし。

第二章　頓阿と草庵集（一）――頓阿

近來風體抄にいはく、

その頃は頓、慶、兼三人いづれも〳〵上手といはれしなり。頓阿はかゝり幽玄に、姿なだらかに、ことぐ〳〵しくなくて、しかも歌每に一かどめづらしく、當座の感もありしにや。慶雲はたけを好みて、物さびて、ちと古體にかゝりて、姿心はたらきて、耳にたつやうに侍し也、爲定大納言はことの外に慶雲をはめられき。兼好はこの中にてちと劣りたるやうに人も存ぜしやらむ、されども人の口にある歌ども多く侍るなり。「都にかへれ、春のかりがね、」この歌は頓も慶もほめ申き。ちと俳諧の體をぞよみし、云云。

とあり。細川幽齋の詠歌大概抄にもまた、

凡歌の事、古今は和歌の頂上の集なり。三代集までは其面影殘れりといへども、次第に陵夷して、金葉、詞花にてはたと其風體損じけるを、西行がよみ直せ

る由、世稱レ之。然るに俊成卿千載集を撰ばれしより以後、金葉の風をかへて歌の道中興せり、云々。新古今には花の過ぎたりとて、新勅撰には實を本とせり。そののち爲家又勅をうけて續後撰をえらび、進せらる、此集正風體にして、花實相兼云々。此後和歌陵夷せるを後普光院攝政、頓阿と志を同して風體を申改られて再和歌の道起れり、これ頓阿が力也。

と見えたり。最後の條は愚問賢注の事を指せるなり。かくの如く頓阿に對して多大の賛辭を捧げてその及ばさらむ事を恐るゝが如きもの多き中に、これを非難せるものまたおのづから無きにあらず。今川了俊の落書露顯にいはく、

近代は歌の聖の如くに頓阿法師をば人々存て、草庵集とかいふ歌集をのみ、或はへつらひ、或はぬすみ詠むともがらも侍にや。さるはかの法師も只一節讀えたる姿のほかをば、つや／＼よみ侍らず云々。

と。またおなじく了俊の和歌所へ不審條々に、

頓阿が歌樣を見候へば、十首に七八首は古歌を多分は用よみて候間、加樣の輩はげにも新敷讀らん詞をば、たゞ言と可レ申やらむ、云々

といへり。

兎に角頓阿の草庵集は歌道の經書の如くに重んぜられ、一世を風靡せり。本居宣長が草庵集玉箒を作れるを見ても、その名高くして、廣く世に行はれしを知るに足らむ。されど、國學の勃興に伴ひてこの書漸く勢力を失ひて、遂に顧みる人なきに至れり。

頓阿は爲世の門人にして、五十歳まで爲世と爲兼との爭を見たり。二人の歿後、その子息に堪能の人なく、歌道萎微して振はざりしを、この人復興の任にあたれり。故に血統をおいて、單に和歌の傳統よりいはゞ、爲世の後をつげるは頓阿なり。そも〳〵二條家は代々大覺寺統の眷遇を辱うしたり。爲世の子贈從三位爲子は、尊良親王、宗良親王等の母（尊卑分脈には爲世の妹とす。）にして、爲冬は尊良親王に從ひて東征し、箱根竹ノ下にて戰死し、爲明は栲問せられたり。而して爲兼は後伏見、花園の乳父なりき。されば正平の始までは花園院御在世にして、風雅集をも撰び給ひ、なは爲兼の風をや執したまひけむ。しかるに、頓阿は世外の人、兩朝のいづれにも舊縁せず。即ち北朝に仕へし良基によりて、更に大覺寺と共に衰へし二條の

風を再興したり。

○二條家略系

定家—爲家—┬爲氏—爲世—┬爲通（早世）—爲定—爲遠—爲衡
　　　　　│　　　　　　├爲藤—爲明
　　　　　│　　　　　　├爲冬—爲重
　　　　　│　　　　　　└爲子—┬尊良親王
　　　　　│　　　　　　　　　└宗良親王
　　　　　└爲教—爲兼（京極家）

頓阿は頼通の子なる師實の裔なり。正應二年に生れ、文中元年八十四歳にして歿す。その傳は賢注六窓抄、草庵集蒙求諺解、先進繡像玉石雜誌、野史等に見えたり。諺解にいふ、

頓阿廿四歳にて叡山に登りて修學し、名を頓阿と改め、聖道門の修行の成就しがたき事をおもひ淨土門に入、阿彌陀の名號を常に唱へ、良惠上人に謁し、眞宗院にも詣でて西山光明寺（粟生）の法義をうけ、如法念佛をも行はれたり。了譽

上人上洛の時參會して、鎭西流義（智恩院派ないふ。）をも傳授せられたりとなん。和歌は二條大納言爲世卿の門弟として古今相傳の一流也云々

とあり。玉石雜誌によれば、高野山に登りて、爲世の住める小田原谷の花折院に入りて、薪水の給仕し、名を感空と改むといふ。（爲世の登山は、花折院に傳ふる所によれば、嘉曆四年（出家の年。）にして、頓阿四十一歲の時なりといふ。おなじく玉石雜誌による。）また同じ書に、京にては、四條道場（時宗）金蓮寺にも住めるよし見ゆ。なほ歌集によるに、その他双林寺（こゝに頓阿の墓あり。康賴入道及び西行法師の墓と相並べり。）靈山（時宗、國堯上人再興、國阿は文和四年頓阿六十七歲の時出家。）蔡花園（頓阿の子經賢の願文に、「抑蔡花園者平生棲息之閑地終身安心之幽莊也」とあり。曾孫堯孝の家集に「文安三年三月十三日蔡花園にまうでて、法事の後、三室木寺の神殿などの花をたゞ獨眺望して」とあり。されば家集に仁和寺の庵室とあるも同處か。）などに住みたるよし見ゆ。旅行には難波に行き、那智に詣でたり。また高野日記あり。これはさきにいへる爲世出家の折とは別ならむか。また貞治三年の國分寺十樂庵記あり、伊勢の國分寺にをれりと見ゆ。宇津の山越ゆることも見ゆれば、鎌倉にも至りしならむか。

頓阿は兼好、淨辨（青蓮院執當法印、爲世に學ぶ。）慶雲（淨辨法印の子、同じく法印。）と親しく、併せて當時和歌の四天王と稱せらる。四人の作にて人々に膾炙せる歌各〻一首あり。

月宿る澤田の面にふす鴫の氷より立つ明方の空　　頓阿

手枕の野邊の草葉の霜枯に身は習はしの風のさむけさ。　　兼好

湊江の氷にたてる芦の葉にゆふ霜さやぎ浦風ぞ吹く。　　淨辨

庵結ぶ山の裾野の夕雲雀揚るも落つる聲かとぞ聞く。　　慶雲

右の歌より、澤田の頓阿、手枕の兼好、芦の葉の兼好、裾野の慶雲の綽號ありき。慶雲と頓阿とは互に妙手を競ひたるが如し、私言に、慶雲と頓阿と新千載集に載れる歌の數の多少を爭ひし逸話あり。

頓阿三十七歳の時爲藤歿し、今はおのれの歌を見る人なしとて歌をすてむといひ、五十歳の時、爲世歿せる時も、また詠歌を思ひ絶たむとせしが、勅諚ありて思ひとゞまりぬ。その時良基の詠める歌、

勅なれば思ひなすてそ、敷島の道に物うきことはありとも。

頓阿の返歌、

雲井まで聞えけるかな、和歌の浦の芦邊の田鶴の音にも立てぬを。

頓阿は西行に私淑せるが如し。かつて庵の軒の藤の花を見て詠める歌に、

紫の雲をもやがて待ち見ばや、軒端の藤の花の盛に。

といふがあり。西行の「願はくは」の歌に似たらずや。但し詩才は雲泥の差あり。

頓阿の著書數種あり。新拾遺集は、貞治二年（承平十八年）二條爲明編纂の勅をうけ、同年爲明死し、頓阿更に勅をうけてその業をつぎ、戀の部と雜の部とを撰み、翌三年成る。その他、愚問賢註、草庵集、同續集、高野日記、十樂庵記、井蛙抄新續歌仙集等あり。愚問賢註は、二條良基が、歌を詠む心得につきて問へるに、答へたるものにして、貞治二年に成れり。この書二條家再興の基を開けり。されど極めて愚劣なるものにて、良基の問に對して毫も明瞭なる答をなしをらず草庵集はその家集なり。德川時代に至りし類題草庵集といふものも出でたり。また草庵集類題拾遺もあり。（高野日記、十樂庵記もこの中にあり。）井蛙抄は歌論なり。群書類從中にある水蛙眼目、井蛙抄卷六の雜談のみを拔きしものにて、これに序加はりをれり。井蛙抄と水蛙眼目とはいづれが先なるか、なほ攷ふべし。兎に角愚問賢註、草庵集、井蛙抄は頓阿の著作中主なるものにして、定家の三部書と對すべきものなり。草庵集は有名なるものだけに、注釋書多く出でたり。即ち梅月堂宣阿の蒙求諺解、これ

を難せし草庵集難注、及び本居宣長の玉帚これなり。

第三章　頓阿と草庵集（二）—草庵集評論

草庵集は二條家の正風といはれ、二條家にてはこれを寶物の如くに貴びたるものなり。德川時代に至りても、堂上家にてはこれを重んじたること尋常一樣にあらず。「群書一覽にいふ、

烏丸光雄卿の口授に云、一部とりきはめて見ならふべきものは草庵集、雪玉集（實隆）又柏玉集（後柏原天皇。）云々。又御門人某頓阿が草庵集の事いかにしても花やかに見えず。耳に面白からぬやに申上ければ、あれは玉と玉とのよりあひたるやうにうつしく、何とも見ることかたし。あれがよきと見ゆれば、歌の合點ゆきたるなりと仰せられしと云々。

職仁親王御敎訓に云、家集にては爲家卿、集尤優美也。近くは草庵集、此作者はふるくいひふれたることを、すこし引直しあたらしくよみたる也、かやうの

事をこそ一段とよきとはいはめ云云。」とあり。

頓阿は、すでに前章に述べたるが如く、二條家の歌風をついで、これを再興したる人なり。抑、二條家は、京極家が新古の言葉を擇ばず、つとめて自由なる思想を詠出せるに反し、俗語を嫌ひ、新奇なる思想を避け、極めて保守的なる歌風を墨守せり。卽ち定家等の新奇なる風をさけて、爲家以來の平凡にして無難なる歌風を貴べり。水蛙眼目にいはく、

故宗近爲世を指す。云、俊成は幽玄にて難及、定家は義理深くて難學、たゞ民部卿入道爲家体を可學の由深相存也云々。

又いふ、

民部卿入道被申けるは、亡父歌殊勝なれども、歌見しらざらん子孫みだりに撰入せばあしかるべき歌多し。わが歌はおろかなれども、たとひ歌知らざらむ子孫の撰出たりとも、さまでおしかるまじき言を詠置て侍るなりと云々。

かくの如きもの卽ち二條家の歌風にして、これを承けつぎたるは頓阿なり。頓阿は實に何人にても解し得べき歌を作らむとせり。否何人も解し得るのみ

ならず、また何人も作り得べき歌を作らむとせり、何人も解し得べき歌尙凡俗に陷るべし、何人も作り得べき歌凡俗に陷らざらむとするも得べけむや。頓阿の歌多くは平凡にあらずんば即ち卑俗、その淸新なるものと奇拔なるものとは影をだに求むべからず。さればこそ烏丸光雄卿に人の尋ねたる如き言も出でたるなれ。さるを後の人彼を買ひかぶりて、勿體をつけ、いくたび見ても飽かぬものと思ひしなり。頓阿すでに然り。その他の歌人、殆どいふに足るものなし。さはれ頓阿の歌の長所を求むれば、三代集の風調をならひて、平穩流暢なる點にあり。

霞たつ空にはそれと見えわかで、聲のみあがる夕雲雀かな。
ことわりと思ひながらも淋しきは、深山の庵の秋の夕暮。
いほりさす山田の引板(ひた)のうちはへて、明けぬ暮れぬと秋風の吹く。
いつはりを頼むだにこそはかなきに、契らぬ暮の何またるらむ。
今はたゞこぬをならひの夕とは、思ひすててもなほ待たれつゝ。
行末は知らぬ習といひしかど、かくやは人のたえんと思ひし。

松風の音をも知らずうきことの、聞えぬかたを尋ねけるかな。
尋ね來て憂きをのがるゝ木の本もすみかとすれば松風ぞ吹く。
老いぬれば何故落つる涙とも、我さへ知らでぬるゝ袖かな。
山かげの比良の湊に舟とめて、月まつ程に小夜更けにけり。
百舌のなく尾花が末の夕日影、のこるもさびし秋の山ざと。

稍思を凝せる如き歌には、

世の中をよしや歎かじ、分け行けば野にも山にも人はすみけり。

またなだらかにして、よくいひ得たりと思はるゝは、

いたづらに過ぐる月日のくやしさを、さらに驚く年の暮かな。

頓阿の歌は客觀的のもの甚だ少し而してその大部分を占むる主觀的の歌は、殆ど皆、理屈に流れ、平俗に陷り、所謂月並調のものならざるはなし、

咲きて散る花の日數の程なきに、訪ふべき方の多くもあるかな。
春毎にわけもつくさず咲く花の日數にあまるみよし野の奥。
いつよりも花をぞ見つるこの春は、月の頃しも咲くを待ち得て。

日にそへてしげる若葉にいとゞなほ散りぬと見ゆる山櫻かな。
殘るとも見えぬ青葉の梢より、今もたえ〴〵散るさくらかな。
時のまに咲けるとぞ見る朝ぼらけ、霞はれ行く山のさくらは。
以上はまだしもなり。次にあぐる歌を見よ、毫も感情の上の印象を歌はずして、小理屈をいへるに過ぎざるなり。
梅が香のさながら袖にとまるかな、嵐の末やにはほざるらむ。
白雲にまがふとならば山櫻、たえずたなびく色に咲かなむ。
風にだに誘はれやすく散る花のしたふになどかとまらざるらむ。
わきてなどつれなかるむ、いづる日のひかりに近き峯のしら雪。
かくの如くにして頓阿は月次調の代表者ともいふべし。その理屈に陷れるは殊に古今集の弊を極端に庶幾したる結果なるべし。その他萬事三代集を出でず。自然に對しては、全く傳習的の思想を繰りかへすのみ。同じ月花をよめるものも、西行のは、清新の氣溢るゝばかりなるを、頓阿のはひたすらに古歌にすがれるのみなれば、毫も感興をおぼえず。人生に對する述懷の歌も、無常迅速の世

を悲み、はかなき悟りを開けるのみ。而してその樂む所は和歌の道にありとなす。

いつまでと思はざりせば世の中の憂きになぐさむ方やなからむ。
うき身とは何嘆くらむ、數ならで、ふることこそやすきこの世なりけれ。
かくれがも今は尋ねじ、いづこにも老いて住むこそしづかなりけれ。
世の中のうきをならひと思ふより、なかなか山の奥は尋ねず。
和歌の浦に老いてかたぶく松が根の、うづもれぬ名をおもふはかなさ。
人ならばはかなくぞ見む、八十路まで、和歌の浦波たち交る身を。
誰かまた思ひも出でむ、おはれ知る友はさきだつ敷島の道。
うき身には思ひ出ぞなき、しきしまの道に忘れぬ昔ならでは。

頓阿の歌は題詠を主としたり。題詠は題にかなはせむがために技巧を加ふ、故に作爲の跡歴然として掩ふべからざるものあり。次の例に見よ。

とぶ鳥のつばさしをれてかへらずば、暮るゝも知らじ春雨の空。

闕花

逢坂の關の關守いとまわれや、人を留むる花にまかせて、

霧上月

夕霧を鳥羽田の面に吹きしきて、月はくもらぬ秋の山かせ。
いづれもみな、斧鑿の跡歴々として、感興の索然たるものあるを如何にせん。
露分くる小野の篠原、草葉にも袖にもあまる月のかげかな。
これらも一目の下に、その傳習的の思想を襲へるものにして、實景を歌へるものにあらざることを瞭然たり。
しからば修辭の方面に於ては如何。そも〳〵二條家にては、平穩を旨として、力めて難解の語句を避けむとすることは、爲家以來の風にして、二條家の正統をうけたる頓阿の歌また然らざるを得ず。渠が一意平易にして解し易き歌を作るに腐心せることはすでに述べたるが如し。
あまの住む磯山櫻散る花の、波かけ衣袖にはふらし。
かくの如き難解の作は、草庵集中にありてはむしろ異例なりとなす。さりながらこれを以て技巧の上の苦心なきものとはなすべからず。新奇の想を避け、平

穩の語を擇ぶが中にも、辭句の上に工夫を凝すことは二條家の特色なり「入日も薫る山櫻かな、」『鶯の聲より明くる山のかげかな、』『鳴く鶯の聲ぞ明け行く、」の類を見れば、その特色を知るべし。頓阿の歌また同じく語の上に工夫を凝せる跡著しきものあり

槇の戸をさゝでぬる夜の手枕に、梅が香ながら月ぞうつれる。

高圓の野路の篠原うちなびき、朝置くつゆに秋は來にけり。

吉野川岸の山吹かげ見えて、まだ暮れはてぬ水の春かな。

初瀨山尾の上の鐘のこゑのうちに梢の花の色ぞわけ行く。

かくの如くいひまはしに工夫を凝すことは、頓阿の大に苦心せる所なり。また句を短くして、『夜渡る月、』『夕居る雲、」『曉霜」などの句あり。

かく言葉の上に工夫を好むより、うるさきまで懸詞を多くつかへり。「ながめつゝ住むとも誰か白雲の、』『都に誰か白河の關、』『絶えぬるか、つらき心も白鳥の、』『今よりも木の芽春雨、』『くれなば宿をかりの鳴くらむ、』『人も小島の山吹の花、』『玉と宮城野の原、』『月や木の間を森の下草、』『世の中のうけくに秋の、』『君が代や猶長月の、」

「露を小倉の山のもみぢ葉」「いくたびか我のみ人にまくず原」「心をとめて三保の松原」「なはつれなくていきの松原」などの如し。

縁語を用ふることもまた甚だ多し。

月はなはすみこそまされ、里はあれて、淺茅が原の露のやどりに。

知られじな枕のちりをはらひても、心につもるうらみありとは。

山がつのおしふく軒のいづかづら、うらむる程のひまだにもなし。

川水のなさらぬ程に鈴鹿山、ふるともこえむ、五月雨の頃。

思へ、たゞつれなき風に誘はれし、なげきの下は言の葉もなし。

かゝりける契もつらし、藤の花、咲くと見しまに春ぞ暮れ行く。

かくの如く懸詞、縁語等の工夫に苦心するは二條家の風にして、その結果として物名、折句の類頗る巧妙となれり。

うしやうし、花匂ふ枝に風通ひ、散りき(ひちりき)て人のこととひはせず。

こは筌、笛、篳篥、琴、琵琶を讀み入れたり。

あさなぎにすゞきつりにやあはぢがたなみなきおきに船も出づらん。

こは草の名十を含めり。その他魚の名十、虫の名十等あり。折句にて有名なるは、兼好との贈答なり。頓阿の歌、

夜もすゞし、ねざめのかりほ、たまくらも、まそでもあきに、へだてなきかぜ。

こは「米たまへ、錢もほし」の折句なり。これ對する兼好のかへし。

よるもうし、ねたくわがせこ、はてはこず、なほざりにだに、しばしとひませ。

こは「米はなし、錢少し」の折句なり。

また本歌取りの歌頗る多し。

志賀の浦の氷のあとに立つ波もかすみてなほや遠ざかるらむ。

こは新古今集の「志賀の浦や遠ざかり行く波間より氷りて出づる有明の月」(家隆)を取れり。

氷より打出づる波は花と見て、谷の戸さゝずうぐひすの鳴く。

こは「谷風にとくる氷のひまごとに打ち出づる花や春の初花」(源當純)が本歌なり。

山高み天ぎる櫻咲きにけり、霞の上にふれる白雪。

こは、古今集の「梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば」より出でしこと言ふまでもなし。

　物思ひなしとはいはじ、花見ればいとどむかしの戀しさぞます。

こは古今集の「年ふれは齡は老いぬ、しかはあれど花をし見れは物思ひもなし」（藤原良房）より來れり。

　誘ひ行く風の宿りもよそならで、木の下にのみ散る櫻かな。

右は古今集の「花散らす風の宿りは誰か知る、我に敎へよ、行きてうらみむ」（素性法師）によれり。

　吉野川みなとや何處、山吹のかげこそ春のとまりけれ。

こは、新古今集の「暮れて行く春のみなとは知らねども、霞に落つる宇治の柴舟」（寂蓮法師）より來れり。

　あしびきの山時鳥山にても、猶うき時とねをやなくらむ。

こは古今集の「世をすてて山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらむ」（躬恒）によれり。

涙川袖朽つるまでしのび來て、かひなく洩れむ名こそ惜しけれ。

こは千載集に出でたる「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ、」周防内侍」による。而して最後にあげたる二つの例の如きは本歌取りといはむよりむしろ剽窃の境に入れるものなり。さて修辭上の工夫といはむよりは、むしろ、頓阿の癖とも見るべきは、言葉を重ぬることなり。

小泊瀨や雲も嵐もおしなべて、花の色香にうつる春かな。

天つ空嵐も雲もおしなべて、花のいろ香にうつるころかな。

いとゞまた雲も櫻も見えわかず、霞みて暮るゝ春の山ざと。

初五の句にて切るゝ歌また頗る多し。すでにあげたる例の中にて、「知られじな、」思へたゞ、』『うしやうし、』「夜も涼し、」の如き皆然り。用語にては「さらでだに、』『よしさらば、』『それならで、』『ならなくに、』『ならねど、」の如き語を好みて用ひたり。

漕ぎかへる棚なし小舟それならで同じ波間にかすむかりがね。

これを要するに頓阿の歌は、尙古の癖に囚はれ、古人の思想用語の範圍内にた

てこもりて、一歩もその外に出づる能はず。何等特色なき思想を、平凡の辭句もて、稍、巧にいひあらはせるに過ぎず。いはゞ二條家の墮落を代表せるものなり。かくの如く歌が德川時代の中頃まで勢力ありしはむしろ不思議なりといふべし。

第四章　新葉和歌集

八代集に定家の新勅撰集、爲家の續後撰集を加へて十代集と稱す。その後龜山天皇の時、後嵯峨院の勅をうけて、爲家等續古今集を撰び、次に後宇多天皇の時、龜山院の勅をうけて爲氏續拾遺集を撰び、次に後二條天皇の時、後宇多院の勅をうけて爲世新後撰集を撰べり。以上を十三代集といふ。その後、花園天皇の時伏見院の勅をうけて爲兼玉葉集を撰び、次に後醍醐天皇の時後宇多院の勅をうけて爲世續千載集を撰び、次に同じ朝に、爲藤後爲定續後拾遺集を撰び、次に光明天皇の朝花園院は風雅集を撰び給ふ。後十年、後光嚴天皇の延文元年爲定

新千載集を撰び、同四年奏覽す。後三年、後光嚴天皇の貞治元年爲明勅をうけて新拾遺集を撰び、同三年奏覽す。次に、後圓融天皇の永德元年、弘和元年勅をうけて、爲遠、爲重新後拾遺集を撰み、同三年奏覽す。次に、後花園天皇の朝飛鳥雅世勅をうけて新續古今集を撰めり。以上を二十一代集といふ。二十一代集の外に新葉集あり。新葉集は新拾遺集の後十數年、即ち後龜山院の弘和元年成り、准勅撰集と稱せらる。二十一代集中、風雅集は當時奇々怪々なりといはれたるものなれども、これも玉葉集の脈をうけたるものにして、實は出色のものにあらず。まして他の二條家の撰みし撰集は評するに足らず。獨りこの新葉集は、その文學的價値より見るも、歷史の材料としても甚だ貴きものなり。茲に他の勅撰集を措いて新葉集を論せむとするはこれがためなり。

新葉集には撰者宗良親王の序あり。元弘のはじめより弘和の今まで三代五十年の間の行宮に從ひて得たる歌を撰し、弘和元年十二月三日これを奏すといへり。後龜山天皇の之を勅撰に擬せらるべきの綸旨は後にあげたり。明魏（耕雲）この集の編纂を助けたることは、耕雲和歌口傳（群書類從にあり。）に見ゆ。耕雲は宗良親

王に親炙して歌を問ひ奉りし人なり。

歴代和歌勅撰考を見るに、この集編纂の主旨について二說あり。一、風雅集に南朝の人々の歌が撰に入らざりしを憤りて、この集を撰まれたりといふ說、二、風雅集のみならず、新千載集、新拾遺集にも自己の歌が載せられざりしを憤りてこの集を撰まれたりといふ說、これなり。思ふに風雅集は冷泉派の撰なれば、二條派に屬する宗良親王の歌の加へられざるは勿論なり。たゞその後に出でし新千載集、新拾遺集は二條家の撰なるに、これにさへ撰ばれざりしため、こゝに初めて不平を懷けるにあらずや。余は第二說を以て眞に近からむと信ずるものなり。

古來、風葉集、藤葉集、新葉集の三部を、南朝の三葉集といふ。されどこの說誤れり。風葉集は文永八年の進獻にして、南朝とは關係なし、藤葉集また果して南朝のものなりや疑はし。群書一覽にいふ、

或說に云、南朝の撰集と云々。しかれどもこの集(藤葉集をいふ)に見ゆる作者及年號等多く北朝によれり。按ずるに、後醍醐天皇吉野の行宮に於て御撰定

有けるか。又云、此集始終全篇を不ㇾ遂して止らるゝ事は亂世故か云々。

新葉集はもとさまで注意せられざりしが、これが大に尊ばるる至りしは、尊王説の起りし以來のことなり。即ち水戸の光圀卿は扶桑拾葉集を撰びて、新葉集を勅撰集の中に數へ、これを風雅集の次位におけり。こは大日本史に南朝を正統とせしと同じ筆法なり。（扶桑拾葉集また勅撰に准ぜられたり。）加賀の綱紀卿（松雲公）もまた勤王の志厚く、宗良親王の歌を好み、

思ひきや手もふれざりし梓弓、おきふし我身なれんものとは。

君がため世のため何かをしからむ、すてゝ甲斐ある命なりせば。

の二首を絶唱なりとたゝへたりといふ。歴代和歌勅撰考の著者もまた親王の歌及び集の序の氣概及び風格に於て勝れたることをたゝへをれり。

新葉集が歷史材料として貴重なるはいふ迄もなし。例へば南朝を三代とすべきか、四代とすべきかの問題に就いて、有力なる史料となれり。四代説は大日本史、編纂所などの主張する所にして、後村上天皇と後龜山天皇との間に長慶天皇を加へ、三代説は宮內省及び谷森美臣の嵯峨野の露などに主張する所にし

て、長慶天皇を省けり。これに就いて常に引かるゝは高野山への願文なり。この願文には太上天皇寛成(長慶天皇の御諱)とあり。故に長慶天皇即位し給ひしなりといふ。これに對して三代說のいふ所は、昔も即位せざりし方に尊號を奉れるは、小一條院の例ありとてこれを否定す。新葉集を見るに長慶天皇の歌なし。こは長慶天皇は後龜山天皇の弟なる故、弟を太上天皇として集に載することを憚りて省きしならむといふ。また後龜山天皇は長慶天皇と御中あしく、弟がさきに即位したまひし故、後龜山天皇の時に撰はれたりし新葉集には省かれたりともいへり。またこの集の序には「吳竹のその人數につらなりても三代の御門につかへ云々」とあり、また「元弘の始めよりしも弘和の今にいたるまで世は三つぎ、年は五十とせり間云々」とありて、三代說の有力なる證據となれり。史料としてまたこの集の貴きこと概ねかくの如し。

○後醍醐─┬後村上─┬後龜山
　　　　　│　　　　└長慶
　　　　　└宗良

この集すべて二十卷、千四百餘首あるが中に、作者はすべて南北朝分立五十年

の間の人のみを網羅し、たえて古人の作を交へず。今二十首以上の作者を數ふれば、後村上天皇百首、撰者宗良親王九十九首、御製五十三首、妙光寺内大臣五十二首、文貞公四十九首、後醍醐天皇四十六首、冷泉入道前右大臣洞院公泰四十五首、尊良親王四十四首、前中納言爲忠四十二首、關白左大臣冬實二十八首、中院入道親房二十七首、長親母二十六首、長親二十六首、春宮太夫師兼二十四首、前大納言光任二十一首、前内大臣（隆俊か。）新待賢門院、（後村上の御母。）新宣陽門院各二十首等なり。即ち概するに、皇室及び文貞公の一家（父祖三代長親母。）最も多し、而して文學上特に注意すべきは宗良親王と長親との二人なり。

宗良親王は尊良親王と同母兄弟にして、御母は爲世の娘爲子なり。されば二條家とは極めて縁深し。（親王の傳は大日本史の外に、先進繡像玉石雜誌に見えたり。）かつて天台座主となり、尊澄法親王といふ。尊氏の亂後遠江の國井伊の城に居り、宗良親王とのたまひ、時々吉野へも參候し給へり。城陷りて後は、信濃、越後、駿河、甲斐その他の諸國をめぐりたまへり「思ひきや」の歌は征東大將軍となりたまへる時の作なり。後河内の國山田にかくれ、兵事をすてたまへり。御年七十の時新葉集を撰まれたり。薨去の

ことは漠然として明ならず。李花集はその家集なり。この歌集は題詠なるもの極めて少く、折に觸れ、時に隨ひて感興を詠まれしものなれば、歴史上の資料としても貴重なるものなり。外に信田の森千首（群書類従に出づ。天授二年夏の末の作なり。終に「かきおくもあたなる千枝のことのはよ、何と信田の森の下風」とあり。）あり。

長親（明魏）は師賢（文貞公）の孫、家賢の子なり。父子三代相ついで歌人たり。師賢は後醍醐天皇が高時を滅さむとしたまへる謀に參與し、帝に代りて叡山に登る。のち遁れて笠置に赴く道にて詠める歌（増鏡による。但し新葉集には、叡山に登る時の作なりとなす。いづれが眞なるかを知らず。）

思ふことなくてぞ見ましほのぼのと有明の月の志賀の浦波。

笠置陷りて囚へられ、千葉貞胤の家にありて薨ず。年三十二。太政大臣を贈り、文貞公といふ。「思ふこと」と同じ頃の作と思はるゝ歌に、

古は露わけわびし虫の音を、たづねぬ草のまくらにぞ聞く。

元弘元年北長尾の山居にありしが、亂によりてそこをも出で、

いは結ぶ山の下柴をりをりのあらましに似ぬ身のゆくへかな。

思ひかねいりにし山をたち出でゝ、迷ふ浮世もたゞ君のため。

宗賢については、さして言ふべきこともなし。長親は權大納言、文章博士、右大將に歷任し、後右大臣從一位にまですゝめり。明魏とも耕雲ともいへり。後村上、後龜山天皇頃の人なり。後村上天皇崩御の時、恰も父の喪にありしかば、

三とせまではさぬ涙の藤ごろも、こはまたいかに染むる涙ぞ。

とうたへり。南北統一後は致仕して、白河南禪寺の邊にすみ、應永十五年耕雲口傳を著す。その中に、

此十とせあまり白川の東花頂山の奧に幻質をかくし、鹿豕に友を結び、泉石に心をすましてあかしくらす程に、應永十あまり五の年やよひの末つ方雨ふりつゞきて云々

と見えたり。晚年には、遠江國榛谷の耕雲寺に籠りて程なく薨せり。著書には、耕雲口傳の外に倭片假名反切義解（群書類從に收む。）あり。源氏物語にも耕雲本といふあり。自ら注をつくり、一卷每に史記の索隱の贊に擬して、歌一首づゝをつけたりといふ。仙源抄は耕雲の作なりと傳ふれども、實は長慶天皇の著なり。外に家集

及び千首歌等あり。歌はさして巧なりといひがたし。

○師實（京極攝政）——家忠（花山院）……師繼（花山院内大臣）——師信（後花山院内大臣）——師賢（權大納言）┬信賢（左中將）
└家賢（權中納言）——長親（右大將兼權大納言）

新葉集の作者中、宗良親王、長親二人の外は特に傳すべき人なきが如し。たゞ嘉喜門院は注意すべき女詩人にして、その歌宗良親王の作と同じく、實際の境遇を歌へるもの多し。新葉集中載する所のこの人の歌十七首あり。

新葉集の歌は前にも一言せるが如く、實際の境遇を歌へる所に興味あり。その歷史的材料を供するの如何は吾人の問ふところにあらず、そも〳〵從來の和歌は唯題によりて句を錬り、巧を凝すのみにして、何等眞實の感を與へざるを習とせるに、新葉集の歌人はいづれも辛酸の運命にあひ、痛歎の聲の洩れておのづから和歌をなせるによりて、極めて見るべきもの多きなり。その西行の和歌に比すべき所あるは前に述べたるが如し。

然れどもこゝに注意すべきは、作者の經歷の面白きにひかれ、おのが想像より

迎合して、その和歌をもおもしろしと見ることとなり。小說の如きは實際の經歷を寫せりとも、巧は巧、拙は拙と、一見明瞭なれども、和歌はその形式の甚だ簡なるが故に、讀者の想像を以て迎へ見る場合多く、從うてさしたることもなき歌に、境遇より推して深き意味を附加すること多し、而してその依つて來る所を見れば、二つの方面よりせるを見る。

一、作者の經歷の明なるがために、和歌をよみたる境遇事情が明になり、よつて以て明瞭にこれを解釋するを得、これによつて批判し、眞價以上に見ることあり。物語の間に含まれたる歌をおもしろく感ずるはこの例なり、源氏物語の歌などその適例なり。また方面はたがへど、歷史繪もこの例なり、繪畫は瞬間の有樣を寫し得るに過ぎず、よりてよく知られたる歷史上の事實を拉し來りて、その前後の關係を明瞭ならしむ。歷史畫はこの點に於て利益ある方法なり。

二、作者の人物の高下を以て、作物批判の標準となすことあり。即ち宗良親王の如き、文貞公の如き、南朝忠烈の臣の王事に盡瘁せし人格を仰いで、直ちにそ

の和歌に感服することあり。この弊は殊に漢學者などに多く、いはゆる文人派の書の如きは、多くこの意味より評價せらる。趙子昂の卑まるゝも職としてこれに由れり。

余はこの二事を以て全然謬見に屬すといふにはあらず。實際の境遇の能くあらはれたるもの眞に可なり。たゞさまでもなきものを迎へ見るを謬れりとす、人格に於てもまた然り。たゞ學者鑑賞家といはるゝもの、却つてその知識に溺れて謬見に陷り易し。たとへば、

いかにして霞のひまの月を見む、さてだにくもるならひなりやと。

後醍醐天皇

わが袖にわきてや月の霞むらむ、とはばやよその春の習を。　幸子内親王

これらは斧鑿の痕見えて、直ちに實際の境遇を寫せるものとは見えす。

聞きわびぬ、葉月長月ながき夜の月の夜ざむに衣うつこゑ。　後醍醐天皇

きゝなるゝ契もつらし、衣うつ賤のふせやに軒をつらねて。　尊良親王

都には風のつてにも稀なりし砧の音をまくらにぞ聞く。　宗良親王

これらは實際の境遇を寫せるものなるべく、題詠の歌とはおのづから趣を異にせりといへども、讀者をして痛切の感を起さしむるほどにはあらず。

かへるべき道しなければ、これやこのゆくを限りの逢坂の關。（關東に下さるゝ時逢坂關にてよめる歌。）　具行

やゝ巧める所なきにあらねど、眞情惻々として人を動かし、一讀涕涙の滂沱たるを禁ずる能はざるものあり。これこの歌の成れる折の事情を知れるがためにも因るべけれど、しかもこれのみによるとはいひ難からむ。

更に作者によつてその作例をあぐるに、

こゝにても雲井の梅咲きにけり、たゞかりそめの宿とおもふに。　後醍醐天皇

わが宿と頼まずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ。　同

都だに淋しかりしを、雲はれぬ吉野の奥のさみだれの空。　同

身にかへて思ふとだにも知らせばや、民のこゝろの治め難きを。　同

こと問はむ人さへ稀になりにけり、わが世の末の程ぞしらるゝ。　同

鳥のねに驚かされて曉のねざめしづかに世を思ふかな。　後村上天皇

曇らじとおもふ心よ、おなじくははや日の本の光ともなれ。　同

わはれはや浪をさまりて和歌の浦に磨ける玉を拾ふ世もがな。　同

治まらぬ世の人ごとの繁ければ、櫻かざして暮す日もなし。　後龜山天皇

その他の人々の歌は略すといへども、多くこの類なり。

要するに新葉集の和歌は、實際の境遇を詠じたるもの多く、またその作者は從來の安樂なる公卿輩と違ひて、幾多の辛酸を嘗めし人々なりき。而してその詠ずる所おのづから一、王事につくすこと、二、國の亂れを歎き、身の境遇を憂ふること、三、早く世治まりて和歌などに心を潜めたしと希ふことなど多し。

然れども從來の新葉集を見るもの、これを買ひかぶれる點なきにあらず。その歌多くは無味平凡、山家集などの清新の氣溢るゝばかりなるに比して、大に趣

を異にす。こは平弱なる二條派の流弊大にそのわづらひをなせるが如し。今一々その例をあげずとも、何人も一讀して直ちに感知する所ならむ。されば此の集には新古今集における如き叙景の歌も少し、その少きうち海岸の景をよみし似よりたる歌二三をあぐれば、

住吉の沖を深めて立つ霧にしづみ出でぬるあはぢ島山。　從三位國量

一木まづ霧のたえまに見えそめて、風に數そふ浦の松原。　後村上天皇

住吉の御前に沖のしほあひに、浮びいでぬる淡路島山。　前中納言爲忠

余は前二者の織巧を喜ばず。自然をありのまゝに詠じたる第三者を喜ぶ。かくの如きは恐らくは實景に對しての詠なるべし。されどこの類の歌は少くして、二條家の流を汲める詞を飾り、想をおろそかにするもの少からざるを悲む。たゞ新葉集にとるべきは境遇の然らしめしのみ。四圍の狀況に餘儀なくせられしのみ。根本の心的狀態に至りては依然たりしなり。

第五章　徒然草(一)——兼好

古來古今集、源氏物語などと相並びて行はれしものは徒然草にして、注釋の書も亦從うて多かりき。江戸時代の中葉以後國學の大に起りてよりは、學者平安朝以前のものを貴び、徒然草などは幼稚なりとして讀まざりしかど、元祿以前までは盛に行はれしなり。而して作者の傳は他のふるき作者よりもやゝ詳に知られしを以て、傳記の事實に就いては、國學興起の前後ともにさして異說なし。たゞその人物に至りては異論なき能はず。

兼好の傳の古より知られしは、園太曆にやゝ精しく記されしを以てなり。この書は中園太政大臣公賢の日記にして、觀應の頃に兼好の事を多く記せり。兼好の事の諸書に見えたるものは、主としてこの書より採れるが如し。

後世兼好の傳をしるしゝものゝ凡そ左の如し。(但し近松の兼好法師物見車、寶永三年自笑、其磧の兼好一代記元文二年四月刊の如きは、いづれも實說ならねば、いはず。)

一、兼好法師諸國物語五卷、寶永三年刊　晁舟子閑壽の著、徒然草記載のことをも交へて、物語風に記せり。當時何々諸國物語といふもの流行せし故の作にて、事實を主としたるものにあらず。

二、卜部兼好傳寫本一卷　園大暦その他の古書にある兼好の傳を拔書せるもの、著者自身の文はなけれど便利なり。終に「正德第二壬辰年菊月中旬霄雨軒月尋所持也」とあるは、所藏者の名か、或はかの戯作者月尋堂の著なりや、いまだ明ならず。

三、兼好略傳正德三年刊　元祿七年篠田厚敬の自跋あり。玉石雜誌に篠田厚敬が種生傳といへるはこれなるべし。

四、兼好法師傳二卷、享保十二年刊。　卷頭に奈良比野岡とあり。また後人の文學にて兼好一代記とあり、双岡の長泉寺の僧利徹の著なり。享保十一年二月の自序あり。上卷は園太暦によりて兼好の傳を書きつらね、下卷には吉野拾遺以下の文を引用せしのみ。

五、兼好法師考。　支考の著。

六、兼好考。　柏崎永以の著。

七、兼好法師傳記考證 五卷、天保八年刊。　野々口隆正の著、天保六年に成れり。物語風に和らげて、一段下げて出典を記し、最も便利なり。但しなほ考慮を要するもの尠からず。附錄忍山物語とあるは、伊賀權守橘成忠の女中宮小辨に名立ちしといふこと、師直が艶書を書きしといふことを辨せんために、假作物語の體に綴りたるものたり。

その他一部の中に含まれたるものは、

八、歌道岸の姫松。　この中に徒然草のこと、兼好の傳など見ゆ。

九、先進繡像玉石雜誌。　栗原柳庵の著。この中に兼好の傳あり。頓阿、兼好等の歌集によりて巧みに綴りたれど、さして價値なきものなり。

さらばこれらの書に記せるところは、多くは信ずべきものなるかといふに、然りと答ふるを得ず。これらの傳記詳略の差はあれど、その材料の本とするところは、いづれも園太曆なり。然るにこの園太曆の記事甚だいかゞはしきものなるをいかにせむ。さればこれを材料として、正確なる兼好の傳記は作り難し。從

うて從來普通の傳記は、正しき傳記として立つること能はざるに至るなり。
尊卑分脈によれば、

兼顯 治部少輔
├慈遍 大僧正
├兼雄 民部大輔従五位上イ下
└兼好 藏人左兵衛佐。以俗名爲法名

とあり。大日本には任左兵衛尉とあり。「佐」とあるの誤なることは、柏崎永以の兼好法師考に見ゆ。
さて、園太暦に見えること大略次の如し。
延慶二年二月八日、兼好兄弟の、院の仰せによりて神詠部類を編みしこと。
同三年六月十四日、萩戸の隅に化鳥を射ること。
康永二年七月二十七日、双岡に塔婆を立てゝ親戚故友の跡を弔ひ、櫻を植ゑて、「うゑおきし花とならびの岡のべに、」の歌を詠めること。
同八月廿八日、南帝の召によりて、その御疱瘡加持のため南山に赴く。

貞和四年二月二日、新古今集を講じ、殿上人廿餘人聽聞せしこと。
同五年正月廿四日、横川に上り法花經を寫し、且顯基中納言記を作る、其文簡にして徽、幽而玄也。
今年宇都宮公綱、藥師寺公義、兩士横川に兼好を訪へども兼好寂然として不ㇾ答。
同五月廿三日、頓阿、兼好二桑門、伊勢國阿野明神に詣で、七日通夜しける慰みに、一草子を撰す。寢覺の友といふ。
觀應元年二月三日、病氣の由聞えければ、光嚴院法皇より典藥頭和氣清元をつかはさる、兼好辭して其藥をのまず、即ち米三十石をたまふ。
同十五日、兼好卒、十八日卒去の由の注進。
同廿七日、權僧都を論賜せられしこと。
應安六年三月十二日、二條良基、兼好が撰べる往生傳、寂光淨土錄、つれ〴〵草等の書、寫本三合を將軍に獻りしこと。
こは卜部兼好傳によりたるものにして、尙種々の箇條あり。文はそのまゝに引

きたるやうに見ゆ。兼好法師傳記考證も亦これらの事實を多く記したれど、園大曆の名を擧ぐるのみにて、直接にその文を引かず。その他の諸書また多くは園大曆を引き、化鳥を射る所など、兼好の武技をあらすためか殊に多く、觀應元年二月卒去の條また最も多く引かる。されど既に黑川道祐はその遠碧軒隨筆にこの二月の數ヶ條をあげて、これ果して園太曆の記事なるかと疑ひ、大日本史には取らず、大日本史料にもまたこれを棄つ、そも／＼何が故にかくの如きか。

一、これを今日行はるゝ園大曆に比較し見るに、前にいへる箇條は一も園太曆にあることなし。唯これに見えたるは前の箇條のうち、次の二のみ。

貞和二年閏九月六日陰晴不ㇾ定、兼好法師來、和歌數奇者也、召二簾前一謁云々。

四年十二月二十六日、天晴、兼好法師入來、武藏守師直狩衣以下事談示ㇾ之、今度被ㇾ用二正慶符一、彼符處示聞了。

これのみ。固より流布の園大曆は全本にあらざれば、或は偶然脫したるものなりともいひ得べし、されど、かの所謂園大曆の引文を見るに、甚だ怪しきも

のあるなり。

二、事實あまりに首尾備はり過ぎたり。一布衣の僧に典藥頭を遣され、米三十石を賜はるといふ、勿體すぎたり。貞和五年八月十五日、院御所廣澤御幸の如き、他の書に見えず、果して事實なりや疑ふべし。

三、書き樣に怪しき點あり例へば、貞和五年七月朔日の條の如き、日記の體にあらず。一々二條良基公、二條關白良基公と記すが如きも亦然り。草庵の遺物を擧げて、「古筆之法華經、自筆之老子經、源氏物語、須磨明石之卷、幷頓阿自筆之幻卷、神代卷二册、反古手習之書捨二包、墨衣二襲云々」といへる古筆自筆など、頓阿、兼好を崇拜せる後人の作たることを示すにあらざるか。

されば、所謂園太曆にいふ所は、全然これを否定することは躊躇すべからむも、大體に於てこれを信せざるを可とす。かくして有名なる事實は多く失はれて、兼好の傳も亦甚だ貧弱なるものとなりぬ。

まづその歿年は如何。こは觀應元年なること眞なるが如し。されどその月日については三說あり。

一、伊賀の國見山の麓田奈保邑にある兼好の墓石には兼好法師墓觀應元年二月十五日俗名左兵衛佐卜部兼好朝臣とありといふ。されど土肥經平は春湊浪話に、次の園太曆の說を眞なりとして、五の字の草體と八の字とを見誤れるものにはあらざるかともいへり。

二、例の園太曆と號する諸書の引文には、二月十八日と記せり。されど引文最も精しき卜部兼好傳には、二月十五日の條に兼好卒すと見え、十八日の條に成忠の許より兼好歿せる由注進來ると見えたり。されば、十五日頃に死したるが、十八日に至りてはじめて注進來れるものと推せられざるにはあらねど、さらば、十五日の條に、兼好卒せる由記す筈なし。これまた園太曆の引文の疑ふべき一證なり。

三、高野山西光院にある位牌には、觀應元年四月八日、六十八歲と記せりといふ。土肥經平は二月十八日說をとりて、四月八日は略、七七日に相當すれば、その日位牌を建てゝ、直にその日を書きつけたるにぞあるべきといへり。大日本史料には諸寺過去帳を引いて、兼好法師觀應元年四月八日、右法金剛院之過

去帳」とあり。

何れか果して正しからむ。所謂園太暦信じ難しとせば、四月八日説或は正しからむ。四月八日と二月十五日と佛生日と佛滅日とにあたれば、いづれか一つは記憶の誤にて、かく取りかへられたるものにあらずや。

兼好の事蹟については徒然草、歌集、續草庵集等に見えたる外、やゝ信ずべき諸書にいへる所は、凡そ次の如し。

(吉野拾遺)　後宇多院崩御の後、木曾に退隱せしが、一日國守の鷹狩に來れるにあひ、またその庵をもすて去ることあり。兼好の出所進退に就いてはまづ確なるものなるべし。

(落書露顯)　今川了俊が、兼好に仕へし童命松丸を引き取りて扶持せしこと。

(徹書記物語)　徒然草が兼好の作なることを辯ず。

三光院實澄の崑玉集には徒然草及び家集は、今川了俊が命松丸に尋ねて、草庵の壁に張りたるものを、あつめて編めるものなるよしを記せり。されどこはまことしからず。前田家に兼好自筆の家集といふもの存せり。寶積經の裏に記せ

る兼好自筆の歌と筆蹟一なれば、信ずべきに似たり。

太平記巻二十一、高師直が鹽谷高貞の妻に艶書を贈ることを記せる條に、「兼好といひける遁世者を呼び寄せて云々」と見ゆ。これ古來疑問の種となれるものなり。まづこれを辨せしは和歌難波津（三光院實枝著）なり。いはく、室町記に兼好に師直たのみて、母の追福のため五十首の歌催しゝ事あり、それを後に艶書の事におやまり傳へしなるべしといへり。次いで林守勝の本朝遯史には、兼好が一生の過錯なりとして深く之を惜み、僧元政の扶桑隱逸傳には、「其不拘也如此」と評せり。何事をもすべて儒教の道德を以て律するは、江戸時代の學者の常なれど、これを以て徒然草の著者を難ずるは如何あるべき。春湊浪話には兼好を辯護して、彼が師直のために艶書を書きしは、南朝を思ふの情に出でたり、師直と鹽谷との爭は足利氏の世の亂の基なり、果して師直一族は滅び、足利氏の基礎もゆるぎはじめたり、本朝遯史等の說にこれを深く考へざるに出づと。これ上田秋成が業平を辯護して、彼が二條の后の直人（たゞひと）なりし時密通せしは、その入內を妨げて、藤原氏の勢力を殺がむがためなりといへると同一軌なり。江戸時代の嚴

格なる道德より觀れば、放縱淫逸といふべき行爲を、文學上尊ぶべき人々に附加するは面白からず。さればこれを理想化し、缺點なき人たらしめむがために、かくの如き說は出で來るなり。而して、辯護のあまり却つて業平なり、兼好なりの人物を小ならしめたるに、心づかざるは愚なりといふべし。土肥經平の說一たび行はれてより、野々口隆正の考證にも得たり賢しとこの說を取りたり。次に栗原柳庵の玉石雜誌には、鎌倉成氏年中行事を引いて、太平記には氏も姓もなければ、同名異人なりやも知るべからずといへり。これに對して痛快なる斷案を下ししは伊勢貞丈なり。いはく、

貞丈按に、高武藏守師直が鹽谷判官高貞妻に戀慕したる時、彼妻に送る艶書をかゝしめけることと太平記に見えたり。後世歌學者流の輩つれ〴〵草は兼好が隨筆なりと知らずして、敎訓の書なりとて、強て敎訓の趣に說を作りて口釋し、兼好をば聖賢の如く思ッゆへ、師直に代りて艶書を書しことを不審する輩もあれども、不審ニ及ざることなり。兼好俗にありし時人なみの好色人なり。出家してもつれ〴〵艸に好色のことを書たる風流人にて、何の德もなき

常の僧なり。懇意なる師直に頼まれたるに、其風流の情ある法師なれば、艶書を書まじきものにあらず。何のいぶかしきことはなきなり。兼好は歌を以て名をえたり、德行を以て名をえし人にあらず。

と。卓見なりといふべし。太平記のこと强ちに僞なりとはいふべからず。强ひてこれを辯ずるは一種の僻見より來れるなり。

兼好の作と傳へられたるものに、兼好法師寢覺物語といふあり。所謂園太曆貞和五年五月廿三日の條に頓阿兼好が伊勢阿野明神に參籠して、寢覺の友を作る由いでたり。篇を分つこと十、その表題一、正直を先とすべき事、二、慈悲深かるべきこと、三、佛神に祈るべき事、四、身をおさむべき事、五、よろづを堪忍すべき事、六、おごりをつゝしむべき事、七、人を恨むべからざる事、八、恩をしるべき事、九、友をえらぶべき事、十、用意あるべき事、等にして、十訓抄と大差なし。而して引例の過半は十訓抄より取りたるものにして、文章また略彼に同じく、唯その切れたるをつゞけて、口調をよくしたるやうのものなり。十訓抄に見えざる例もあるやうなるが、それらは何に據りたるものなるが、いまだしらべ見ず。文章は徒然

草に似たることと毫もなく、序など、對句を並べて美しくしたるは、むしろ方丈記を庶幾したるものゝ如し。とにかく亂雜にして體裁整はず十篇中その一二篇は引例殆どなく、極めて釣合あしきものにして、後世の假托たること、推して知るべきなり。

以上述ぶるが如く、兼好の傳も甚だ荒漠たるを免れず。考證及び玉石雜誌にはやゝ委しく生涯の行動を、所謂園太曆により、又は想像をめぐらして次第したれども多くは信ずるに足らず。その信ずるに足るものを再記すれば、凡そ次の如し。

一、觀應元年四月八日、六十八歲にて卒去のこと。諸寺過去帳。 觀應元年卒去のことは諸說皆一致する所にして、慥なりと信ずるを得む。六十八歲といへるも亦排斥すべき理由を見ず。たゞ卒去の月日に至りては、諸說區々なれども、四月八日說を信ずべしとせん。

二、貞和二年閏九月六日、同四年十二月廿六日、兩度、中園公賢公を訪ふこと。現存の園太曆。六十八歲歿とすれば、六十五歲と六十七歲との時。「和歌數奇者也」など特に說明せるを見ても、所謂園太

暦の僞なるを推すべし。只これによりて、貞和の頃京にありしを知るのみ。

三、正中元年後宇多法皇聖算五十八歳にして崩ず。兼好この頃出家せしこと、吉野拾遺等によりて事實なりとすべし。（四十三歳。）

その外年代の明なるは、家集に、

先坊（邦良）御時、歌合につかうまつりし五首。元亨三年のことにや。（四十二歳。）

正中二年、春宮より歌合の歌めされ侍りしに、山路花、稀逢戀。（四十四歳。）

建武二年内裏にして千首歌講せられしに、題を賜はりてよみて奉りし七首。（五十四歳。）

以上によりて見るに、大抵四十以後のことなり。なほ家集によりその交遊の官名等を見て察するに、若き時の事もとよりあれども、和歌に名を揚げてやゝ世にもてはやされしは、四十以後なるにあらずやと思はる。

交遊は宮家、法親王より始めて、いづれも歌を以て交れるなるべく、爲世（入道大納言とあれば、これまた元徳元年（此年爲世出家、兼好四十八歳）以後のことなり）以下、二條家の人々の名の殊に多く現はれたるは、歌を學べるなるべし。冷泉大納言といふも家集に見ゆ。頓阿、淨辨などと親し

きは固より、道我僧正とは殊に親しきが如し。道我は日野俊業の曾孫、東寺の執行聖譽律師の三男にて、東寺の長者たり。聖無動院と號し、八坂に住す（家集によれば清閑寺に住む。）また平貞直朝臣の家にて歌よむこと見ゆ、貞直は大佛氏、民部少輔家泰の長男にして、時政の裔なり。

その事蹟を考ふるに、旅行は、家集に「石山にまうづとて。」「雪ふる日ひらの山に上りて。」「神無月の頃初瀬に詣で侍りしに、入道大納言（爲世）云々、」「花のさかり但馬の湯より歸る道にて雨にあひて、」などあり。「東へまかる。」『東にて、宿のあたりより富士遠く見ゆ。」ともあり。金澤、こよろぎの磯、相模國いたち河、清見關、田子浦、うつの山等を詠めるもあり。而して東へ再びゆきしことは、「むさしの國金澤といふ所に昔すみし家のいたうあれたるにとまりて、月あかき夜』「一とせ夜に入りてうつの山をこえずなりにしかば、麓なるあやしのいほりにたち入り侍りしかど、此度はその庵のみえねば」など端書あるによりて知るべし。また、「世をのがれてきそぢといふ所をすぎ侍りしに、」といふ題にて、

思ひたつきそのあさぎぬ、あさくのみそめてやむべき袖の色かは（風雅集に出づ。）

の歌も見ゆ。なほ考證には、ある人にいざなはれて、四國見にわたりし時、波風のあらかりし事をのちに思ひ出でて、」と詞書して

世の中を渡り比べて今ぞ知る、阿波の鳴戶は波風もなし。

の歌、家集に出でたる由いへど、見えず、四國へ渡りしことは姑く疑を存す。また若き頃のことにや、「深草に通ひし頃曉きぬたうつを」といふ題にて、

衣うつ夜寒の袖やしぼるらん、曉つゆの深草の里。

「人にものいひそめて」といふ題にて、

通ふべき心ならねば言の葉をさりともわかで人やきくらん。

「つらくなりゆく人に」とかきて

今更にかはる契と思ふまではかなく人を賴みけるかな。

また人の爲に戀の歌をよめることあり。「としごろたのめわたりける女のがりつかはすべき歌とて、人のよませ侍りし」と端書して二首あり。また住居には、法輪、修學院にこもれることと、横川にすめることなど見ゆ。「よ川に住侍りし比靈山院に生身供の式をかき侍しおくにかきつく」「人に知られじと

思ふ此、ふるさと人のよがはまで尋ねきて、世の中のことどもいふいとうるさし（藥師寺、宮都宮などの來りしことなどこれより出でしか。）などあり。双の岡に生みしことは言ふまでもなし。「双の岡に無常所まうけて、かたはしに櫻をうえさす、」と記して、「契りおく花と双の岡のべに」の歌あり。

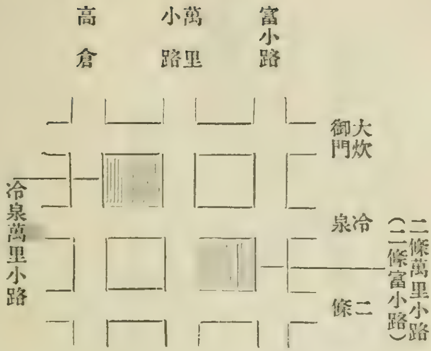
第六章　徒然草(二)―その評論

徒然草はいつの頃書かれたるか。春湊浪話卷下にいはく、

つれ〴〵草上卷に、冷泉萬里小路を今の內裡と書たり。此內裡、建武三年正月に燒亡せしかば此上卷建武三年より以前に書たる明なり。又同下卷に藤公明卿を大納言といふ。是は建武三年五月に大納言に補任ありし人なれば、此下卷は建武三年の夏より後に書しことも明なり。

この說多く後の書に引かれて、本書編纂の時代の證左とせらるれども、未だ俄に信ずべからず。今の內裡のことは徒然草三十三節に「今の內裏つくり出され

て、有職の人々に見せられけるに………玄輝門院御覽じて………」とあるなり。經平はこれを冷泉萬里小路とせり。こは增鏡に、「御門(後醍醐)坊にておはしましゝ時



のまゝに冷泉萬里小路殿にうつり住ませ給へるに云々」とあるによれるが如し。次に徒然草二百三十八節に、「當代いまだ坊におはしましゝ頃、萬里小路殿御所なりしに、云々」とあり。この當代は後醍醐天皇なるべし、而して茲に萬里小路殿といへるは、冷泉萬里小路なりや否や、經平これを別として、二條萬里小路なりとせり。されど余は思ふ、所謂今の内裡とこの萬里小路殿とは一にして、二條萬里小路を指せるにはあらざるか。建武三年正月に燒亡すといへるは、皇居年表に、「延元元年正月十日尊氏侵洛、帝幸台山二條富小路内裏兵火、(南都所傳 迎陽記)とある事實を指せるにはあらざるか。經平の所論は、あまりに速斷に失せずや。遞莫、建武三年には後醍醐天皇は

すでに吉野に幸せられたれば、徒然草に今の內裡と書けるは、帝が未だ都にまし〻時、即ち建武三年以前なることとは、經平の論を俟たざるなり。次に藤大納言とあるは、藤公明卿のことなりといへる、また信ずべからず。この時大納言たりしは一人にあらず。徒然草句解には爲世卿とあり。その何れなりしか明ならず。されば、これを以て、建武三年の夏より以後に成れる證とはなし難し。

なほ次に時代を知るに足るべき數例をあぐ。

一、六九節に「元應の淸暑堂の御遊云々。」淸暑堂の御遊は元應元年(一九七九)なれば、その以後のものなること明なり。

二、八五節に「惟繼中納言は云々。」惟繼は元德二年(一九九〇)權中納言に補任、曆應五年出家、康永二年卒す。されば元德二年より以後に書きしものなること明なり。

三、百一節に、「洞院左右大臣殿云々。」洞院左大臣は藤原實泰にして、文保二年(一九七八)右大臣より左大臣に轉じ、元亨二年八月辭す。さすれば文保二年以後のものなること明なり。されど「右」と「左」とは寫本にては紛れ易きものなれば、こ

は確證とはなし難し。

四、百七十六節に、「吉田中納言云々。」吉田中納言とは藤原藤房のことなり。藤房は、嘉暦元年（一九八六）に權中納言となり、建武元年中納言にて遁世す。されば嘉暦元年以後のものなること明なり。

五、二百五節に、「後德大寺右大臣殿檢非違使の別當の時云々。」後德大寺殿とは、實基の子公孝なり。公孝は正安元年（一九五九）より乾元二年（一九六三）まで右大臣、乾元二年に太政大臣となり、嘉元三年薨ず。乾元二年後ならば大政大臣なるべく且つ「檢非違使の別當の時」とあるより見れば大政大臣となりて後、沂りて當時の官名を書けるものなりとはいふを得ず。故に乾元二年以前の筆ならざるべからず。さらば徒然草は二三十年間に亘りて成れるものなりとの結論に歸す。されどこは俄に斷ずべからず。或は記憶の誤なりやも亦知るべからず。兎に角この一例を以て判斷するは非なり。されば、官位を標準として時代を定むるもむつかしきものなり。

六、二百三十節に、「當代いまだ坊におはしましゝ比、萬里小路殿御所なりしに、堀

川大納言殿伺候し給ひし云々。」堀川大納言は師信にて、後醍醐天皇御即位の翌年、元應元年大納言より內大臣に任ず。而して內大臣といはずして、大納言とあるは、元應元年以前になれるに似たり。されど、こは泝りて當時の官名を書きたるものなりやもまた知るべからず。而して「當代未だ坊におはしましゝ頃、萬里小路殿御所なりしに、」とあるは、天皇の今はすでに、萬里小路內裏にあらせられざる書振なり。さればこの書は後醍醐天皇の隱岐に遷幸中か、或は建武三年延文二年以後、即ち南北朝となりて、吉野に行幸せられてより後のものならざるべからず。

されば經平の如く、上卷は建武二年前にして、下卷はその後に成れりと斷ずるを得ず。以上いへる所によりて察するに、大凡そ元德二年以後、建武三年以前の數年間に亘りて出來しものか。但し二百三十八節の如きは或は尙建武三年以後にも渡りしならんか。たゞその時日を明にいふ能はざるを憾むのみ。

因にいふ百五十一節、百五十二節、百五十三節に日野資朝の事を記せるは、卿が罪に陷りて後の記事なるべし。

さらば徒然草の内容は如何。

この書全篇を通じて厭世的の思想に滿つ。假の世なるに、俗事に使はれて奔走するは愚なり、生の一大事を冀はざるべからざる由を述ぶること多し。例へば三十八節には、名利のために一生營々として過すは愚なりといひ、五十七節には、道心だにあらば、何處に住むとも可なりといふ人あれど、そは思はざるの甚しきものなり、浮世に交れば、心俗事に煩はさるゝこと多し、誠に後生を願ふ人は早く官位を捨て、家を離れざるべからずといひ、五十八節には、大事を思ひ立たむ人は、凡てをそのまゝ放棄せざるべからずといへる類頗る多し。

されど厭世的思想は、その全部にあらず。その中にまた樂天的思想の錯綜混合せるあり。而してこの兩思想は、互に衝突撞着せるの奇觀を呈す。こは本書を讀むものの皆感ずる所なり。例へば、七節に「世の人の心惑はすこと色欲には如かず云々」といふかと思へば、一方には、三節に「色好まざらむ男はいとさう〴〵しく、玉の盃そこなき心地ぞすべき、云々」といひて、戀愛を尙び、五節に、子孫のなか

らむ事を希ふかと思へば、百四十一節に、子孫の愛すべきを述べ、子なきものは物の哀を知らざる由を述べ、百七十四節には、一方に酒の害を擧げ、他方に酒の功を述べたり。かくの如く著者は兩極端の事を解決をつけずして棄ておきし觀あり。されば後世双の岡の色法師と呼ばれ、粋法師とうはれて、戯曲小説にも作られ、その性格のわからぬやう三上高津文學史にもいはれたり。抑、かくの如き撞着は如何にして來れるか。

されど當時の時勢に見、兼好の爲人に見れば、この矛盾あるは毫も怪むに足らず。屢、いへるが如く、鎌倉時代以後の特徴は新佛敎の起りて厭世思想の瀰蔓せし事なり。この思想はあらゆる社會の事物にあらはれ、文學にも現れたることは、平家物語、撰集抄、寶物集以下種々の書籍を見ても明なり。而して徒然草にも前にあげたる例のみならず、到るところこの思想の充溢せるを見、なほまた老莊道家の説も加り、南北清談家一流の趣も見ゆるなり。然れども鎌倉武人の間にこそ鎌倉時代は全然新しき時代、新しき社會なれ、平安京の人々はなほ舊慣を重んじ今の生活に興味を有せずして、ひたすら藤原極盛の時代を夢想せし

なり。而して文學はむしろこれら京都人の專有せし所なれば、その中にこの平安思潮と鎌倉思潮とがもつれ合ひ、即ち公卿と僧侶と、樂天と厭世と、感情と意志とが相闘ひ、相依りしものなることは著しき事實なり。而してその兩極端が徒然草に於てもまた相混じて現れしものにして、即ちこゝに矛盾の觀を呈するも怪むに足らず。平安京人士の社會が即ちかくの如く矛盾に滿されるものなりしなり。

さらば兼好が僧侶として僧侶を離れ、むしろ平安朝公卿の風習に憧憬する例の一二を引かしめよ。

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるゝよと清少納言がいへるもさることぞかし。云云。(一節。)

ありたきことはまことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事の方、人のかゞみならむこそいみじかるべけれ。手など拙からず走りがき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。(一節。)

和歌こそ尙をかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざもいひ出づれ

はおもしろく、おそろしきゐのしゝも、ふす猪の床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外にあはれにけしきおぼゆるはなし。……歌の道のみ古にかはらぬなどいふこともあれど、いさや、今もよみあへる同じことば、歌枕も昔の人のよめるは更に同じものにあらず。やすくすなほにして姿も清げに、あはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ又あはれなることは多かめれ。昔の人は、いかにいひ棄てたることぐさも皆いみじく聞ゆるにや。(十三節。)

何事もふるき世のみぞしたはしき。今様はむげにいやしくこそなりゆくめれ。(二十一節。)

その他有職故實のこと多く出づ。三十二節に、櫛形の穴の事、六十節に御産の時の甑落のこと、六十三節に車の五緒の事、六十四節に冠の事、六十五節に花の枝に鳥つくる事、九十三節に勅書をもちたる時は下馬せざること、九十四節に、箙の紐のつけ方の事、百三十一節に鳥羽の作り道の事、百三十二節に夜のおとゝ

は東枕をよしとする事、百五十七節に盃の底の澱を捨つる事、百五十八節に、みなむすびの事、百五十九節に額をかくること、護摩を修することなどの呼び方、百九十五節に社頭にて警蹕の事、百九十六節に定額の事、百九十七節に楊名目の事、九十九節に呉竹河竹の事、二百節に退凡下乘の卒塔婆の事二百一節に神無月の名稱の事、二百二節に靫かけの作法、二百三節に笞刑の作法、二百五節に起請文の事、二百七節に經文などの紐の結び方、御前の火爐に火をおく作法をしるす。なほ他にわるべし。以て兼好が如何に、禮儀作法故實等に注意せしかを知るべし。音樂の事も亦多し。十五節に、

神樂こそなまめかしくおもしろけれ。おほかたものの音には笛、篳篥、常に聞きたきは琵琶、和琴。

といひ、なほ二百十三節には想夫戀といふ名稱の考證、二百十八節に調子の論、二百十九節に天王寺の舞樂の事、二百二十四節に白拍子の起源、二百二十五節に平家琵琶の事を記せり。これも中流以上の交りをなすには、音樂の事を知らざるを恥とせる平安朝の習慣をうけたるなり。

平安朝に於ては、京都を重んじ地方を輕んずる風あり。後には、國守となりても代官を遣して、自らはその任地に就かざりし程なり。今日に於ても、京都の人士に都自慢の風殘れり。徒然草またこの傾向あり、百二十六節に、都の人の上品なるを誇り、片田舎の人の下品なるを嘲り、百四十節に、悲田院の堯蓮上人の口を假りて、東國の人は頼まるれど、都の人は輕薄にして信なしといふものあれど、そは深く思はざる説なり。都の人は情にもろくして、人の頼むことをいなみかね、なし難きことをも諾ふが故に、おのづからこれを果すを得ざるなり、あづま人は人情乏しきが故に、人の頼むことをはじめより斷る故、信あるやうに思はるるなりと論ぜり。かくの如く鎌倉までも田舎としていやしめたるなり。

されば徒然草一篇遁世出離、後世の一大事を專らと說きたりといへども、尚よく作者の胸奥を探り見るに、兼好は眞の遁世者といふべからずして、宮廷生活を慕ひ、平安朝の昔を慕ひて、詩歌管絃を喜び、田舎をいやしめ、都會の生活を喜ぶ人なり。筆には人遠く水草淸き地を喜ぶ如くいへど、內心は都會の交際を喜ぶ人に外ならず。見よ、第八節に「女は髮のめでたらむこそ人のめだつべかめれ」

といひて、次に、みづから戒めて恐るべく愼むべきはこのまどひなり」といへるが如き、百六節に、「すべて男をば女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。……女のなき世なりせば衣紋も冠もいかにもあれ、引きつくろふ人も侍らじ。」といひて、次に、「女の性は皆ひがめり、人我の相深く貪欲甚しく、ものの理を知らず、たゞ迷の方に心もはやくうつり、ことばもたくみに、苦しからぬことをも問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、またあさましきことまで、問はずがたりにいひ出す、深くたばかり飾れることは男の智惠にもまさりたるかと思へば、そのこと、あとよりあらはるゝをも知らず。すなほならずしてつたなきものは女なり。その心に從ひてよく思はむことは心うかるべし。されば何かは女のはづかしからむ、もし賢女あらばそれもものうとくすさまじかりなむ。たゞ迷ひをあるじとしてかれに從ふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり」といへるが如き、一文中に於て好惡善惡の兩面を說き、出離的の文を以て結末とす。されど讀者の心に響く所は、却つて結論とは反對にて、毫も兼好が眞に戀を呪ひ、女を唾棄せるものとは見えず。その他三節と七節との矛盾の如き、一方戀愛を尙

び、一方色欲の迷を戒むるの類諸所に散見すれど、兼好の眞意はこれにあらずしてかれにあるものと認めざるを得ざるを如何にせん。また百二十一節に上品なる人の性質を說いて、「人の才能は書あきらかにして、聖の敎を知れるを第一とす。つぎには手かくことむねとすることは無くとも、これを習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも醫にあらずはあるべからず。つぎに弓射、馬に乘ること、六藝に出せり。必ずこれをうかがふべし。文武醫の道まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。つぎに食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる德とすべし。つぎに細工、よろづの用多し。」といへるが如き眞に世を厭ひ捨てたる僧侶の筆とは見えざるなり。思ふに當時の人は何か事ある每に僧侶となりぬ。定家の如きも然りき。頓阿は僧形なれども後世を知らず。兼好は菩提の道に入れりといへども、なほ頓阿と兄たり難く弟たり難かるべし。「木曾の麻衣淺くのみ」といひ、「こゝもまた浮世なりけり」とは歌へど、藤房の如く眞に遁世の志深きものにはあらざるべし。たゞ親しく仕へし後宇多法皇の崩御の緣によりて姿を僧形にかへしのみ。いはゞ時勢

の壓迫の爲に出家せし人にして內心は飽くまでも平安朝風の人なり。個人としては朝廷に立ち交るを好みしかども、亂離の時世と不自由の境遇とは、自然に兼好を出家せしめしなるべし。

されば兼好は、「つれ〴〵わぶる人はいかなる心なるらむ、まぎるゝ方なくたゞひとりあるのみこそよけれ。……未だまことの道を知らずといへども緣を離れて身を靜にし、事にあづからずして心をやすくせむこそ、しばらく樂ぶともいひつべけれ。」（七十四節）といひ、また「日暮れ途遠し、わが生旣に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を得ざらむ人はものぐるひともいへ、うつゝなし、情なしとも思へ、そしるも苦まじ、ほむるも聞き入れじ。」（百十一節）といひて、只管世の交を絕ちて出離を喜ぶが如くなれども、また一方に於ては、好んで交際の祕訣を說けり。五十五節に人と談話する時の心得を說き、七十九節には人の前にては、おのが知りたる事もしたり顏にいはぬものぞと說き、二百三十節に、言葉のわざとらしきは厭ふべしと說き、二百三十四節に、人のおのれに物問ひたる時は、知りたるまゝにすなほに答ふべし、婉曲に

答ふるはあしと說ける類皆然り。かくの如きは厭世の人の好んでいふ所にあらざるべし。これを以ても渠が表面のみは解脫厭離の人の如くなれども、實は全く世俗の人なりといふを得む。更に二百三十八節に見えたる渠が七ヶ條の自讃といふものを見よ。いづれも皆おのが才智學問を誇ることの幼げならぬものはなし。その女に溺れざりしを誇るは、遍照の「苔の衣はたゞ一重」といへるに比して、その徑庭いくばくぞや。

更に個人としての兼好を見るに渠は甚だ健康の人にあらざりしが如し。百十六節に友とするにわろきもの七つをあげて「三には病なく身強き人」といひ、百十九節に「唐の物は藥の外はなくとも事かくまじ」といひ、百二十一節に、人の學び習ふべき事をあげたる條に、「次に醫術を習ふべし、身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも醫にあらずはあるべからず」といひ、第百二十六節に人の止むことを得ずして營むこととて、衣食住の三つをあげたる次に、「たゞし人皆病あり、病に犯されぬれば、そのうれへしのび難し。醫療を忘るべからず」といへり。かくの如きは强健の人には思ひつくまじき事なり。

次に又徒然草は南北朝分裂爭亂の頃のものなるべきに、少しも爭亂についての嘆聲を發せざりしは如何、こは清少納言の枕の草子に主家の零落のことをしるさず、西行の山家集に源平の爭亂のこと見えざると相似たり。思ふに兼好は出家としても歌よみとしても、かゝる世の變遷には耳をかさず、無關心なるをよしとせし故ならんか。

これを要するに、兼好は厭世を說けども極端なる厭世家にあらず、流俗に交れどもまた泛々として一般の人と浮沈するを好まず。その性質として極端を避くる人なり。或は中庸といふべく、或は平凡といふべく、概するに最も常識の發達せし人なり。徒然草は實にこの常識の說明に外ならず。而してこの常識は儒家の見を基とするか、老佛の說に依れるか。否々、意志を根據とせずして感情を基礎とせし常識なり。換言すれば、渠は太平記に多くあらはれたるが如き武士的道德の上に立つ人にあらずして、なほ、感情を偏重せし平安朝人士の典型を襲踏せし人なり。たゞ夫れ中庸を旨とし、極端に走ることを避けたるが故に、その情念偏重主義と、所々に散見する老儒佛の思想と相一致するが如しといへ

ども、なほ少しく注視すればその間に相容れざる差別の存する事を明瞭に認むるを得べし。要するに徒然草一篇、感情を主とし、美を重んぜし著者が、自己の趣味を說くを主眼とせしものなり。かくの如く解し來るとき、著者の所說に續出する一切の矛盾は難なく了解せらるべきなり。

今余が徒然草は著者が自己の趣味を說くを旨とすといへるは、三節「色好まざらむ男は」の條、百三十六節「花はさかりに」の條、百七十四節に酒のことをいへる條など有名なる文を考へても明なることながら、尙一二の例をあぐべし。九節に住居のさまはわざとらしからぬをよしとする由を說ける、五十四節に家の作りざまを說ける、八十節に室內の裝飾のことゞゝしきは忌むべしと說ける、いづれも自然にしてなだらかなるを愛する著者の趣味を表白せるものなり。十六節「山寺にかきこもりて佛につかうまつるこそつれゞゝもなく心の濁もきよまることちすれ」といへるは、信仰の心をいへるにあらずして趣味の上よりいへるなり。二十節に自然の風物のみなそれゞゝに趣あるを說き、「さて人遠く水草淸きところにさまよひありきたるばかり心なぐさむことあらじ」とい

へるも、また趣味の上の論なり。三十一節「九月二十日の頃」の條、四十二節「あやしの竹のあみ戸」の條、百三節「荒れたる宿の人めなきに」の條、百四節「北の家かげに」の條などは、いづれも簡單なる叙事文にして、風情のおもしろきを捕へたる衆好が趣味の發達せるを見るべきなり。八十三節に、

法顯三藏の天竺にわたりて、故郷の扇を見ては悲み、病に臥しては漢の食を願ひけることを聞きて、「さばかりの人の、むげに心よわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都、「優になさけありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくくおぼえしか。

といへる、著者が感情主義の人、唯美主義の人たることを暴露せるものにあらざるか。次に、百八十九節に

妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。いつもひとり住みにてなど聞くこそ心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又いかなる女をとりすゑてあひ住むなど聞きつれば、むげに心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそ添ひ居たらめといやしくも推しはかられ、よ

き女ならば、この男こそらうたくして、わが佛とまもりゐたらめ。たとへばさばかりにこそとおぼえぬべし。まして家の中を行ひをさめたる女いと口惜し。子などいできてかしづき愛したる心うし。男なくなりて後尼になりて、年よりたるさま、なきあとまであさまし。いかなる女なりとも明けくれ見むにはいと心づきなく、にくかりなむ。女の爲も中空にこそならめ。よそながら時々かよひ住まむこそ年月經ても絶えぬなからひともならめ。あからさまに來てとまり居などせむはめづらしかりぬべし。

といふに至りては、全然道德をはなれ、習慣を無視して、たゞ自己の趣味の一方に偏したるものなり。百九十節

夜に入りて、ものゝはえなしといふ人、いと口をし。よろづのもののきらかざり、色ふしも夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎをよすけたる姿にてもありなむ。夜はきらゝかに、花やかなる裝束いとよし。人のけしきも夜の火影ぞよきはよく、ものいひたる聲も暗くて聞きたる用意ある心にくし。にほひも、ものの音もたゞ夜ぞひときはめでたき。さしてことなることなき夜、うちふけ

て、來れる人の淸げなるさましたる、いとよし。若きどち心とゞめて見る人は時をもわかぬものなれば、ことにうちとけぬべき折ふしぞ、けはれなく引きつくろはまほしき。よき男の日くれてゆするし、女も夜ふくるほどにすべりつゝ鏡とりて顏などつくろひ出づるこそをかしけれ。

といへる、また平安朝人士の趣味を襲踏せる著者の傾向をさながらに見るべきなり。

されば兼好の執する所は善にあらず、また眞にあらずして、美なり。渠は一面無常を說き、一大事に志すべきを說けども、一も涅槃淨樂の境界を說けるはなし。渠が宗敎の必要を說けるは、時勢の壓迫によれるものにして、その信仰は未だ得ざりしものなりしことを思ふべし。徒然草一篇を讀んで、その無常を說き厭世を說く所、深き渠の經驗より來れりとは覺えずして、その趣味を說ける所こそ、却つて自家の經驗をその儘に記せるものと思はる。而して徒然草が、撰集抄、寶物集、發心集などに比して遙に興味深きは、實にこの點にあるなり。但し、著者の趣味の標準は勿論程を得るにあり、中庸の度を得るにあり。その弊は平凡と

なる。前にいへる八十節「屏風、障子などの繪も」の條の如きその好例なり。徒然草の如き短篇を集めたるものは、やゝもすれば理屈に落ち易きものなるを、これは理を說きても理屈に趨らず、その例を具體的に示してその前後に理を說く手段を採れり。四十節に、

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てゝ見えざりしかば、おの〳〵下りて埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向なるあふちの木に法師のぼりて、木のまたについゐて、もの見るあり。取りつきながらいたうねぶりて落ちぬべき時に、目さますことたび〳〵なり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな、かく危き枝の上にて、やすき心ありてねぶるらんよ、」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來たゞ今にもやあらむ。それを忘れて、もの見て日をくらす。おろかなることはなほまさりたるものを、」といひたれば、前なる人ども、「まことに、さにこそ候ひけれ、最もおろかに候ふ、」といひて、みなうしろを見かへりて、「こゝへ入らせ給へ、」とて、所を去りて、呼び入れ侍りに

き。かほどのことわり誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひがけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりてものに感ずることなきにあらず。

單に具體的の叙事を尙ぶ方より觀れば、この簡單の理屈さへ厭ふべしといへども、これは文體の性質やむを得ざる所もあるなり。なほまた何の理屈も敎訓もなき、叙事または逸話の類あり。これらは特に面白がらるゝ所以なり。例へば、十八節に四季の變遷を叙したる、四十四節に良覺僧正の逸話を記したる、五十二節に仁和寺の法師足鼎をかぶる話など、これなり。なほ五十一節、石淸水詣の條、及び五十三節風流のわりごの物語の條と、この鼎かぶりの條とを比較せよ。おなじやうなる叙事ながら、かれにはいづれも最後に短き敎訓の語を附したるに、これはたゞ事實を平叙せるに止る。それだけ厭味の少きを覺ゆるなり。

第五期　室町時代

第一章　室町時代の小說（一）——總說

南北朝時代及び室町時代の小說は、作者及び時代の明ならざるもの多く、ために時代を細別して論ずること困難なれば、今これを一括して、室町時代の小說として論ずることとすべし。

今この時代の小說を鎌倉時代の小說と比較するに、おのづから異なる色彩あるを看取せらるれど、一つ〳〵として見るに足るものなく、文章また、謠曲の如く錦繡の美をつくせるものなし。要するに、極めて荒唐無稽の作多く、その子供らしく單純にして、原始時代の趣の存する所に、興味もあり、研究の餘地もあるなり。

凡そ作品にはそのものに絕對的價値の存するものあり、また文學的價値は乏しけれど、時代の趨向をあらはすものとして價値あるものあり。總じて文の拙

きものは、時代の壓迫をうくること甚しきが故に、作者はこれがために個性を滅却せられて、周圍の事情がよくあらはるゝ事多し。たとへば源氏物語の如きは、無論これによりてその時代をも覗ふを得べけれども、時代を離れて、單に一篇の作品として絕對的價値を有す。しかるに今昔物語は文章極めて雜駁、單にこれを一篇の作品として見る時は、その價値頗る疑はしきものなり。然れども、その當時の傳說を多く集め、殊に當時の小說が京都の貴族の生活の外觀ふを得ざるに、この物語は中流以上はもとより、下流に行はれたる話をも集めたれば、平安朝の風俗人情を見るべき資料として無上の價値あるなり。近松及び西鶴の作品を見るに、いづれも絕對的價値の存することはいふまでもなく、時代の思想もまた現れたりといへども、なほその傾向をいはゞ近松は前者に屬し、西鶴は後者に屬すべし。今室町時代の小說を見るに、その間おのづから多少の優劣はあらむも、殊に傑出したりと見るべきものなく、只時代の趨勢をあらはせるものとして價値あるのみ。いづれが先にして、いづれか後なるか、混沌として明ならず、一は他を摸し、此れは彼に擬し、模擬剽窃相繼いで、千篇多くは一律、

個々を以て論ずべからず、一團として說くべきなり。總じて文學的價値あるものは、個々につきて作者、作品を解剖批判することを要すれども、時代を反映せるものは數篇をあつめて、時代に照して論ずべきなり。謠曲、御伽草子の類は殊に然り。謠曲の如きは、名のみ殘れるものをも加ふれば千番もあるべし。しかもその代表として四五番をあぐれば、他は皆その同類のみなり。なほ一團として論ずるを可とする他の理由あり。即ち個人の思想をあらはすものにあらずして、民間の傳說をあらはすものなればなり。當時の小說は、源氏物語などの如く、個人の想像より生み出されたるものにあらずして、材を民間の口碑に採れるもの多し。平安朝の貴族文學漸く廢れて、江戶時代の平民文學の曙光のほのめき出でむとするを見るべきなり。なほ南歐の文化漸く衰へて北歐の傳說あらはれ來り、今日の歐洲の文明を生みいだせるに似たりといふべし。

然らばこれらの傳說はいづれより來れるか。そもそも平安小說は貴族の偏倚せる文化を代表せるものにして、一般民衆の文化とは何等の交涉なく、これによつて中流以下の情態を知るに足らず。貴族がうつぼ物語、源氏物語を弄べる

間に、渠等と中流以下との間には、非常なる懸隔ありき。而して多少の變化はあれ、また外國文化の影響はあれ、なほ太古の儘の面影、太初の傳說を傳へたるものは中等以下、殊に地方の人民にありき。惜しいかな、これらの人々の間には文字なく、從つて文學としてあらはれることなかりしなり。鎌倉時代また然り。室町時代に至りて漸く世は一變す。卽ち鎌倉時代には文の京都、武の鎌倉と相別れて相接することなかりしもの、南北朝時代以來二者互に接近して、互に他を摸して、こゝに相混合するに至れり。太平記を讀めば、この間の消息を覗ふを得べし。かくて中流以下に、又は地方に傳りし傳說は、今や文學の上に現れむとす。但しこれは旣に今昔物語に、また軍記に現れし事なきにあらざりしかども、なほこれらは多少の彫琢を加へられて、本來の初なる姿を留めざりしに、今や更めてこゝに上古のまゝなる傳記口碑は紹介せられむとす。

改めていふ迄もなき事ながら、一般民衆の文明の歷史を知らむとするに、普通の歷史のみによりては興味も價値も少かるべし。鉛垂線的に時の古今を見ざるべからざると同時に、平面的にまた所の都鄙をも見ざるべからず。わが國太

古の風俗人情を知るには、古事記、日本紀などによらざるべからざるは、いふまでもなき事ながら、また文明の空氣の侵入せざる偏部の地方を見るべきなり。古代神話と今日の野蠻人の間に殘れる傳說とを比較して興味ある所以また實にこゝに存す。而して室町時代の小說に古來の傳說を見るが興味ありといふもまた、この點にあるなり。

されどこの傳說も京都文明の空氣に觸れたり。全然もとの姿にはあるべからず。また外國文明の影響もあるべし。支那文明の影響は特に注意すべし。殊に謠曲が元の雜劇より出でしことは何人も認むる所なり。室町時代は明との交通頻繁にして、雪舟など支那に學びて盛に支那風の繪を書けり。詩も發達せり。物語にも李娃傳あり、こは白行簡の義妓傳を譯せしものなり。また百合若傳說はホーマーのオデッセーに類似せり。(これに就いては早稻田文學新第一號に坪內逍遙氏の考證見えたり。)戰國時代に南蠻との交通ありし時輸入せられたるものか。兎に角、百合若といふ名は從來の軍記物に見えざれば、外來のものたることを信じて可なるべし。かゝる意外の邊に外國文化の影響あることを忘るべか

らず。

今一つ注意すべきは、古傳說を材とせりといへども、後世の意味の復古にはあらず。從來のものの入り込みをれるなり。卽ち平安朝の物語はもとよりその著しき分子を占む。而してまた謠曲の如く戰記を材料とせるもあり。すべてこれらを合せたるものにて、特筆すべき程のものもなく、時代の前後も分明ならざれば、むしろこれらは分類して論ずるを便なりとす。

室町時代の小說は御伽草子と舞の草子とを主なるものとす。普通にいふ御伽草子とは、文正草子、鉢かつき姬等二十三篇に對する名稱なり。こは德川時代の中頃まとめて版本とせることあり。明治二十四年今泉、畠山二氏の校正にて二册に飜刻せり。これらはもとより一時になりたるものにあらず。萩野氏は新編御伽草子の解題に、

酒顚童子双紙は大江山繪詞ともいひて、兼好法師の筆なるものありといへば、東圃云、このこといかがあるべき。南北朝の比のものなるべく、第十六猫のさうしは慶長七年の文見えたれば、德川氏の初世のものなり、云々

といへり。而してまた、

貞享二年の廣益書籍目錄に、この內の草子を盡くのせたれども、叢書としての御伽草子の名をば記さず。或は元祿の頃にや名づけつらむ。そは尙考ふべきことなり。

といへり。而してなほこの外に、同じ類の書の木版になれるも少からず。されば、御伽草子の名は、必ずしも二十三篇に限れるにあらず、更にこれを廣義に解して、室町時代より戰國時代に亘りて出でたる御伽噺の性質を帶びたるものは皆これを御伽草子と名づくるを得むか。これらが德川時代に至りて、假名草紙となり、浮世草子となり、更に八文字舍本と移り行けり。

舞の草子は幸若舞の詞なり。これを小說の中に入るゝは如何といふ人もあらむ。然り、こは一種の戲曲に相違なし。さりながら外國の戲曲などの如く、日本のは物語との區別明ならず、「歌ふ」といはずして、「語る」といひし位にて、面白く朗讀する程度に過ぎざりしならむ。よりて便宜上御伽草子と共にこれを小說として論せむとす。しかのみならず舞の草子と御伽草子と一致せるものも尠から

ず。性質の上より見るも亦二者の間に甚しき相違あるにあらず、たゞ舞の草子は時代物多く、御伽草子は禽獸を擬人化せる小兒騙しのもの多きに過ぎず。舞の草子は、貞享書籍目錄に三十六あり。群書一覽も同數なれど二箇の出入あり。他に現存するもの四種あり。卽ち今殘れるものすべて四十二篇なり。版本は寛永のもの、明暦のもの、またその外のもあり。一部を出したるも全部を出したるもあるべし。但し今具足して傳はれるは罕なり。上田氏の舞の本に十五曲あり。新群書類從に四十一曲をそろへたり。なほそれらの解題を見るべし。(幸若舞の傳來についてはこれらの解題に記する所、又は歌舞音樂略史、また泝りては嬉遊笑覽等を見よ。口碑に、桃井播磨守直常の孫宮内少輔直詮の幼時幸若丸といひて仕出でたるものと傳ふるが、俄に信ずべからず。)

萩野氏の校訂にかゝる新編御伽草紙(二冊)は、舞の本、十二段草子、御伽草子等すべて二十篇を網羅せり。解題あり。平出氏の室町時代小說集は小說十七篇を集む。こはあまり行はれざりしものを特に集めたり。詳しき解題あり。なほ續群書類從、丹鶴叢書、續史籍集覽等にも散見す。解題書には、長谷川氏の古代小說史あ

り。墨水遺稿古物類字抄は解題なけれども、參考となるべし。

第二章　室町時代の小說(二)—戀物語

こゝに戀物語といふは、男女間の情事を寫せる平安朝式の物語をいふ。この類に屬するもの數篇あり。いづれも一定の型あるが如し。その代表作と見るべきものは忍音物語なり。

忍音物語。　この物語は頗る石淸水物語に似たり。相愛の男女ありて深く契りしが、男の父はその子のために別に富貴の家より妻を迎へて、一家の利達をはからむとし、二人の間を割く。女は詮方なく母と共に親しき人の許に身を寄せて世を忍ぶ。男いたくこれを悲み、細々と文したゝめて女の許に送り、おのれは出家す。女悲みて常に忍び音に泣きてのみゐるを帝御覽じて女御に召す。女はじめは應せざりしが、仰せもだしがたくて、遂に入内して女御となり、後皇后と

なる。かゝる因緣ありしかば、これも別れざるべからざるさだめなりけむとて男はいよ〳〵道心堅固に行へりと。これこの篇の梗概なり。主人公の出家すること、石清水物語の筋に似たり。これ最も多く行はるゝ室町時代の小說の定型なり。忍び音物語の名は月詣集、色葉集、八雲御抄に見ゆ。されば平安朝のものなる筈なり。然れども風葉集に忍音物語の歌としてあげたる二首は、今の忍音物語になし。されば春村は風葉集時代の忍音物語と現存の忍音物語とは全く別物なるべし、さるは風葉集の二首の歌の今本に見えぬのみならず、詞づかひも「案内せさせ給ふ」とあるべきを案内させ給ふ」といひ、「佇みありき給ひつらむ、とあるべきを「佇みありき給ひつらめ」といひ、「しつるかな」とあるべきを「しつかな」といひ、「おはする程」とあるべきを「おはす程」とあるなど、いづれも近世の事づかひと見ゆれば、必ず文明頃などのもののなるべし。もとより轉寫の際の誤もあらむが、なほ「若君」を「若」とのみいひ、「かつは」を「かつうは」と延べ、「うき事」を「物うき」といひ、「笛ばかりなつかしきはなし」を「笛ほどなつかしきはなし」といへるたぐひ、後世のものたるを知るべしといへり。但し、春村は古の忍音と物語と今の忍

音物語とは全く無關係のもの如くいひをれど、余は却つて今の忍音も事實の點に於ては古のものと同じきものにして、たゞ漸次改竄せられて現存のものとなれるものならむと信ず。風葉集中の二首の歌も、その挿入せらるべき場所大凡は推知するを得。若し後人が全く新に作り出でゝ、名のみ異なれる古人の作に擬したるものとせば、いかんぞ風葉集中の歌を採らざるの理あらむ。

櫻の中將物語。　櫻の中將故大宮大納言の女を愛したるに、中將の父は、別に權勢ある家より嫁を迎へて、人をして大納言の女を追はしむ。中將悲みてその行方を尋ね、遂にその住吉にあるよしを聞きて尋ね行けるに、姫君は三日前に歿したるよしを聞き、出家す。これを前の忍音物語に比するに、女が一は女御となり、他は死せることの相違あるのみにして、殆ど同じ筋の物語なり。室町時代の末になれるものならむ。德川時代に版本となれり。

若草物語。　按察大納言の息少將從妹若草に契る。少將の父時めく人の女を少將に妻せ、若草を取り隱さむとす。若草宇治に入水して死す。少將長谷の觀音に祈りて姫の死を知り、己の子を妹に托して出家す。これまた、結構大體に於て忍

音物語と相似たり。終に、

是につけても世の中の慾に限なきは、必家を失ふ也。又女のあまりたんきたるもわが身を失ひ、人を必ずそこなふもの、云々。

とあり。かゝる敎訓的の辭を添へたるは、平安朝の物語には勿論、鎌倉時代の物語にも見ざる所なり。これも室町時代末のものならむ。

雨やどり、(一名**時雨の緣**。) 二條萬里小路左大臣に兄妹の二子あり。兄の中將、ある時清水參詣の歸るさ、雨宿りが緣となりて、三條殿の姬君と契る。時に左大將某、おのれの女を中將に妻せむと欲し、三條殿の姬君を呪詛せしにより、中將は、左大將の女に通ひて、三條殿の女を忘れたるが如し。姬君は歎きつゝ日を送りしが、のち召されて女御となり、承香殿に居る。中將は後呪詛なりしことを悟りて遂に橫川に出家す。この書が、前の數書と結構殆ど同一にして、只異なる所は呪詛といふ人爲の細工加りたる點のみ。かくの如く美人は何處までも善人となし、呪詛などの外面的原因を借り來るにあらざれば、人情の反覆を寫すを得ずと思惟せるは、趣味の墮落し來れる一證にして、德川時代の小說の萠芽をあ

らはせるもの、平安朝時代の小説には見ざる所なり。終に、姫君の御果報、中將殿のまことのみちも、これ皆清水の觀音の御利生也、云々。例の御伽草子風の佛敎的意味を加へたる所、室町時代の末のものなり。

室町時代の戀物語は、この忍音式のものを最も多しとす。その特色は、

(一)父子意見を異にし、父は富貴の人の女を娶らしめむと欲し、子は愛情を主張す。平安朝の風俗には、多妻(又は一人の本妻と多くの妾)をゆるしたれば、小說にも彼もよしこれもよしといふ風見えたれど、この時代に至りては、一夫一婦の風に變り來りたれば、物語もまた形式は平安朝の物語の風を墨守して、男が女の許に通ふを寫すことあれども、なほ一夫多妻の風を寫すことをも踏襲せむことは、當時の人情の許さざりし所なるべく、さてこそ父の欲する女を入れむとすれば、愛情を犧牲にするの止むを得ざることを寫すこと多きに至れるなり。

(二)戀人を失へる女は、初こそ忍音に泣けども、遂には時の帝に從ふか、病死するか、さなくば自殺を遂ぐ。而もその死は情の切なるがかめにして、後世の女の

死して貞操を全うする類にはあらず。著者はむしろこれを短氣なりと評して與せず。思ふに、佛教の盛なる時代なれば、女をたゞ弱くはかなきものと見て、これに對して、後世の如く貞操などいふ嚴格なる道德を要請せざりしなり。

(三)戀人を失へる男は皆出家す。こは鎌倉室町兩時代を通じての一大特色なり。なほこれに屬せしむべきは次の狹衣なりとす。

狹衣。　こは殆ど平安朝の狹衣を踏襲したるものにて、中將と飛鳥井の姫君との事を記して、他を省けり。中將には幼時よりの許緣の源氏の君あれども、これを好まず、外に愛する女あり。ある時太秦を通りかゝりて飛鳥井の姫君が法師に挑まれをるを助け、己の好む女に似たる故にてこれを愛す。しばし訪はざる間に飛鳥井の姫君は中將の家來筋にあたる某の妻となりて九州に下り、その途中船中より入水す。一僧これを助けて京都につれかへる。中將これを聞き尋ね行きたるに、姫君はすでに病歿せり。大將は日記などを見てあはれむ。後中將はますます榮えたり。以上は平安朝の狹衣の梗概なり。室町時代の狹衣は一旦

病死せし飛鳥井の姫君が再び蘇生し、しかも一度地獄を見て來たればとて出家し、中將もまた共に出家することとせり。即ちこの異なる點が、やがて平安朝の物語とこの時代の小說との特色の差異を明白に示すものといふべし。

室町時代の小說の後をうけて江戸時代の初にいで、恰もこの二期の連鎖となれる觀あるは、恨之助草子及び薄雪物語なり。こは江戸時代に至りて說くべきものなれども、この時代と江戸時代との連絡を示さむがために、便宜上左にこれを略說すべし。

恨之助草子。 葛野裏見の助と雪の前との情事を記す。雪の前歿するや、その侍女皆追腹を切り、裏見の助も自殺し、その友もまたこれに殉ず。見るべし、戀人の死後その菩提を弔ふを常とせる佛敎趣味の室町時代の小說は、追腹を切るといふ武士氣質を描けるものに移り行けるを、殉死は四代將軍の時禁ぜらる。その文章は古文を摸し、無意義なる美辭麗句を連ねたる極めて厭ふべきものなり。本文の中に「慶長九年の夏の末云々」の文あり、慶長十四年頃の作なるべしといふ。種彥の好色本目錄を見よ。

薄雪物語。 園部左衛門清水にて薄雪姫を見染めしに初り、うちしきりて戀文

を贈る。その戀文を多くのせていはゞ艶書集の如きものなり。かゝる書簡體の小説はこの後大に流行せり。かくて戀は二人の間に成立せしが、薄雪姫病死せしために、左衛門は出家せり。こは室町時代の小説の餘波をうけたり。

花の名殘。　男を內藏介、女をお照の前といふ。內藏介死してお照の前侍女とともに出家す。これも江戸時代のものと思はる。

宮戸川物語。　持氏の外孫賴仲と藻屑といふ女との情話なり。賴仲京に出でゝ池薗大納言の女藻屑と馴染み、鄉に歸りて宮戸川の邊に死す。その塚を業平塚といふ。今業平といはれしが故なり。藻屑これを尋ね來りて死す。藻屑の母北の方もまた尋ね來りて死し、女の生める子のみ一人殘り、父母の菩堤のために池薗山菩提寺を建てしといふ。忍音物語の系統をひけるものにして、一面緣起めきたるものなり。挿繪は菱川風なり。同じ頃の著ならむ。

これを要するに、相慕へる男女の間意の如くならず、一人は他人のものとなり、または死して、ために殘れるものは出家するといふが、室町時代の戀物語の定型なり。而してその趣向も源氏物語、狹衣の如き平安朝の小說の一節を取りて

これを敷衍せるに過ぎず。

第三章　室町時代の小說(三)—兒物語

男色の起源は詳ならず。或は源氏物語の光源氏の小君に於けるはこの關係なりといひ、或は古今集中の歌を指して男色のことを歌へるものなりといふもあれど、遽に信ずべからず。この事古く僧侶の間に行はれ、男女間の情交を禁せられたるがもととなりて、こゝに破倫の所行を演ずるに至れるが、後には柔弱を嫌ふ武家の間に廣く行はるるに至りぬ。馬琴は美少年錄、巡島記等に男色のことを論じたれり。この男色を主題とせる戀物語、卽ち兒物語の多きは、室町時代ほど盛なるはなし。而して當時のすぐれたる作品は多くこの中にあり、忍音物語の類に比して遙に特色あるものなり。續史籍集覽に、兒物語部類あり、ついて見るべし。

秋夜長物語。　こは瞻西上人の名をかりて作れり。瞻西若き時(後堀河天皇の頃)叡山にありて桂海律師といふ。ある日石山に詣づる途にて、三井寺聖護院の稚兒梅若丸を見染めて契を結ぶ。梅若一日桂海を尋ねむとしたるに、天狗に捕へ

られ石室に押し籠められたり。三井寺にては梅若の失せたるに驚き、父の花園家に隠れをるならむとて、これを圍みて燒き、また叡山にありと聞きて叡山を攻む。茲に兩寺の戰爭となりて、爲に三井寺は炎上せり。この時梅若は漸く石室より脱し來りしかど、この樣を見て、瀨多の大橋より入水す。桂海これを聞いていたく悲み、その後世を弔ひ、身を卑うして高野山に到り、佛道を修行し、終に東山に雲居寺を建てゝ、茲に殘生を送りぬ。瞻西上人これなり。その趣向若草物語と殆ど同じきを見る。瞻西上人は金葉集、詞花集にあらはれをる作者なれば、後堀河天皇の世の人といふはもとより誤なり。また雲居寺もこれより前に造營せられたれば、この物語の史實と毫も關係なきものなることを知るべし。この物語は、兒物語中最も早く出でたるものの如し。俗說辨及び塞川辰淸の近江輿地誌略には、愛護若の傳說はこれより作りたるものといひ、馬琴は更に一歩を進めて梅若傳說もこれより出でたりといへるが、皆非なり。思ふにこれらはいづれの物語より出でたりといふことなく、たゞ同じ樣なる物語が當時に多くありしなるべし。

鳥部山物語　武藏國の僧にて民部といふもの京に上りて、中納言の若君藤辨といふ少年と親みしが、民部東國にかへりし後、藤辨はこれを戀ひ慕ひ、ために病を得て歿せり。後民部再び都に上りて、このことを聞いて悲にたへず、鳥部野の墓前にて自殺せむとせしが、それもえ遂げず、北山に草庵を結びてわびしく世を遁れりといふ筋なり。趣向殆ど櫻中將物語と同じ、春村は應永より應仁に至る間の頃のものならむといへり。

これに類せるものは花の緣なり。この物語は江戶時代のはじめに成れるものなるが、趣向は全く鳥部山物語を剽竊し、たゞ男色のことを男女間の情に改めたるのみ。卽ち民部を左京とし、藤辨を大和屋の何某の娘とし、東山の墓前にて自殺する事とせり。この書寬文六年器之子の奧書あり。文章は可なりの出來なれども、鳥部山物語の文をそのまゝに引用せる箇所もあり。この男色のことを男女の情事に改めたるは、當時稍〻男色の衰へし證とするに足るべし。又自殺を遂げたる事に改めたるも、江戶時代の色彩を現せるものなり。

松帆浦物語　宰相君と藤侍從との情話なり。この二人契濃なりしに、時の太政

大臣の子左大將、侍從を見染めて遂にこれを奪ふ。されど侍從は宰相の事を忘れ得ずして沈み勝ちなり。大將遂に宰相を松帆浦に流す。侍從その跡を慕ひてたづね至れば、七日前に宰相は死せり。侍從は世をはかなみて出家すとなり。卷末に兼載在判とあるが、渠の寫ししものなるべしと春村はいへり。（兼載は宗祇の弟子にして有名なる連歌師なり。）應仁前の作なるべし。

嵯峨物語。　中納言康直の子松壽といふ稚兒を嵯峨の奥にすめる一條郎といふもの契りゐたり。松壽は父康直の歿後中納言康則といひて、帝に寵せらる。一條尙思ひ棄てず、康則もまたその許へ通ふことをしるせり。春村は文明頃のものならむといへり。

幻夢物語。　大原の奥に幻夢といふ僧あり。叡山に參詣せしに、傍に一美少年の參詣せるを見て、これと連歌を詠みかはし、別るゝに臨み、少年明日なにがしの坊に訪ね來れよといふ。幻夢翌朝坊を訪ねしに、その人はあらずして、日光の竹林坊の侍從といひて尋ねくれよとの傳言あり。幻夢日光に下り見るに、月夜に笛を弄しつゝ侍從の來るに會ふ。種々物語の末、侍從ははや此世になき人なり

といふ。怪みて竹林坊に行きて見るに、住職その位牌を示す。猶その語るを聞けば、侍從はもと太夫左近將監の子花松といふものなるが父が小野太郎兵衛に討たれたるを以て、先頃花松太郎兵衛を討ちて父の仇を復したるが、おのれもまた太郎兵衛の子に討たれたりといふ。幻夢は世をはかなみて、愈、佛道に志深し。一日初瀬に詣でたるに、小野太郎兵衛の子に出會したりしが、これまた親をうたれ、花松を殺したるを歎きて出家したる由を物語り、二人懷舊の涙に咽びぬとなり。この書奥書に文明十六年寫とあり。文中、秋の夜長物語の句を引用せるを見る。

辨の草紙。 刊本なし。日光の昌信法師の生立を書けり。昌信は大輔公といふ僧に愛せられたるが、僧の歿せしを歎きておのれも死せりといふ筋なり。室町時代の末のものなるべし。

藻屑物語。 これは、江戸時代のものなれども、室町時代の兒物語の名殘を留めたるものなれば、こゝに併せ説くべし。この書燕石十種中に收む。瀨川采女といふもの、伊丹右京といふ美少年を慕へり。采女が兄弟の如く親しうせる志賀左馬助といふも

のこれが媒をなす、然るに細野主膳といふ惡少年また右京を慕ふ、右京遂に主膳を殺して己も自殺す、釆女また右京の死を歎きて自殺す。左馬助のみは自殺せざりしかば、世の物笑となり、遂に刑罰をうけぬ。文中寛永十七年云々などありて、全く事實めかしてかける物語なり。

これを要するに、兒物語もまだ大體に於て戀物語とかはることなく、千篇一律、主人公の出家に終るを常とす。德川時代に至りて、武士的となり、頗る殺伐なるを見る。

第四章　室町時代の小說(四)――嫉妬物語

附　遁世物語

我が日本の社會制度は夫婦關係よりも親子關係を重んずること甚しく、特に鎌倉室町時代及び德川時代にありては、婦人は非常に低き地位にありて、妻妾は單に後繼の子孫を得るためのものとのみ思はれたり、從つて、一夫多妻の風

益、盛なるに至りし結果、婦人の嫉妬を以て甚しき罪惡と認むるに至りぬ。婦人の嫉妬を題目とせる小說の特にこの時代に多きは怪むに足らず。

藍染川。　大內に仕へし女房に梅壺侍從といふあり。折節在京の筑紫安樂寺天滿宮の神主中務賴澄と契りしが、賴澄は國許の妻病めりとて下りしが、その後沓として音信なし。侍從は一子梅千代を育てけるが、あまりに父を慕へば伴ひてはる〴〵太宰府に下る。かくてその地につきて、左近丞なる者の家に宿り、文を宿の主に托して、この由を賴澄に知らしめたるに、折節賴澄不在にて、妻その文を見て大に怒り、左近丞を脅して母子を追はしむ。侍從親子は身を托するに所なく、遂に藍染川に投せしが、折よくも賴澄通りかゝりてこれを救ひあげ、天滿宮に祈りてからくも蘇生するを得、茲に父子夫妻再會して末めでたく榮えしといふ。中に天滿宮の緣起を挿めり。例のめでたし〳〵に終るところ、室町時代より江戶時代にかけての特色をあらはせり。謠曲にも同じ題目のものありて、事實も殆ど相似たり。謠曲の大部分は義滿より義政の頃に至るまでに出來たるものにして、御伽草子より前の產物なり。されど謠曲の藍染川は極めて新

しきものの如くなれば、その前後は俄に斷言しがたし。また謠曲及び說敎に刈萱あり、この前後もまた定め難きが如し。筑前刈萱殿の子松若母と共に父を高野山に尋ね行きしが、母は死す。稍〻この藍染川に似たる所あり。但し御伽草子には刈萱なし。

佐伯。御伽草紙にあり。外題さいかきとあれども、本文中の名字は佐伯にて、書籍目錄にもさいきとあり。豐前うだの佐伯某一族に所領を橫領せられ、訴訟のために京に上り、淸水に參籠の折一人の美女を見そめて、遂にこれに契る。めでたく訴訟すみて、別を惜みて歸國し、三年經たれども迎をおこさず。よりて行脚の僧に托して文をおくる。たまたま夫鷹狩に出でゝ家にあらず、妻これを見て、かゝる事は男の常、嫉妬は女の愼むべきことゝ、我は京の妹を迎ふるなりといひて、これを招く。京の女喜びて下る。妻その容姿の美しきを見て、今更に嫉妬の情抑へ難く、かゝる女に契りては定めて京にては我をば思ひ出さざりしならむ、かゝる賴しからぬ男を賴みしこそあさましけれとて、出家す。京の女、高きも卑きも、女は嫉妬深きものといふに、やさしき擧動かなと感じて、己も剃髮して尼と

なる。佐伯もまた出家して高野山に登る。これ清水觀音の方便にして、かくして三人とも往生の素懷を遂げ、彌陀、觀音、勢至とあらはれたりと、御伽草紙一流の佛敎に引きつけたり。

七人比丘尼。 こは、信州善光寺にて、尼が風呂の攝待をなすに、ある夜七人の比丘尼集りて身の上話をする趣向とし、七つの物語を含めり。室町時代の末のものならむと思はる。中に二つの嫉妬物語あり。

（一）三池殿。 三池殿は筑後の三池殿の北の方に仕ふる女房なり。その物語に、三池殿訴訟のために京に上りしが、その後久しく音信なし。よりて北の方にすゝめて、藤若丸を伴うて三人都に上る。然るに夫三池殿は越後栖吉を賜りてかの地に下れり。よりて越後に下り、宿の主人に托して文をやるに、折節三池殿不在なりしが、夫がこゝにて迎へたるあだし妻、その文を見て、主人の言に托して母子を追ふ。妻水に身を投げて死す。たま〳〵三池殿來りて父子の對面をなし、三池殿は子に後を讓りて出家す。北の方に從ひし己もまた出家したりとなす。思ふにこの物語殆ど藍染川の通にて、たゞ女房の蘇生せざるだ

け自然に近し。

(二)菊井殿。 菊井殿は阿波の國菊井右近の御臺なり。その物語に、夫都に上りて三年を經て歸りしが、若き女房を率て來れり。われはとかく忍び居りしに、夫は次第にわれを疎みしを以て、嫉妬の心もゆるが如く、鱗生じ、角はえて、生きながら蛇身となる。一夜泊りし僧に憎きものを殺す法やあると尋ねしに、却つて本來の妙相に歸する法を聞きて邪念の雲はれ、やがてその僧の弟子となりぬとなり。

橋姫物語。 時代詳ならず。古今集戀部に、

さむしろに衣かたしき今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫。

とあるを骨子として作れる物語なり。昔中將なりし人難波邊にありて、二人の妻をもてり。その一人を宇治の橋姫といふ。この女房懷妊して、惡阻のために五ひろの若布をもとむ。中將これを得んとて海に出で行きたるまゝ歸らず。後橋姫子を抱きつゝ夫をたづねて海邊にさまよふ。ある夕道に迷ひて、破屋にやどり、あるじの嫗にわが身の上を物語りしに、嫗は中將が今龍宮にあることを告

げ、鍋の中を覗くことなかれといひて去る。橋姫嫗の言を堅く守りて待ちてありしに、やがて老婆は中將を連れかへれり。中將は瘦せ衰へてありしが、絶えて酒食を口にせず「さむしろに」の歌を口吟む。やがて再會を契りて去る。橋姫いま一人の妻もまた夫に逢はまほしかるべしと思ひて、このよしを告げたるに、その女房また嫗の家に至る。女房嫗の不在に乘じ、その戒を守らずして鍋の中を覗きしに何物もなかりき。やがて中將あらはれて「さむしろに」の歌を口ずさむ。女房嫉妬の念にたへずして、狂ひまはりしに、ありと見し板屋も夫も忽ちに消えうせて、身はたゞ一人茫々たる松原の中に立てり。その後はたえて中將のたよりなかりきといふ。なほ古今集には、

千早ぶる宇治の橋姫、なれをしもあはれとぞおもふ、年の經ぬれば。

の歌あり。今も平等院のほとりに橋姫神社といふ小祠あり。川向ひの宇治の離宮の神が通ひ來るなりといひて、嫉妬の神の如くなれり。この橋姫物語の事實は、顯註密勘、色葉集、八雲御抄等に見えたり。密勘にいふ、

先人（俊成を指す。）幼稚の時はし姫と云し物語をめのとのよみてきかせしが、哀に

おぼえて落涙、成人の後見ばやと思ふに、その物語不₂尋得₁、其に此歌はありし也と申されき、云々。

春村は一旦中絶せしならむといへり。されど現存の物語は平安朝のものなりや疑問なり。或は顯註密勘等を見て、それに基きて今の橋姫物語は作られしものか。但し話の筋は平安朝のものと大差なきが如し。思ふに、瘤取、舌切雀の如き人眞似して失敗する御伽噺風の物語は、もと平安朝下流に行はれしを、當時上流に流行せる戀物語に壓せられて後世に淺らず、たゞ口碑によりて傳れるが、後に至りて今昔物語、宇治拾遺物語等にあらはるゝに至りしものならむと思はる。橋姫物語またこの類にあらざるか。(別に江戸時代に至りて、如慶のかける橋姫物語あり。)

(附)福富草子。　物羨みして失敗する話の有名なるものは、繪卷物の福富草子なり。福富織部といふもの放屁して金儲けをなす。隣家の老翁羨みてこれをまねて失敗し、福富を呪ふといふ筋なり。その他舌切雀、花咲爺などは皆この類なれど、口碑に傳るものの多き割に、物語に書かれたるものは少し。

概言すれば婦人の嫉妬を題目とせる物語は橋姫物語の如き、平安朝より傳れ

るものは別として、多く遁世に終るをその通型となす。極言すれば、嫉妬を寫すといふよりも、遁世を描くがその眞の目的なりといふを可とするに似たり。なほ左に、嫉妬とは關係なき遁世物語二篇を說いて、この章を終ふべし。

三人法師。 室町時代の中頃のものが。高野山にて三人の法師集りて、おの〳〵その身の上の物語をなす趣向にして、七人比丘尼はこれに倣へるものの如し。三人の內の最後のものを篠崎六左衛門といひて楠氏に仕へしが、正儀が北朝に降りしを諫めて聽かれざりしかば僧となる。後故鄕にかへりたるに妻は三日前に死し、小兒二人後に殘れり。父と知らずして讀經を乞ふ。父と名乘りたきは山々なりしかども、心を鬼にして名乘らずして去りぬと。

朽木櫻。 二條大納言の御內にむねのぶ、むねやすといふものあり。宗信は奧州、宗安は筑紫のものにして、兄弟の如く親み、忠勤を勵みしが、相共に無常を感じて出家せむとす。花見の翌朝宗信宗安を訪ひしに、宗安頓死せり。宗信いよ〳〵無常を感じて出家す。後に殘れるは女の兒のみ。家は沒收せられて妻子困難を極めし末妻は死せり。そこへ宗安入道かへり來りて親子の名告をなす。時に舊

主人の臣來りあはせて、宗安を主家に歸らしめむとす。宗安子をこれに托して、おのれは道心いよ〳〵堅かりきとなり。前半は西行物語に似、後半は三人法師に近く、これに室町時代の色彩を加味せるものなり。

第五章　室町時代の小說(五)―繼子物語

附　嫁いぢめ物語

前章に說ける婦人の嫉妬を題目とせる小說は室町時代に多く見る所なるが、それよりも一層多く行はれたるは、繼子物語なり。嫉妬と繼子いぢめとは、もと同じやうなる動機に出づ。即ち他の妻の子を惡む一種の嫉妬に外ならず。而してこれが數に於て彼を凌駕せる所以は、一は、夫婦關係よりも親子關係を重んずる事殊に甚しかりし當時の社會にありては、人の同情を惹くこと一層多かりしにもよるべく、一はまた、御伽草紙が兒童の讀物なるにもよるならむ。この種の物語の最も古きものは平安朝に於ける落窪物語なり。世人動もすれば落

窪物語を以てこの種の物語の源となし、後代に出でたる繼子いぢめの物語は、すべてこれより出でたるものなりと思へり。もとより鎌倉時代の住吉物語の如き、全くこれを摸倣せるものなることは否むべくもあらず。さりながら後代に出でたる繼子いぢめの物語のすべてを、落窪より出でたりと斷ずるは甚だ早計なりといはざるべからず。余は思ふ、繼子いぢめの物語は、落窪物語を外にしては、平安朝の小說に類を見ざる所なれども、民間の說話中には多く行はれたるものにあらざるか。偶〻かゝる說話の一つが上流のことに托せられたるもの、即ちこの落窪物語にはあらざるか。更に疑ふ、室町時代に現れたる多くの繼子いぢめの物語は、作者の想像、もしくはこの時代の想像に成れるものにあらずして、平安朝時代より民間に流傳せる說話が、この時代に至りてはじめて文學として現れたるにあらざるか。但しこの時代の趣味の附加せられたること、もとより論なし。

總じて繼子いぢめの物語は、平民文學の最も原始的のものにして、萬國通有のものなり。グリムのメールヘンには、繼子いぢめの物語頗る多く。支那にもまた

少からず。二十四孝中にもいくつかあり。さればこれを以て日本特有のものとなすべからず。況や室町時代に特有のものとなすべからざるや論なし。これ余が、平安朝時代より既に早く民間に流布せるものならむと信ずる所以なり。繼子いぢめの物語の趣向は、多くは、繼母は惡人にして、その實子は概ね繼子に同情を寄するを常とす。德川期には、紅皿缺皿往古噺、盃石皿山記、皿々鄕談等あり。

小落窪。　新編御伽草中にをさむ。落窪物語の一部をとりて極端にせるものなり。澤野中納言の女に落窪の君といふあり。一人の上達部と契りしが、繼母憎みて父に讒言す。父これを逐ふ。姫六角堂に參籠して觀世音に祈り、その利生にて、戀人に再會せりといふ。平安朝の落窪物語が日常見るが如き出來事を材として極めて自然に描き出せるに反して、これは事實に遠ざかりて、荒唐不稽の甚しきものなり。かつ宗教臭味を附加せる所に、この時代の特色を見るべきなり。

秋月物語。　文鳳堂雜纂中にあり、單行本もあり。　室町時代小說集中にもこれを收めたり。京極大納言物語はこれと大同小異なり。京三條の帥大納言兼隆の女にあいきやうの君とあいしの君とあり。あいきやうの君は先妻の子にして、繼母に憎

まる、關白殿の二位中將姉姫を戀して文を通はす。繼母はおいしの君をおいきやうの君と詐りてこれにおはしめ、かつ侍女鬼かはらをして五藤次、金八を語らはしめ、おいきやうの君を海に投ず。筑紫の秋月の尼これを救ふ。二位中將清水に祈りて尋ね至る。趣向前半は住吉物語に似、後半は狹衣物語に似たり。

美人くらべ　五條宰相に二人の女あり。姉をのもせの姫、妹をしらんの姫といふ。共に美人の聞えあり。姉姫は先妻の子なり。丹波少將二人を見て、姉に心をよせ文を通ず。繼母怒りて姉を瀨田の橋より投せむとす、侍おはれみてこれを逃れしむ。熊野參りの尼これを助けて、信州伏屋の里に伴ふ。少將これを求めて七日が間住吉に參籠し、その利生によりて、信州に至りて姫君に對面す。宰相怒りて後妻を殺さむとせしを、のもせの姫哀泣して父を宥む。落窪物語にては、繼母は一度は仕返しをさるれども、後にはやはり一家にて睦じく暮すこととなれり。室町時代の繼子物語は極端に至らざれば止まず。即ち繼母は殺さるゝか、追放せられて乞食となるかを普通とす。この篇またこの傾向を認むべし。

つきみつ草子（月日の本地）　天竺まかだ國のやうこく長者、觀音に祈りてはう

王の君、さんそうの君といへる二子をおぐ。しかるに、二子幼き時母うせたりしかば、更に後妻を入れぬ。繼母この二子を惡みて殺さむとせしが、觀音の擁護によりて果さず。更に長者の留守に人をして海に沈めしめむとす。命ぜられしものの憫みて汐水島に棄てゝ還る。長者歸りてこれを知り、二子を迎へて、繼子を鬼が島に放つ。二子は佛の弟子となりて、日と月とに現る。

中將姫本地。　横佩右大臣豊成の女中將姫繼母に苛責せられ、後出家して當麻寺の蓮絲の曼姫羅を作りしといふ有名なる物語なり。

小夜衣。　刊本なし。平安朝の物語の體裁に倣へるものなり。按察大納言の女、山里の祖母の許にありて山里の姫君といふ。兵部卿宮これに通ひ給ふ。繼母はおのれの所生を入內せさせ、姉姫をおのが名代として妹姫につけて參內せしむ。帝御覽じていひより給ふ。繼母怒りて追ひはらはしむ。後姉姫は兵部卿宮と契り、宮卽位ありて皇后となりぬ。

一本菊。　右大臣の前妻の子に兵衛佐とその妹とあり。後妻にもまた兄妹二人の姫あり、二人の繼子繼母に惡まる。兵部卿宮菊の宴に兵衛佐が奉れる一本菊

をその妹姬のつくれるなりと聞き、これを召させらるゝより、繼母たばかりて、兵衞佐を鬼界が島に流し、姬君を幽閉す。後姬君は兵部卿の妃となり、宮帝となり給ふに及んで皇后となる、兄もまた關白となれり。三莊太夫の話をやゝ平安朝風にしたるものなり。かくの如く、繼子が兄妹二人なるもの、なほこの外に例多し。

繼子いぢめの物語につきて思ひ出さるゝは、三莊太夫の話なり。出羽の酒田に安壽姬、對王丸の二人が人買に拘引かされ、丹後の由良の三莊太夫に賣られ、苛酷に使役せられし話なり。德川時代の淨瑠璃にこの物語多し。思ふにこの話は、苅萱の話、梅若の話とともに、當時のものなるべけれど、皆、この時代の草紙中に見えず。

繼子いぢめと並びて說くべきは嫁いぢめなり。以下說く所の三種の草子は嫁いぢめと繼子いぢめとを合せたる如きものなり。

岩屋の草子。　對の屋姬ともいふ。中納言有末卿の女に對の屋といふあり。前妻の子にして繼母に憎まる。父、大宰帥になりて筑紫へ下る道にて、繼母子を海に

投ず。明石の岩屋の漁人これを助けて岩窟の中に養ふ。二位中將これと契りて妻となす。中將の母、他の子の妻はすべて富貴の人の女なるに、獨り中將の妻のみ素性いやしきを厭ひ、衣裝くらべを行ひ、これを恥しめて追ひ出さむとす。然るに美裝して出で、さながら天女と見紛ふばかりなるに、母も漸く心を折りぬ。かくて末めでたく榮えきといふ。衣裝くらべのことは次條に說く鉢かづき姬にも見ゆ。これらは、空想のみにあらじ。元祿の頃江戶の豪商石川六兵衞が、京の難波屋十右衞門と衣裝くらべをなさむがために、淸水に至りしことあり。室町時代にも或は實際に行はれしものならん。

鉢かづきの草子。　これは文正草子とならびて、御伽草子中最も有名なるものなり。御伽草子は當時多く婦女子の愛玩せしものにして、從つて女はおのれの理想を草子中に求めたれば、この鉢かづきは末めでたく榮ゆる緣起よき話なればゞ、特に持て囃されしなるべし。交野の邊なる備中守さねたかの先妻の腹に一女あり、母死する時一つの鉢をかづかしめしが、その鉢はなれず。繼母に悄まれたり。後、中將の四男宰相に愛せられ、妻となる。宰相の母姬を惡みて、追ひ出さむ

ために衣裝くらべをなさしめしに、鉢おのづからはなれて、中より金銀財寶夥しく出づ。これ長谷觀音の利生なりとぞ。

花よの姫の草子。　駿河國富士の裾野の豊後守もりたかといふ長者の先妻の腹に花よの姫といふあり。繼母に憎まれ、うばが峯にすてらる。この里に、中納言たゞふさの退隱せるが家に、火たきとなりて住みこみたるが、(照手の姫の事に似たり、)たゞふさの末子宰相と契る。(宰相の母息子の嫁くらべをなす事あり衣裳くらべと同套なり。)　後宰相はもりたかの養子となりて、榮えたり。繼母は逃げて行方を知らず。

最も慘酷なるは吉崎の嫁おどしの話なり。越前の吉崎に夫婦あり、蓮如上人を信仰して夜々寺に詣づ。姑これを疑ひ、鬼面を被りて嫁をおどしたるに、この面顔の肉につきて離れざりしといふ物語なり。こは眞宗の說敎にてよく話す所にして、室町時代の話と思はるれど、御伽草子には見えず。當時の草子にては、嫁いぢめといふも、さして慘酷なることはなし。上の三つの物語の衣裳くらべなどにて直に機嫌を直すが如き、極めて淡白なるものにして、むしろ繼子いぢめが主となりをれるが如し。

第六章　室町時代の小說(六)――英雄說話

前章說ける所の繼子いぢめ物語は、一面より見れば求婚說話なりといふを得、英雄求婚說話は萬國共通のものにして、我が日本の神話にも、大國主尊、彥火々出見尊の求婚說話あり、繼子いぢめの物語はこれらの說話より怪談的の分子を去りて、平安朝式の自然に近き物語に作り改めたるものともいひつべし。されどなほこれらを外にして、別に英雄神話の迹をうけたる純然たる英雄成功說話、英雄求婚說話この時代の草紙に多し、而してこれらはむしろこの時代の得意なる作物ならむ。思ふにこれらは民間に行はれし單純幼稚なる姿を、そのまゝに寫し出ししものにあらざるか。中につきて最も單純なるは桃太郎の話にして、口碑によりて傳り來れるものにして、御伽草子の中には見えず。

御曹子島渡り。　義經がいまだ牛若丸といひて、秀衡の所にかくまはれ居たる頃、千島に渡り、笛を吹いて大王の館の邊を逍遙ひて、大王の女朝日の天女因にいふ

當時の小說の美人の名に朝日の前といふ名甚だ多し。と契り、大日の法の一卷を盜む。天女義經を逃れしめ自ら代りて死す。鬼一法眼三略卷と同じ話なり。義經遁れて日本にかへり、この法によりて思ふがまゝに平家を平げたり。天女は江島辨天の化身なりといへり。義經の蝦夷渡り朝比奈の島巡りの話も、この系統をひけるものか。

田村の草紙。坂上田村麿の話を牽强附會せしものなり、藤原俊すけ益田が池の大蛇と契りて日りう丸を生む。日りう丸長じて俊仁將軍といふ藤原利仁の事か。俊仁堀川中納言の女照日の前と契り、陸奥田村鄉に赴きて惡路王を平ぐ。東鑑文治五年九月の條に谷窟に惡路王といふ賊ありしを、利仁これを平ぐとあり。古く傳りしことなるべし。田村鄉に生れし子即ち田村丸なり。田村丸は後に坂上俊家といひ、唐土を征せむとして果さず、後鈴鹿の大竹丸を征す。靈夢の告にて天女鈴鹿御前と契り、その助によりて大竹丸を誅し、また近江の國の高丸といふ賊を奧州まで追ひ行きて、誅す。鈴鹿御前死したるを俊家冥府に赴き、連れ戾りて二世の契を結ぶことあり。玉依姬、武甕槌命の神話を襲ひし痕跡を見るべし。

立烏帽子。新編御伽草子中に收めたり。坂上田村五郎利成鈴鹿の化生の女賊

立烏帽子を平げむとす。立烏帽子その夫たる陸奥の阿黑王を厭ひ、これを殺しくれなば、御身と契らむといふ。是において利成神通の鏑矢にて阿黑王を殺し、立烏帽子と契れりとなり。杉原本保元物語、白河殿夜討の條に、山田小三郎が自ら名のりて、鈴鹿山の立帽子を搦めて院の恩賞に預れる山田庄司が末裔といへり。さればこの物語のもとも古くより傳れるなるべし。

貴船の本地。　新編御伽草子中に收む。侍從忠平といふ色ごのみあり、未だ曾て一人のおのが意に適ふ女を得ざることを憾とせり。或日内裏に扇合のありし時、扇の繪に書ける美人に懸想し、それより病となり、出仕もせざりしが、遂に堪へかねて、扇の主なる源氏の大臣に、これを描ける繪師の何人なるかを問ふ。大臣笑ひて曰く「鞍馬の奥にみぞろが池といふあり。その池のほとりに大きなる穴あり。その中に鬼國あり。鬼國の大王に二女あり。その妹なる龍女といふはこの扇の繪よりも優れり」と、忠平これを聞いて、せめて夢になりともその女にあはまほしきものをと、鞍馬の毘沙門天に祈る、毘沙門天あはれみて、鬼の國の恐しきを諭せど、忠平さらに厭はずといふ。毘沙門よりて扉を開いて龍女に會は

しむ。龍女は忠平を鬼の國に伴ひ行く。かくて龍女は夫に代りて死し、忠平をこの世に歸すこととなる。龍女は後人間と生れて、忠平と二世の契を結びしといふ。この龍女は貴船明神、忠平はまらうどの宮とあらはる。これに加へて追儺、五節句の由來を說けり。

毘沙門の本地。 御伽草子に收めたり。天竺瞿婁國のせんさい王子なきを悲み、梵天宮に祈りて、一人の女を授けらる。玉姬といふ。摩耶國の王また子なきを以て、强ひて玉姬を求む。小國の悲しさこれを拒むを得ず、玉姬已むなく摩耶國に行く。玉姬旅立ちて七日目の日、旅宿にありて空をながむるに、一朶の雲下り來て、中より一人の美少年あらはれたり。維曼國の金色太子なりといふ。かくて二人は契をなし、太子は、姬を國にかへし、單身摩耶國に赴き、瞿婁國の使なりと詐りて後宮に侵入す。國王その武勇に驚き、これを養うて子とす。かくて留ること三年、玉姬は太子の歸り來らざるを悲みて遂にこがれ死す。太子夢に姬が梵天宮にあるを知り、求めてかしこに至る。日月星辰に道をたづねつゝ、十年にして梵天國に達し、黃金の井筒の傍に立てる桂樹にのぼりゐたるに、玉姬水を汲ま

むとてこゝに來り、水にうつれる男の姿を見て、再會を遂げたり。かくて金色太子は毘沙門天と現れ、玉姫は吉祥天女と現るといふ。太子が玉姫を求めて梵天宮に至る條は、長恨歌に、方士が楊貴妃を求めて蓬萊に至るに似たり。黄金の井筒の條は、古事記の彦火々出見尊と豊玉姫との傳説をそのまゝに取れり。

梵天國。　室町時代に出來て、德川時代の淨瑠璃に用ひられ、大にもて囃されしものなり。淨瑠璃の終には必ずこれを演じたりし故に、物事の終を梵天國といふ諺さへ出來たり。五條右大臣の子王若、中將たり。才藝人に勝れしを以て、梵天の姫君天降りて中將と契れり。帝この姫君を得むとてさま〴〵の難題を出し、希世の珍寶を奉るべきよしを中將に迫る。姫はそれらの寶を、一々梵天國より得て奉りしかば、帝の謀成らず。しかるに姫君中將の留守に捕はれて羅刹國に至る。中將羅刹國に至り、これを伴ひて逃げ歸りしが、都にあるもまた天皇の難題のうるさければ、避けて山中に隱る。かくて中將はくせどの文珠とあらはれ、姫は成相の觀音とあらはれたりといふ。大國主尊の求婚說話を模したるものの如し。

天稚みこ物語、長者の娘三人あり。蛇來りて我に與へよ、もし否まむには取り殺さむといふ。よりて末の娘をこれに托す。蛇來り、我を恐るゝことなかれとて、頭を切らしむ。その頭より美男天わかみこ出でて契る。去るにのぞみて、女に唐櫃を與へ、これを開くなかれといふ。さるを約に背きて開きしより天若みこ來らず、女尋ねて天に上る天わかみこの父は鬼なり、鬼が女を苦む。女を苦むること甚し。後、年に一度相契るを許す。七夕、彦星の本地なり、鬼が女を苦むる條は素盞嗚尊の傳說と同脈なり。艱難辛苦を受くる主人公が、女性となれるは、女子に聞かせむとてなるべし。貴船の本地の追儺、五節句の由來といひ、この物語の七夕の由來といひ、いづれも兒女のために年中行事を說明せるなり。

別本天わか彥物語。これは女二人ありて、末娘天稚彥と契る。帝妹の美なるを聞きこれを召す。妹にはすでに夫あればとて、姉を奉る。帝姉を喜ばず、これを虐待す。更に妹を召せども聞かず。次に皇太子即位して、また妹を召す。妹終に入內して、皇后となる。その子天に上りて彥星となれり。

猿源氏。伊勢國阿漕浦にさる源氏といふ漁師あり。京都に出でて魚を賣る、都

の遊君を見染め、關東の侍なりといひて、遊君を招く。寢言に魚の賣聲をいひしかば、漁夫なることをさとられて猿源氏と遊君との問答となる。さる源氏は歌の難題をよく解きしかば、遊君これに感じ、遂に伴はれて伊勢に下れりといふ。前々の物語と同じく難題をいひかくる物語なれども、これがやさしき歌の難題と變れるを注意すべし。

藤袋草子。寫本にて、一卷なり。これも求婚說話の一なり。一人の百姓田を耕せる時、勞苦のあまり、おのれを助くるものあらば娘を與へむといふ。一疋の猿來りてこれを助け、娘を伴ひ去りぬ。娘泣いてやまず、猿は山中に行き、娘を藤袋に入れて、樹に吊しおのれは食物を取りに去れり。その留守に父は獵師を伴ひ來り、娘を與ふることを約し、袋を射落して、娘を取り返さしむ。こは今昔物語に見えたる南山城蟹滿(カニマ)寺の緣起と同系の物語なり。

これを概觀するに、この時代の英雄說話は、神代の昔に立ちかへれるが如き單純なるもの多し。而して主人公が困苦をかさね難題を解いて、然る後女を得る物語は、西洋の求婚說話と似通へる所あり。これ後に江戸時代に至りて、變形し

て、武者修行と化物退治との結合したる岩見十太郎、宮本武藏などの物語とは
なれるなり。

第七章　室町時代の小說(七)──復讐物語

復讐小說はこの時代には思ひの外に少し。抑〻復讐の事は古よりありしことに
して、殊に蘇我兄弟の復讐以來、屢〻行はれたりしことと思はる。されどこれを忠
臣孝子の道として大に奬勵するに至れるは、江戶時代に入りて後のことにし
て、當時は後世ほど盛には行はれざりしなるべし。これこの時代に復讐小說の
多からざる所以ならむ。今一つの理由は、御伽草子は當時の時代を寫すものの
極めて尠かりしことなり。謠曲にても、望月、放下僧の如き、當時のことを材とせ
るもの、多少なきにあらねど、なほ古代の傳說を材とせるもの多きを數ふ。わけ
て御伽草子に至つては、その時代に觸れしものは、甚だ少し。されば復讐の事例
當時必ずしも甚だ少かりしにはあらざらむも、これを材とせる物語は比較的

少かりしならむか。

幻夢物語。　第三章兒物語の部にて說ける物語なり幻夢といふ僧叡山に參詣して、日光の花松といふ稚兒を懸想す。後日光にたづね行きしに、花松は親の仇を討ちしが、おのれもまた仇の子に討たれたる後なりきといふ。こは單純なる復讐の物語にはあらずして復讐のことはその一部分なり。

あきみち物語。　刊本なし。鎌倉の禁內に山口秋廣といふ侍あり。その子を秋道といふ。秋道訴訟のために都にのぼれる後にて、秋廣及び家族はかなやの八郎左衞門といふ大賊のために殺されぬ。秋道これを討たむとし、妻を都の遊女によそはしめ、賊の住家の邊を徘徊せしむ。八郎左衞門果してその妻に馴染み、日々かよひ來る。されどなほ心を許さずしておのが住家を知らしめず。かくて空しく一年を過ぎ、妻は賊の子まで成しぬ。一日妻は嫉妬にことよせて、遂にその巢窟を知り、夫を導きて首尾よく敵を討たしむ。やがて妻は出家し、夫も菩提の道に入りぬ。江戸時代の小說には全く例を見ざる趣向なり。

堀江物語。　上野の原新左衞門の女美人なり鹽谷賴純にとついで、月若丸をあ

ぐ。後頼純家衰ふ新左衛門よりて女を國司三位中將に嫁せしめむがために、頼純を殺す。月若も同じ時に殺されむとせしが、不思議にも助り、奥州岩瀬權守の養子となり、後父の仇新左衛門を討つ、戰國時代の風を直寫せるらしき物語なり。寫本、住吉文庫にあり。

(附)月かげ。 こは仇討物にはあらねど結構甚だ堀江物語と相似たり。豐後のひたの太夫に二人の女あり、妹を月かげといふ。安藝の左衛門藏人に嫁し、一男一女を設く。しかるに後その家衰へしかば、ひたの太夫女を奪ひ返し、周防の地頭五二郎に嫁せしむ。藏人都に上り、二子も都に上り、遂に五二郎を亡し、ひたの太夫を放逐す。かくてまた妻を取りかへしてめでたく榮えたりといふ。

てこくま物語。 繪卷物にして、博物館にあり。貝田、山鹿の二氏軋轢して、貝田氏遂に山鹿氏を亡す。山鹿氏に一人の女あり、阿曾忠景の許嫁なり。老臣まきの太夫の許に隱る。貝田、まきの太夫をせめて姫を求む。まきの太夫止むを得ず、おのが娘てこぐまを身代りとして出す。貝田その贋物ならむことを疑ひ、父の面前

にてこぐまを拷問すれども更に白状せずして責め殺さる。姫は後に忠景に嫁ぎ、その力によりて貝田をほろぼす。身代りのことは江戸時代の小説には多く見る所なるが、この時代の小説には、これを別にして殆どその例なし。たゞ謠曲に一二の例あるを見るのみ。

(附)男衾三郎繪詞、　寫本にして一卷あり。武藏大介に吉見二郎、男衾三郎といへる二人の男子あり。二郎死して三郎その領地を横領し、遺子を虐待する物語なり。これらも戰國時代の風をそのまゝに描き出ししものの一ならむ。これも仇討物にはあらねど、この點に於て、堀江物語、月かげに似かよひたる所あれば、序にこゝに擧げたるなり。

第八章　室町時代の小說(八)―孝行談

二十四孝。　舜の孝行に感動して象雀などが助けたる話をはじめとして、二十四の孝行話を集めたるものなり。こは元の郭居業の定めしものなりといふ。そ

の三四は今昔物語中にも見えたり。

七草草子。 こは、楚國の大しうといふ人が親孝行にして、七草を親にすゝめて幸福を得たりといふ話なり例の御伽草子に屢、見ゆる年中行事の說明を兼ねたるもの。

蛤草子。 天竺まかだ國にちしうといふ親孝行の人あり。一日海岸に出でて蛤を拾ひ、これを家に持ちかへりしに、蛤の中より一人の美人あらはれて、ちしうと夫婦となり機を織れり、その織物價高く賣れてちしう長者となるといふ話なり。

法妙童子。 舍衛國に法妙童子といふ人あり。父に後れ、母と共に貧しく暮しぬ。しかるに、だんびり長者の娘、山神の犧牲と定められたることあり、長者これを悲みて、大金をかけて代人をもとむ。法妙童子これに應じて犧牲となりて妖怪にあひしが、讀誦せる法華經の功德により助けられたり。長者喜びてこれに娘をめあはせぬ。國王はまたこの話を聞いて養うて子となし、後位を讓る。母は子を失ひて、盲目となりて流浪せるを尋ね出して、孝養をつくせりといふ物語な

り。

(附)さよひめ。 壺坂の松浦長者の娘、勢多の橋にて母の貧苦を救はむため大蛇の人身御供となりて身を賣りしが、終に助りし話なり。こは孝行談にはあらねど、法華童子と相似たれば、序にこゝにあげたるなり。

周防内侍。 右近のすけといへる官女周防の國守と契りて、周防内侍を生む。右近のすけ業病に罹りて苦む。周防内侍諸所に祈り、遂に如意輪觀音の功德によりて全快す。その時作りし如意輪觀音は清水寺奥院の觀音なりといふ。

木村朝治。 近江の木村權守顯常の子に、源太朝治、源三なりつねといへる兄弟あり。家貧しくなりしかば、太刀を賣りて親を養はむとて、京都に出づ、折しも平重衡が住吉に詣でたる時なりしが、これに因みて、平家を詛へる落首をかゝげたるものあり。

君が世の短かるべきためしには、かねてぞ折れし住吉の松。

清盛怒りて、賞金を懸けて犯人を求む、朝治金のほしさに弟をして自己の訴人せしめしが、佛の力にて命助り、源氏の世となりて大に榮えきといふ。

右の如く孝行の話は可なり多く見ゆれど、忠義の物語は、歴史に關する話を除いては極めて尠し。これ一は讀者の範圍が、武士に限られざりしと、一は兒童には忠義の觀念はむつかしすぐるに由るならむ。かつこの時代は戰亂烈しく、下尅上のこと多く、德川時代ほど忠義の念の一般社會に行き渡りをらざりしにもよらむか。

第九章　室町時代の小說(九)—祝義物

我が國の小說戲曲には悲劇少く、目出たし〳〵にて終るもの多し、歌にも古今集以來賀の部あり、謠曲にも高砂をはじめとして所謂祝言物の少からざるを見る。高尙なる趣味といふよりも、むしろ普遍なる趣味を主とする御伽草子に、謠曲の祝言物に比すべき作の少からざるは、敢て異とするに足らざるなり。

文正草子。 常陸の國鹿島に文正といへる正直なる老人あり。鹽燒くことを業として富み榮えぬ。夫婦の間に子なきを以て、鹿島明神に祈りしに、二人の娘を

授けられぬ。この二人の娘長じて類なき美人となりぬ。かくて姉は京都の二位中將の北の方となりしが、帝は中將より妹の美なるを聞き、入れて女御となす、その腹に生れいでたる皇子七歳にて即位したまふ、妹の入内するや文正は宰相中將となり、後大納言に進めりといふ。御伽草子は、一面婦人の讀物なりしかば、かくの如く婦人の出世を描けるもの多きなるべし。

物草太郎、をたぎの本地ともいふ、信濃の國に物草太郎といふ男あり。極めて無精なる男にて、何事をもなさず、郷黨に養はれてその日を送りぬ。その後都に出でて、女を得たく思ひ、人のすゝめにて、清水にて參詣の女房を勾引かさむとす。この女豊後守に仕へたる女郎花といへる女房にて、はじめは物草太郎を嫌ひしが、その歌才にめでて遂にこれと契りぬ。やがてこの事帝に聞えて、物草太郎に參內を命ぜられ、御前にて歌を詠む、帝御感ありてその素性を尋ねられしに、深草天皇の皇子二位中將の信濃に流されし時、そこにて設けし子のなれの果なることを知り、信濃の中將となして、信濃甲斐兩國を賜ふ。かくて物草太郎はかの女房を伴ひて信濃にかへり、めでたく榮え、物草太郎は愛宕の大明神、女

房はわさひの權現となりてあらはる。はじめの方おもしろし。後半は物臭とい
ふ性質を忘れたるが如し。京都の景を述べたる條に、地名のみをならべて、その
景を彷彿せしむ後世、近松は兼好物見車にこの手段を襲ひをれり。

一寸法師。 御伽草子に收む。津の國難波の里に老いたる夫婦あり。子なきを憂
ひ、住吉明神に祈りて男子を生む。この子丈わづかに一寸なれば、一寸法師と名
づく。十二三歳まで少しも成長せず。都に上りて宰相の館に止りしが、宰相の姫
君を戀ひてこれを伴ひて難波に歸らむとせしに、風波のために鬼の國に至り
ぬ。一寸法師おのが身の小なるを利用して、鬼どもを征服し、そのもてる打出の
小槌を奪ひて、からだ大きくなれとうてば尋常の人の大きさとなりぬ。更に金
銀財寶を多く打ち出し、姫を伴ひて京に歸る。やがてこの事叡聞に達して、朝廷
に召され、その素性を尋ねらるゝに、父の翁は堀川中納言の子、母の嫗は伏見の
少將の女なること明になりぬ。よりて一寸法師を堀川の少將となさる。少將は
難波より父母を招きて孝養をつくし後中將にのぼり、子女あまた設けて榮え
たり。これ住吉明神の功德によるとなり。

梅津長者物語。　山城國梅津の里に左近丞富永といふ人あり。夫婦貧苦を歎きて夷子の神に福徳を祈りけるが、正直慈善の德によりて、富み榮ゆる物語なり。一日老翁飢ゑたる人に食をめぐみしに、その夜の夢に、夷子上臈となりて現れ、この家に福の神を集めて永く榮花を與ふべしといふ。かくて夷子、辨財天、毘沙門天大黑天、壽老人、福祿壽、布袋和尙など右近の家に集りて酒宴をなし、舞を舞ひ、角觝を取る事などあり。また天狗兵衞といふ盜賊、多くの仲間を率ゐてこの家を襲ひしに、七福神等これを追ひ拂ふ事などあり、後左近の關白の若君の乳母となり、左近はその緣によりて家富み位高く、子孫また繁昌したりきといふ。

大悅物語。　前の梅津長者物語に似たるふしあり。また宇治拾遺物語中にもこれに似たる話あり。大和の國吉野の里に大悅の助といふものあり、家貧しくして父母の孝養心にまかせぬを悲みぬ。ある時、京に上り淸水の觀音に參詣して親を心安く養ふべき祈願をこめしに、その功德によりて黃金百枚を得、かくて思ひのまゝに孝養をつくしぬ。大黑天その孝心をめでゝ、さまざまの寶物を與へ、家ますます繁昌す。こゝに丹後の大江山のほとりにすめるおふてきり右衞

門といふ盜賊數十八の手下を引きつれて押し入りしが、大黑天、夷子三郎これを退く。帝これを聞いて大悅親子を召し、昇殿を許し、おまたの領地を賜ふ。壬生中納言の女を娶りて三男一女を生み、各〻出世す。大黑天喜びてこの家に來り舞ふ。おもふに七福神のこと世にいひ囃さるゝに至れるは、室町時代の末頃よりの事なるべく、梅津長者物語及びこの篇はその頃の產物なるべし。

第十章　室町時代の小說(十)―佛敎に關する物語

佛敎臭味は室町時代の小說のいづれにも彌漫せり。その大多數はいづれも佛の利生を說き、信仰を勸むる文句を以て結ぶを常とす。而して茲に論せむとするは、特に佛敎を說く方便として作られたるものなり。

中に就いて厭世的のものは、三人法師、七人比丘尼、二人比丘尼、朽木櫻等なり。但し二人比丘尼は鈴木正三の作また佛敎の功德によりて現世の幸福を得る物語は、前數章に說け

る物語中に、多くその例を見れども、その特に著しきものは、次の三種なり。

青葉の笛。 仁明天皇の時京都の朱雀門に毎夜笛を吹くものあり。在原業平帝に命せられて行き見たるに、笛の主は美しきちごなりき。かれ業平を箕尾山の奥にさそひ行きていふやう、われ御身が幼き時より法華經を讀誦せしことを知るが故に、普賢の御方便に從ひ、御身に幸福あらしめむために來れりとて、携へたる青葉の笛を與ふ。業平かへりて帝にこの由を奏上し、かの笛を上る。帝御感斜ならず。業平これより帝の寵愛いよ〳〵渥く、榮華を極めたりといふ。全篇法華經の功德を說くを以てその主眼となす。

さゞれ石。 成務天皇の御子さゞれ石の宮、藥師如來を信じて不老不死の藥を授けられて長生し、後東方淨瑠璃世界に生れいでたまふ物語なり。

寶滿長者。 天竺まかだ國に寶滿長者といふあり。帝、その黃金の箱三つの中に納めたる法華經の妙文、六字の名號、父母の頭を御覽じて信仰の念を起し、長者に千部を與へて左大臣となす。

當時は神佛一致の世なれば、それらの緣起を說ける何々本地といふもの甚だ

多し。前に說ける月みつの草子（一名月日の本地）毘沙門本地、梵天國、貴船本地等は皆この類なり。なほ次の如きものなり。

しやかの本地。　釋迦の俗傳なり。

熊野の本地。　本地物中最も有名なるものなり。古淨瑠璃の五翠殿といふはこの熊野の本地なり。紀海音の本朝五翠殿はこれより出づ。また說經節にも歌はれたり。天竺のまかだ國のせんざい王千人の后を置かむとして、九百九十九人を得たり。最後に中御門宰相の娘十三歲なるを迎へ、五翠殿と名づけらる。然るに他の后達は、五翠殿の美貌君寵を專らにせむことをおそれ、帝のそこに至るを得ざらしむ（白樂天の上陽人などより取れるならむ。）しかるに王ゆくりなく一度五翠殿に逢ひたまひしより、寵遇淺からず、遂に懷妊す。他の后たちますます これを憎みて、しきりに讒奏したひしかば、王遂に五翠殿の首を刎ねしむ。五翠殿死にのぞみて佛に祈りて王子を生めり。王子觀音の力によりて、死せる母の乳をすひて成長し、三年の後、五翠殿の兄靈山寺のちけん上人に養はれ、才智すぐれ、學に長じて、兒學匠といはる。王子七歲の時、せんざい王重病にかゝりて、危く見えし時、殿上に一

つの鳥來りて靈山寺の兒學匠を賴みて祈らせたまへと囀る。よりてこれを迎へて祈らしめしに、王の病忽ちに癒えぬ。かくて王はこれがおのれの子なることを知り位を讓らむとす。王子固く辭し、かゝる國は人の心恐し、住み難しとて、大王、ちけん上人と共に日本に渡り、紀伊國の和歌浦につき、熊野の神社と崇めらる、證誠殿は大王、兩所權現は五翠殿、聖宮はちけん上人なり。(而して王子のことは、却つてしるさず。)殘れる后等も王の後を追ひて來りしが、海上にて暴風にあひ、船沈みて死す。その靈虎杖の葉にのりて歸國せり。今も熊野にて虎杖を忌むはこれがためなりと、熊野の社は延喜式にもある古き神社にて、白河天皇の頃より甚しく世の信仰を受くるに至りぬ。當時宮庭の人々が難路を凌ぎて、これに參詣するもの多かりしことは、誠に意想の外にあり。後白河院の如きは三十幾度も行幸ありきといふ、以てこの社が如何に當時の人に尊崇せられしかを知るべし。これ熊野の本地の行はれし所以なり。

嚴島の本地。　天竺とうせう國のせんさい王、さいせう國のてんいち王の三女あしびきの宮を戀ひ、かしこに至りて宮を欺いて本國につれ歸る。しかるに千

人の后たちは宮を嫉みて、王を欺いてぎまん國に行かしめ、その留守中にわしびきの宮を山中につれ行きて殺さしむ。宮妊娠七ヶ月なりしが、死に臨みて王子を生む。王子、梵天、帝釋の守護にて山中に成長す。十二年の後王かへりて宮の死を歎き、この山に來りて王子に對面す。しかるにふろう上人の祈請の力によりてわしびきの宮再生し、王と共に住みぬ。しかるに王は心かはりて宮の妹を戀ひ慕ふに至りしかば、宮逃れて日本に來りて、いつく島(宮がいつくしき島といへるよりこの名起れりといふ。)に住む。さてわしびきの宮を大ごんせんといひ、本地は大日如來、後より宮をたづね來りしせんさい王はまらうどの御前と呼ぶ、本地は毘沙門なりといふ。

加茂の本地　賀茂明神の縁起といふべき書にして、祭神の由來、靈驗の掲焉なること、世々の天皇の尊信淺からざることなどをしるす。その本地は釋迦牟尼佛なりなどと說けり。

なほ本地物はこの外にもあまたあり。もと多くの繪卷物が縁起となり、更に版本となれるものなり。而してその荒誕不稽なること甚し。これは當時の宗教の

信仰がかゝる性質のものなりし上に、兒童に讀ましむるために、一層甚しく誇張せるによる。されど兎に角これによりて當時の民間の信仰を覗ふを得べし。因みにいふ、本地物は多く印度種のものなるが、御伽草子中には支那種のものも尠からず。(但し本地物には關係なし。)さきにあげたる二十四孝の外に次の如きものあり。かくの如き飜譯物ありしことは注意に値すべし。

張良。幸若の舞曲なり。黃石公より兵法を授けらるゝことをつくれり。

楊貴妃物語。白樂天の長恨歌を譯したるものなり。

李娃物語。唐の白行簡の義妓傳(又李娃傳ともいふ)を日本の事に飜案したるものなり。

第十一章　室町時代の小說(十一)―異類物

茲に異類物といふは禽獸、虫魚、草木の類を擬人せる物語の謂なり。原始的の人類は人と他の動植物との間にさして區別をおかず、人間と同じ性情を有する

ものの如く思へり。かゝる思想の發達し向上したるもの即ち佛教の輪廻説なり。今昔物語日本靈異記等には、この思想を具體化せる物語いと多し。これらが基となりて異類文學は起りしなるべし。この種の物語は、頗る小兒に喜ばる。これ物語に出づる種々の人物を同じやうなる名もて差別せしむるよりも、桃太郎、猿蟹合戰の如く形異なる動物を出したる方、その單純なる頭腦に理解し易ければなり。御伽草子は、屢〻いへる如く小兒の讀物たるを以て、この種の物語の多き所以ならむ。更に考ふるに、この時代は、趣味退化し、しかも文學が知識なき下流にも及ばむとせし時にして、これまたこの種の文學の續出せし一因となりしならむ。

思ふに、かゝる異類物は描き出されたる草木鳥獸が、各〻の特性を發揮したるもののならむには、面白き物語となるべきに、惜むべし、この點に注意を拂へるものは殆どなく、多くはたゞその名が動植物の名を借り來れるのみ、その性情、その行爲は全く人間を離れず。これこの種の物語が、現今の世に顧みられざる所以なるべし。

異類物中には歌道を說けるもの多し。玉虫草子、鳥歌合、蟲歌合の如きこれなり。また武事を說くもあり。魚鳥平家、鴉鷺合戰物語の如きこれなり。文藝を以て物を教ふる手段なりとする思想は、既にこの時代の作物に現れたるを見るべし。而して前者は平安朝の物語の風をうけ、後者は鎌倉時代の軍記物の傾向を帶びたり。今異類物の主なるものを列擧すれば次の如し。

魚鳥平家。（一名精進魚類物語）魚鳥平家及び鴉鷺合戰物語は一條兼良の作なりと傳へらる。また一說に魚鳥平家は二條良基の作なりともいへり。されど鴉鷺合戰物語は魚鳥平家の後に出でたるものなることは、その本文中にも見ゆ。何れにもせよ、二書共にその作者詳ならず。魚鳥平家は、平家物語に擬して作れるものにして、魚鳥元年八月一日越後の鮭の大介鰭長の子息二人、御料の大番のために京都に上る。恰も八幡の放生會行はるゝ時なりしが、この子息等精進物のために恥辱を蒙り、合戰となり、結局魚鳥類の敗戰となる。滑稽を旨とし、中に夫婦の別れなどを加へたり。

鴉鷺合戰物語。　糺の森の鷺と祇園の鴉との合戰の物語なり。はじめ鴉鷺の娘

を見染め、文を送り、反つて耻辱をうけしより合戰始る。鴉は敗北して熊野に落つる時、和歌浦にて捕へられ、佛法僧に賴み高野山にて出家す。鷺も亦高野山に上りて出家す。魚鳥平家、鴉鷺合戰物語、二書共に軍記物語の系統を引きたれども、本文中には歌の功德を說ける個所あり。また具足の故實、つけ方等を長々しく記しあるを見れば、著者の意を用ひし所の、那邊にあるかを知るべし。

十二類合戰繪詞。 こは繪卷物にして、その體裁歌物語と繪卷物と軍記物とを併せたる如きものなり。明月の夜、十二支の虫魚集りて歌合をなす。鹿出で來りて歌の判者となる。その次の夜鹿を呼べども鹿出で來らず。しかるに狸は先夜鹿のもてなされしを羨み自ら進みて判者となり、却つて十二類の怒を招き、十二類と狸との合戰となる、栗原柳庵は狸は南朝十二類は北朝になぞらへたりといひ、考古畫譜にも、これに同意したれど、領きがたし。思ふにこは人眞似して失敗する物語の脈ならむ。

德川期に於てこの類の物語の殿將となれるは、三浦爲春にして、仇物語を著し、烏丸光廣の跋を乞ひて、仙洞御所に奉りしといふ。今その梗概を述べむに、照鶯

姫といふ美人あり、諸鳥これを戀うて艶書を送る。中に就きて烏、鷺、梟の三人最も執心なり。照鷽姫はそのいづれに靡くべきかを知らず、遂に自ら縊れて死す。諸鳥悲みてこれを弔ふ。因みにいふ、慶長見聞集、北條五代記の著者に、同じく三浦爲春といふ人あれど、全く別人なり。この爲春は紀州の人なり。

柿本系圖。　柿を人格化して、柿本人丸となし、その系圖を作れるものなり。群書類從及び新編御伽草子中に收む。

かざしの姫君。　植物と人間との交通を物語の骨子となす。中納言の娘にかざしの姫君といふ美人あり。性來菊を愛せしが、幻の中に、菊花の精と契りて、一女を生む。この姫君また美人にして、長じて帝に召されて女御となり、一同榮ゆる物語なり。

狐の草子。　さる僧都、ある家の美しき女房と契りて、七年の月日を送りぬ。しかるに、ある日錫杖を持ちたる若き僧の來りしに、女房は狐となりて逃げうせたり。かくてさめ來れば、七年の年日を經たりと思ひしは、僅に七日の日子にして、かの若き僧は地藏菩薩なりきといふ筋なり。

小幡狐。山城の國小幡の里に住める狐の娘、三條大納言の子中將を見染めて、これと契を結び男子を生む。その男子三歲の時、中將のめのと犬を贈りけるによりて、中將の妻これを恐れて家を遁れ出でしが、夫と子とを忘れかね、髮をおろして、嵯峨野に庵を結びて行ひすましきといふ筋なり。人間と狐との婚姻は、今昔物語にも出づ、大內鑑の葛の葉、三十三間堂棟由來の柳の精なども、この類なりとす。

第十二章　室町時代の小說(十二)―舞の本

室町時代の小說中、物語類は平安朝の物語に倣ひたるものにして、戀物語及び稚兒物語が大部分を占め、草子類は兒童に聞かするために作られたるもの多く、英雄談、孝行談、繼子物語、祝義物、異類物等を含む。繪卷物は何々緣起とへるものの大半を占め、草子類中の本地物と共に、佛陀の利益、社寺の緣起等を說く。以上はすでに前數章に於て一通り說きをへたり。殘れるは舞の本の一類なり。

舞の本は悉く時代物のみにして、一の世話物を見ず。謠曲にも源氏平家等の人物を主題とせるあり、また御伽草子中にもこれを見れども、舞の本の如く、その全部が時代物にはあらず。今舞の本中の時代物を類別すれば左の如し、(因みに御伽草子類の同材なるをも附記すべし。)

一、上古、中古の事を材としたるもの。

入鹿。　入鹿征伐のこと。

大職冠。　謠曲に「海士」あり。

田村の草子。　謠曲に「田村」あり。

立烏帽子。

百合若大臣　嵯峨天皇の時の話。

俵藤太物語。

信田。　平將門の孫信田小太郎のお家騷動。

二、源氏に關するもの。

滿仲。

雪女物語。　滿仲雪女を退治する話。
土蜘蛛草子。　謠曲に「土蜘蛛」あり。
酒顚童子。
鎌田。　義朝の事蹟。
三、平氏に關するもの。
祇王。
硫黃が島。　俊寛のこと。謠曲に「俊寛」あり。
築島。　清盛人柱を立つる話。
横笛草子。
敦盛。　謠曲にも「敦盛」あり。
小敦盛。
六代草子。
六代御前物語。
景清。　謠曲にも「景清」あり。

四、頼朝に關するもの。

文覺。勸進帳のこと。

戀塚物語。文覺上人と袈裟との物語。

伊吹。「鎌田」の續きなるが如し。頼朝伊吹山の民家にかくれたることを作る。

夢合せ。安達盛長、頼朝に夢の話をなす話。

馬揃へ。頼朝兵を擧ぐること。

濱出。一名蓬萊ともいふ。お伽草子にも出づ。

大佛供養物語。法然上人大佛の前にて説教せし話「大佛供養」とは別なり。

富士の人穴草子。

頼朝最後。畠山六郎誤つて頼朝を殺しし話。

五、義仲に關するもの。

木曾願書。謠曲にも「木曾願書」あり。

淸水冠者。「木曾義高物語」ともいふ。義高と大姫との情事。

唐糸草紙。手塚太郎光盛の娘唐糸、頼朝を殺さんとして捕へられたるを、そ

の娘萬壽これを救ふ話。

六、義經に關するもの。これに屬するものは最も多し。一は武勇一方のこの時代の人氣に投じたるによるべく、一は手の裏をかへすが如き運命に同情したるにもよるなるべし。

伏見常盤。常盤伏見にさすらふ話。

常盤問答。牛若丸鞍馬の僧と問答する話。

笛の巻。常盤、鞍馬寺にある牛若に與へたる笛の因緣。

未來記。牛若、鞍馬にて天狗を師として學ぶ。天狗未來のことを示す。謠曲の「鞍馬天狗」にあたる。

天狗の内裏。牛若丸天狗の内裏に至り、更にこれに伴はれて地獄、淨土をめぐる話。

橋辨慶。謠曲にも「橋辨慶」あり。

辨慶物語。

鬼一法眼。判官都ばなしともいふ。

鞍馬出。 牛若丸鞍馬を出で、奥州に下らむとして、逢坂の關の邊にて、關原與一を殺す話。謠曲の「關原與一」にあたる。

烏帽子折。 牛若丸の元服のこと。謠曲にも「烏帽子折」あり。

十二段の草子。 義經と淨瑠璃御前との話。

秀衡入。 十二段の草子の後をうけたるものなり。

御曹子島渡り。 **千島**にて鬼を亡す話。

那須與一。

腰越。 義經酒勾にて腰越狀をかく話。

堀河夜討。 正尊義經を討たむとして捕へらるゝ話。謠曲の「正尊」にあたる。

四國落。 義經都を落ちて平家の亡靈にあふを、辨慶祈りてこれを退くる話。

謠曲の「船辨慶」にあたる。

靜。 義經に別れて後の一生のことを記す。

富樫。 辨慶富樫の前にて勸進帳をよむ話。笈さがしの前段なり。

笈さがし。 「富樫」の後をうく。直江津にて、直江の太郎、義經等の笈をさがす話。

謠曲「安宅」は「富樫」と「笈さがし」とをあはせたる如きものなり

八島。 義經主從佐藤莊司の後家の尼の許に至り、嗣信が忠死のさまを物語る話、謠曲の八島はこれにあらず、「攝待」にあたる。

清重。 駿河二郎清繼が義經の命にて兵を擧げむとし、鎌倉に入り、事あらはれて自滅する話。

高館。

七、曾我兄弟に關するもの。義經ものに次いで多し。すべて舞の本のみにて、お伽草子には、一もなし。

切兼曾我。 謠曲にも「切兼曾我」あり。

元服曾我。 謠曲にも「元服曾我」あり。

和田酒盛。 舞の本中有名なるものにして、後の淨瑠璃に影響せる所甚だ多し。矢の根五郎、草摺引等の話はこれより出づ。

小袖曾我。 謠曲にも「小袖曾我」あり。

劍讃歎。 平家物語の劍の卷にあたる。箱根別當が吾郎に劍を餞別に與ふる

話別にお伽草子に「劍の卷」あり、これは曾我とは關係なし、髭切膝丸の由來を説く。

夜討曾我。　謠曲には「夜討曾我」あり。

十番斬。

八、南北朝の事を材としたるもの。　謠曲及び舞の本には、鎌倉幕府までの事はあれども、その後の事に關するものは殆どなし。たゞ謠曲にては「檀風」の一篇、舞の本にては「新曲」の一篇あるのみ。これ作者が室町幕府に憚れるによるか、或は尙古の風の惰力によるか。

新曲。　中書王に關する物語にして、太平記に見ゆ。一條兼良の作なりと傳へらるゝ「中書王物語」またこれと同じ事をしるせり。

九、支那に關するもの。

張良。　舞の本中支那傳説を材とせるは、この一篇あるのみ。

楊貴妃物語。

傳説を材とせるものは舞の本には一もなし。お伽草子中に「浦島太郎」あり。

かくの如く舞の草子は、一として時代物ならざるはなく、源平二氏に關するものの大部分を占む。かつ殆ど武勇譚のみにして、戰爭に關係なきは大職冠の一あるのみ。そのかくの如く武ばりたるものとなれるは、この時代の風が極端に武事に傾ける結果として生み出されたるものにして、後の金平本の基をなすものなり。

舞の本に義經及び曾我兄弟に關するものの多きことは既に述べたり。而してこはたゞに舞の本のみならず、また室町時代の文學のみならず、江戸時代の文學また然り。甚しきは世話物にすら義經と曾我とを結びつけたるものあり。思ふに義經記、曾我物語が、平家物語、太平記等に次いで廣く愛讀せられし結果なるべし。義經記、曾我物語は室町時代の産物なるべく、その舞の本及び謠曲との前後に就いては、人により異說あらむも、余は義經記、曾我物語が先にして、謠曲、舞の本はその後にいでしならむと思ふ。而して謠曲と舞の本との先後に就いて、舞の本の方後にして、恐らく室町時代の末に出でたるものならむと信ず。但しこは大體は就いていへるのみ。謠曲の中にも二書の先にいでたるものある

べく、また舞の本の後にいでたるものもあるべきは勿論なり。

舞の本の行はれたるは中流以下にして、謠曲の上流に行はれたるとは趣を異にす、「貴賤上下感せぬものこそなかりけり、」「上下萬民ほめぬ人こそなかりけれ、」といふ如き語を以て結べるもの多きにても、その然るを知るべし、而してその組織も亦謠曲とは異なり、謠曲には舞臺の統一、場所の統一、事件の統一あり。舞の本は飛びはなれたる幾多の事件がいくつも集りて一の物語體をなす。幸若舞の詞とはいへど、これを一々舞臺にかけて舞ひ、または演じたりしものなりや頗る疑はし、かつ舞の本中には、曲は別れをるも、前後相連絡して、殆ど一の物語を項目により分ちし觀あるものあり。たとへば富樫、笈さがしの如し、この點また大に謠曲と趣を異にす。かくの如く長き續きものあること、また舞はざる傍證たるべし。但し節付あれば歌ふことはありしなるべし。而も、歌ふといふも、節おもしろく朗讀する位のものなりしなるべく、語るといふ方一層妥當ならむ、後の說經祭文など稍〻似たる趣ならむと思はる。

舞の本の文の單純にして、同じ語を繰り返すことの多きは、萬葉集の長歌に似

たる所あり。たゞ萬葉集の歌は自然の感情より出たるもの多きに、舞の本の文は、徒らに前代の文學に拘はり、先人の辭句を摸倣し、また故事を引きて來りて衒學的となり、天眞の流露を妨げらる。されど粗笨にして語格文法を顧みず、強く勇しきはその長所なり。和田酒盛の草摺引の段の如きこれなり。

第十三章　室町時代の小說(十三)—餘論

室町時代は佛敎全盛の時代にして、從つて文學の雖も何々本地といへる類が社寺の緣起をしるせるものなるは言ふにも及ばず、戀物語の類までも結末に至りては觀世音の利益を說き、佛敎を敎ふる方便となせり。但し舞の本のみは例外なり。江戶時代に至りて、家康文を重んじ、儒敎を以て國政の根本となししかば、儒敎は俄に勃興して佛敎を壓倒するに至りぬ。從つて從來、佛の敎を示す方便とせられし文學は、道德の敎を說くの具と見らるゝに至れり。但し從來の佛敎の惰力の猶強きもののあるは言ふを俟たず。

江戸時代の初期に出でたる純粹なる戀物語に恨の助草子、薄雪物語あり。されどかゝる源氏物語の系統をうけしものはあまり榮えざりき。而してこの頃朱子學、陽明學の盛なるに從ひ、これを弘めむがために、その學の趣旨を平易におもしろく說ける俗書多く出でしが、これらの書と小說との間には判然たる境界線なきが如し。寛永の頃出でたる淸水物語は、その中間に位するものなり。一人の老翁淸水詣の歸るさ語れる話として、道德の敎を說きし書にして、一向に小說らしき點なし。これに次いで出でし祇園物語は淸水物語を反駁せるものにして、佛敎を說けるものなり。この二者を折衷せし如きのは糺物語なり。一方に朱子の理氣の說を說き、他方に法華經の功德を述べたり。されどいづれかといへば佛敎に傾きて日蓮宗の僧侶の手に成れるものの如し。兎に角この時代に於ける儒佛の衝突のこれらの書にあらはれたるを見るべきなり。二人比丘尼の作者鈴木正三の如きは、佛敎文學の作者として、掉尾の勇をふるへるものなり。その他儒敎の敎訓となるべき小話を集めたるものあり、これらが一方に於ては醒睡笑、一休話のごとき滑稽物となり、他方に於ては如儡子の可笑記、山

岡元隣の誰が身の上、小巵の如き、徒然草の體を摸したるものとなれり、西鶴の浮世草子は實にかゝる短篇を集めたるものの系統をうけて出でたるなり。その他、道德に限らず、何事をか敎へむとする考は、名所記の類にこれを見る。東海道名所記、竹齋物語、都雀、あづまめぐり、(一名色音論)の如きは、地理書と文學書とを兼ねたる如きものなり。

更に注意すべきは江戶時代に至りて出版の盛となれることにして、慶長年間活字製造せられ、次いで整版起り、古書の翻刻せられしもの頗る多し。この時代に出版せられし書籍の大部分は、室町時代の書にして、出版の年月を以て直ちにその書の成りし時とするは非なり。されば室町時代末期のものと、江戶時代初期のものとは、極めて混同し易く、明確に兩者を區別せむことは頗る難し、故に余が前數章に於て說けるものも、嚴密に室町時代の小說のみなりとは斷言する能はず。

江戶にて出版せる書には松會開版の印を捺せるもの多し。こは江戶にて初めて軟文學を出版せし松會三四郎なり淨瑠璃小說の書は多くこの書肆より出

でたり。

鎌倉室町時代學史　終

日本文學小史

總論

文學とは何ぞ　文學は人の思想感情を美はしく文章の上に現はせるものにして、進んでは人生の祕奥を開かんとするものなり。

國民文學史　一國には、その國民に固有なる思想感情あり、その國の文學はこの特質を發揮す。なほ一時代には時代の特質あり、文學者には個人の特質あり。一國の文學史は、これらを擧げて說明批評し、その變遷の由來を究む。

日本文學史　されば日本文學史は、わが國民の特質を基礎としたる文學が、各時代においていかに推移し、諸大家によつていかに異同あるかを究むるものなり。これらの變遷は、內政の治亂等、種々の影響を受くといへども、殊に感化の強かりしは、儒教と佛教となり。わが國民はその本來の思想感情に、この東洋の二教を融化し、近くはまた西洋思想を移植す。かくして東西兩洋の文學を以て

培はれて、將來の日本文學は、その幹ますます太く、その枝ますます茂らんとす。

第一章　太古

太古の文學　神代の年歷は知るべからず、建國より奈良朝の末に至るまで、年を經ること千五百年に近しといへども、文學の發達は甚だ遲く、常に單純にして素樸なり。海外の文物も移植せられたりといへども、その影響いまだ著しからず。

自然と人心　國民の氣風は、その國の氣候地勢によりて養はる。日本の本州が溫暖なる地位にありて、山水極めて明媚なるを思へば、わが國民が自然の景物を愛し、快闊の氣に富み、峻酷の風なきも、偶然にあらざるを知るべし。進取敢爲の性を備へ、雄壯にして武事に勵み、勤勉にして清潔を尙ぶも、またその特質にして、太古の文學はよくこれを現はせり。

一　神代以來

神代より九〇〇頃まで。

此時代の文學　太古、わが國には文字なし、或は神代文字といふもののありきといへども、これを以て記したる文學的作品は存せず。この無文時代に、後世の如く發達したる文學は、望み得べからずといへども、歌謠、傳說、祝詞、壽詞の類は既に存して、口より口に傳誦せられ、後人の筆に錄せられたるあり、これらによりてはゞこの時代の文學を覗ひ知ることを得べし。

歌謠　歌謠は形式いまだ定まらず、一句の字數も限られず、短歌、長歌の別も明かならず、たゞ相互に長短の句を交ふる風は初より存す。疊句、對句を用ふることと多きは、記憶に便ならんが爲に生ずる、無文時代の通習なり。いづれも物に觸れ、事に感じて、おのづから聲調の整ひたる言語をなすものにして、述ぶるところ、天眞爛漫に、敍情を旨として、敍景詠物の作は極めて稀なり。作中に見ゆる鳥獸草木は、雉、鴨、鹿、猪、蘿蔔、蒜、桑、栗の類多く、その歌に入るは、美なるが爲にあらず、偉なるが爲にあらず、日常觸れ易きが爲のみ。傳はるところの歌謠、概ね國民が空想に耽らず、實際を尙ぶ風を現はせり。

神武天皇が長髓彥を討ちたまひし時の御製、

みつ〳〵し、久米の子らが、粟生には、か韮一莖、其根が莖、其根芽繋ぎて、討ちてし止まむ。

日本武尊が出雲建を討ちてよみたまへる歌。

やつめさす、出雲建が、佩ける太刀、黑葛多纒き、眞身なしにあはれ。

傳說　神代の傳說は、國土の成立、天神の經世、天孫の降臨等、概ね帝國の起源、祖神の偉業を述べたるものにして、萬世一系の國體、忠勇無比の士風が、國初より堅く人心に銘せられたるを示す、

祝詞、壽詞　祝詞は神前に申す祭文なり。わが國民はわけて敬神の心深く、國初の政は即ち祭政一致の制なれば事每に神に祈り、その折には祝詞をよみ上ぐ。祝詞の體は、ものによりて異同あれども、概ねまた天孫降臨、開國紀元の樣より說き始めて、祈禱の意を述べ、種々の供物を捧ぐる由を申す。五穀豐かに、疫病息み、禍亂收まらんことなど、祈禱の主意にして、殊に國民が農耕を主とし、風雨の和順を希ふ意は、おのづからその中に現はる。辭を列ぬること樸實なりといへども、雄渾正大の氣に富みたること、後世に比を見ず。壽詞も祝詞の類にして、朝

廷の大禮、高貴の饗宴などに述ぶる賀詞なり。

祝詞大祓詞の一節。

かく宣らば、天つ神は、天の磐門をおし披きて天の八重雲をいつの千別に千別きて、きこしめさむ、國つ神は、高山の末、短山の末に上りまして、高山の伊穗理、短山の伊穗理をかき別きて、きこしめさむ。かくきこしめしてば、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、艫解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて打ち掃ふ事の如く、遺る罪はあらじと、祓ひたまひ、淸めたまふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ、速川の瀨にます瀨織津姫といふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百會にます、速開都姫といふ神、持ちかゝ呑みてむ。かくかゝ呑みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國、底の

國にます速佐須良(ハヤサスラ)姫といふ神、もちさすらひ失ひてむ。

二　漢學公行以來

九〇〇頃より一二〇〇頃まで。

韓國の影響　神功皇后、征討の軍を發して、韓國を服したまひしより、かの國來貢し、爾來、海外の文物を輸入すること多く、國運の進歩頗る見るべかりき。

漢學傳來　應神天皇の十五年(九四四)、百濟の阿直岐(アチキ)來り、翌年そのすゝめによりて、かの國の博士王仁(ワニ)を徵す。皇子菟道稚郎子(ウヂノワキイラツコ)この二人に學びて、よく經義に通ず。ついで阿知使主(アチノオミ)も來歸し、これより三人の子孫は、代々文事を掌れり。

文學進歩の遲緩　かくて漢文世に行はれ、史官も設けられたれども、文教の發達は産業の如く著しからず、公文官符の類こそ漢文を用ひたれ、世人は文筆に疎く、なほ前代の狀態を繼續し、海外文物の傳播も、わが文學に影響すること少かりき。

歌謠　この時代の和歌は、毎句の字數漸く五七に傾き、短歌、長歌の別もやゝ立ちたれども、内容の單純素樸なることは、前代と大差なし文學進歩の遲々たる

と、太古の世には、已むを得ざりしなり。

三　佛敎傳播以來

一二〇〇頃より一三五〇頃まで。

佛敎の傳來　欽明天皇の十三年(一二一二)、百濟の使來りて、佛敎を傳ふ。ついで推古天皇の朝、聖德太子その興隆に力め、併せて文運の進步を計る。これまで公の海外交通は、概ね韓國に限られしが、こゝに至りて始めて使節の隋に赴くあり、遣使の來往これより絕えず、學生僧侶は伴ひて支那に留學し、唐代の文藝を輸入す。この刺戟にあひて、久しく潛み居たる國民の智力は、一時に發展し、制度の改革、服飾の制定、寺院の建築、美術品の製作等、百般の事物は燦然として光彩を放つに至れり。

漢文學の勃興　唐代文藝の輸入と共に、わが國の漢文學も勃興せり。聖德太子が蘇我馬子と計りて、はじめて編纂せる國史は、惜むべし、燒亡して傳はらざれども、また太子の撰に成れる十七箇條憲法は、今に存して、當時の漢文の程度を示す。漢字にて記したる金石文も、この時に至りて始めて見るを得べし。漢文の

習得せらるゝに從ひて、また詩賦の詠あり。わが國の最初の詩は、弘文天皇及び皇弟河島皇子の御手に成れり。

儒佛二敎の影響　文運の發展は、佛敎の傳來實にこれが動機たり。かの憲法は治國修身の訓令にして、儒佛二敎の旨を以て倫理の大本とす。されど佛敎の興隆は儒敎を凌ぎ、工藝美術の進步など、多くはその結果なり。

和歌　和歌には儒佛二敎の影響なほ極めて少し、されど時勢の進步はおのづから吟詠の閒に現はれ、國民の生活が餘裕を生じて、典雅なる性情の蕾を開けるを見る。

四　奈良朝

一三五〇頃より一四五〇頃まで。

文學の進步　大化の新政このかた、天智、天武二帝の政事に勵みたまふあり、國運の發達は文學の進步を促がし、持統天皇の頃より奈良朝にかけて、光彩煥發、太古の文學はこゝに絕頂に達して、後代と異なる一時期を劃したり。

國史地誌　文運大に開けて、こゝに纒まりたる書籍の編著あり、中にも、いま傳

はれるわが國の最初の古典古事記とす、この書は奈良奠都後、間もなく成り、神代より推古天皇までの歷代の事蹟を述べ、文體は力めて國語のまゝに寫し、質實にして遒勁、神代の部は殊に趣味多し。のち數年、詔して更に詳確なる漢文の國史を編せしむ、日本書紀これなり、また諸國の地誌の編纂もあり、これを風土紀といひ、今僅かに數種を存す。多くは乾枯なる記事にして、まゝおもしろき傳說を交ふるに過ぎず。

古事記神代の一節。

故こゝに速須佐之男命申したまはく、しからば天照大神に申して罷りなむと申したまひて、すなはち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りき。こゝに天照大神きゝ驚かして、我が弟の命の上り來ます故は、必ず善しき意ならじ。我が國を奪はむとおもはすにこそと宣りたまひて、すなはち御髮を解き、御髻に纒かして、左右の御髻にも、御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺の勾璁の五百箇の御統の珠を纒きもたして、背には千箭入の靫を負ひ、五百箭入の靫をつけ、また稜威の高鞆をとり帶かして、弓腹ふり立てて、堅庭は向

股に蹈みなづみ、沫雪なす蹶散かして、稜威の雄たけび蹈みたけびて、待ちとひたまはく、など上り來ませると問ひたまひき。

體裁の具はれることは、書紀まされりといへども、その漢文は、古意を枉ぐる弊ありとて、識者は却つて古事記の國文を貴しとす。されど古事記も、意に害なきところは、漢文體に作りて、これを訓讀せしめたるもの、また風土記も、大部は漢文にて、時に國文を用ひたるものなり。

宣命　歌謠のほか、太古の純粹なる國文は、祝詞と宣命となり。宣命は天皇の百官庶民に宣りたまふ文にして、朗讀するが爲に、國語のまゝに綴りしなり。古樸にして莊重なること、祝詞に似たれども、その調やゝ新たにして、時に儒佛二教の影響を見る。

漢文學の發達　祝詞、宣命等の國文を綴るにも、漢字を假らざるを得ず、その他の實用の散文は、概ね漢文を用ふ。從うて漢文學ます〳〵盛にして、前代の末より詩賦を作るもの漸く多く、その作は載せて懷風藻にあり。懷風藻（一四一一）はわが國の詩集のはじめなり。聖武天皇の頃には、吉備眞備、安倍仲麿等唐に留學

し、詩文とゝもにかの國の學士に比して恥づることなしと稱せらる。しかれども この時代の韻文の精華は實に和歌にあり。

萬葉集　萬葉集はこの時代の末に成り、第二期以來の歌も載せたれども、多數はこの期のものにして、詠歌の甚だ盛に、題詠も漸く生じたるを見る。歌の種類には長歌、短歌、旋頭歌あり。長歌は句數に制限なく、五七の句を幾つも列ねて、五七七にて結び、多くは末に反歌とて短歌を添ふ。短歌は、その實長歌の最も短きものにして、卽ち三十一字の歌なり。旋頭歌は五七七を二つ續けたるものをいふ。世を經るに從ひて、形式かくの如く定まりたれど、一句のうち、一二字の過不及は妨なし。殊に萬葉集の歌は、平安朝以來の如く拘束せられずして、詞の使用も自由なりき。

人麿と赤人　集中の歌人の最も有名なるは、柿本人麿、山部赤人なり。そもそも この時代の初、紀綱張り、國運進み、外國文化の採用と共に、國民の自信も固くなれり。人麿はこの時に出で、故人舊都を追懷し、祝詞に倣うて、しばしば開國紀元より詠じ出して、和歌に壯大の調を加ふ。赤人は少しく人麿に後れて出で、自然

の景物をよむこと少からず。人麿は長歌に長じ、赤人は短歌をよくし、共に雄渾にして雅麗なること、古今に超絶す。當時、漢學、佛敎盛なれども、二人はその直接なる感化を受けずして、國民固有の性情を詠じたり。

其他の歌人　赤人と同時に、山上憶良（ヤマノウヘノオクラ）大伴旅人（タビト）あり、旅人の子に家持（ヤカモチ）あり。憶良は漢文學に通じ、旅人父子は共に武官なり。憶良は人世を詠じ、倫道を說き、旅人は恬澹無爲の言を弄し、家持は題を取ること廣しといへども、殊に忠君愛國の旨を述ぶ。いづれも漢學佛敎の影響を帶び來り、思想はやゝ複雜になりたれども、その歌は到底、人麿、赤人の高邁なるに及ばず。

此時代の和歌の特質　最もよく奈良朝の文華を代表するものは萬葉集なり。神代以來培ひ來りしもの、こゝに至りて柳櫻桃李の色を競ひ、殊に長歌はその比を見ず、和歌の內容は、率直なる感情をありのまゝに現はして、浮薄僞虛の嫌なしといへども、思想の單純にして變化少きことは、否むべからず。げにや太古文學の長所は、內容よりも形式にあり。人麿、赤人は、この點において大成し、枕詞を置き、對句を設けて、歌調の莊重正大なるは、後世の纖弱なる風と正に相反す。

憶良等がこの二聖に及ばざるは、主としてその措辭の粗雜なるによれり。

吉野宮の長歌及びその反歌。　　人麿

やすみしゝわが大王、神ながら神さびせすと、吉野川たぎつ河内に、高殿を高しりまして、上りたち國見をすれば、たゝなづく青垣山、山神の奉る御調と、春へは花かざしもち、秋たてばもみぢ葉かざし、遊副川の神も、大御食に仕へまつると、上つ瀬に鵜川をたて、下つ瀬に小網さし渡し、山川もよりてつかふる神の御代かも。

山川もよりてつかふる、神ながらたぎつ河内に船出せすかも。

富士山の長歌及びその反歌。　　赤人

天地の分れし時ゆ、神さびて高くたふとき、駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影もかくろひ、照る月の光もみえず、白雲もいゆきばかり、時じくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつぎゆかむ、富士の高嶺は。

田兒の浦ゆうちいで見れば、眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける。

當時の短歌の例。

士（ヲノコ）やも空しかるべき、萬代に語りつぐべき名は立たずして。　憶良

いざ兒どもゝ、香椎の潟（カタ）に、白妙の袖さへぬれて朝菜つみてむ。　旅人

たなばたし船のりすらし、まそ鏡清き月夜に雲たちわたる。　家持

第二章　平安朝

文學の貴族的傾向　平安朝凡そ四百年は、上代文化の最も光彩ある江戸幕府の世と併せて、わが國における文運極盛の二紀とす。されど上流の社會のみ發達して、人民の智能は、貴賤の間に、大なる逕庭あり。從うて百般の事物すべて貴族的傾向を帶び、實用を忘れて、粉飾に過ぎ、優麗を喜ぶ。されば文學も帝都貴族の間に行はるゝのみ、下流の人は文字を知れるもの少かりしなり。

文事偏重の弊　尚武は邦人の通性にして、建國以來、朝政に參與せしものは、武門に出でたりき。されど平安朝の大勢力たりし藤原氏は、もとより文事を尚び、泰平に馴れて武事を卑む。文事を尚べば、文學の流行せるも、當然のことにして、詩歌は管絃と共に、上流の人が必須の技と稱せらる武事を卑み、風俗優柔に流

るれば、文學もまたこの傾向を帶び女子の宮廷に勢力ありしより、わけて纎弱の趣味を育成せり。加ふるに文弱の公卿は、京洛數里の間に籠居して、遠く出遊せず、悠々たる生活極めて單調なれば、思想の變化極めて乏し。從うて文學も一局面にのみ發展し、一旦その頂點に達しては、停滯し、沈衰するのみなりき。

佛教の感化　漢文學も、前代よりひき續きて重んぜられたれど、儒教は却つて佛教に壓せられて人心を感化すること、到底、彼に及ばず。佛教は、この時代のはじめ、天台、眞言の二宗更に傳來して、朝野に播まり、法事供養盛に行はれ、貴族の出家するも少からず、文學にも、人世のはかなく、宿命の免れがたきをいふこと、多くなりしかど、いまだ快闊なる邦人の性質の根柢を動かすに至らざりき。

美を愛し情を重んずる風　太古以來、邦人は老幼憐み、部伍睦みて、人に殘虐の行なく、おの〳〵その業に安んじて相侵さず、無爲にして化すといふ樣なり。因襲風をなし、儒佛二教傳來しても、これによりて人心を檢束する要を見ざりき。平安朝に至りても、なほ往古のまゝにして、外來人爲の道義は、制裁の力甚だ薄し。さりとて當時の人も徒らに慾念の奔放に任するにはあらず、力めて中正な

る性情を養はんとす。かくして取るところの人生の尺度は、善よりも美なり、敎育は意の鍛冶にあらずして、情の薰陶なり。しかれども情は狂ひ易し、物質的文化の開けて、これを制御すべき道義の存するなければ、その弊や浮華蕩逸となり、文學も實を失ひて華に過ぎ、輕靡綺麗に流れたり。

一　弘仁時代

一四五〇頃より一五五〇頃まで。

詩文の隆盛　太古より維新以前までは、學問といへば、第一に支那の文學、儒學を擧げたりといへども、この時代の如く、漢文學のみ行はれしことは、稀なり。既に大化改新の頃より、漢學は興隆の運に向ひ、爾來、年を追うて盛なりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を奬勵したまへり。その頃京都の大學、地方の國學の外に、名門貴紳が私學を設けて、一族の子弟を敎育するもの多し。敎ふるところ、經書、律令、算術等もあれど、唐代の學風を受けて、專ら詩文を重んじ、學者のうち文章博士の位置最も高し。

空海と篁　勅によりて編成せられし詩集には、凌雲集、文華秀麗集、經國集あり、

いづれも弘仁前後の詩を集む。平城、嵯峨、淳和三帝みな詩を詠じ、殊に嵯峨天皇は才藻に富みたまふ。天皇と共に漢文學の興隆に力ありし人には僧空海あり。空海は敎界一派の祖たると共に、また文學の恩人なり。その唐に留學するや、佛敎研修のかたはら、詩文を學び、歸朝の際には、かの國の有名なる詩文集を携へ歸る。わが國の漢文學は、蓋しこれより蔚然として興れるなり。當時小野篁また詩才に富みたりき。

菅原道眞　清和天皇以來、また詩文に名ある人少からざりしが、就中、菅原道眞が、平易暢達なる辭を以て、悲慘なる實境を詠じたる詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されどこの頃より、大江、菅原の二家は、文學界における門閥の位置を占め、階級の固定は漸くその道を不振ならしめたり。

支那文學の影響　當時の詩人が愛誦したるは、六朝より唐代にかけての詩文にして、文選、白氏文集殊に重んぜらる、これらが社會と文學との上に影響せしことは、甚だ大なり。浮華驕奢、四時の遊觀の盛なるが如き、一はこれが爲なるべく、わが國の詩家歌人が取りたる題目も、彼に得たるもの多し。綴るところの文

辭は、四六駢儷體を旨とし、語句の配置に苦心して、眞情の流露を忘れ、纖麗の態を喜び、漢文學はこれより衰微の運に向へり。

歌風の變還　和歌は、弘仁の頃には、漢文學の流行に壓されて、一時屛息の姿なりしが、淸和天皇以來、やゝ頭をもたげて、漢詩と并び行はる。これもまた時俗と漢詩との感化を受けて、浮華の體をなす。奈良朝には、歌人即ち武人なるもの少からず、隨うて和歌も剛壯の氣ありしに、今は文弱なる貴族が席上唱和の具となれば、その風の變化せしや知るべし。かくて五七の調は七五に轉じ、長歌は殆ど衰滅せんとし、爾來この風永く淤らず。在原業平は當時第一の歌人なり、眞率なる詩想の迸出するに任せて、辭句の修練の如きは、深く注意せず、僧正遍昭、小野小町またこれと聲名を齊しくせり。

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、わが身ひとつはもとの身にして。　業平

はちす葉のにごりにしまぬ心もて、なにかは露を玉とあざむく。　遍昭

色見えでうつろふものは、世のなかの人の心の花にぞありける。　小町

神樂、催馬樂　當時また神前に樂器に合せて奏するうたひ物に神樂（カグラ）、催馬樂（サイバラ）あ

り、平安朝の半を過ぐる頃まで、盛に行はる、神樂の一部は普通の短歌にして、その一部と催馬樂とは民間の俚謠より取れるもの多し。これらの俚謠は概ね奈良朝の末よりこの時代の初にかけてのものなるべし。

假名の弘通と物語類　久しく漢文は行はれしかど、なほ言ふところを自在に筆にするは、容易き業にあらず。よりて奈良朝には、字を假りて音を寫す萬葉假名なども用ひられしが、これも複雜なれば、ついで片假名、平假名の製作あり。この假名は、奈良朝よりこの時代にかけて、次第に出來しものなるべく、その使用の弘まるに隨ひて、散文は發達せり。散文の發達は小說日記類に見るべく、その魁として、竹取物語の如き傳奇小說を見るに至れり。これと前後して伊勢物語あり。二書の簡潔にして古樸なるは、後人の擬せんとして及び難きところなり

二　延喜天曆時代

一五五〇頃より一六五〇頃まで。

古今集　平安奠都以來、年久しく、紀綱漸く弛みて、地方離叛せんとすれども、帝都の文化はいよ〳〵光彩あり。世に醍醐天皇の朝を延喜の聖代と稱す。弘仁時

代は專ら外國の文藝を謳歌せしが、この時代に至りて、一方には遣唐使を廢すると共に、支那文物の研究は衰へ、一方にはわが文化の發展に伴ひて、國民の自信は長じ、かくして純一なる國民的文藝は歡迎せらる。繪畫には巨勢金岡ありて、美術を國風に化し、文學には和歌盛に行はれて、漢詩を壓す。歌界には紀貫之、凡河内躬恒等新たに出で、こゝに弘仁の詩文隆盛は延喜の和歌勃興と變れり。延喜五年(一五六五)、貫之、躬恒等勅を奉じて、古今歌和集を撰し、萬葉集以後、當時に至るまでの歌を集む。歌體こゝに至りて定まり、主觀的叙情を主とし、優麗の調を尙び、永く後世に範を垂れたり。

貫之と躬恒　古今集の編成は、貫之の功重きに居る。貫之の歌を作るや、刻苦經營、想と辭と相合はしめんとして、一語一句苟しくもせず、眞に雅正の氣あり。後世彼を歌道の宗として、人麿と併せ稱す。躬恒これと竝び立ち、才氣の横溢を以てまされり。

ひとはいさ、心もしらず、故鄕は花ぞ昔の香ににほひける。　貫之

逢坂の關の淸水にかげみえて、いまや曳くらむ、望月の駒。　同

春の夜の闇はあやなし、梅の花、色こそ見えね、香やは隱るゝ。　躬恒
住の江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つしらなみ。　同

貫之の散文　貫之は和歌のみならず、散文にも力を盡し、これより假名文大に世に行はる。その古今和歌集序の如き、漢文の脈絡を應用し、國文の一體を開く。されど駢儷體より出でて、やゝ華麗に過ぐる難なきにあらず。貫之また晩年に土佐日記を作る、文體簡淨、國文の軌範と稱せらる。

土佐日記正月二十一日の條、

二十一日、卯の時ばかりに船いだす。みな人々の船いづ。これをみれば、春の海に木の葉しもちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ、風もふかず、よき日いできて漕ぎゆく。この間に使はれむとて附きてくる童あり。それがうたふ歌、

なほこそ國の方は見やらるれ、父母ありとし思へば、かへらや。

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、黑鳥といふ鳥、巖の上に集まり居り、その巖のもとに浪白くうちよす。楫取のいふやう、黑鳥のもと

に白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやうにぞきこえたる。人のほどに合はねば、咎むるなり。かくいひつゝゆくに、船君なる人、浪をみて、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

わが髮の雪と磯邊の白浪と、いづれまされり、沖つ島守。

擑取いへ。

後撰集と拾遺集　村上天皇の朝は、天曆の聖代とて、延喜時代と竝べ稱せらる。天慶、承平の亂こゝに終りて、都人は更に泰平に安んじ、學者文人また輩出す。延喜時代の反動として、漢文學やゝ復興せるが如くなれども、全詩の結構よりは、寧ろ一二句の修辭に苦心して、器局小に過ぎ、畢竟、漢詩の衰運に向ひたるは、疑ふべからず和歌は盛に行はれて、これを詠ずるもの日々に多し、天曆五年（一六一一）、源順等勅を受けて後撰和歌集を撰す。これを古今集に比するに、措辭やゝ蕪雜に流れたり。その後、また拾遺和歌集の撰ありしが、後撰と共に、大體においては、古今の前轍を蹈むに過ぎざりき。

宇津保物語等　假名の使用はます／＼擴張し、散文も漸次複雜となりて、こゝに宇津保物語の長篇を出すに至れり。人情の描寫を主とする小説は、これを始とすべく、九百年に餘れる昔に、この大作ありしは歎美に堪へたれども、その缺點は情を寫して眞ならず、辭を行ることも粗なるにあり。當時の小說にまた落窪物語あり。

三　藤原氏全盛時代

一六五〇頃より一七五〇頃まで。

假名文全盛　この時代の上半は、即ち攝政道長が榮華に誇りし時にして、藤原氏の勢力絕頂に達し、一門宮廷に跋扈して、花月の遊に耽れば、文藝にも、優美なる平安朝の特性は最もよく發揮せらる。漢文學は、男子が唯一の學問として行はれたれども、既に傾き來りし運命の囘復すべくもあらず。今や文學の中心は全く移りて、當時の傑作は實に假名文を以て記されたり。されど學問に誇れる公卿は、卑みてこれを用ひず、いはゆる女文字に甘んせし女子をして、却つて千歲不朽の名を博せしめたり。

上流の風俗　當時の廷臣は京都に蟄居して、地方の事を知らず、行政軍事を賤みて、宴飲管絃に日を送り、宮女と和歌を唱和するを事とす。權力扶殖の手段としては、名流貴族いづれもその女を後宮に納れて、皇室の外戚とならんことを望む。かくて多くの女御更衣榮寵を競ひ、おの〳〵才能ある女子を侍女として相誇る。さればこそ當時の女流には文學に秀でたるものも輩出せしにて、その歌ふところ、書くところ、京都のこと、殊に宮廷のこと多く、その風のます〳〵優美柔弱に流れたるも、またこれが爲なり。

淸少納言と紫式部　當時の女流の最も文才あるを淸少納言、紫式部とす。二人はたゞに當時の第一流と稱すべきのみならず。古今を通じてまた第一流の文學者なり。淸少納言は一條天皇の皇后定子（道長の兄關白道隆の女）に仕ふ。その著枕草紙はわが國の隨筆のはじめにして、見聞せるまゝ、思ひつきたるまゝを、筆に任せて敍述し、寸鐵人を殺す趣あり。筆鋒の銳利なるは、その才の男子を凌ぐを知るべく、觀察の緻密なるは、女子の特性を現はせり。紫式部は一條天皇の中宮彰子（上東門院といふ、道長の女）に仕ふ。源氏物語はその筆に成りて、貴族の

生活を寫せる長篇の小說なり、巧に長篇を組織して、抑揚あり、波瀾あり、修辭精到にして流麗なり。されば、この書を以てわが國第一の小說と稱するは、當然の評なり。

うつくしき物。（枕草紙の一節）

瓜にかきたる兒（チゴ）の顏。雀の子のねずなきするに躍りくる。また紅（ベニ）などつけてすゑたれば、親雀の蟲などもてきてくゝむるも、いとらうたし。三（ツ）ばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指（オヨビ）にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし、あまにそぎたる兒の、目に髮の覆ひたるを、かきはやらで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。手繦（タスキ）がけにゆひたる腰の上の、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくも、うつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寐入りたるも、らうたし。雛（ヒヽナ）の調度。蓮（ハチス）の浮葉のいと小さきを、池よりとりあげて見る。葵の小さきも、いとうつくし。何も〳〵、いと小さき物は、いとうつくし。いみじ

う肥えたる兒の二ばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など衣長くて、手繦あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八、九、十ばかりなる男兒の、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鷄の雛の、脚高に、白うをかしげに、衣短かなる樣して、ひよ〳〵とかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨の卵。舍利の壺。撫子の花。

光源氏が須磨のわびずまひ。（源氏物語須磨の卷の一節）

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うち息みわたれるに、一人目をさまして、枕を欹てて、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝもとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりにけり。琴を少しかきならしたまへるが、われながらいとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は、思ふ方より風やふくらむ。

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、しのばれて、あいなう起きゐつゝ、洟(ハナ)をしのびやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身一(ヒト)つにより、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるを、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然(ツレヅレ)なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき樣なる唐(カラ)の綾などに、樣々の繪どもをかきすさびまへる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山の有樣を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかき集めたまへり。この頃の上手にすめる千枝、常則などをめして、作繪(ツクリヱ)つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ〳〵さき亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊に出でたまひて、佇みたまふ御樣の、ゆゝしう清らなること、所からはましてこの世のものと

も見えたまはず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく、うち亂れたまへる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆるゝによみたまへる、また世にしらずきこゆ。沖より舟どものうたひのゝしりて漕ぎゆくなどもきこゆ、ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも、心細げなるに、雁の列ねてなく聲、檝の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるるを、かきはらひたまへる御手つき、黑木の御數珠にはえたまへるは、……人々のこゝちみな慰みにけり。

和泉式部等　和歌にて、當時無雙の名家は和泉式部なり。和泉式部は紫式部と同じく彰子に仕へ、天稟の詩才、物に觸れ事に感じて、咳唾珠をなす。藤原公任は和漢の學に長じ、歌道においても第一の先達と稱せられしが、舊習を墨守して、その實は名にかなはず。これに反して、曾根好忠は時風の因循固陋に厭き、ひとり用語の自由、格調の變革を唱へたれども、その作に險難の語句多く、世人はこれを卑しとして顧みざりき。

道長薨後の頽勢　道長薨じて後、藤原代の勢やゝ傾き國運もまた振はず。地方

には平忠常の亂、前九年の役あり、武人處處に地を占めて、漸く實力を養ひ來る。藤原氏と共に浮沈せし文學は、こゝに至りてまた漸衰の運に向はざるを得ず。小説も勢源氏に極まり、その後の製作はこれを摸擬するに過ぎず。その他の編著にして見るべきものは、邦人の漢詩文を選びたる本朝文粹・和漢天竺の雜談を集めたる今昔物語などあるのみ。

四　院政時代

一七五〇頃より一八五〇まで。

院政時代　後三條天皇英邁の資を以て親しく政を視たまひしより、藤原氏の權力は衰へ、引いて院政の世となりぬ。紀綱やゝ伸張し、人心また興奮せりといへども、白河、鳥羽の二帝奢侈を好みたまひ、君臣ともに容儀を修すること婦人の如く、後三條天皇の振肅も直ちに弛みて、風俗はます〳〵浮華に流る。源平鬪爭の世、京都も禍亂の巷となりしが、月卿雲客なほ姑息の安を貪りて、舊習を更むるを喜ばず。かゝる時、長篇大作の出づること稀にして、一時の唱和、半日の消閑に便ある短歌が、ひとり流行を極めしも、偶然にあらず。

和歌の新體　古今集の風調は、歌道の正風として、久しく行はれたりしが、世人は久しくその陳套に倦けり。この時に當りて、改新の旗を飜へししを源經信とす。その子俊賴出藍の才を以て、大に新體を唱へ、藤原基俊保守の見を懷いて、俊賴と衡を爭ひしかど、天下は靡然として新體に傾く。新體は前期の曾禰好忠の詠に得る所多く、用語を自由にし、日常の俗語をも採り、また助辭を略し、名詞にて結びなどして、句格を緊密ならしむ。殊に多とすべきは、和歌の題目を擴め、玄ばく客觀的に自然の景を詠ずるに至れることなり。されどその弊や、奇を好み、俗に流れ、蕪雜にして統一なく、擾亂せること、恰も源平の爭の如くなりき。

千載集　時に藤原俊成千載和歌集を撰して、新體の長短を取捨す。溫雅にして清新なる一體、こゝに至りて漸く定まれり。されどこの改新も根本的の轉化にあらず、社會の思想に變動なければ、和歌の内容も舊の如くにして、むしろその形式において、精細巧緻なるに至りしなり。さるが中に群を拔きて異色ありしを、僧西行とす。

西行　西行はもと武門の人なり、世をはかなみて出家し、四方を周遊して、風月

を友とす。常に山水の景に接して、天成の才を養ひ、詞句に拘泥せずして、自在に感想を吐露す。時に佛教の腐敗も既に久しくして、こゝに革新の氣運に向ひ、新たなる宗教まさに起れり。西行この時に出でて、詠ずるところ佛敎の趣味多く、和歌の內容に深邃の度を加へたり。

夕されば、門田の稻葉おとづれて、蘆のまろやに秋風ぞふく。　經信

うづらなくまのの入江の濱風に、尾花波よる秋のゆふぐれ。　俊頼

夕されば、野邊のあきかぜ身にしみて、鶉なくなり、深草の里。　俊成

道のべに淸水流るゝ柳蔭、しばしとてこそたちとまりつれ。　西行

歌論の勃興　和歌の流行と共に、歌論の學も勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。前期に藤原公任出でて、やゝ體を備ふるに至りしが、この期に至りて、始めて盛なり。藤原基俊博覽に誇りて、一家の見を立て、藤原俊成これに學びて、別に家學を開き、天下の師表となる、藤原淸輔また歌論に名あり。されど淺薄なる形式の論、無益なる舊例の爭のみ多かりき。

朗詠と今樣　うたひ物としては、平安朝の中世このかた、朗詠、今樣盛に行はる。

朗詠は曲節を設けて詩句短歌を朗吟するなり。今樣は七五の句を重ねたるものにて、その句數の四なるもの殊に多し。平安朝のはじめ、旣に佛敎を讃したるものなど見え、いろは歌の如きもその一なりしか、この時代の婉柔なる姿を好む風に投じて、大に世に行はれ、ついで次期にも及べるなり。

舊都の詠。（今樣）　藤原實定

古き都をきて見れば、　淺茅が原とぞなりにける、
月の光はくまなくて、　わき風のみぞ身にはしむ、

國文體の歷史　散文の見るべきものには、僅かに榮華物語・大鏡等あり。榮華物語は長くして冗漫に、大鏡は、史記に倣ひて作れるものにして、筆路頗る勁拔なり。二書ともに、關白道長を中心として、藤原氏の榮華を寫し、わが國の國文體の歷史のはじめなり。

第三章　鎌倉室町幕府の世

文學の不振　源賴朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに變ず。武人權力を握りて、

兵事に勵み、戰亂ゑば〱起りて、庶民は疲勞し、從うて文學も衰微せり、出づるところ、多くは見聞の事蹟もしくは古事來歷を記述したる軍記、雜纂、隨筆有職の書などにして、想像力によれるものは少し。

文學の佛敎的傾向　公卿は政權を失ふと共に、意氣も沮喪し、因循姑息にして、古人の糟粕を嘗むるに過ぎず、武人は文事を輕んじて、文學に志すもの多からず。この時に當りて、武家の祐筆となり、參謀となりて、專ら文筆に從事したるものは、僧侶にして、純文學も多くはその手に成れり。さればこの時代の文學に、佛敎的傾向の存することゝ、平安朝よりも甚だしきは、一は僧侶の手に成れるが爲にして、一は時勢の然らしめしなり。當時、頻繁なる變亂は、社會をしておのづから厭世に傾かしめたる折しも、禪、淨土、一向、日蓮等の新宗派、或は支那より傳はり、或はわが國に起りて、大に行はれ、深く人心の根柢に染みたることゝ、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。儒敎の影響の文學に現はれたることもあれど、佛敎に壓せられて、その勢力は微々たりき。

一　鎌倉時代

一八五〇頃より一九八〇頃まで。

鎌倉初期　鎌倉時代のうち、文壇の最も賑はひたるを、そのはじめ三四十年とす。時に後鳥羽天皇帝室の式微を憂へ、鋭意事に當りたまへば、都人も前途に希望を有して、新たに活氣を生じ、文藝もこれが爲に一時の盛況を呈したり。

新古今集　文學は前期にひき續きて、和歌最も盛なり。元久二年(一八六五)、後鳥羽上皇の勅によりて、藤原定家、同家隆等、新古今和歌集を撰す。延喜よりこの時に至るまで、和歌の勅撰八度に及びしが、そのうち古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は千載の歌風を大成したるものにして、彼の清新を體を節するに、更に古今の古調を以てしたるなり。

當時の歌人　上の好むところ下これに靡き、當時有名なる歌人輩出す。後鳥羽、土御門、順德の三帝、ともにその道を得たまひ、攝政藤原良經は天授の才を以て時流を詠じ、その叔父僧慈圓は西行に學びて、好んで佛敎の趣味を含め、將軍實朝は萬葉の古調を喜ぶ。定家は俊成の子にして、家隆と共に、名匠の譽一世に高し。定家は古語の平穩なるを喜べども、措辭は巧緻を極めて、時に了解に苦むも

のあり家隆は暢達の調を用ひたり。

われこそは新島守よ、隱岐の海のあらき浪風、心してふけ。　後鳥羽上皇

足柄の關路こえゆく玄のゝめに、一むらかすむ浮島が原。　良經

武士の矢竝つくろふ小手の上に、霰たばしる、那須の篠原。　實朝

山のはの月まつ空のにほふより、花にそむくる春のともしび。　定家

かすみたつ末の松山、ほの〴〵と波にはなるゝ橫雲のそら。　家隆

軍記の勃興　平安朝のなかば頃より、漢學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文を書きえず、こゝに和漢混交の一體を生ず。衰ふるはまた興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の遒勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となりたり。この混交體の大に光彩を放ちたるは、源平爭鬪の始末を記したる軍記類なり。そも〳〵源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものゝ感懷は、うたゝ假作小說よりも深し、こゝにおいて軍記の作あり。其の最初に出でたるは保元物語、平治物語にして、文章やゝ質實なり。ついで平家物語、源平盛衰記の作あり、この二書は大體

の組織を同じくすれども、平家は諷誦せんが爲に悽惋の調を加へ、盛衰記は記事の委曲を盡さんことを期す。これらの軍記は史實に據りて、しかも史實に拘泥せず、思ふに源平時代より建長年間までの作なるべし。

大原御幸の一節。(平家物語)

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉にみゆる梢には、春のなごりぞをしまるゝ。卯月二十日餘のことなれば、夏草のしげみが末をわけいらせたまふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたるほどもおぼしめしやられて哀なり。西の山の麓に一宇の御堂あり、卽ち寂光院これなり、古う造りなせる泉水、木立、よしある樣の所なり。いらかやぶれては霧不斷の香をたき、とぼそおちては月常住の燈をかゝぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草しげりあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫にさける色青葉まじりの遲櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹さきみだれ、八重立つ雲のたえまより、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あ

つて、かうぞあそばされける、

池水にみぎはの櫻ちりしきて、波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩のたえまよりおちくる水の音さへ、ゆゑよしある所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも、筆も及びがたし、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦あさがほはひかゝり、しのぶまじりの忘草、瓢簞しば〳〵空し、草顏淵が巷に滋し、藜藋深くとざせり、雨原憲が樞をうるほすともいひつべし。すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしともみえざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小篠に風さわぎ、世にたゝぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の言づては、間遠にゆへるませ垣や、わづかにことゝふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゞら、くる人稀なる所なり。法皇人やある〳〵とめされけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。女院はいづくへ御幸なりけるぞと仰せければこの上の山へ花つみに入らせたまひて候ふと申す。…………やゝあつて上の

山より、濃き墨染の衣きたりける尼二人、岩のかけぢをつたひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなる者ぞと仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたかみ臂にかけ、岩つゝじとりぐして持たせたまひて候ふは、女院にてわたらせたまひ候ふ。つま木に蕨折り具して侍ふは、鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍の局と申しもあへず泣きけり。法皇御涙せきあへさせたまはず。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見え參らせんずらん恥しさよ、消えもうせばやと、おぼしめせども、かひぞなき。宵々毎の閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、また御庵室へも入らせおはしまさず、呆れて立たせまし／＼たるところに、内侍の尼參りつゝ、花がたみをばたまはりけり。

鎌倉中期以後　承久の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎はいよ／＼堅く、これより京都は自由の念なく、希望の光を失ひて、萎靡して振はず。關東の武士はもとより文筆に疎ければ、鎌倉時代中期以後の文學は見るべきもの少し、散文の

や丶見るべきは、十訓抄、古今著聞集等の雜纂類あるのみ。これらはいづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來のおもしろく珍らしき事實を輯めたるものにして、率直平易なる文體にてかきたり。

歌道の門閥　和歌の衰へたるも散文に同じ。人心は漸次萎縮せるに、藤原俊成、定家二代相續いて名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸す。その子孫は二條、京極、冷泉の三家に別れて、互に反目せしが中に、二條家は嫡流として殊に榮え、歌集の勅撰も多くはその一門より出でしが、その家を尊くせんが爲に、種々の法式を設けて、子弟を束縛したれば、斯道は却りて日々に萎縮するに至れり。

二　南北朝

一九八〇頃より二〇五〇頃まで。

南北朝の概觀　建武中興の業成り、幾ばくもなくまた壞れて、南北兩朝分爭の世となりしが、政治の中心は關東より畿內に復せり。輦下の貴紳は懶眠より覺めて、更に政治にあづかり、文學も一時は希望を有し、活氣を生じたること、鎌倉

時代のはじめの如し。戰うて利なきは憤慨の情を文筆に漏らし、亂離の變にあひては、人生の險に恐れ、隱遁の安を說く。これ南北分爭の間、多く見るところなりき。

頓阿　和歌は黨同伐異の弊を受けて、微々として勢なかりしが、僧頓阿二條家の門に出でて、二條の中興と稱せられ、一時みなこれに靡く。歌風は穩和を主として、ますます平凡に流れたり。

兼好　僧兼好頓阿と親しく、和歌にも名ありしが、その不朽の譽は徒然草の著あるによれり。徒然草は脈絡なき隨筆にして、著者が閑靜の境を愛し、花月の美を愛して、悠々自適、趣味を談じ、人情を說き、よく老佛の說を融化するを見る、文章暢達にして雅馴、世に枕草紙と併せて、隨筆の雙絕とす。

北畠親房　歷史には北畠親房の神皇正統記等あり。親房は南朝に仕へ、楠木、新田の諸將が戰死の後は、ひとり王事に勵みて、國家の柱石たりしが、軍旅の間にも筆硯を捨てず。正統記は、著者が國事を慷慨して、古來の歷史を述べ、皇統の正閏を論じたるものにして、文章平直に、議論正大なり。

太平記等　源平の爭闘ありて、源平盛衰記等の作ありき、南北の戰亂ありて、ここに太平記の長篇を見る。太平記は文體盛衰記より出でて、一層、雄大にして絢爛なるが、やゝ華に過ぐる嫌あり、體裁も整頓せず。その後、軍記の類にして見るに足るべきは、曾我物語、義經記等にして、次期にわたりての作なるべし。

三　室町時代

二〇五〇頃より二一五〇頃まで。

能樂と謠曲　室町幕府の世は戰亂相繼ぐ、されど三代義滿の頃はなほ幕府に威權あり、義滿遊樂を好み、能樂を興す。能樂は委しくは猿樂(サルガク)の能といふ。昔より神事に用ひたる伎樂なりしが、義滿に至りて、樂師をしてその他の舞樂をも折衷して、能樂を起さしめ、これに合せんが爲に、また新曲を作らしむ、この新曲は即ち謠曲(うたひ)なり。これよりさき禪宗の行はれしより、僧侶の支那に渡航して、宋元の文化を傳へしこと少からず、義滿新たに明と交を修して、海外の交通やゝ繁し。謠曲の文は、蓋し當時の僧侶の手になりたるもの多かるべく、結構は元の戲曲に出で、また至るところ佛教の思想を含む。詞句は好んで古文辭を補

綴すれども、よく諧和して、好調に富む、これより能樂流行して、武家の式樂の如くなり、新曲續いて出でしかど、千篇一律の嫌を免れざりき。

狂言　能樂の餘興として、その間に挾み行ふものに、狂言あり、その技、能樂の嚴正なるに對し、滑稽を旨として、よく人の頤を解き、往々世情を諷刺したるところあり。その文は當時の言語をそのまゝに寫して、率直愛すべし。

謠曲八島の一節。

また修羅道の鬨の聲、矢さけびの音震動せり。今日の修羅の敵は誰そ、なに能登守敎經とや。あらもの／＼しや、手なみは知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の、その船軍今ははや、閻浮に歸る生死の、海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、陸には波の楯、月にきらむは劒の光、潮に映るは甲の星の影、水や空、空ゆくもまた雲の波の、うち合ひさしちがふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、かたきと見えしは群れゐる鷗、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐とぞなりにける。

應仁の亂　應仁の亂起りては、京師も修羅の巷となりぬ。一條兼良名門に生れ

て、官位顯達し、博覽强記にして、また文學の才あり。亂を避けて地方に遊ぶ、その第内の文庫は藏書の富を以て名ありしが、兵火を免れしかど、兵士に毀たれ、幾百合の典籍、衢に落ち散り、誰收むるものもなかりきといふ。

和歌の非運　和歌も日に〱衰ふ。京極、二條兩家ともに既に絶え、古今集以來連續したりし歌集の勅撰も、また途に絶えたり。應仁の頃、東下野守常緣といふ武士、歌學の祕事傳授のうち、殊に古今傳授を重しとし、これを定めて僧宗祇に傳ふ。その傳授も淺薄にして附會なる說多く、かくの如きことを唱へてその道を貴くせんとしたる社會の窮狀は、むしろ憐むべし。

連歌の流行　和歌に代りて大に行はれたるは、連歌なり。連歌とは、短歌一首の半を一人がよめば、他の一人がこれに繼いでその半をよむものにて、もと一種の遊技に過ぎず。その起源は太古にありき。後鳥羽天皇の頃より、わけて和歌の餘興としてこれをもてはやし、一首のよみきりに止まらず、首尾相繼いで、二十句以上、千句にも及びたりき。南北朝に二條良基これを好みて、その式を定め、また勅撰に准じて、菟玖波集を撰したりき。蓋し連歌の技たる、深く精力を費やす

ものにあらず、干戈匆忙の際も、半日の閑を樂むに適すれば、ますます世に行はれ、應仁の頃、僧宗祇に至りて絕頂に達す。宗祇旅行を好みて詩才を養ひ、四方に流浪して定居なし。嘗て勅を奉じて、新撰筑波集を撰す。海內風靡して、斯道の宗と仰ぐ。門人に僧宗長、牡丹花肖柏最も名ありき。

水無瀨三吟百韻のうち。(連歌)

雪ながら山もとかすむゆふべかな、　宗祇
ゆく水とほく梅にほふ里、　肖柏
河風にひとむら柳春みえて、　宗長
舟さす音もしるきあけがた、　宗祇
月やなほきりわたる夜に殘るらん、　肖柏
霜おく野はら秋はくれけり。　宗長

四　戰國時代

二一五〇頃より二二六〇頃まで。

當時の槪觀　應仁以來、天下大に亂れ、皇室は窮乏の極に達して、節會大禮も行

はれず、幕府は全く威權なし、京都は荒れて貴賤四方に離散し、諸侯はその領地に割據して干戈を事とす。かゝる時、文學が衰微の極に達したることは、多言するを要せず。地方には、堺に細川氏、三好氏、山口に大內氏、小田原に北條氏ありて、わけて勢強く文藝に長けたるもの一時遁れ來りて、これらの地に住みたりき。

文學の衰微　鎌倉時代以來、禪僧の支那に往來して、かの國に學び、詩文をよくするもの少からず、戰國の世、文物の衰滅に近き時、漢文學の命脈を保てるは、禪僧にして、殊に京都の五山はその淵叢なりき。和歌、國文の衰へたることもまた甚し。連歌はさすが無學のものも作ることを得れば、盛に行はれて、武人戰場消閑の技として用ひられたり。

平民文學　文運かくの如く慘澹たれども、都鄙の懸隔滅じ、貴賤の階級壞れたれば、京師の貴族等が文學を獨占したる風も、共に失はる、武人に和歌をよくするものあり、和歌よりも連歌の行はれたるなど、いづれもこの傾向を示せるなり。されば江戸幕府の世に盛なる平民文學の曙光も、既にこの時に現はる。御伽草紙とて、童蒙の訓誨に資すべき小說の類は、この頃の作多かるべく、淨瑠璃即

ち戯曲の起源もこゝにあり。山崎宗鑑、荒木田守武が好んで連歌の俳諧體を詠じ、卑俗滑稽を旨としたるは、俳諧のはじめにして、連歌の一句十七字を全詩として詠ずることも、またこの時代に起れり。

第四章　江戸幕府の世

文學の普及　江戸幕府の世は、泰平うち續きて、文化の進歩前古に比なし。ひとりこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり、學問藝術上下に渉りて、四民ともにその徳を享け、文學の滋味も弘く世に味はるゝに至れり。

文學の階級　されど幕府の施設漸く成るに從ひて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、從うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を玩び、彼は學問を喜び、此は戯曲小説を愛し、彼は古文を墨守して、固陋に流れ、此は新作に傾倒して、卑俗に陷る。學識あるものは、新興の文學を卑み、新興の文學に就くものは、みづから低うして、高尚なる趣味を解せず。か

くて戲曲小説の如きは、戲作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

儒教の勢力　この時代に著しき思想界の現象は、儒教が佛教に代りて勢方を得たることなり。佛教の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、僧侶は漸く安逸に馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身齊家の道を唱へしかば、世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛よりも儒なり。國學の新たに起りて、わが國固有の道を明めんとしたることも、また注意すべし。

武士道の勢力　殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり、武士道は日本固有の廉潔尙武の精神に、人倫五常の別を明かにする儒教の意と、信仰を本として生死を離るゝ佛教の旨とを折衷し、これを古來の戰亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて內容形式共に備はり、武士はこれを以て造次にも忘るべからざる大道とす。その朴直を守りて、浮華を斥け、感情を卑みて、義理に進み、婦人を輕んずるは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を

偏重するより、時に殺伐に流るゝ弊なきにもあらざりき。

一　寛永時代

二二六〇頃より二三四〇頃まで。

偃武後の趨向　德川家康國內を一統して、四民はじめて泰平の化に浴す。家康性極めて愼重、馬上に天下を得たりいへども、馬上にこれを治むべからざるを知りて、文學の興隆に志す。命じて散亂せる書籍を集め、必要なるは活字を製して版行せしむ。世旣に靜謐に、またこの奬勵あり、寛永の頃に至りては、衰廢せし文學も、漸く復興の運に向へり。

朱子學の勃興　文學復興の魁たりしは漢學なり。されど久しくうち續きし戰亂の後を受けては、いまだ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒敎によりて、社會の秩序を回復せんとしたり。かくて儒敎の興隆に功ありしを藤原惺窩、林羅山とす。家康の京都にあるや、しば〳〵惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才、羅山を薦む。羅山は家康の聘に應じて、江戶に來り、律令制度の改定に參與して大功あり。これより子孫代々、儒を以て

幕府に仕ふ。この二人が奉せしは宋の朱熹の學なり。朱學は既に南北朝の頃よりわが國に傳はりしが、惺窩、羅山等出でてより大に世に行はるゝに至れるなり。

其他の學派　朱子學の外に陽明學も行はる。近江の人中江藤樹、明の王陽明の學說を奉じて、實踐躬行を勵み、好んで孝經を講ず。近隣その德に服して、みな善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり、儒敎かくの如く行はれて、その社會における感化は、今や佛敎の及ぶべきにあらず。神道には、從來、佛敎思想を以て說をなししもの漸く衰へ、山崎闇齋が朱學の說によつて垂加神道を立てて、世に用ひられしが如き、よく儒佛二敎が勢力の消長を示せり。

歌道の授受　和歌において、戰國とこの時代との過渡の人は細川幽齋なり。幽齋は武人にして、諸藝に通じ、殊に歌道を傳へて、大に世に重んぜらる。幽齋に學びたるもの、公卿にもその人少からざりしが、いづれも古來の弊風を墨守せるに過ぎず。ひとり地下に松永貞德がまた幽齋の傳授を受け、その道を中流以下

の人に弘めたる功を多とすべし。

俳諧の勃興　されど貞德の主功は和歌よりも俳諧にあり、貞德は京の人、始めて俳諧の式を定め、これを連歌より獨立せしむ門人頗る多く、江戸幕府の世に俳諧の興りて、連歌の廢れしは、實に貞德の唱道によれり。されどその作なほ幼稚なり、この一派を古風と稱す。ついで、西山宗因大阪に起り、舊格を打破して、放縱なる一體を創む。これを檀林風といひて、また一時大に行はれたり。

しをるゝは何かあんずの花の色。　貞德

雪月花、一度に見するうつぎかな。　同

世の中や、蝶々とまれかくもあれ。　宗因

しら露や、無分別なるおきどころ。　同

訓蒙平易なる文學　概するに、この時代は文學復興の運に向へりといふまでにて、いまだ旺盛の時至れるにあらず。新作の書も、多くは訓蒙諺解の類なり。小說の類も、假名草紙といひて、御伽草紙より僅かに一步を進めたるものの、訓誨を旨とせるが多かりき。

二　元祿時代

二三四〇頃より二四〇〇頃まで。

元祿時代の盛運　泰平久しく、生活豐かにして、こゝに元祿時代の盛運は來れり。中古以來の文學は、その思想、用語共に舊習に縛せられて、狹小なる局面に逡巡するのみなりしに、今や先例の桎梏を脫し、直ちに自然と人生とに接して、自在に事物を研究し、感想を述ぶる至れり。

儒者の輩出　將軍綱吉漢學を好み、屢、儒者を集めて、經義を討論せしめ、またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には、羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、のち江戶に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石、室鳩巢等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にして、よく父の學を祖述す。荻生徂來江戶にあり、また朱子學を駁して、古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

益軒と白石　筑前の士貝原益軒も當時の碩學なり。性謙讓にして、博識を衒は

ず、書を著はすや、概ね平易懇切にして實益あらんことを期す。江戸の新井白石は將軍家宣及び家繼に仕へて、政務に參與す。學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして、透徹せざるところなし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

水戸の學問　この時代において、和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀(ミツクニ)とす。光圀は家康の孫なり、明の遺臣朱舜水を聘して學を講せしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしむ。その學の重んずるところ、大義名分を正すにありき。

國文學の勃興　光圀古典の研究に志あり、殊に萬葉集の解し難きを遺憾として、その註釋を計る。時に大阪に下河邊長流あり、古文に通じ、中古以來の僻説を捨てて、先人未發の見を立つ。光圀の依託を受けて、かの註釋に從事せしが、終らずして歿し、釋契沖その業を繼ぐ。契沖は眞言宗の僧にして、國文學を好み、造詣至りて深く、識見世に絕す。その著述少からざるが中に、學界に大影響を與へしは、萬葉代匠記と和字正濫抄となり。代匠記は即ち光圀の囑に應せしものにして、偉大なる奈良文學はこゝにはじめて闡明せられたり。正濫抄は、中古以來、假

名遣の誤れるを正せる書なり。

春滿の國學 やゝ下りて享保の頃、荷田春滿（カダノアヅママロ）あり。深く國史律令に通じ、從來、古書を說くものの佛敎或は儒敎の意を迎合せるを非とし、國民が固有の性俗を明むるを以て、己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて、國體のあるところを學ぶは、この人に起れるなり、幕末の際、勤王攘夷の說の沸騰せるは、水戶の學と國學との感化、與りて力ありき。

芭蕉の俳諧 學問の方面における文運の進步は、凡そかくの如くなるが、純文學の發達は更に著し、俳諧には、伊賀の人松尾桃靑（芭蕉）京に出でて、北村季吟に學び、のち江戶に來りて、正風を起し、また東西に周遊して、その風を擴む。蓋し從來の俳諧は、內容の見るべきものなく、多くは措辭の上に滑稽を弄するに過ぎざりき。桃靑起るに及びて、その地位を高くし、造化の祕を發くを以て歸趣とす。四方詠ずるところ、人事よりも自然に多く、幽玄淸淡にして、廣く雅俗にわたる。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人には豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪をはじめて、俊秀の士諸國に多かりしが、師歿して後は、各そ

の好むところによりて說を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。

ふる池や、蛙とびこむ水のおと。　桃　青

荒海や、佐渡によこたふ天の河。　同

聲かれて猿の齒しろし、峰の月。　其　角

梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ。　嵐　雪

浮世草紙　戲曲小說は殊に急速なる進步をなしたるが、その作多くは大阪に出づ。この地は商賈の占むるところ、この時代に至りて豪富の商賈多く出で、町人も社會におけるその勢力を自覺して、こゝにその間に行はるゝ文學は開けたるなり。されどこれらの階級には儒敎及び武士道の制裁も薄ければ、その文學もおのづから趣味低くして、輕佻浮華の風を帶びたり。小說は井原西鶴出でて、いはゆる浮世草紙を作る、文章輕妙奇拔にして、法格に拘はらず、寫實的に社會の表裏を描き出せり。

戲曲の全盛　戲曲は謠曲等より出で、江戶幕府創立以前より旣に行はれしかど、なほ拙劣なるものなりしが、この時代に至りて隆盛を極む。元祿の頃、近松門

左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戯曲を作る。寫すところ人情の祕奥を穿ちて、才藻湧くが如し、その作百種の外に出づ。ついで竹田出雲あり、文才は門左衛門に及ばずといへども、趣向の變化に富めることは却つて勝り、今日もなほ行はるゝはその作に多し。

曾我會稽山の一節。　　門左衛門

ひつたてんとする所に、五郎時致何としてか見つけけん、坂を下りに駈け來り、列卒の兵五六人、ひつつかんで手鞠の如くうちつけ〳〵、團三郎が繩も皮もひきちぎり、八幡四郎をはたと蹴倒し、どうとふまへ、梢もゆるぐ大音にて、「鹿の皮かづきし人を鹿と見るは、おろかの眼力、曾我五郎時致は、形は人にて魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ、十郎殿、おりあひたまへ。」とよばはれば、祐成つゞいて走りつき、兄弟揃うて珍しき對面と、太刀の柄に手をかくれば、祐經が郎黨、主をうたすな、餘すなと、二重三重にかけへだて、ひつつゝんで、たち騷ぐ。團三郎割つて入り、「ア、〳〵旦那、麁忽なされな、今日のお命、團三郎が預かる、御一生の大事の御使古郷の御老母、一昨日の夕暮より、にはかの御病氣、次

第に重り、唯今も測られず、千に一ッも御本復あるまじき御覺悟、今生の名殘、兄弟に一目對面せん、萬事をふりすてたち歸れ。これに背かば、時致はもとの如く、十郎もろとも生々世々の勘當と、たえ〴〵弱る御聲を聞きすてて驅けつけし。」と聞くよりはつと力も落ち、兄弟目と目を見合せて、寢ぬ夢みるこゝちなり。「アヽ御思案どころでなし。京の小四郎の不所存人さへ、ひつ添うて看病、この人にお二人が孝行劣りたまひては、冥途までの御恨、天の冥加も恐ろしゝ。祐經殿に和を乞うて、おたち〳〵。」と勸むれば、祐經おほきに力を得、「これ〳〵兄弟、父の河津は流矢に中りしとも、俣野五郎が討ちたりとも、分明ならぬ親の敵、さしあてて祐經を狙ふとな。よし〳〵、さもしげにいひわけはすまじいぞ。サアうちかけよ、きりかけよ。音にきく程にもなし、怯(オク)れたか、曾我殿原。」と足もと見たる廣言、五郎たまらず、「神妙候ふ、祐經。」と踊りいづるをおしとゞめ、「母の便を何ときく、狂亂か、弟。」「いや〳〵〳〵、微塵こつぱいになればとて、敵に聲をかけられ、すご〳〵たつては骸の恥辱、放されよ、十郎殿。」「ヤイ身の譽も恥もすて、娑婆と冥土の父母を喜ばせ奉らんと、幼少より今日まで兄弟が念

願、はや忘れしか、時致。」「ハッア さうぢや、エヽ殘念至極、くちをしい、祐成殿、」「無念な、時致。あさましき曾我の運命や。」と淚の齒ぎり身をふるはし、握りひしぐ太刀の柄、ぬきかけぬきかけ、はつし／＼と鍔打は、鎺、切羽も一時に碎けちるべう見えてけり、……「母のいたはり心ならず、參會は重ねて。」と立たんとすれば、「暫く／＼。孝行のほど感じいる。祐經も一家の端、外のやうには思はず、本海道は遠ければ、山路の近道いそぎのため、某が祕藏の名馬、狩場まで引かせしを、兄弟に餞別せん、外道鴾毛、婆羅門栗毛、これへ／＼。」「あつ。」と答へて引きいだす、その長八寸あまり、肉十分に節高く、沛艾に口こはく、乘入もせぬ野髮の馬、一樣の鞍皆具、遣繩、追繩、口取繩、つらを振れば、六人の舍人もよろめきひつたてられ、前脚かいて齒をたゝき、人を嚇して鼻嵐、鬣よりもるゝ眼の光、角なき鬼の如くなり。兄弟きつと目くはせし、必定この馬に駈け落させ、殺すか、不具か、恥かゝせん謀。辭退せばなほ恥辱と、………ひるむところを引きよせ、ひらりとうちのつて、兄弟鐙ふんばつて、銜を並べひかゆれば、祐經案に相違して、唯うつかりと大口を、あきれはてゝぞ見えにける。祐成勇めば時致きほひ、

「ヤア〳〵團三郎、汝はこれより秩父殿、和田殿、そのほかの方々へ一禮申して、假屋をまかへ。サア來い、五郎。」「いざござれ、十郎殿。」と一鞭くれてのり出すも、日脚も速き午未、わが身の運も上刻と、八卦うらかた八響く、鐘にさそはれ風さそふ、朽木の櫻春すぎて、また何時の世の花をだに、待つにかひなき曾我の里、いたはしや母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年の物おもひ、貧しき上に世をしのぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身につもる、雪をれ松のむすをれに、にはか病の萬死の床、たのしみは似ぬ孫是が、藁屋の紙帳もりくる風、そよと寢がへり息つぎも、今を限ときこえけり。

三　寳曆前後

二四〇〇頃より二四五〇頃まで。

文運東遷　幕府の創立と共に、政權は江戸に移りしが、人文の發達は直ちにこれに伴はず。前期までは、江戸にも著名の文學者はありしが、なほ少數にして、概するに文學殊に純文學の中心は、京阪にありき。しかるに形勢は漸く移り、この代は即ち文運東遷の過渡期にして、次期に及びては、榮枯處をかへ、京阪は全く

江戸に及ばざるに至れり。

國學の傳播　文運の東遷に力ありしは、荷田在滿（アリマロ）、賀茂眞淵を主とす。在滿は春滿の甥にして、制度の學に委しく、江戸に下りて家學を弘む。當時、將軍吉宗の子德川宗武、國學を好みて、學者を聘す。在滿これに仕へしかど、その說宗武と合はず、辭して眞淵を以て代らしむ。眞淵は遠江の人、京に出でて春滿に學び、のち江戸に來りて講說し、宗武に仕ふ。その學は春滿に繼いで、わが國固有の道を明かにするにあり。謂へらく、むかし儒佛の敎の傳はりしより、古道はこれがために廢れぬ、故に古道を明めんとせば、外國の影響なくして、人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず、その古書は萬葉集最も善しと。よりて深くこの書を究む。識見甚だ高しといへども、詩文の才は寧ろ學問にまされり、たゞ萬葉風の古文辭を用ひて、却つて技能の發展を妨げしを、憾むべしとす。門下に高材の士多くして、これより國學の勢天下を席卷するに至れり。

京都の情況　されど京都にも、なほ國文學に名ある人少からず。小澤蘆庵は和歌に長じ、眞淵に反して、平語を用ひて、清新の調をなす。富士谷成章は文法に通

じたり。

富士をよめる長歌一首及びその反歌。　眞淵

磯間よりそがひに見ゆる、駿河の海、沖つ波路はせばきかも。ふりさけみれば相模（サガミ）嶺（ネ）の、八重山峰は低きかも。天の原なる富士の嶺の麓をいでて、風のまに横ほる雲に、駿河の海、沖もかくろひ、相模嶺の峯も雨ふり、時のまに雷（カミ）もなりゆけど、六月のてる日の空にあらはれて、曇るともなく、常夏に雪ぞふりける、富士の高嶺は。

駿河なる富士の高嶺は、いかづちの音する雲の上にこそ見れ。

富士の嶺の麓をいでてゆく雲は、足柄山の峯にかゝれり。

當時の短歌の例。

信濃なるすがの荒野にとぶ鷲の、翅もたわにふく嵐かな。　眞淵

大堰川、月と花との朧夜に、ひとりかすまぬ浪のおとかな。　蘆庵

俳諧の革新　俳諧は都鄙にわたりて廣く行はるゝにつけて、時好に投じ、風調甚だ卑俗に流る。天明の頃更めて清新の風を詠せしもの起れるが中に、谷口蕪

村を最とす。蕪村好んで自然の景物を詠じ、また漢詩の趣を交ふ、桃青と相竝んで、斯道の二聖とすべし。横井也有は殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。その後、俳諧なほ遍く行はれしが、漸次俗了しゆくのみなりき。

ほとゝぎす、平安城をすぢかひに。　蕪村

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。　同

戯曲小説　戯曲小説は、京阪の間には見るべきもの少く、江戸には、青本といふ小説漸く發達し、兒童の玩具より進んで、世態人情を穿つに至れり。されど文學上の價値より見れば、數多き青本の作よりも、寧ろ上田秋成、建部凌岱を重んずべし。二人はいづれも國文學の知識を基礎とし、漢文學をも折衷して、小説を作る。平賀鳩溪また奇才を抱いて世に容れられず、戯曲戯文を綴りて悶を遣りたりき。

四　文化文政時代

二四五〇頃より二五三〇頃まで。

松平定信　元祿は京阪の文華の燦爛たる時代にして、文化、文政は江戸の最も

光彩ある時代なり。文學に大功ある人、彼に德川光圀あるが如く、此に松平定信あり、定信は德川宗武の子なり、將軍家齊立つに及びて、老中となり、のち致仕して樂翁と號し、文學を樂みて晩年を送る。その政を執るや、力めて風紀の振肅を計り、道德的觀念を以て、學問文學を律したり。

異學の禁　儒敎においては、林家代々、幕府に仕へて、朱子學を立つ。この學に抗して、さきに古學、古文辭學は出でしが、その後また折衷學も起り、黨を分ちて相爭ふ。定信黨同伐異の俗が風敎に害あらんことを患へ、林家の私學を幕府の有とし、林述齋をしてこれを統べしむ。また朱學を奉せざるものは、官職に就くことを得ざらしむ、これを異學の禁といふ。

東西の風潮　寛政より文化、文政の頃までは、江戸の繁華絶頂に達し、市民は泰平の化浴にして擊壤鼓腹す。玄かるに京都はこれに反して、皇室は幕府に壓せられ、攝關淸華の家も貧しくすごせば、國學の開けて古代王朝の盛大を知るにつけても、當今の非運を慨せざるを得ず。この形勢の相違はさながら文學に影響し、江戸の文學は泰平を謳歌して、不平の念の見ゆること稀なるに、關西には、

賴山陽の如く、鬱勃の情禁じがたく、尊王愛國の主義を鼓吹するもの少からざりき。

本居宣長 賀茂眞淵起りてより、國文學の勢盛に、殆ど漢文學を壓す。その門人多きが中に、關西の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名ありて、その學風の異同はまた東西の形勢の相違を示せり。本居宣長は伊勢の人、その學一に古道を明むるにあり、古道を知るには、古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に從事し三十五年を歷て業成る、即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを知るべく、實に契沖の萬葉代匠記と併せて、江戸時代國文學界の二大作なり。宣長なほ多くの著述あり、殊に文法に通じて、詞の玉の緒等を著はす、門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平田篤胤最も名高し。篤胤の唱ふるところは、宣長より一歩を進めて、古道を以て一の宗敎とし、これを弘布して儒佛の敎を斥けんとするにあり。勤王攘夷の說は、これらの論によりてますます刺戟せられたり。

千蔭、春海 加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人、歌文をよくすれども、學問は宣

長の博きに比すべくもあらず。千蔭は萬葉集略解の著を以て著はれ、春海は漢文にも併せ通じ、和漢の文を折衷して一體をなす。この二人が詠ずるところの和歌は、その師の如く萬葉の調にあらずして、むしろ古今に則れり。

塙保己一　江戸は日本一の都會となりて、珍品奇什こゝに集まれば、書籍もまた求めやすし。されば生活の豊かなるに安んじて、圖書を蒐集し、訓詁考證に專らなる學者も少からず。盲人塙保己一（ハナハホキノイチ）は眞淵の門より出づ。幕府に建議して和學講談所を設け、古書を集めて、群書類從及びその續篇を編したり。

江戸の狂歌　狂歌は詞の卑俗に想の滑稽なる短歌なり。既に萬葉集に滑稽の歌あり、それより往々これを詠ずるものあり。江戸幕府の世に入りては、殊に行はれたりしが、前期の末よりこの時代にかけて、江戸の泰平はその振興を促がし、狂歌師一時に江戸に輩出す。中にも四方赤良（ヨモノアカラ）最も滑稽の才に富み、戲謔口に任せて出でたり。

京都の和歌　飜りて京都を見るに、文壇頗る寂寥なりといへども、なほ香川景樹の歌道を一新したるあり。景樹は鳥取の人にして、京に住む。その說、小澤蘆庵

に近く、意は古の誠實なるに倣ひ詞は今の通じやすきを取り、殊に聲調を重んずるにあり。景樹の號によりて、その一派を桂園派といひ、大に世に行はれたり。

當時の短歌及び狂歌の例。

しきしまの大和心をひととはば、朝日ににほふ山櫻ばな。　宣長

二見潟、こちふく風に明けそめて、神代のまゝの春は來にけり。　千蔭

心あてに見し白雲は麓にて、思はぬ空にはるゝ富士の嶺。　春海

大堰川かへらぬ水にかげみえて、今年もさける山櫻かな。　景樹

埋火のほかに心はなけれども、むかへば見ゆる白鳥の山。　同

時鳥なきつる跡に、あきれたる後徳大寺のありあけの顏。　赤良

江戸の小説　江戸には、小說勃興し、作者輩出せるが中に、山東京傳早く許多の作を出して、名聲一時に鳴る。曲亭馬琴ついで立ち、學問該博にして、文藻絢爛なり。椿說弓張月、里見八犬傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる每に、世人爭うてこれを求めて、及ばざらんことを恐る。時に前期より享保の振肅も弛みて、世風漸く浮華侈奢に流れしかば、執政松平定信等これが矯正に力め

て、文學の風俗を壞り、時事に涉るものを制す。一時これが爲に罪を得るものあり、京傳もその數に漏れざりしが、ひとり馬琴は謹嚴にして高く居り、その小說も一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり、その他の作者のうち、殊に滑稽に名を得たりしは、十返舍一九、式亭三馬なりき。

小文吾諷諫して高く舟水を論ず。（里見八犬傳のうち）

引かれて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に雨戶おちなく開かせたり。當下、小文吾はまづ頭を回らして、彼此と見かへるに、樓上の東面には、僧一山が款印ある、對牛彈琴といふ四大字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今、夏と秋との違あれども、犬田が爲には、こゝも亦望鄕の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれど、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つく〲と見わたせば、天ははやあけし橫雲の、色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黑き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、跡なき如と滿誓が詠みたる

歌はきら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、西に歇るあり、葛西村落幾戸の畑、南に沖つあり、北に滅ゆるあり、鎌田、浮田、行德の浦々、あれかとぞ思ふ目も迥に、登る旭をふる里の、方とし見れば翁さびし、父のうへ又親戚のこと、胸に滿へてながらふる、かひこそなけれ劒刀、身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵より數しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ。尺蠖の伸びんとする時、まづその身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし、あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり。又眞帆あげて走るあり、繋ぎし船に走るべからず、走る船は留まりがたし。和殿が今の滯留も、只この理をもて悟るべし。これをわが上に譬へていはば、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて、又よく船を覆す、自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん、かの隣國なる敵の爲に滅ぼされんこと疑なし。某も亦千葉の一族馬加光輝の姪なれば、代つて取るとも、誰か咎めん。されば享德の例に倣うて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を當城の主にせばやと、

思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず、和殿今よりわれを佐けて、事成る時は葛西の半郡を宛て行ふべし、うけひかれんやと、小膝を進めて、また他事もなく囁けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひがけもなき密議を談せらるゝものかな、某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん、貴所は只水と船との反覆を說きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや。いかにとなれば、水の船をうかむるは經なり、その船を覆すは變なり、苟しくも只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし、君臣禮あり、舟車に檝あり、君臣禮を失ふときは、舟車に檝を失ふが如し。一旦その利を得るといふとも、滅亡せんこと疑なし。その君を弑せしもの、誰かその久しきを保ちたる。希望くは非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはば、德誼後世に芳流して、子孫餘慶を承くることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし、いかでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念ずるの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面に見はれ

ても、手を叉きて物いはず。

幕末の壞勢　嘉永以後は、幕府勢を失ひて、列藩これに服せず、歐米諸國きたりに開港を迫り、志士諸國に奔走して、勤王の論と佐幕の說と相爭ひ、世の中甚だ騷がしく、人心恟々たれば、文學の見るに足るものなし。かゝる中に明治維新の世は來れり。

第五章　明治の世

二五三〇頃より。

階級の破壞　明治の維新は未曾有の改革にして、社會のあらゆる事物は非常なる變化をなせり。その種々の變化のうち、まづ一世を聳動せしを、階級制度の破壞とす。職業の世襲は止み、四民は平等にして、たゞその才能によりて進めば、文學に於ける上下の區別も消失せざるを得ず。上流社會に根ざせる保守の弊は失せて、前代には中流以下にのみ玩ばれし俳句、戲曲、小說の類も遍く貴賤の間に行はれ、高尙なる文學の品位は始めて明かに認めらるゝに至れり。

歐米文化の移植　維新の改革は歐米文化の移植によること多し。太古以來久

しく儒佛二敎の感化を受け、社會はこれが指導の下に立ちて進步し來りしが、今や翻然として東西兩洋の優劣を知り、力めて優秀なる西洋の文化を學べば、國民の思想は諸般の事物と共に、その影響を被れり。

國民性の發揮　しかれども現今の文運の進步は、決して外國の事物を移植するのみによりて成れるにあらずして、その本づくところは、國民が己の能力を自覺し、發揮したるにあり。悠久なるわが歷史は、その民の智能を育成して、深く蘊蓄するところあり、またよく物の本末を辨へ、漫然たる摸倣の益なきを覺らしむ。かくしてわれらは國民の特性を基礎とし、外國の文化の長短を取捨して、これを彩り飾れるなり。

形式の改善　國民の自覺と外國文化の折衷とによりて、われらの思想は著しく進步し、文學もこれに伴うて、その形式は內容と共に大なる變化をなせり。國文學と西洋文學と併せて研究せられ、文字の改革を論ずるものあり、言文の一致を唱ふるものあり、新進氣銳の士は從來の歌文の陳套なるに飽きて、新體を試みるもの多く、文壇は漸次隆昌の度を加ふるに至れり。

國文學の前途　現代における文學の景況、凡そかくの如し、維新以來、新たに覺醒したる國民は、まづ衣食住の改善に忙はしく、工藝に勵み、交通を便にするなどのことに急にして、文學の進步はやゝ緩やかなりきといへども、今や文物日に進み、人心に餘裕を生じて、國民は漸く高尙なる文學を享榮せんことを思ふ。かくしてわが帝國が東西兩洋の文の二大潮流を融化し、光輝ある文學を以て、世界に雄視せんとする氣運は、正に迫れるなり。

日本文學小史　終

西行論

第一章　山家集

權家に諂はず、聞達を求めず、貧苦に甘んじて、一生を羇旅の間に送る、されど聲名なほ臺閣の間に高く、天子將軍もその筆に接し、その說を聞くを喜ぶ。當時第一と稱せられたる人も、つれなく歲月の波に碎かれて、その聲は跡を留めざるに、西行ひとり人麿の再誕と稱せられ、斯道の名匠と仰がるゝこと、古今ともに渝ることとなし。從うてその傳記といふものも少からずといへども、余輩が西行を景慕するは、武人としてにあらず、僧侶としてにあらず、散文家としてにあらず、たゞその歌人たるが爲なり。最もよく西行を知るには、歷史傳說の如きはさもあらばあれ、直下にその作歌に接するに如くはなし。

普く西行の作歌を知らんとするには何の書に依るべきか。釋固淨の增補山家抄に、その書名とこれに載せたる歌の數とを擧げたり。その數の一も誤なきか

如何は、未だ調べ見ずといへども、便利なれば次にこれを借る。

山家集一千五百七十一首斗（上巻に七百廿三首、此中、他人の歌二首あり、下巻に八百四十八首、此中、七十首斗は寂然等のなり。）（著者云、山家集類題には「在來の山家集歌數千五百六十九首あり、その中に戀の歌一首秋の部に重出せり、これを除て千五百六十八首」といへり。）

西行家集五百四十一首（他一首）

千載集入し歌十八首

新古今九十四首

十三代集合百四十二首（内五十五首は玉葉に有、作者部類に所載の歌數は誤れり、寫誤歟。）（著者云、參照の爲、和歌作者部類にあげたる十三代集の歌數を掲ぐ。新勅撰、十一。續後撰、十三。續古今、九。續拾遺、九。新後撰、十二。玉葉、五十二。續千載、四。續後拾遺、三。風雅、十三。新千載、四。新拾遺、九。新後拾遺、三。新續拾遺、三。）

自賛歌集十首

撰集抄自所載九首（外に他五十二首、連歌は六句、他の句三。）

夫木抄三百八十五首（同兩部へ入し歌六首斗同歌なり。云々）

四季物語ニ七十二三首（他人歌二三首）
讃岐歌枕藻鹽草ニ三十五首（他五首）
松葉集ニ百六十二首（雨三部に同歌十餘。云々）
諸集諸傳散ニル玉歌（諸歌仙家集、方興集、春雨抄等也。）
御裳濯河歌合七十二首、是は自撰なり、淸書は慈鎭和尙。
宮河歌合七十二首、是も自撰なり、（奉納十二卷と侍れば、此二部の外猶十卷、同數ならば七八百首なるべし。）……これらに散在せるも千首に近かるべけれども、多は同歌の所々へ出たりければ、山家に合すとも二千首に滿ざるべし、處々勸進の百首歌、彼奉納十卷等は世に弘ざるこそ口をしく侍れ。……在俗の時の歌も數多有べし、法臘五十六年（著者云、年數は撰集抄によれるなり、從ひがたし。）の開の歌も僅に二千にてやまんや。行脚の身一處不住なれば、家集とて打つゞき自記せらるゝ事もなく、もれたる歌多かるべし。

增補山家集抄に記するところかくの如し、その中、西行の歌を一つに集めて、最も考究に便なるは、いふまでもなくその家集なり。西行の家集を山家集といふ、異本卷下に「遁世の後、山家にてよみ侍りける」と題して、

山里は庭の梢の音までも世をすさみたるけしきなるかな。

とあり、その外、集中、山居の吟少からず、また流布本卷下の下に「この歌どもも山里なる人の語るに從ひてかきたるなり、されば僻事どももや」などいへるによりて、後人のつけたるにや。惜しいかな、この家集には、未だ世に許されたる定本なし。概していふに、これまで行はれたるもの二本あり、その一種は六家集本（藤原俊成の長秋詠草、慈鎭和尚の拾玉集、藤原良經の秋篠月清集、藤原定家の拾遺愚草、藤原家隆の壬二集、及び西行法師の山家集を六家集と稱し、刊行して世に行はる。）にして、上下の二卷に別つ。（下をまた上下に別けたれども、冊はやはり一つに併せたり。）山家集とて從來普通に行はれたる刊本も、六家集のうちより拔きて單行本としたるなり。（さきに一千五百七十一首斗といへるもの即ち是。）明治に至りて翻刻したるものには、佐々木信綱氏の校訂せる歌學全書第八編のうちなるもの、覆刻叢書の第二卷として出でたるもの、幸田露伴氏校訂の名著文庫第八卷、及び千勝義重氏の山家集評釋あり、いづれも六家集本の外に出でず。されば便宜の爲これらを總括して、流布本といふべし。この流布本は誤脫少からず、不審の歌も見ゆ、後人の僻わざも交りたるべくして、信じ難きところあり。既に增補山家集抄にも、「六歌仙の集

中に、唯此山家集のみ後人の撰み集めしと見ゆ。定家卿の家集は自撰擇の上、伯父河内前司(親行)に淸書を誂へ、慈鎭和尚の集は嘉曆の撰聚、貞和の淸撰、(尊圓親王記之)瑚子丸の筆、玄旨法印の比校等、皆慥に侍けるに、此集のみ淺閒しう不沙汰に侍けん。……歌の年代の前後し、斯彼の入亂れしは、諸處山家の自撰の小冊或は家々文庫の一首をも後に拾ひ集めし成べし。云々」といひ、その外、前人のこれを非難せしもの少からず。されど外に完本も傳はらねば、この書のみ專ら勢を得たるなるべし。

他の一種は西行法師家集と題したるものなり。(さきに五百四十一首といへるもの。)或は二卷、或は三卷、或は四卷に別ちたるもあれど、內容はいづれも同じものなりといふ。自ら藏するところの寫本は、即ちこの本を寫したるものならん。その奧書に云く、

或人、西行法師の家の集歌とて密なはしおく事、年久し。予が云、宜成哉、祕せる哀、しかれど卞和が玉も人に見せしによりてこそ、其光をも磨し出せり、今此集も諸人にあまねく識知せしめば、などか世の龜鏡ともならんや、且又火災

のれそれあり、甲梓に鏤よとすゝめて、開板し畢ぬ。

于時延寶二林鐘日

南山鞜客一無軒道治

とあり、余が見たる板本は半紙形四卷にして、同じ奥書あれど、南山云々の署名なく、書堂永田長兵衛開板とあり。

内閣文庫にまた西行法師家集と題したる一册の寫本ありて、和學講談所、淺草文庫等の印あり、その奥書は、

此西行法師家集、去元中年中、於二吉野一以二或家本一書寫者也。

應永二十年癸巳二月十八日　　藤原判

とありて、次に一本の奥書を擧げ、更にこれかれの奥書ある二種の本によりて寫せる由の奥書あり、古き寫本にはあらじといへども、そのもとは南朝に仕へたる臣下などの手に出でしならん。此寫本もまた前にいへる家集と同種のものにして、これらを總括して家集本と稱せん。この家集本は、余が見たる限にては、到るところ誤脱に滿ちて、殆ど讀むに堪へず、その歌數の少きと誤脱の多き

ことを以てにや、從來世に行はるゝこと稀なり。西行の詠とて、人口に膾炙せる歌、

何事のおはしますかはしらねども、かたじけなさに涙こぼるゝ。

は、類聚名物考に、撰集、家集、その他西行物語等にも見えず、唯人の口碑に云ひ傳へし所のみ、未だ出所を考へずといへり。されど家集本の終には、明かにこれを載せたることを思へば、この本の廣く行はれず、名物考の編者の眼にも觸れざりしことを知るに足らん。群書一覽などにも、歌尤も少く、誤多き由を一言せるのみ。また山家心中抄なるものあり、こは山家集の内より拔き出でたるものなりといふ、(大日本史料所載奥書)されど今いかなるところに存するかを知らず。

なほ別に西行自筆の山家集を寫せる本として、讀書家をして垂涎に堪へざらしむるものあり。これに就て委しく世に紹介したるは、群書一覽を始とすべし。一覽の著者尾崎雅嘉は、その著に異本山家集(寫本)一卷の目を掲げ、敍して云く、

予が藏すところの古寫本にて、刊本よりは歌すくなし。奥書に云、此集、周嗣禪師不慮レ被二相傳西行上人自筆一之處、於二法勝寺僧房一燒失間、尋二他本一書二寫之一、

けぶりだに跡なき浦のもしほ草、又かきおくを哀とぞ見る。　頓阿

此西行上人集、蘂花園上人、此本卷始和歌十一首銘奥書歌副一首、新所被灑翰墨也、雖未消遺恨之心灰、聊擬殘芳之手澤而已、觀應二年七月日修行者周嗣判〇雅嘉案ずるに、草庵集にこの歌入りて、こと書に周嗣西行上人自筆の山家集を傳へて侍るを、法勝寺僧房の火の時燒き侍りて後、又料紙など元の如くに違へず書きて侍りしを、見せ侍りし、其の奥に書き付け侍りしとあり。又按ずるに、頓阿の高野日記に云、西行上人自ら書きたまへる山家集を、周嗣傳へられけるを、法勝寺僧坊の火の時燒け侍りける。その後、西行の筆に露違はず書かれて侍りしを。見せられたまひしなり云々。これらを考へ合せて、愈、予が藏本の眞の山家集なることを知れり、尤も上人自撰の集なること疑なし。〇周嗣は禪僧にて、新千載集にも歌入りて、頓阿時代の人、五玉集の中の一人なり。

増補山家集抄にこの本のことを言ひたれど、周嗣をさへ周制と幾所も誤りたるなどを思へば、たゞ草庵集等によりたるのみにて、實際の本を見たるにはあらざるべく、山家集類題には「或人祕藏して頓阿法師のもたりし山家集といふ

あり」と一言したれど、これらを校合したる本は約束のみして遂に出さず。かくてこの異本は群書一覽に紹介せられたるのみにして、また隱れて世に顯はれず。覆刻叢書に佐々木信綱氏は「何處にか散りぼひゆきけむ」といはれ、大日本史料がその奧書を引くにも、原本は得難しとて、一覽に依りたり。しかるに先つ頃はからずも余が手に入りたる本は、即ちこの周嗣所持の本を寫せるものにして、足利氏末季頃の寫本なるべし。尾崎氏の藏書印なしといへども、そのやゝ久しく大阪に傳はれることを思へば、或は一覽に予が藏本といへるものならんか、こゝに刻するところの書即ち是なり。

追記。その後、佐々木信綱氏におひて、この本のことを語れるに、氏更に書庫を探りて、一本を見出せりとて示さる。寫本一冊、時代は甚だ古きものにあらず、夏秋の部二三枚脫落したるが、また終に頓阿、周嗣の奧書を記し、更に左の奧書あり。

貞和四年十月頃、不慮相二傳此一卷一、自愛無レ極、殘生之間不レ可レ放而已、

西山隱士頓阿

此草子於鷹司高倉之蓬筆加勘校畢、不審猶多、尋證本、追而有校正者也。

享德元年十一月四日　　和歌所舊生法印在判

以飛鳥井頼孝筆跡、不違一字書寫校合畢

延寶戊午年以林白水本謄之京師新寫本。

この異本を以て前にいへる兩種の本に比するに、これは家集本の部に入るべきものとす。異本は家集本より數首多きが、「何事のおはします」の詠及び外三首は却つて見えず、小序にも時に彼と此と文字の相違あるが、大體に於ては二者相同じきものなり。唯異本には、追而加書西行上人和歌と題して、法師の詠を補へるものありて、家集本にはこれなし。されどこの追加は後人の附加したるものなるべく、餘りに信じ難きものとす。たとへば「後鳥羽院位におはしましける時、折々の行幸など思出られて、隱岐國へ奉りける」と題して、二首の歌あるが如き、明かに西行歿後の事にかゝり、その中の「見ればまづ」の詠は、續千載集雜下に西音法師の作として擧げたるものなり、とにかくに異本と家集本とはそのもと同じきものなるを、群書一覧に、異本は山家集の原本として推稱しながら、家

集は歌數尤も少く誤多しと、一概に排し去りたるは、兩者の關係を蔑視したるやうにて、甚だ飽かぬ心地す。されど家集本の誤脫に滿ちたるは、固より爭ふべからず、これのみにてはとても用をなし難き程なるを、わが異本を得て始めてこれを訂し明らむべし。今異本を刻するに當り、家集本は內閣文庫の本を以てこれを代表せしめて、傍らこれを參照し、異本になき四首は補ひ置きたり。

さらば異本を以て更に流布本に比較せんか。異本の歌數はすべて五百八十首、これに家集本によつて補へる四首を加へて、合せて五百八十四首。（外に他人の歌十七首。）その中、全く流布本に見えざるもの百六十五首、他は流布本と重複す。追加は百八十八首（重出せるもの四首を除く、外に他人の歌三首。）その中、流布本になきもの八十六首あり。流布本には他人の詠を除きて、西行の歌殆ど千五百首、その中、異本及びその追加と重複せるものを去れば、殘るところ九百八十首ばかり、これは異本及びその追加になきところとして、拾遺としてこの卷に附加す。かくして西行の詠を得ること千七百五十餘首、以てこの出家歌人の面目を覗ふに庶幾からんか。

流布本は歌の數多しといへども、西行の作として古來人口に膾炙したる、つの國の難波の春は夢なれや、蘆の枯葉に風渡るなり。
年たけてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり、さやの中山。
及び作者が第一の自讃歌と稱せらるゝ
風に靡く富士の煙の空にきえて、行方もしらぬわが思かな。
の如き、いづれもこれに漏れたるはいぶかしき限なるに、異本には載せたり。兩本に通じて擧げたる歌にも、彼此異同なきにあらず、その小序も意義の異なるあり、意義同じけれども字格句法の異なるあり、詳略の度の頗る異なるあり。概するに異本の歌は誤謬少く、流布本を讀みて疑はれし節の氷釋するも少からず、小序のかき方は古拙にして、流布本の整へるに似ざるは、却つてその時代を先にせることを示せるが如し。されど異本とても淨寫を重ねたるものなるべければ、おのづからその間に誤を生じたるもあるべく、時には流布本の正しと見ゆるもあり、彼此參考して、漸く正鵠を得るに近し。これらの例一々に擧ぐるは餘りに煩はしければ省略すべし、讀者意あらば、本文の中に校合せるに注意

せよ。今僅かに一二を擧げんに、名著文庫本の解題に、露伴氏が道心逐年深の逐は遂の誤、仁和二年の和は安の誤と推斷せられし精讀の程は感ずべく、また異本には初よりこの正しき方になり居りて、なほ二年は三年とあり。また

何事にとまる心のありければ、更にしも又世のいとはしき。

の詠の小序を、新古今集には「題しらず」とし、流布本には「述懷」とし、異本には「素覺がもとにて、俊惠と罷合て、述懷し侍りし」とあり、各〻そのいふところを異にするを見るべし。

要するに異本は西行自筆の本に出でたるものといひ、觀應年間、周嗣禪師の奥書あり、またその類本たる家集にも、元中年間、吉野にて寫せる由の奥書あるものあれば、その山家集の原本なること明かにして、南北朝の頃は多く流傳せしものなるべし。流布本は後人の增補せるところ少からず、不審のことも交りたれど、僞本として棄つべき限にはあらず、取捨して用ひたらば、これまた西行の歌集として併せ見るべきものなること、勿論なり。

なほ西行の歌集を後人の增補訂正せるものには、前に屢〻名を擧げたる增補山

家集抄及び山家集類題あり。抄は天明四年、讃岐國來光寺の僧固淨の手に成り、流布本山家集、家集、及びその他の諸書に出でたる西行の歌を網羅して、註釋を施せるものなり。大成せば甚だ便利なるものなるべしといへども、首卷(西行上人傳等を載す)及び四季の部併せて五卷だけに止まりしが如し。山家集類題は流布本を更に類によりて正しく別けたるもの、文化九年、松本柳齋の編纂せるものなり。

第二章　撰集抄

西行を傳し、その性格、作品を論ずるもの、これが材料として撰集抄を引くもの多し。撰集抄九卷、終に「于時壽永二年睦月の下の弦、讃州善通寺の方丈の庵にてしるし終りぬ」とあり、本によりては卷の初、終に西行記としるせり、本文をよみゆけば、すべて西行の自記と見え、古今の名僧智識の話、旅中見聞の事柄などを、隨筆體に順序もなく敍したるものなり。中にも名を隱して山林に潛み、姿を汚して郊衢に狂ひ、錦衣財寶を捨てゝ、ひたすら後生の爲に盡せるものを渇仰し

て、專らこれらの逸話を蒐めんと志したるものの如く、古書には往生傳、拾遺往生傳、もしくは遊心集といふものなどより引用したること少からず、時には神社の事をも記し、また詩歌に關する話などをも寄せたり、西行みづからが羈旅の中に出あひたる奇事も多ければ、この出家歌人を傳するには、山家集をおいては、撰集抄はまことに缺くべからざる根本資料なるに似たり。

さはいへ撰集抄の眞僞を疑へるもの、既に世に少からざるなり。余もこれを讀みて、はじめより、文章、用辭、または書中の事實、いづれも首うち傾けらるゝこと多しと思へり。文章、用辭については、その論甚だ煩はしくなるべければ、暫く措きぬ。事實については、たとへば文學技術に關する記事の特に多き第八卷を開き見よ。「僧正遍昭の事」に、遍昭が上東門院に參りて、馬内侍と贈答せることを記したるが、僧正は古今集に既に昔の人にして、上東門院より百五十年ばかり前の人たること、誰かは知らざらん。「行尊僧正笙の岩屋の歌の事」に、白河天皇の頃なる行尊が、一條天皇の御時、空也上人の不具を治したりなど記せるも、いみじき時代の相違なり。「隨身兼方歌の事」に、兼方の歌を俊成が非難したる由いへる

が、俊成は後拾遺集の撰者なる通俊の誤にて、通俊、兼方ともにまた白河天皇の頃の人なり、さるを「待賢門院かくれさせ給ひての又の年」など更に時代を明記したれば、俊成の二字の單に轉寫の誤にあらざること確かなり。また「侍從大納言成通鞠の事」に、既に堀河天皇の朝に薨じたる師大納言經信を、鳥羽天皇の朝に侍從成通に難せられたる樣に記せるは、これまた如何なる卒忽ぞや。(成通の生れたる年に經信は薨せしなり。)撰集抄は勿論架空の小話を集めたるものにあらず、見聞の始末いづれも事實によりたりとは、本書の體裁にても知られ、西行の傳記にこれを引くものも、またかく信じてなるべし。遍昭、行尊の事は少く歌書を見たるものの過つべからざることなるを、或は西行の文盲無智ゆゑに時代を誤り傳へたりとも、解すれば解すべし。されど過去の事を己が遭遇したる時代の、しかも甚だ親しき俊成、成通等に附會するは、西行としてはあるべからざる曲事にして、必ずや後世無學の人が古人に託して僞作せるものなるべしと、推斷するを當然なりとす。

さりとていまだ輕卒に撰集抄を排し去るべきにあらず、その序文に「卷は九品

の淨土に思ひ宛て丶、十に一をもらし、事は八十隨好に思ひよそへて、百に二十を殘せり」といへば、九卷、八十章なるべきを、今見るところの本によれば、すべて九卷、百十七章あり。これもと八十章なりしを、後人の攙入するところありし故、序文と本文との矛盾を生せしにあらずや。これらによりて考へ得たるにや、また他の理由あるにや、既に耳底記にも「撰集抄は西行の書れたるに書そへたるものなるべし」といひ、その後の書にもこの由を說けるもの多し。かくて更に思ひつきて穿鑿せるに、撰集抄には廣略の二種あることを知り得たり。

廣本九卷は元祿十四年、江戶にて刊行せり、前にいへる如く、章數百十七章あり。(なほ增補山家集抄等に百三章といへるは、また一種の本なるべけれど、大體は同じ廣本に屬すべきものか。)これを次にいふべき略本に比するに、多きこと五十九章、これを除きその他もまた屢、蛇足を加ふ。案ずるにこの五十九章は後人の增補せるものなるべく、撰集抄の原本を見るには、これを除き去らざるべからず、前に擧げたる著しき誤謬は、即ちこの增補の中にあり、されど西行が讃岐の白峯に詣でて崇德天皇を弔ふ條、及び江口の遊女と問答して、「月はもれ雨は

とまれと思ふには、賤が伏屋を葺きぞわづらふ」の連歌を得たる條などの有名なる文も、またこの漫りなる增補の中にありと知るべし。ここにかくにこの廣本は撰集抄の原本として憑據すべきものにあらず、さらば略本は如何。

略本にまた二種あり、光悦本と活字本とにして、刊行の年代明かならずといへども、共に恐らくは寛永前後のものにして、行はれし時代は廣本より古かるべし。いづれも九卷を三冊に合せたるが、活字本は更に一本に合綴したるもの多きが如し。文字の異同は存すれども、この二種は大體において同じきものなり。活字本にはなしといへども、光悦本には目錄を附す、廣本の五十九章を後人の增補とすれば、殘るところ略本は五十八章に過ぎずといへども、目錄にはなほこれを離合せしめて、恰も八十の數となる、卽ち序文に「百に二十を殘せり」といふに合ひて、この略本こそ西行の筆になれるものなるべきか。

廣本は余輩の取るところにあらず、さらば略本に載するところに就いて、更にその眞贋を驗せんか。余はなほ略本をも西行の著述とせずして、後人の假託に成れるものとす。試みにかくいへる所以の說を擧げん。

一、巻七に「長承の末の年出家の望とげて」（活字本巻下の九丁）とあり、（廣本の増補にも同じ由しるせり。）二字の轉寫の誤とも見えず、また後人の筆を加ふべき故ある事とも覺えねば、まづは原文の儘とすべし。しかるにこの出家の年には異說多し。台記、康治元年三月十五日の條には、西行がみづから去々年（即ち保延六年）出家の由を語れりといひ、百練抄にも同年の出家とす、吾妻鏡、文治二年八月十五日の條には、これを保延三年とし、西行物語等には大治二年と事とす。西行物語は紕繆多き書なれば、取るに足らず、台記、百練抄、吾妻鏡は共に正確なる史料として、後人の十分に信を置くもの、その中、吾妻鏡に言へるは、關東幕府の祐筆が聞き誤りか書き誤りかに出でしものなるべしといへども、他の二書に明記したるところは、これを斥くべき所以を知らず。これをこそ事實とすべく、他の說の眞僞を測定すべき尺度とすべきものにして、即ちこれに戾れる長承出家說は誤れりとなさゞるを得ず、これを誤れりとせば、即ち西行の自記といへるを僞れりとするなり。序にいふ、撰集抄の序にまた「鳥邊、舟岡の煙を餘所に見て、過ぎにし方は四十餘年の霜を載き」とあり。奥書には壽永二年にこの書を著は

せりといへるに、その時四十餘歳なりとは、いかにも事實に合はず、この年には西行六十六歳なりき。されどこの四十餘年は或は誤寫にてもあるべければ、こゝには强ひて追究せじ。

二、卷四に、越路の舟坂川を舟にて渡せることあり。活字本卷中の九丁その時、西行何となく、

みなれ棹とらでぞくだす、高瀨舟、

と口占めるに、折節同船したる東大寺の得業慶緣、

月の光のさすに任せて。

と附けたりといへり。されどこれはもと連歌にあらず、旣に後拾遺集雜一に「船中月といふ心をよみ侍りける」と題して、源師賢朝臣の詠とせり。伊勢物語などの小說的の書ならば知らず、事實を語るべき隨筆に、西行いかんぞ早く勅撰集にのりたる古人の歌を取り來りて、世人を欺くべきや。さりともこれを古歌を誦したるなりといはんは、餘りに本の讀み方をも、物の趣味をも辨へぬわざなり。この一事また以てこの書の後人の僞業になれるを證すべきにあらずや。

三、卷六に、西行の道友西住上人往生せしを、花山院中將雅經の弔へることを記して、活字本卷中の廿三丁「涙にくれ給て、此春、東山の花見に伴ひたまへりし事の、最期の對面にてありけるぞやとて、

なれ〳〵て見しは名殘の春ぞとも、などしら河の花の下陰。

と口ずさみ給へる、殊に哀に覺え侍りき」とあり。しかるに新古今集雜上にまたこの歌を載せて、その小序に、「最勝寺の櫻は鞠の懸りにて久しくなりにしを、その木年ふりて風に倒れたる由きゝ侍りしかば、男共に仰せて、異木をその跡に移しうゑさせし時、罷りて見侍りければ、あまたの年々暮れにし春まで立ちなれける事など思ひ出でゝよみ侍りける」とあり。即ち撰集抄は「なれ〳〵て」の詠を以て、西住の死を弔へるものとし、新古今集は、枯れたる櫻を懷ひて作れりとせるなり。西行みづから作者の口より聞けりといへば、抄のいふところに傳聞の誤あるべき筈なし、されどこの作者は新古今集撰者の一人なれば、集の小序またいかんぞ傳聞の誤あらんや。彼此説を異にし、各〻そのいふところを正しとす、こゝに於てか二者の一は必ず僞書ならざるべから

ず。余輩は固より八代集の一として正確なる典據を斥くるの妄なることを思へば、撰集抄は即ち荒誕の言をなすもの、その西行の筆にあらざることを知るなり。

四、なほ勅撰集と相違せるは、卷二侍從大納言成通が長谷の迎西上人より得たる歌二首、金葉集には大納言の歌とて載せたりといへる事なり。（活字本卷上の廿二丁）金葉集には、その一「恨むなよ」の詠を、戀下に一宮紀伊の詠として擧げたり。されば撰集抄のいふところまた訝かしけれど、これらは或は金葉集にも誤寫なしともいひ難ければ、しばらく問はずして可ならんか。

五、卷五に、待賢門院の中納言局が出家して、小倉山の麓に隱れ住みたるを訪へることあり。（活字本卷中の十九丁）三年經て、更に罷りて、この尼の臨終にあへりといふこと、これまた小倉の庵にてと外は覺えず。しかるに流布本山家集卷下に、またこの庵を訪ひて歌をかきつけたることあり。その歌の次に、尼の事を「小倉を捨てゝ、高野の麓に天野と申す山に住まれけり」といへり。二書の相違いづれをかまことゝすべき。たとひ原本の家集にあらずとはいへ、余輩疑はしき撰集

抄を排して、山家集に從ふを穩當なりと考ふ。
右は撰集抄の信ずべからざる著しき例を擧げたるのみ。なほこの外にも疑はしき點少からずと覺ゆれど、折節小田原の客寓にありて筆を執れば、傍に書架の探るべきなく、參照の便を得ず。されど以上說くところを以ても、余が說を支ふるに十分なりと信ずるを以て、今はまづ考據をこれに止む。されば廣本は後人の攙入多くして取るに足らず、この弊なかるべき略本を以てして、信ずべからざることまたかくの如く、しかも略本は序文にいへる章の數に合へるものなり。しからば强ひて撰集抄を取らんとするものの、いづれの章を捨てゝ、いづれを拾はんとするや。詮じ來りて、余輩は西行の自著としてこの書を信ずべき所以を知らざるなり。
西公談抄は西行の和歌についての談話をその弟子蓮阿の筆記したるものと稱す、されどこれもまた信ずるに足らず。後人が傳記をしるせるもの西行一生涯草紙、西行物語、西行四季物語等あり、いづれも類似したるものにて、謬說多く、憑據し難きものなることは、古人既に論あり、更めてこゝに繰り返さず。さらば

余輩が西行を見るに當りて用ふべき書は何ぞ、唯山家集の異本、流布本、御裳濯川歌合、宮河歌合、及びその他の諸書に散見する和歌あり、これに補ふに信ずべき典籍の中に存するその逸話數箇條あるのみ。

第三章　西行の經歷

西行物語、撰集抄等を採ることを得ば、西行が旅行の年歷、吟詠の由來など、委しく明らかに知るべしといへども、余輩は正確なる史料としてこれに依る能はず、こゝには山家集を主とし、信憑すべき二三の書に散見するところを加へて、この僧の一生を覗はんとす。所說甚だ茫漠たりといへども、架空の小說を補へて、屋上更に樓閣を建てんよりは、退いて安全なる小基礎に據るに如かざるなり。

尊卑分脈を案ずるに、西行は藤原房前の子魚名の末流にして、俵藤太秀郷が九代の後裔なり。俗名佐藤義清（ノリキヨ）（或は憲清、則清ともかけり。）鳥羽院下北面の士にして、父を康清といひ、母は監物源清經の女なり。義清出家して圓位といひ、大寶房（或は大本房）と號し、また

西行と稱す。兄に內舍人、攝政隨身仲淸あり、子に權律師隆聖あり。左大臣賴長の台記、康治元年三月十五日の條に、

西行法師來云、依レ行二一品經一、兩院以下貴所皆下給也、不レ嫌二料紙美惡一、只可レ用二自筆一、余不二輕承諾一。又問年、答曰二十五。（去々年出家二十三）抑西行本右兵衞尉義淸也。（左衞門大夫康淸子）以二重代勇士一、仕二法皇一、自二俗時一入二心於佛道一。家富年若心無欲、遂以遁世、人歎二美之一也。

とあり。去々年とあるは即ち保延六年にして、百練抄にも仝年十月十五日出家の由記せり。この年二十三歲とあるによりて逆算すれば、西行は鳥羽天皇の元永元年に生れたりしなり。

西行は眞言宗を奉せしなり。その頻りに法華經の功德を和歌に詠じ、半ばは歌道の上に於てとはいへ、天台の慈鎭和尙と親しく交はり、また東大寺再建の爲に勸進するなど、褊狹固陋なる一宗の僧徒とはいふべからずといへども、とにかくに密敎の旨を奉じて、屢々高野に籠れり。一々例を擧げずとも、山家集にこの御山にて作れる歌の多きは、讀者の知るところなるべし。また弘法大師が降誕の跡を尋ねて讃岐に至り、善通寺の邊に庵室を結びて住み、時にその靈場を參

拜したるも、集の示すが如し。西行また深く本地垂迹、和光同塵の說を信じ、特に伊勢の兩神廟に渴仰す。その內宮に近き山陰に草庵を構へて、時に神德を贊し、時に佳景を賞したるも、また屢、集中に見ゆ。賀茂の社も、若き頃より崇敬したる習に、出家の後も罷り詣でたりといへり。住吉詣をいへることの一二に止まらざるも、この神は和歌の神なれば、いふまでもなきことなるべし。

近衞天皇の朝、崇德上皇宣旨ありて、左京大夫藤原顯輔をして詞花集を撰せしむ、天養元年、撰成りて奏上す。この時、西行二十七歲、これより一年若くましませる上皇の御製は六首を擧げたるに、これと親しくし參らせし西行の歌は一首も見えざるは、地位の卑きが然らしめたるか、また大器晚成の質、未だその才を認められざりしか。それより年を經ること十二年、保元元年には、在俗の時事へまゐらせし鳥羽法皇崩御ましませり、たま〳〵西行高野にありしが、山を下りて京に出で丶、偶然にも大葬に會す。今を悲しみ、古を懷ひて、感慨に堪へず、みづから稱して「淺からぬ君に契のある身なり」といひ、

道かはる御幸悲しき今宵かな、限のたびと見るにつけても。

と歎く。昨久壽二年に崩御ありし近衞天皇の御墓に詣でゝ、露いと深きに涙の雫おきそへしも、蓋し此時の事ならん。天皇の崩御は皇儲について紛擾を釀し、更に法皇の崩御は爭鬪の破裂に機會を與へぬ。北邙の煙消えもやらぬに、征鼓の響喧しく、保元の亂こゝに生じて、未だ曾て血を見ざりし洛中は修羅の巷となりぬ。左大臣賴長は流矢に中りて薨じ、源爲義等は殺され、征途茫々、新院は讃岐に遷御ましましぬ、父子兄弟相爭ひて、人倫の亂れこれより甚しきはなし。世を捨てし西行も、見るにつけ、聞くにつけて、涙催す種ならぬはなく、遂には得たへでまた高野に歸りしが如し。集に大炊御門右大臣公能が相次いで父母を失ひしを、高野より弔ふ歌あり、公能の父實能は保元二年九月に薨せしなれば、即ちその頃は西行が去つて高野にありしことを知るべし。

幾ばくもなくまた平治の亂あり、洛中再び矢叫び、鬨の聲おどろ〳〵しく、藤原信賴、源義朝戰敗れ、平清盛勢を得たり。この年、西行また京にありて、まのあたり淺ましき世の成行を見たるならんか。こはしかとはいひ難けれど、異本山家集に「前大納言成通世を背きぬときゝて遣はしける」とて、一首の歌あり、成通が出

家せしは實に平治元年十月のことなり。遙かに書を寄せたるには、旅よりとか、高野よりとかある習なるに、この時はその事なきを見れば、在京中に、親しかりし成通が遁世の由を聞きて、贈れるならん。されど亂れたる都は久しく住むに堪へざりけん、翌々應保元年の頃はまた高野に棲めり。そはこの年かくれましし美福門院の御骨の高野の菩提心院へ渡されたるを見奉りて、「今日や君おほふ五つの雲はれて」と詠せしを以て、推量するに足る。

越えて四年、永萬元年の秋は、西行また京にあり、このことは流布本山家集に、「五十日の果つ方に、二條院の御墓に御佛供養しける人に具してまゐりたりけるに、云々」とある年時を思ひ合すれば、明らかなり。その前年、崇德上皇讃岐にましまして、憤懣のうちに崩御ありき、事の由は京都に傳はりて、西行はこの折の在京に悲報を聞きしなるべし。更に三年にして仁安三年、（異本山家集による、流布本には二年とあり。）わが歌人は四國遍歷を思ひ立ちぬ、時に年五十一。新院が松山の遺址を尋ね、白峰の御陵に詣で、善通寺の邊にしばしの宿を求め、また「土佐の方へやまからましと、思ひ立つことと侍りしに」といへるも、この時なるべし。

承安元年六月、後白河法皇、熊野詣の御次に、住吉に御幸あり、折しも西行參りあひて、昔の後三條天皇の行幸、神も思ひ出でて、いかばかり嬉しかるらんと眺め、同三年には、太政入道淨海が和田岬築港の供養にも參りあひぬ。下りて治承四年、福原遷都の事ありし時には、伊勢にありてこの由を聞きて、「雲の上やふるき都になりにけり」と歎じぬ。その頃、世の中更に大いに亂れ、源三位頼政が高倉王を奉じての旗揚は、宇治川の底の埋れ木と、哀れなる身をも恨をも沈めしが、これより頼朝の伊豆に起るあり、義仲の木曾に立つあり。榮枯得喪は掌を反すが如く、旭將軍は粟津原の朝の露、平家の一門は壇の浦の海の沫、あらゆる悲劇は數年間の事實となりて現はれぬ。保元の昔より壽永の今に至るまで、源平二家の盛衰、世界の歴史にも珍らしき有爲轉變の樣は、西行の親しく見または聞きたるところなるべきに、これらの現實世界のことについては、一言も述ぶるなし、たゞ八嶋内府宗盛が捕はれとなりて、母の事はさることにて、わが子の事の思はるゝにぞとて、泣けりと聞きて、「夜の鶴の都のうちを出でゝあれな」といへるのみ。

吾妻鏡、文治二年八月の條に云く、

十五日己丑。二品御參詣鶴岡宮。而老僧一人徘徊鳥居邊。怪之、以景季令問名字給之處、佐藤兵衛尉憲淸法師也、今號西行云々。仍奉幣以後、心靜遂謁見、可談和歌事之由被仰遣。西行令申承之由、廻宮寺、奉法施。二品爲召彼人、早速還御、則招引營中、及御芳談。此間、就哥道並弓馬事、條々有被尋仰事。西行申云、弓馬事者、在俗之當初、憖雖傳家風、保延三年八月遁世之時、秀鄕朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失、依爲罪業因、其事曾以不殘留心底、皆忘却了。詠哥者、對花月動感之折節、僅作卅一字許也、全不知奧旨。然者是彼無所欲報申云々。然而恩問不等閑之間、於弓馬事者具以申之、即令俊兼記置其詞給、終夜云々。

十六日庚寅、午尅、西行上人退出、頻雖抑留、敢不拘之。二品以銀作猫被宛贈物、上人乍拜領之、於門外與放遊嬰兒。云々。是請重源上人約諾、東大寺料爲勸進沙金、赴奧州、以此便路、巡禮鶴岡云々。陸奧守秀衡入道者、上人一族也。

折節千載集を撰ばるゝ由傳へ聞きて、ゆかしさに途より引返し、途に知れる人に會ひて、わが鴫立澤の詠や入りたると尋ねたるに、さもなしといひければ、さ

らば上りても何かせんとて、また東に向へりと傳ふるも、今物語この旅の事なり。
蓋し西行の東遊や一度に止まらず、

年たけて又こゆべしと思ひきや、命なりけり、小夜の中山。

と詠めるは此時のことにして、既に過ぎ去りし年、こゝをたどりし事あれば、かくいへるなり。その始めての旅は、關東までに止まりしか、また陸奥、出羽までも至りしか、委しくは知るべからずといへども、「十月十二日、平泉に罷りつきたるに、雪ふり、嵐烈しく、事の外にあれたり」などいへるは、恐らくは文治二年の旅ならんか。奥州の別天地、榮華三代の小都會、高舘は北上川に臨みて、崖下は急流矢よりも早く、彼方の岸は束稲(タワシネ)山廣く尾を曳きて、春さりくれば櫻は一面の雲と靉靆く。折しも判官義經兄に惡まれ、こゝに遁れ來て秀衡を頼む。木曾を倒し、平家を挫きて、觸るゝもの敗れざるはなかりし勇猛の大將も、昨日の勢見る山もなく、頼む木陰に雨や漏らざる。かゝる樣をも目撃したれども、浮世を外なる人の一言もこの事に及ばず、吉野にも見ずとたわしのねの花を賞したるのみ。
晩年、西行みづからおのが從來の詠を選びて、諸社十二卷の歌合を作る。その中、

御裳濯川歌合は伊勢內宮の法樂の爲に集めしもの、宮河歌合は外宮に捧げんとしたるもの、各、三十六番、この二卷のみ世に存して、他は傳はらず。御裳濯川は藤原俊成に託してこれが判をなさしめ、その後、宮河をその子定家に託して判せしむ、判成れる年、文治五年、時に西行河內の弘川寺にありて病床に臥したりしが、歌合の判を得て大に喜び、書を裁して、年の暮には京に上らんなど、俊成の許に申し送りぬ、されど病は癒えず、年を超えて建久元年二月十六日、臨終めでたくかの山寺に寂す、（流布本長秋詠草及び拾玉集）時に年七十三、嘗て釋迦入滅の頃に終をとらんことを希ひて、

願はくは花のもとにて春死なん、そのきさらぎの望月の頃。

幽契違はず、その折に合ひたるを、世の人歎稱したりき。

一个の笠、一條の杖、見すぼらしき頭陀僧の小さき包を背に負ひて、飄然として佇める姿は、繪にも畫き、木にも彫り、伏見人形にも作られて、物知らぬ子供もこれをば西行とぞいふ、支那の文人に瀧見の李白騎驢の東坡あれば、わが國の歌人に富士見西行あり、げにも旅行は西行が畢生の事業の一にして、東西を漂浪し

て、山川を遊覽し、これによつてその詩嚢は肥されたるなり」地方布敎の傍ら、山澤を拓き、津梁を架して、濟世の便となせるもの、役行者、行基の如きは、その人乏しからずといへども、文人として旅行生活を營めるものは、西行にして始めてこれを見る。その閑棲を營み、また足跡の至れるところ、一々年序を逐うて記すこと能はずといへども、京に近くては、ある時は東山に、ある時は嵯峨に、またある時は鞍馬に棲む。近畿にては天王寺、住吉、春日の參詣はいふに及ばず、難波に潮湯に浴し、ある年はこゝに越年し、また長柄に古を懷ひ、江口に宿を求めたり。殊に吉野山の風光を愛して、喜んでこゝに遊び、龍門に詣で、大峰は二度の行者と稱せらる。やゝ隔りては、慶、高野に出入して、第二の故鄕の感ありしなるべく、粉河に詣で、熊野を分け、那智に籠り、新宮より伊勢に越えたることもあり、伊勢にはしばしの庵を結びぬ。東海は、小夜の中山を越ゆること再び、久能、淸見の景を賞し、大磯、小磯、砥上が原をうち過ぎて、鎌倉に入る。更に東北に進み、下野を通り、白河の關を跡に見て、信夫、武隈をこゝと聞き、平泉には年を越して、次の春は出羽の國に向へり。その歌の中に、「蝦夷が千島を煙こめたり」といふは、いづくに

りければ、兩闕共に叶ふまじげに聞えけるを、西行聞きて、急ぎ中將の許に詣りて、その由を語りて、人に超えられ給ひなば、定めて世を遁れ給はんずらんなど申しけるを、中將聞きて、誠にさこそ有るべけれども、母尼堂を立つべき願ありて、その間の事を申し付けたる、出家の身にて口入せん事、すゝめ法師に似たらんずれば、その願遂げて後相計らふべしと、答へられければ、西行心劣りして歸りぬ。任大臣のついでに、聞えしが如く、宗頼、成經朝臣等藏人頭に補せられにけり。その朝、西行弟子を中將の許へやりて、もしやとて事柄を見せけるに、おへて日來に替る事なかりければ、又文を持ちて、申し候ひし事はいかにと尋ねたりけるに、見參の時委しうは申すべきと、返事せられたりければ、無下の人にておはしけりとて、その後は向はずなりにけり。世を遁れ、身を捨てたれども、心はなほ昔にかはらずだて〳〵しかりけるなり。

こゝに西行が舊主の子孫を疎外せし所以を說ける、或は物の表面を見て裏面を探らず、眞の事情は必ずしも然らざりしかも知るべからずといへども、一面の道理は見たるものなるべく、遁世の歌人が稜々たる圭角いまだ銷磨せず、白

眼を以て世人を睥睨せしを察するに足る。頭は剃れども心は圓めず、衣の色は改むれども胸の内は染めかへず、西行は遂に穩和篤實の資にあらず、清淡虚無の境に入らざりしが如し。

指折り數ふれば殆ど二十年、余曩のなほ郷里の學校にありしや、會〻友人と古人を論ず。友人の曰く、西行世を遁れて風月に放浪すと稱す、さはいへ後の藤原藤房の如く、いさぎよく跡を山林に晦ましもせず、吟詠贈答、更に俗塵に出入す、これ眞の厭世解脱の人にあらず、惜むべしと。然り、當時、文覺上人が罵りて「遁世の身とならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず、數寄をたてゝ、こゝかしこに嘯きありく條、惜き法師なり、いづくにても見あひたらば、頭を打ちわるべき由井蛙抄いひしも、またこの故なり。されど西行を以て、虚淡寂靜の出家、大信仰ありて精力熾盛なる高僧に擬するは、固より非なり、渠は僧侶といはんよりは詩人なり。欺騙は良心を蝕し、習慣は個性を縛し、嘔吐すべき諂諛、繁縟なる虚禮、滔滔として社會はこれが爲に痲痺し、倫道頽廢し、人心腐爛す、此の如きは、直情徑行の西行が堪ふるところにあらず、渠は現實界を厭うて空想界に遊ばんとす。

その好むところ吟詠にあるはいふに及ばずといへども、當時未だ和歌を以て專門の職業とするものあらず、これありといへども、そは家傳、歌學の沙汰喧ましき門閥に限れり、その他は公卿殿上人が消閑の遊戯とし、花鳥風月の使としたるのみ、習慣の惰力は此境をも掣肘して、直ちに自然の化に浴するもの極めて稀なり。西行にとりては、和歌は遊戯文字にあらず、さりとてまた門閥の下に屈從するに堪へず、望むところは、擅まに山川花月に對して、おのが感情を述べんとするにあり。平安の末造未だかくの如き歌人あらず、社會の情態は未だこの種の文藝の士の存在を許さず。乃ち西行は最もこの生活を爲すに近き法師の境界を選びしものにあらざるか。敢て意識してこれを選びしとはいはず、その天稟の傾向はおのづからこゝに至らしめたるなり。

さりとて西行はたゞ名を僧籍に列して、實は崇佛の念篤からずといふにあらず、累代の武人、早くも俗界の纒綿を厭ひ、人世の無常を觀じて、兵仗を擲ち、後生の勤めにまた餘念もなかりしなり。しかれども渠もと多情多恨の資、壯年の時、その小女が危篤の由を聞きても、顏色少しも變ぜざりき十訓抄下といふは、意志の

力を以て、强ひてその情を抑へたるのみ。その德大寺の一家に對する逸話の如き、老年に至りても、感情一遍の性の更まらざるを證するにあらずや。己は力めて佛道に精通し、修練苦行、眞如の月を見んとし、また屢、人に勸めて、泥濁の世を棄てゝ、出家の身とならしむ、かの公衡中將を勸めしが如き、卽ちその一にして、その他、侍從大納言成通、中院右大臣雅定等を勸めしこと、また山家集に見ゆ。されど勸めし人みづからも迷悟の境にさまよひて、安心決定の妙境に到着することを能はず、迷へりといふ人に答へて、

世を捨てぬ心のうちに闇こめて、迷はんことは君ひとりかは。

といひ、また道に入りたればといふ人に、

たのもしき道には入りてゆきしかど、わが身をつめば如何とぞ思ふ。

といへり。されば西行を目するに、身心ともに遠く俗界を離れて、佛陀の位に到れる高僧とするは、非にして、渠は汚衣破草鞋のうち、終に熱情を消すこと能はざる人間なり。憂き世の中とこの社會を厭ひこそすれ、全くこれを超脫することを能はず、悲喜哀樂ともに世人に同情せずんば止まず、また世人より同情を求

めずんば止まざるなり。かくて一度は飄然社交を絶つて、跡を山林に潛め、また遠遊の途に上るといへども、稍〻久しくては、寂寥の感に堪へず、集め得たる歌枕を携へて、更に舊里に歸る。

吉野山やがて出でじと思ふ身を、花ちりなばと人や待つらん。

といひながら、この山に籠りも果てざりしを、食言の徒なりと、後世の褊狹なる道學者流が非難するも、これが爲なり。四國より同行の僧が先だつて還りしを見送りて、

還りゆく人の心を思ふにも、離れがたきは都なりけり。

といへるもの、みづからまた望鄉の念抑へても抑へ難かりしなるべし。かくの如き天性即ちこれ西行をして、敎界の高僧たらしめずして、歌壇の名家たらしめし所以にあらずや。

熱烈の性、篤く同情を世人の哀樂に注ぐは、集中の和歌これを證すといへども、西行の見たる社會は、あくまでも澆季汚濁の社會なり。矛盾のみ多く、罪惡に滿ちたる世、これを遁るゝの方便は出家得道これのみ。兼賢阿闍梨が僧官を得て

錦衣を纏へるが如きは、俗を出でて俗に還れる人、その西行が誹を得たるも宜なるかな。西行が社會觀は、常に現實界を離れんと苦悶する消極的厭世説なり。

情ありし昔のみなほしのばれて、ながらへまうき世にもあるかな。

ながらへんと思ふ心ぞ露もなき、厭ふにだにもたらぬうき身は。

これらの例集中に夥し、一々擧げずともありぬべし。されば世人に對しては、

いつ歎きいつ思ふべきことなれば、後の世知らで人のすぐらん。

といひて、力めて菩提の道に入るべきを推奬す。また山家集中、他人と贈答せし歌の中、故人を懷うて今昔の情深く、遠逝を弔うて無情の感に堪へざるもの多きも、これが爲なり。西行は社會の悲哀の方面をのみ見て、その他を顧みず、權力の爭奪、武人の戰闘の如きは、ことさらに眼を被ひ、耳に蓋す、これ即ち二十餘年の平家の盛衰について言ふところなき所以にあらずや。

天地は廣く、時劫は長し、山嶽は終に動くことなしといへども、轉變の數を免れず、人間は變りて止まずといへども、無常の間に不動の則あり、歡樂いつまでも歡樂にあらず、禍は即ち福の基なり、禍福といふも、これ彼我の別を立てたる依

估の人間が、假に名づけたる稱呼のみ、造化の眼に何の哀歡かあらん、濁れる世なり、厭ふべき世なりといふも、ある個人が主觀的に人間界を臆測したるものに過ぎず、佛敎はその主義厭世に傾き易ければ、これを奉ずる一僧侶が厭世說を唱道すること、固よりその所なりといへども、なほ西行が悲哀の觀念は、一はその主觀的性情に基かずんばあらず。渠や遂に自我を沒却して、廣大なる自然と冥合することを能はず。いつまでも己と世とを對立せしめて、世は即ち己なることを思はず、小主觀の偏見に住して、迷悟の間に彷徨す。これを以てその歌もまた純客觀の敍事、敍景あること殆ど稀なり。敍事詩は本來わが國には類例乏しければ、敢てこれを一人に求むるを得ずといへども、敍景の歌は當時正に大流行の折にして、西行もまたこれを詠じたりといへども、そのうちなほ抒情を交へて、純粹の客觀的敍景は極めて少しとす。

主觀を立て、厭世を唱へ、感情を主とし、狷介に傾けるは、西行の特色なり。渠や既に社會と斷つことを能はず、訪問、贈答のことその家集に多し。されど人と交はるにも漫りに來往せず、意氣投合せるものにあらずんば不可なり、從うて親交の

人の甚だ少きは、おほよそまた集によつて覗ふを得べし。その少數の親交のうち、崇德天皇との關係は輕々しく看過すべからず。されど世人は未だ深くこれに注意せざるやうなれば、次に殊にこの關係を說いて、西行の生涯を明らむるの便とせん。

第五章　崇德天皇と西行法師

崇德上皇恨を吞んで讃岐に崩じたまうて後、西行その松山の行宮の跡を尋ねまゐらせては、

松山の波に流れてこの舟の、やがて空しくなりにけるかな。

と歎き、また白峯の御陵を拜しては、

よしや君、昔の玉の床とても、かゝらん後は何にかはせん。

と弔ひまゐらせたることは、山家集に見えて、疑もなき事實なり。この一條は源平盛衰記にも見え、廣本撰集抄卷一の一節となり、更に雨月物語によりて小說化せられ、轉じて椿說弓張月には鎭西八郎が靈墳に詣づる一齣となりて、世人

に熟知せらる。そも〳〵西行がこの參詣は、たゞ四國巡禮の次を以てなせるか、何ぞ然らん、上皇には御在生中にも親しみまゐらせたる中らひぞかし。さらばこの中らひは詠歌の友として、上下の別を沒したる交わりし故か、然り、かの君とこの僧とはその頃に類なき名家にして、共に感情の流露を主とし、ことの外なる合ひ口なりき。されば上皇の遷御ましませるや、西行深く斯道の頽廢を歎じ、その友寂然に贈りて云く、

言の葉の情絶えにし折節に、ありあふ身こそ悲しかりけれ。

寂然の答に、

敷嶋や絶えぬる道に、なく〳〵も君とのみこそ跡を忍ばめ。

といへる程なれば、二僧が歌道において篤くこの君を尊みまゐらせしことを知るべし。されど上皇と西行との關係はなほこれのみに止まらざるなり。前に著聞集の文を引きたる中に、「西行法師出家より前は、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり」といへり。この左大臣實能は實に鳥羽天皇の皇后なる待賢門院と兄妹の間柄とす、徳大寺家は九條師輔の九男閑院公季に出で、その末に白河

法皇の御母后を出しゝより、一族大いに顯達し、更に待賢門院を出し、門院は崇德、後白河兩皇を生みたまへり。されば西行は崇德天皇の外戚に密接なる主從の關係ありしなり。

今、西行が德大寺の一門と親しく、從うて殊に崇德天皇に睦み參らせし樣を、山家集によりて覗はんか。渠が出家以前に奉仕せし左大臣實能は保元二年九月二日に薨じ、その妻も引きつゞきて逝く、これを悲みて公能を弔へる歌あり、その後、實能の遺址を尋ねては、その衰廢に悵然たらざるを得ず、「德大寺の左大臣の堂に立ち入りて見侍りけるに、あらぬことになりて哀なり、三條太政大臣歌よみてもてなしたまひしこと、唯今と覺えて忍ばるゝ心地し侍り」といひ、また「三昧堂の方へわけ參りけるに、秋の草深かりけり、鈴虫の音微かに聞えければ、哀にて」といひて、感慨の情を漏らせり實能の子公能が崇德上皇が百首の和歌を集めらるゝ時、これを奉らんとて、まづ斧正を西行に請ひたるも、もとより親しき間柄なりければなるべし。

徳大寺家略系

- 公季（九條師輔九男　從一位太政大臣　大將　閑院　仁義公）
  - 實成（中納言）
    - 公成（權中納言）
      - 實季（大納言　後贈太政大臣　後閑院）
        - 公實（權大納言）
          - 實行（太政大臣　三條　又八條）
          - 通季（權中納言　大宮）
          - 實能（左大臣　左大將　德大寺）
            - 公能（右大將　右大臣　大炊御門）
              - 實定（左大將　左大臣　後德大寺）
                - 公繼（左大臣　野宮）
              - 實家（大納言　川原）
              - 實守（權中納言）
                - 公衡（右中將）
            - 公親（參議）
            - 公保（權大納言）
            - 育子（二條天皇皇后　六條天皇養母）
            - 幸子（左大臣賴長妻）
          - 季成（權大權言）
          - 璋子（鳥羽天皇皇后　崇德天皇母　待賢門院）
      - 茂子（後三條天皇女御　白河天皇母　贈皇太后）

山家集中、待賢門院といふ語がいかに多く繰り返されたるかを見ても、西行がこの國母に親しみまゐらせたることの深きを思ふべし。待賢門院、名は璋子、實能の父なる權大納言公實の女にして、鳥羽天皇の後宮に入り、のち國母と仰がれたまふ。女性と交際するは、遁世者の好まざるところなるべきが、この門院に仕へし女房に對して、西行は常例を外れて來往せり。久安元年、門院崩御あり、これに仕へし堀川局、中納言局は共に世を遁れて西山に棲む、西行時にこれを音づれて、その隱栖を憐み、また後世の勤めを勸む。中納言局は後に紀州の天野に移れるを、昔の友なりし帥局が尋ね往けることあり、その歸るさに西行ゆきあひ、局を案內して粉河寺に詣でたりき。同じあたりの女房兵衛局は、門院うせたまひて後、上西門院に仕ふ。上西門院は鳥羽天皇第二の皇女統子內親王にして、待賢門院の御腹、崇德天皇と同胞にまします。大治二年選ばれて賀茂の齋院に立ち、居ること五年にして、長承元年これを辭す。集に前齋院(もしくは菩提院の前齋院)にて歌よめるなどいへるは、この姬宮のことなるべし。保元三年、前齋院は後白河天皇の准母となり、平治元年、上西門院の尊號附かせたまふ。この門院

嘗て洛東法勝寺の花見に罷りて、雨にあひたまへり、西行今はその御許なる兵衛局に書を送り、御母の待賢門院が昔の御遊のことなどいひ出でて、

見る人に花も昔を思ひ出でて戀しかるらん雨にしをるゝ。

秋の頃、上西門院が洛西法金剛院の紅葉狩に、また同じ事を繰り返し思ひ出でて、同じ局の許に、

紅葉見て君が袂やしぐるらん、昔の秋の風をしたひて。

といひ送りたりき。

歌人藤原爲忠の子に爲業、頼業、爲隆等あり、爲業は出家して寂念といひ、頼業は寂然、爲隆は寂超、共に叡山の麓大原に閑居するを以て、大原三寂の稱あり。三寂みな和歌をよくして、西行と親しく、殊に寂然は金蘭の契ありて、山家集中、贈答の歌甚だ多し。寂念、寂超の母は橘大夫の女にして、もと待賢門院の女房なり、寂然の母は知るべからずといへども、或はまた然らんか。されば西行がかれらと親昵せしは、歌道の交はりを以てなること勿論なるべしといへども、一はまた主筋なる待賢門院に關するよしみを以てにあらざるなきを得んや。三寂に對す

るこの說はなほ淺薄なりとすとも、崇德天皇との關係は爭ふべからざる事實なりとす。

西行いたく待賢門院の眷顧を受け、その御腹なる崇德上皇とは年齡も相如き、和歌はことの外の合ひ口なり、嘗てゆかりありし人の上皇に勘當受けたりしを、これが爲に御許を請ひ、歌を奉りて願を聽かれしことの集に見ゆるにても、渠が上皇に親しみまゐらせしことを知るべし。保元の亂に、上皇御企成らず、戰敗れてしばしが程、仁和寺の北院に籠められおはします。昨日の榮華の夢は今日の災難の現、淺ましかりし御有樣思ひやるだに淚こぼるゝばかりにて、西行はせめても御慰めの辭にても述べばやと、北院に詣りぬ。柿の衣纏ひたる身も、なほ親しく召させたまふことの憚やありけん、兼賢阿闍梨出であひて、召次をぞ仕ゐ、折しも月の光の隈なきに、西行は心もしゞに亂れて、

かゝる世に影もかはらずすむ月を、見るわが身さへ恨めしきかな。

と歎きぬ。さて幾程もなく上皇は讃岐の國に遷御あり、はる〳〵の海のあなたに、蟲の聲、松の嵐、いかに御心を惱ましたまふらんと、哀なり。折々の便につけて、

御側に侍る女房の許まで手紙を送り送られ「いかなる故の報にてかゝることしもおる」と愁へまゐらせ、

　その日よりたつる涙をかたみにて、思ひ忘るゝ時のまぞなき。

といへるなど、俗界のことは忘れても、なほ君臣の情誼忘るゝに術なかりしこと、推するに餘りあり。淋しき山邊にも住まば住まれて、上皇は讃岐にましますこと數年、宸筆の大乘經を都に入るゝことさへ拒まれて、逆鱗のうちに崩御ましましぬ。西行がこゝに行脚の杖を曳きて、陵前に血涙を注ぎたりしことは、生前の恩を思ひて、特に御跡を弔ひまゐらせたるなるべし。

西行が出家の動機の如何なるかは、今詳かに知るべからず、世に傳へて、同族左衛門尉憲康が頓死によつて、日頃の志を決行せるなりと（西行物語）いへるが、眞僞は保しがたし。されど保延五年に、鳥羽上皇の皇子禮仁親王が美福門院の御腹に降誕ましませしことを忘るべからず。上皇、門院を寵幸したまへる餘りに、當歳の皇子を擧げて崇德天皇の皇嗣としたまふ、天皇は父皇の叡慮を違へがたく、皇太弟を立てたまへども、御不滿の念は抑へても抑へられず、保元の亂は實に

こゝに薨せり、西行の出家せるは、實に立太弟の翌保延六年なり。されば此の事實を以て、出家の原因となすは、附會の嫌あらんといへども、遁世の後も、主家より出でたまひし待賢門院と崇德天皇とに深く同情を寄せて、その不運には胸も燃ゆる思ひありしなるべし。墨染に衣をやつして、浮世の事は忘れ果てぬとこそ許しゝに、悲しき新院の御世の末を見ては、靜めてし心もいかでか更に亂れざらん。後德大寺實定には、新院は血緣を引きたまへり、左大臣賴長は叔母の夫なり、院も左府も保元に敗れたまひて、一族秋風落莫の感あるを、實定は知らず顏に新らしき御代に出で仕ふ。公衡が任官に外れしにすら出家を勸めし西行の、いかほどかこの振舞を慊焉らずや思ひけん、疎みて尋ねずなりにしを、寢殿の棟に繩を張りし故とのみするは、餘りに稚き言ひ傳へならずや。されば西行が一生のうち最もその情を動かしゝは、この院の榮枯盛衰なること、山家集を讀んでも略、その大體を察すべし。伊勢大廟に詣でて、

神路山、月さやかなるかひありて、天の下をば照らすなりけり。

と詠せしもの、果して皇統のみだれに、心を傷ましめざりしや、否や。

在原業平は平安朝における放縱不拘の貴公子なり、されど上田秋成の如きは辯じて云く、業平は深く藤家の專橫を惡んで、經綸の大策を講せし慷慨の士、その蕩逸の行爲はことさらに胸中の眞意を晦まさんが爲のみ、後宮の艶聞は藤原一門の勢を殺がんとしたるなり、東北の征旅は同志の輩を糾合せんとしたるなりと。されど余輩はかくの如き强辯に與せず。なるほど業平は惟喬親王の轗軻を哀めり、親王は文德天皇の第一の皇子を以てして、東宮に立つこと能はず、藤氏の出たる幼冲の皇弟に儲位を奪はれて、淋しき山里に隱れたまふ、業平多感の人にして、また親王と姻戚の緣なきにあらず、世の人は參朝に暇なき折、ひとり雪踏みわけて「思ひきや」と歎けるは、固より然るところなりしならん。されどこれによつて益、强族の跋扈を憤りて、これが轉覆を計りしとは、到底信ずること能はず。彼は放蕩の公子、此は遁世の法師、固よりその行爲に差別はありと雖も、余輩が西行に對して見るところまた然り。渠は崇德天皇と俗緣あり、その不遇を憐みまゐらせて、輾轉反側の思に堪へざりき、されどいかんぞこの貧法師に政治上の野心ありとは見ん。讃岐に手紙を參らせしは、密かに胸中の計

畫を披瀝せしなり、東國の行脚は義兵を募らんが爲なりなどいはんは、小說としてもまた牽强に過ぐ。西行は佛法に心を染めて他念なきもの、機緣の熟すと見る時は、力めて他をも勸めてその道に入らしめんとす。旣に公衡中將の失意を聞きて出家を勸め、從はずとてこれを疎み果てぬ。新院が讃岐にて後世の勸め隙なくしたまふと傳へ聞きて、前代未聞の非運はいふ言の葉もなしといへども、これもまた佛道に入るの便と思へば、さすがに宿緣の催すところと、頷きしなるべし。遙かに書を裁して、若人不瞋打、以何修忍辱といふ經文の辭を引き、

世の中を背く便やなからまし、うき折節に君があはずば。

と申したるを思へ。その御陵にて、昔の玉の床もかゝらん後は何かせんといひしは、また無常の理を說いて、幽魂を慰めたてまつりしに外ならざるべし。

崇德上皇の一生は西行の半生に苦悶の情を斷たざらしめ、世を棄てたる人をして、終に全く世を棄つる能はざらしめぬ。集の歌に悲哀痛苦の辭多きも、これに基くこと蓋し鮮少ならざりしなるべし。されど上皇崩御の後は、悲痛の種ここに去りて、過ぎ去りし禍福は今はた得道解脫の因となり、世事と全く相離れ

て、ひたすら無我なる自然に接したるならん。山家集を驗するに、上皇崩御まではは人事に關する歌なほ少からず、その後はこの種の詠殆どこれなき所以、恐らくはこゝにあらんか。

第六章　西行の和歌

古來西行の和歌を評するもの、嘖々として賞讃の聲を絶たず、既に御裳濯川歌合を俊成が判したるに、「こともなくうるはし（またよろし）」と評したること三度、こともなくといふは、たゞ無事といふ意にはあらで、非常にといふ意なり、俊成が一度の歌合に屢〻かくいへるは、固より尋常一様の事にあらずといふ。定家は宮河歌合の判に、概括して「ことの心幽に、歌の姿高くして、空よりも測りがたし」といへり。同じ人の詞に「歌の道あらぬ樣になりもて行きつるを、西行上人といふ人ありてよみ直し侍り」（東野州聞書）といひ、また「慈鎮、西行などは歌よみ、その外の人は歌つくりなり」ともいへり（雅載雜話）と稱す。後鳥羽院御口傳に云く、

俊頼が後には釋阿、西行、俊惠なり。……西行は面白くて、しかもこゝろ殊に深

くて、哀なる、ありがたく、出來がたき方も、共に相兼ねて見ゆ、生得の歌人と覺ゆ、これによりておぼろげの人のまねびなんとすべき歌にあらず、不可說の上手なり。……釋阿、西行なんどが上手の秀歌は、言葉も優にやさしき上、こゝろもまことに深く、いはれもある故に、人口にある歌勝計すべからず。

八雲御抄に云く、

法性寺入道この道好み、崇德院の末つ方より、やう〳〵又歌の事沙汰ありて、久安に百首歌などありしより、俊成、清輔、西行法師など云ふもの、この道に堪へたるが故に、今はまた廣まれるなり。凡そ中頃よりこの方は、この道に堪へたる人も少し、たゞ經信、近くは西行が跡を學ぶべし。その樣は別の事にあらず、たゞ詞を飾らずして、ふつ〳〵といひたるが、聞きよきなり。

才人往々當代に重んせられず、知己を千歲の後に待つなるに、西行いかなれば、その時代において、既に盛名あり、またこれを數世紀の末に持續せるか。抑も渠はいかなる時代に遭ひて、いかなる地位に立ちたるか。

平安朝和歌の體は古今集に定まりて、また動かすべからず。この朝の初、その道

一旦衰へ、從うて萬葉集の勢力も振はずなりぬ、紀貫之この間に立ち、歌集編纂の大任を受けて、自他の作を精選す、穩雅優麗なる古今の一體こゝに成り、爾後の撰集いづれも取りて則とせざるはなく、歌人はこれを以て犯すべからざる斯道の經典とす。藤氏專權の頂點たる御堂關白の時、風尙漸く轉じ、言語もまた變じたりといへども、古今崇拜の念は渝らず、一代の耆宿四條大納言も貫之を以て人麿に比し、ひたすら古今が示せる道より遠ざからんことを患へたりき、しかれども星移り物變る世の習、人間が立てたる事物は、時劫の波に碎かれざることを能はず、延喜以後殆ど二百年、陽に古今集は渴仰せらるれども、これが跡を追ふのみにしては、單調陳腐の弊に陷らざるを得ず、時人も漸くこの弊に飽きて、陰には清新なる歌體を思ふこと、旱天の雲霓もたゞならざりき。この時に當りて、源經信、俊賴父子が旗幟を翻へして、斯道の革新を絕叫するあり、藤原基俊これに抗すれども、時勢の潮流は抗すべからず、天下翕然として來りて新派に屬せり。新派の特色とするところは、辭章の束縛を脫し、新奇なる地名、物名、卑近なる言語をも自在に用ふるにあり、主觀的抒情詩の範圍に止まら

ずして、客觀的に山川草木の景情を詠ずるにあり、一見して斬新にしかも警拔なるところあるを覺ゆ。既に千篇一律の古今調に倦みたるものの、爭うてこの風を詠じて、新ならず奇ならざるを恐れたるも、時勢の趨くところ正に然りしなり。されど新派の弊や、極端に流れ、求めて怪奇の語を用ひ、佶屈の調を弄し、雅俗の別を思はず、卑俚險難、以て人に誇るに至る。藤原俊成はこの折に出でて、一世の俊傑と稱せらたる人、時樣の俗惡を慨し、これを以て斯道の無規律、無節制より起れりとし、更に古體を復興し來る。その見るところ全く新派を排斥し去るにはあらず、たゞその弊を矯めて、正雅の調を得せしめんとするにあり。その子定家なほ一歩を進めて、深く古書を研究し、俗語俗調を斥け、三代集以後の語辭は和歌に用ふべからずとす。かくして野部怪醜の弊は脫することを得たりといへども、用語を制限せられて思想を行ること自在ならず、苦吟慘澹、修辭の術を練りて、この缺點を補ふ。かくして定家の風たるや、用語は何等の奇をも見ざれども、句法に巧を盡し、後人をして讀誦再三なほその意を得るに苦しましむるものあり。爾來、定家を宗として二條の流を汲むもの、先師の句法の巧は學

ぶこと能はず、用語の平をのみ襲ぎて、凡愚庸劣、漫りに師法口傳を唱へて、わが道を尊くせんとす、斯道の衰廢こゝに至つて極まれり。

新派は一時の流行を極めたりといへども、長く後世に範を垂るゝこと、到底、古今集に及ぶ能はず、二條の家風は幾ばくもなく無味平板に化し去りぬ。かくの如くして斯道の大革新に志ざすものが、終に永遠の生命を得ること能はざりしは、その努力の闕けたるにはあらず、革命者が要するところの第一條件を具せざればなり。渠等は陳套に厭きて變化を想ひ、煩悶して平地に波瀾を起すに至れりといへども、その成功を博せるは、文辭の末のみ、形式の上のみ、内容に於て和歌は如何の變化をなしたるぞ。内容はさしおいて、外形にのみ苦心するものは、浮薄輕靡の誹は免るゝこと能はず。案ふに平安朝四百年の社會は泰平に馴れて安逸に過れり、月卿雲客ひとり文化の恩澤に霑ひて、京師數里の閒を無上の安樂淨土とし、東山、大堰川の佳景を外にして、また高嶽深谷の幽趣、雲煙漠漠、波濤洶湧の大觀に接せず、年々變ることなき宮廷、寺社の年中行事、春秋の行遊に、あたら歳月を徒消するのみ。その生活は單調を以て一貫し、外界に毫も變

化なければ、思想もまた沈滯鬱結、別途の方面に發展するに至らず。されば和歌の道においても、たゞ前哲の跡を逐うて進むばかり、個想は銷磨して、典型の外に脫するを得ざれば、歌をよむといふも、情懷を述ぶるにあらずして、文辭を陳ぬるなり。平安朝の末に至りて、天下の風雲穩かならず、源平二氏權を爭ひて、洛中遂に合戰の巷となりたれども、堂上人の遊惰はなほもとの如く、空しく從來の乾燥なる生活を送れり。かくして文學社會の境遇と思想とは共に依然たる時、ひとり歌道に眞の革新あるべけんや。新様を試みるものも、內容は舊の如く、唯辭句の上に刻苦するに過ぎず、渠等は感せずして作り、これを聞くものも、人工あるを知つて、天工あるを知らざりき。

かゝる時、西行ひとり群を離れて、毅然として立てり。既に繋縛なる社會の束縛を受くるを屑しとせずして、身を雲水の行くに任する境界に入れるもの、歌壇にありてもまたその道の法則と稱するものに掣肘せらるゝに堪へんや、渠は詩歌管絃にうき身をやつす上達部にあらず、六條、二條の門に雌伏する歌人輩にあらず、敢て和歌を學ばず、辭章を練らず、天稟の才を以て興來れば即ち詠あ

り。さすがに聲名高き身の、要請せらるゝことも多かるべく、山家集中、題により て歌を詠じたるものなきにはあらず、夢中落花、獨聞擣衣など三四字の漢文の 題あるは、この種に屬するものなるべく、屏風の畫讃もあり、また經文を題にし たるも屢これあり。されど寄何戀などいふ題の、異本には一もこれなく、流布本 にのみ存するは、そのもと作者の好むところにあらざれば、みづからは一も載 錄せず、後人の集むるに當りて、捨つるに忍びざりしものにあらざるか。なほ題 詠の多少を當時の諸家に比するに、歌合、百首、千首などの最も流行せる時、西行 にはこの種類の詠ありといふ程もあらず、御裳濯川、宮河の兩歌合は通常のも のと類を異にし、多年の詠を後に至りて選出したるものなり。慈鎭和尙の如き は、殊に題を設け、時を限りて詠じ出して、多作に誇れり、その西行を學べばとて、 同じく歌よみにして歌つくりにあらずといふは、定家の評とすとも、蓋し當ら ざるなり。西行は感ある時に歌をよむもの、風月に嘯き歩きて、詩興の油然とし て湧くを待てり、これを桐火桶の前に苦吟して、一字一句を推敲する俊成と對 比して、當時の二雄と稱すべし。

されば西行をして題に依り、座を定めて、强ひて名歌を作らしめんとするは非なり、渠は當世の上手といはるゝ人々の如く、いつにても美はしき辭を陳ぬること能はず。恩祕抄に「先年、仙洞にて、老若の勝負の御歌合當座なりしに、西行出すな、たて籠めてよませよと、勅定ありき、げにもと覺えて侍りしか、されはその時はさまで秀逸とおぼしき歌なかりき」といへるは、當然の數なるべし。その鎌倉において右幕府に歌道と兵法とを强ちに尋ねられ、遁世以來捨て果てたる弓馬の道はなほ答申したれども、和歌は花月に對して動感する折節、三十一字を陳ぬるのみ、全く奧旨なるものを知らずと、對へたるは、和歌に道なし、たゞ情を以て道とすといふ西行の本意にあらざるなきを得んや。

西行は感情を主として、辭句の如きは深く注意するところにあらず。經信、俊頼の如く、ことさらに新奇を語を濫用せずといへども、實地に須つところあればまたこれを容る、俊成、定家の如く、つとめて三代集に模範を限らずといへども、優麗なる雅語は喜んでこれを用ふ、要はたゞ思想に相應せる辭句を取るにあり。一方に伸ぶれば、一方に縮むは物の常、西行は、和歌を詠じて、形情並び得せし

め、眞率なる感情をありの儘に現はすこと、古今にその匹稀なりといへども、なほ細かに穿鑿すれば、用辭に至りては、これを重視せざる結果、時に蕪雜粗笨の嫌なき能はず、修辭當を失して、或は後人の誹を免れざるもあり。後進定家が「ひとへに風情を先として、詞を勞はらずは見え侍れど」といへるも、啻に宮河歌合の一二首の上のみに止まらんや。

感情の横溢するに任せて、詞句の修練を顧みざるもの、平安歌壇の初に在原業平あり、中頃、和泉式部もまた天授の才を以て恣まに文辭を行れる閨秀歌人なりき。この二人の如きは、形式の雕琢に苦心し、粉本の隨逐に汲々たる輿衆の中にありては、雞群の孤鶴、西行と併せて、泰平四百年間の三幅對と稱すべきものなり。されど、二人の主題とするところは戀愛にあり、脊々の情、綿々たる恨、人情冷熱の中に浮沈して、またその外を思はず、西行ひとりこれと類を異にし、人心の表裏反覆、世間の盛衰無常、まことしからず、賴みがひなき間に、喜び歎くも果敢なしとて、現實の社會を遁れて、自然の懷に投じたり。自然は公平無私にして、來るを拒まず、去るを厭はず、人間は我意に覆はれて淨土を隔たること遠きに、

神明佛陀の姿は山川草木の影に讀むことを得べし。かくてわが歌人の半生は全く抖擻行脚に費さる、その生活はこれが爲に變化あり、その思想はこれが爲に修養せらる。その作歌は堂上に坐して强ひて構成するものにあらずして、自然によりて動かされたる感興を文字の上に現はせるなり。されば西行の歌がひとり群衆を拔き、後人をして感に堪へざらしむるも、決して偶然にあらざるなり。

自然の事物のうち、梅、鶯、卯の花、時鳥、蟲の音、鹿、紅葉、鴈がね、千鳥など、いづれはあれど、西行が最も愛せしは櫻と月となり。蕾ふくだみたる頃より寢食を忘れ、春には疎くなりにし身の、花待つ心こそ昔ながらにして、染めおく心誰に讓らんといひ、雨に傷み、風を傷うて、おくがるゝ心は散りての後ならでは身に歸らざるべし。

たぐひなき花をし枝にさかすれば、櫻にならぶ木ぞなかりける。

といひ、死するは花の下にて春の時と願へり。櫻の名處は吉野山に及ぶところなしとし、岩つたひ、苔ふみわけて、去年の栞の途かへて、まだ見ぬ方の花を尋ね

んといひ、時には人りしよりやがて出でじとぞ思へる。月を賞でて、淸見潟に富士の煙の靡けるを望み、明石の瀨戸に波の綾織るをうれしむなど、心を傾くるは花に劣らず。而して西行が花と月とを愛するは、彼は咲くと見るより早く散りて、盛衰常なき世の有樣に思ひよせられ、此はいかなる宿にもさし入りて、澄みたる影の動きなきが、己が理想と賴まるゝにもよりしなるべし。

さばれ花の開落を人世によそへ、友を嫌はぬ月の無心を憧憬するは、何ぞ西行に始まらん、そのほか四時の景物に對して歌ふところ、いづれもまた前代に比して思想の殊に變化せる點わるを見ず、渠もなほ思想の上に革新の旗を樹つること能はず、春花秋葉は先人の眼に詠じたるものに違はざれども、これを詠ずるや、たゞ古歌の句を拾ひ字を偸み、樣によりて胡蘆を畫くものとは選を異にするのみ。余輩をして隴を得てなほ蜀を望ましめば、前にも一言せるが如く、西行をして全く小我を捨てゝ、純客観の詠をなさしむるか、然らずんば、わくまでも大我を立てゝ、これをして天地の間に磅礴せしむるにわり、しかれどもかくの如きを當時の佛敎より出でたる消極的厭世觀によりて立てる歌人に望

むは、望むものの無理なるなり。さればこゝにはたゞ平安朝の末期に當りて、この千載不朽の大詩人を得たるは、日本文學の光榮なることを特記して、この篇を結ばんとす。

西行論 終

鎌倉室町時代文學史索引

人名、書名、件名併せ收め、排列は五十音順により、發音は現今普通行はるゝところに從ひて、クハはカに、ヂはジに、ヅはズに、ヰはイに、ヱはエに、ヲはオに攝せしむ。人名はまづ名を擧げて姓を後にし、書名は見出しの下に＊を附して他と區別せり。

へ

ホ

鎌倉室町時代文學史索引 終

發行所
東京市日本橋區通一丁目十九番地
大倉書店

鎌倉室町時代文學史正誤表

（頁）	（行）	（誤）	（正）
六	八	智勇なる	智勇ある
八	四	華嚴	華嚴
九	一二	なしりこと	なりしこと
一七	三、一三	人磨呂	人麻呂
一八	二	名所圖會引の	名所圖會所引の
同	一三	續記	續紀
二〇	一一	可下令二來人一給上	可下令二來人一給上
同	一四	寂連	寂蓮
二一	四	歌よみ連	歌よみ達
同	九	設けたにも	設けたるにも
二五	八	不可思義	不可思議
同	九―一〇	切三新古今一	切二新古今
同	一四	藤原雅隆	藤原雅經
二七	八―九	「かの末の露	かの「末の露
同	一三	寂連	寂蓮
二八	一	二條院、讃岐	二條院讃岐
三〇	一三	逢生の月	蓬生の月
三一	一一	まつとなづげそ	まつとなつげそ
三三	六	歌に本歌は	歌は本歌に
三四	一三	たづねぞすむ	たづねてぞすむ
三五	七	みよしの野の	みよし野の
三七	一二	波に放るゝ	波に離るゝ
四五	一	□□を定家も	これを定家も
四六	三	集に見る所	稀に見る所
同	六	□白にして	淡泊にして
四九	六	對句ともとに	對句とともに
五七	六	邦經	雅經
五八	六	免るじきか	免るまじきか
五九	三	身を焦れつゝ	身も焦れつゝ
六五	末行	雅世 新續古今 榮雅	雅世 新續古今 祢雅
六六	九	西園家	西園寺家
七一	一三	寢覺の御津	寢覺、御津
七二	二―三	前攝政道安	前攝政道家
七六	八	後峨峨院	後嵯峨院
八〇	九	家長	家良
八二	一	第四章	第三章
八三		女子 名媛子從三位大納言	女子 名媛子從二位
八四	一三	勅令	勅命
同	一四	尊卑分派	尊卑分脈
九一	一二	なほやらみむ	なほやうらみむ
九六	一二	和歌所見不審	和歌所へ不審
九七	八	□兼一人	爲兼一人
一〇一	一三	ねざぬに	ねざめに
一〇八	一四	同一祝し	同一視し
一〇九	七	苦しまざを	苦しまざるを
一一八	八	蔓陀羅	曼陀羅
一二三	六―七、七	兼顯	顯兼
一三〇	一三	御嵯峨天皇	後嵯峨天皇
同	四―五	御深草	後深草
一三一	九	臺	台記
一三三	一	混とも	混人とも
一三四	一一	江抄	江談抄
一三九	一	情の係りて	情を係りて
一四〇	九―一〇	十訓抄などと	十訓抄など
一四一	四	趣意なれば	主意なれば
一四二	一三	醍醐するを老年	醍醐する老年
一四三	四	慈□も	慈悲も
一四八	五	開注所	問注所
一四九	一一	岡崎本は名にす	岡崎本は
一五〇	二	これが、これら	これら
一五一	五	作二此歌一者之性	作二此歌一者元性
同	一四	故事談	古事談
一五三	一一	四本に	四本共に
一五四	二	時代より鎌倉	時代より徳川
一五七	一	元に出で	先に出で
一六一	一四	こは盛衰記の	これ盛衰記の
一七四	一四	記せざるが	記せるが
同	一四	見えず○但し本延慶	見えず○但し延慶本
一七七	一三	建孔門院	建禮門院
一八〇	一三	八幡八菩薩	八幡大菩薩
一八二	一〇	ここに	ことに
一八七	五	これもまた	これのみは
一八九	二	八幡の前當	八幡の別當
一九二	一四	ニーベルングン	ニーベルンゲン
一九三	六	哀別	愛別
同	六	識悔	懺悔
同	一一	女姓	女性
同	一二	せるものが	せるものか
二〇二	一三	並べて	並べし
二〇六	七	拾遺百番歌會	拾遺百番歌合
二〇八	九―一〇		（正三位云々の重複の一句削る）
二一〇	七	男女二人	男子二人
二一五	四	其の衣	苔の衣
二二四	九	とへり	といへり
二二五	五	古からぬも事	古からぬ事
二二八	一	るは全く	るに全く
二三三	一一	やほらかに	やはらかに
二三五	一三	この舞臺	その舞臺
二三六	六	藝術的眞も	藝術的眞心も
二三七	一	第四期	第三期
二四〇	一〇	遍照	遍昭
二四七	五	蘆の葉の兼好	蘆の葉の淨辨
二四八	五	愚開賢註	愚問賢註
同	一〇―一一	水蛙眼目、	水眼蛙目は
二五〇	七	故宗近	故宗匠
二五七	七	なさらぬ程に	ならさぬ程に
同	一三	筌	筌
同	同	華果	華果
二六二	一三	飛鳥雅世	飛鳥井雅世
二六四	一四	谷森美臣	谷森善臣
二六六	一三	洞院公奉	洞院公泰
二六八	二	宗賢	家賢
二七二	九	雲井の梅	雲井の櫻
二七六	一〇	後人の文學	後人の文字
二八四	四	三光浣	三光院
同	一三	說に	說は
二八七	一	似たるとこと	似たるところ
二九六	一三	生の一大事	後生の一大事
三一二	八、九	鼎	鼎
三一三	一	第五期	第四期
三一六	四	あらはれるゝ	あらはるゝ
同	五	初なる	初（ウブ）なる
三二三	一〇―一一	近世の事づかひ	近世の詞づかひ
同	一三	ななつかしき	なつかしき
同	一四	忍音と物語	忍音物語
三二四	二―三	たんきたるも	たんきなるも
三二六	八	許絲	許嫁
三二六	一三	大將	中將
三三四	五	まだ	また
三三七	一三―一四	したりとなす	したりとなり
三三八	一三	破屋	板屋
三四〇	七	淺らず	殘らず
三四一	四	中頃のものが	中頃のものか
三四四	六	御伽草中	御伽草子中
三四六	七	曼姫羅	曼陀羅
三四七	七	拘引され	勾引され
三六〇	一三	別にして	外にして
三六二	四	法華童子	法妙童子
三六七	八	繝漫	瀰漫
三六九	二	如きものなり	如きものあり
三七七	一〇―一一	緣起とへる	緣起といへる
三八三	一四	吾郎	五郎
三八七	六	文學の雛も	文學と雛も
三八八	八	如きのは	如きものは
三八九	四	都雀	京童

大正四年五月十五日印刷
大正四年五月廿一日發行

〔鎌倉時代文學史奥付〕
【正價金貳圓】

著作者 故藤岡作太郎

相續者 藤岡由夫

發行者兼印刷者 東京市日本橋區通一丁目十九番地 大倉保五郎

印刷所 東京市京橋區新榮町五丁目七番地 大倉印刷所

發行所 東京市日本橋區通一丁目十九番地 大倉書店

大倉書店出版圖書

特約販賣所

京都市寺町通	若林書店
京都市佛光寺通	東枝律書房
京都市河原町	大黑屋書店
京都市寺町通	松田書店
大阪市淡路町	大阪寶文館
大阪市鹽町三丁目	前川書店
大阪市瓦町四丁目	盛文館書籍部
大阪博勞町四丁目	丸善大阪支店
橫濱市吉田町	第一有隣堂
橫濱市伊勢佐木町	第四有隣堂
橫濱市伊勢佐木町	弘文堂
神戶市元町	寶文館支店
神戶市元町	川瀬日進堂
兵庫縣龍野町	竹內書籍部
長崎市築町	渡邊重吉
長崎市東濱町	好文堂書店
長岡市表四ノ町	目黑十郎
長岡市表三ノ町	覺張書店
新潟市古町通	萬松堂
新潟市古町通	北光堂
越後直江津町	柿村卯之吉
越後柏崎町	高桑書店
前橋市曲輪町	煥乎堂
下總千葉町	多田屋支店
水戶市上市南町	寺田支店
茨城土浦町	寺田分店
宇都宮市鐵砲町	煥乎堂分店
野州足利町	青木大盛堂
津市京田町	別所書店
名古屋市本町	川瀬書店
名古屋市玉屋町	星野松次郎
靜岡市吳服町	吉見義次
遠江國濱松町	谷島屋
甲府市柳町	柳正堂
長野市大門町	西澤書店
仙臺市大町	金港堂書店
仙臺市大町	鈴木英華堂
盛岡市肴町	佐藤庄兵衛
盛岡市吳服町	佐々木仙助
弘前市土手町	今泉本店
青森市米町	今泉支店
山形市七日町	五十嵐書店
山形市七日町	遠藤純平
山形縣新庄町	大泉善助
秋田市茶町菊ノ丁	成見書店
秋田市大町	石川書店
羽後國大館町	藤島書店
羽後國增田町	東海林本店
福井市佐佳枝中町	品川書店
金澤市片町	宇都宮書店
富山市東四十物町	中田書店
高岡市守山町	學海堂
伯耆國米子町	今井兼文
松江市末次本町	有田傳助
岡山市西大寺町	武內教育書店
廣島市鹽屋町	積善館支店
周防國岩國町	白銀日新堂
周防國山口町	白銀日本店
下關市東南部町	白銀日新堂支店
和歌山市新通	宮井宗兵衛
德島市西新町	黑崎精二
高松市丸龜町	宮脇書店
松山市湊町	土肥書店
松山市湊町	向井書店
高知市種崎町	澤本駒吉
久留米市米屋町	菊竹書店
福岡市中島町	積善館支店
福岡市中島町	竹松弘陽堂
佐賀市吳服町	大坪萬六
佐賀市白山町	牧川書店
豐後國大分町	甲斐治平
豐後國大分町	忠文堂
熊本市新町	長崎次郎
熊本市上通町	金書堂
日向國宮崎町	松井修進堂
鹿兒島市中町	谷村書店
鹿兒島市中町	吉田書房
鹿兒島市東千石町	久永金光堂
琉球國那覇區	小澤博愛堂
札幌南一條	富貴堂
函館區末廣町	魁文舍
小樽區相生町	川南重祐
京城本町	日韓書房
大連大山通	大阪屋號

藤岡博士著書

東圃遺稿　第一卷

明治四四、菊判布裝三八四頁
價一圓五十錢、郵税十二錢

（國學史、日本評論史、國文學と風俗を含む）

「博士は明治學界の偉人なり。篤學にして才識に富み……その研究たるや、月並の死學にあらず、古人に拘はらずして、常に新説を樹て、考證に考證を重ねて、然る後に徹底せる科學的見地と流麗穩健なる筆致を以て、縱横に品隲を試み、しかも臆斷に陷ることなくして、最も公平なる客觀的評論を下し、殊に時代の背景に注目しつゝ、微に入り細に亘り、主として其實を傳へんことを力め、新に國文學の研究に一新紀元を畫したるは洽く人の知る所、……何人もこの明治の大著に接することを欲せずんばあらざるべし』 ―萬朝報

「國學史は著者が國學に對する總括的意見にして、之に附せる神道史の該博にして而も精緻なる意見は、我國民性の眞面目を傳へたりと謂ふべく、評論史亦未だ曾て人の手を下さゞりし所なり、若夫れ國文學と風俗に至りては、著者の本領と特色とを發揮せるもの、何人か之を一讀するを欲せざらむ。……』 ―東京朝日

東圃遺稿　雜纂

大正元年　菊判布製七六五頁
價金貳圓貳拾錢　郵税拾六錢

本編は博士一代の論説、隨筆、創作、二百餘種のうち最も雄篇傑作と目せらるゝものを網羅せる八百頁に近き大册にして文學美術に關する評論をはじめ、考證、追憶、遊記の類、或は識見卓拔、或は趣味横生、その文は大町桂月が評して「明治第一の文」となすもの匇々金玉の響を有して、流風餘韻永く後世に延かんとす、若夫れ附錄書翰に至つては、博士が内外兩面の生活の鑽にして眞に錦上花を添うるの概なくんばあらず切に諸君の愛讀を請ふ。

松雲公小傳

明治四二、全一册、菊判布裝三三四頁
非賣品

「松雲公の事蹟の傳へざるべからざるは論なけれど、此書は寧ろ藤岡博士の遺著として後世に傳はるべし。……附するに五十音索引を以てし、卷首更に公の年譜あり、插入せる圖版五十六葉亦贅澤なりと謂ふべし。文章の流麗と敍述の明快とは、流石の故博士の遺著なりけり。』 ―東京朝日

『……例によつてその時代を背景として偉人を活躍せしめた手腕は推服しなければならぬ。……挿む所の木版寫眞版は前田侯爵家の寶庫を傾けたもの、これに對して三尺の垂涎なき者は盲者ならずんば愚者であらう』 ―萬朝報

國語教本

明治四一、（同四五、改訂）全十册、菊判和裝各約一三〇頁　價各廿六錢、郵税各六錢

國語教本備考

明治四一、四六判和裝各約一三〇頁
非賣品

國文學史講話

明治四一、全一册、菊判布裝四四二頁
價二圓、郵税十二錢

『……流石に間に合せの編纂物でないのは賞むべきである。……事實の詮索よりは一家の觀察、解釋、批評を述べるのを先にした所、最も注意を要する。」 ―早稻田文學

『人物の取捨、敍述の精粗等に於て苦心の痕頗る多く、此處にも亦

博士の卓見を見るに足るものあり。……」 ―中央公論

「事件の年表に類せず、文學者列傳、圖書解題に類せず、時代の思潮と文人の性格に重きを置き、社會の情態、民衆の趣味の變遷等、眼前に躍動して、巻を措く能はざるの妙あり。學者に文人少し、東圃は學者にしてしかも文才に富む、恐らく此點に於ては文科大學教授中唯一の人ならん。本書の趣味深き、比類稀なるも宜なる哉。」 ―萬朝報

異本山家集

明治三九、全一冊、四六判布裝三四〇頁 價八十五錢、郵稅八錢

「西行上人の歌集刊本の市に在るもの、已に五指を屈するほどもあるべしと雖も、一も此の三百年前の古寫本、而かも上人の自筆本に依るといふものに如くものなかるべし。特に附錄の西行論一篇は、流説や怪しき撰集抄等に據らずして、直に上人の作歌について其性行を論ぜしは、尤も可なりとす」 ―白百合

「注意周到な校訂……」 ―文庫

國文學全史 平安朝篇

明治三八、全一冊、菊判布裝七二六頁、價二圓五十錢 郵稅十六錢

「吾人が最も喜ぶ所のものは、世の平凡淺薄なる古作品の穿鑿以外、進んで評論し、説破し、考證して、新なる自己の見識を加へたる點にあり。……古今獨歩の見……思はず案を打たしむ。」―新聲

「……近年有數の大書……」 ―文庫

「……源氏物語の如きに至つては、論評梗概約五十頁を費せるを見る……」 ―新潮

「編纂の次第畫然として一絲亂れず、殊に著者獨創の見を以て公平なる客觀的評論を下したるが如きは、平安朝文學心醉者の夢想だも爲し得ざる所…… 國文學研究者の前に新生面を開きたるものといふべし」 ―東京朝日

近世繪畫史

明治三六、全一冊、菊判布裝四〇〇頁 價貳圓、郵稅拾二錢

「……考證も精到に、觀察も着實に、文章も穩健にして、確かに好著たるを失はず」 ―明星

日本文學史教科書

明治三四(同四〇改訂)全一冊、菊判和裝九〇頁、價四十五錢、郵稅六錢

日本文學史教科書備考

明治三五、全一冊、菊判和裝一五六頁 非賣品

日本史教科書

明治三二、全二冊 菊判布裝二二〇頁 價九十錢、郵稅十二錢

國史綱

明治二九、全二冊、半紙和裝合計二三九頁 價一圓十五錢、郵稅八錢

日本風俗史

明治二八、全三冊、菊判布裝合計七二二頁、價上八十五錢、中、下一圓八十錢、郵稅各十二錢